

下土師東遺跡2

東関東自動車道水戸線（茨城南IC～茨城JCT）
建設事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ

平成21年3月

東日本高速道路株式会社
財団法人茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第315集

しも は し ひがし
下土師東遺跡2

東関東自動車道水戸線（茨城南IC～茨城JCT）
建設事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ

平成21年3月

東日本高速道路株式会社
財団法人茨城県教育財団

序

茨城県では、県土の均衡ある発展を念頭において地域の特性を生かした振興を図るために、高規格幹線道路などの根幹的な県土基盤の整備とともに、広域的な交通ネットワークの整備を進めています。

その一環として、東日本高速道路株式会社（旧日本道路公団）は、東茨城郡茨城町下土師東山地区において、東関東自動車道水戸線（茨城南IC～茨城JCT）建設事業を決定しました。

しかしながら、この事業予定地内には埋蔵文化財包蔵地である下土師東遺跡が所在することから、これらを記録保存の方法により保護する必要があるため、当財団が東日本高速道路株式会社から埋蔵文化財発掘調査の委託を受け、平成17年10月から平成20年9月まで、3年間にわたってこれを実施しました。

そのうち、平成17・18年度に実施した調査の成果については、既に当財団の『文化財調査報告第305集』として刊行したところです。

本書は、第305集に続き、下土師東遺跡の調査の成果を収録したものです。学術的な研究資料としてはもちろんのこと、郷土の歴史に対する理解を深めるために活用されることによりまして、教育・文化の向上の一助となれば幸いです。

最後になりますが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である東日本高速道路株式会社から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、茨城町教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対しまして深く感謝申し上げます。

平成21年3月

財団法人茨城県教育財団
理事長 稲葉節生

例 言

1 本書は、東日本高速道路株式会社の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成17年度から20年度に発掘調査を実施した、茨城県東茨城郡茨城町大字下土師字東山2,401番ほか^{（地番）}に所在する下土師東遺跡の発掘調査報告書である。

2 本書が報告の対象とするのは、下土師東遺跡第2・3・7区の遺構と遺物である。

3 発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。

調査 平成17年12月1日～平成18年3月31日（第2区）

平成18年4月1日～平成18年7月31日（第3区）

平成19年2月1日～平成19年3月31日（第3区）

平成19年6月1日～平成19年7月31日（第7区）

平成20年8月1日～平成20年9月30日（第7区）

整理 平成19年11月1日～平成20年3月31日

平成20年12月1日～平成21年1月31日

4 発掘調査は、平成17年12月から平成19年3月まで調査課長川井正一、平成19年6月から7月まで調査課長瓦吹堅、平成20年8月から9月まで調査課長池田晃一のもと、以下の者が担当した。

平成17年度

首席調査員兼班長 川又清明

主任調査員 芳賀友博 平成17年12月1日～平成18年1月31日

主任調査員 杉澤季展 平成17年12月1日～平成18年1月31日

主任調査員 片野靖久 平成18年1月1日～3月31日

平成18年度

首席調査員兼班長 櫻村宣行

主任調査員 小澤重雄 平成18年6月1日～7月31日

主任調査員 須藤正美 平成18年4月1日～4月30日

平成18年6月1日～6月30日

主任調査員 芳賀友博 平成18年4月1日～4月30日

主任調査員 小薮江徹朗 平成18年4月1日～6月30日

平成19年2月1日～3月31日

主任調査員 杉澤季展 平成19年2月1日～3月31日

平成19年度

首席調査員兼班長 藤田哲也

主任調査員 栗田 功

主任調査員 須賀川正一

平成20年度

首席調査員兼班長 三谷 正

主任調査員 市村俊英

調査員 鹿島直樹 平成20年8月1日～8月31日

調査員 佐々木愛理 平成20年9月1日～9月30日

- 5 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長村上和彦のもと、以下の者が担当した。

主任調査員	大関 武	平成20年12月1日～平成21年1月31日
主任調査員	芳賀友博	平成19年11月1日～平成20年3月31日
主任調査員	田原康司	平成20年2月1日～3月31日
主任調査員	小野政美	平成19年12月1日～12月31日
調査員	早川麗司	平成20年3月1日～3月31日

- 6 本書の作成にあたり、土器編年については、つくば市立吾妻小学校教頭の櫻村宣行氏、神奈川県立埋蔵文化財センター・かながわ考古学財団調査部主査の西川修一氏ほかにご指導いただいた。また、当遺跡から出土した炭化米及び炭化材の樹種同定及びC14年代測定については、パリオ・サーヴェイ株式会社に委託し、結果は付章として掲載した。

凡 例

- 1 地区設定は、日本平面直角座標第IX系座標に準拠し、X軸=+35,880m、Y=+51,520mの交点を基準点(A1a1)とした。なお、この原点は、日本測地系による基準点であり、抄録の北緯及び東経の欄には、世界測地系に基づく緯度・経度を()を付して併記した。

調査区は、この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C…、西から東へは1、2、3…とし、「A1区」「B2区」のように呼称した。さらに、小調査区は、北から南へa、b、c…j、西から東へ1、2、3…0とし、名称は、大調査区の名称を冠して「A1a1」「B2b2」のように呼称した。

- 2 実測図・一覧表・遺物観察表で使用した記号は、次のとおりである。

遺構 S1-住居跡 SB-掘立柱建物跡 SE-井戸跡 SD-溝跡 ST-墓坑
HT-方形竪穴遺構 SK-土坑 SF-道路跡 SA-柵跡 PG-ピット群
P-ピット K-攪乱

遺物 P-土器・陶磁器 TP-拓本記録土器 DP-土製品 Q-石器・石製品 M-金属製品
G-ガラス製品

土層 K-攪乱

- 3 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

- (1) 遺構全体図は400分の1、遺構実測図は60分の1の縮尺での掲載を基本とした。
(2) 遺物実測図は原則として3分の1の縮尺で掲載した。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。
(3) 遺構及び遺物実測図中の表示は次のとおりである。

 焼土・施釉・赤彩・炭化米  炉・火床面

 電部材・粘土・炭化材・黒色処理

● 土器 ○土製品 □ 石器・石製品 △金属製品 ☆ ガラス製品 ----- 硬化面

- 4 土層観察表と遺物における色調の判定には、『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社)を使用した。

- 5 遺構一覧表・遺物観察表の記載方法は、次のとおりである。

- (1) 計測値の単位は、m、cm、gである。なお、現存値は()で、推定値は[]を付して示した。
(2) 備考の欄は、残存率や写真図版番号、その他必要と思われる事項を記した。

- 6 竪穴住居跡の「主軸」は、炉・竈を通る軸線とし、主軸方向は、その他の遺構の長軸(径)方向と共に、座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で示した(例 N-10°-E)。

目 次

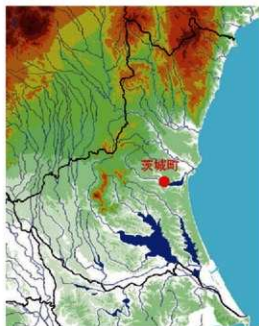
序	
例 言	
凡 例	
目 次	
概 要	1
第1章 調査経緯	5
第1節 調査に至る経緯	5
第2節 調査経過	6
第2章 位置と環境	7
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	7
第3章 調査の成果	13
第1節 調査の概要	13
第2節 基本層序	13
第3節 遺構と遺物	14
1 縄文時代の遺構と遺物	14
陥し穴	14
2 古墳時代の遺構と遺物	17
(1) 竪穴住居跡	17
(2) 掘立柱建物跡	171
(3) 溝跡	173
3 奈良時代の遺構と遺物	175
溝跡	175
4 中世・近世の遺構と遺物	176
(1) 方形竪穴遺構	176
(2) 井戸跡	177
(3) 溝跡	179
(4) 墓坑	179
(5) 土坑	188
(6) 道路跡	189
(7) 柵跡	191
5 その他の遺構と遺物	192
(1) 竪穴住居跡	192
(2) 溝跡	195
(3) 土坑	205
(4) 方形周溝遺構	225
(5) ビット群	227
(6) 遺構外出土遺物	233
第4節 まとめ	237
付章1	
付章2	
写真図版	
抄 録	

しもはじひがしいせき 下土師東遺跡の概要

【はじめに】

下土師東遺跡は茨城町の南西部に位置し、濁沼川沿いの台地上に位置しています。東関東自動車道の建設に伴い、遺跡の内容を記録・保存するため、平成17年度から茨城県教育財団が調査を行いました。調査した面積は、約3万平方キロメートルで、南側部分についての調査の内容は、すでに報告書にまとめられています。

南側からは、奈良・平安時代（今から約1,300～1,100年前）の集落跡が見つかりました。特に、住居跡から土器の内側に「大同三年正口」と書かれた漆紙が見つかっています。年号が書かれている紙が発見されたことはたいへんすごいことです。また、「土師楓家」や「土師子家」と墨で書かれた土器も見つかり、この地域が昔から「土師」と呼ばれていたことも分かりました。



茨城町の位置図



南側から見た下土師東遺跡

[調査の内容]

北側からは、^{たてあな} 堅穴住居跡69軒、^{げん} 掘立柱建物跡2棟、^{ほつたてばしらたてもの} 溝跡16条、^{よう} 墓跡47基、^{ほか} 道路跡などが見つかりました。堅穴住居跡のほとんどが南側の奈良・平安時代より前の古墳時代の前期（今から1,700年前）のものであることが分かりました。

古墳時代前期の住居跡は、焼失したものが多く、建築部材と思われる柱材が燃えた炭がたくさん出土しました。また、住居跡からはたくさんの土器の他、炉で使った炉器台が3個1組で出土しており、住居内での煮炊きの様子を探る手がかりとなります。



土器の他、柱材の炭が出土した住居跡。火災に遭った住居跡です



土器と一緒に出土した炭



住居跡から3個の炉器台がまとまって出土しています



このように使ったと思われます

また、古墳時代後期（今から1,500年前）の住居跡からは、人物埴輪じんぶつはにわが出土しました。顔には朱しゆが塗られ、前には盾たてを持っている盾持ち埴輪たてもちはにわです。通常は古墳に立てられるもので、住居跡から発見されるのはたいへん珍しいことです。投げ込まれたような状態で出土していることから、使われなくなった住居に捨てられたものと考えられます。遺跡の近くにはたくさんの古墳があることから、その古墳から持ち込まれたのかもしれませんが。また、埴輪を製作していた小幡北山埴輪製作遺跡おぼらきたやまはにわせいしよが近くにあり、この埴輪はそこで製作された可能性があります。



住居跡から出土した埴輪



復元した埴輪



埴輪を焼いた窯跡かまどの調査

『小幡北山埴輪製作遺跡』 茨城町教育委員会より



小幡北山埴輪製作遺跡や周辺の古墳から出土した埴輪

『小幡北山埴輪製作遺跡』 茨城町教育委員会より

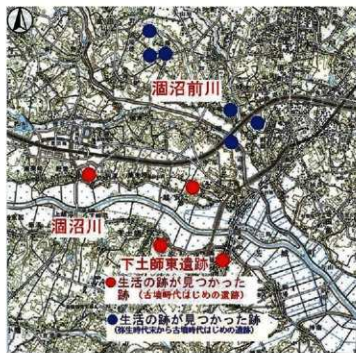
【調査でわかったこと】

古墳時代前期の集落跡は、澗沼川や澗沼前川沿いにも存在しており、当遺跡と同じように焼失した住居跡も見つかっています。土器などの出土状況から、不幸にも火災に遭ってしまった場合と、住まなくなって燃やしている場合のあることがわかりました。

また、同じ澗沼川沿いにある南小割遺跡の住居跡からも土製の炉器台が出土してします。同じような炉器台は、茨城県内の遺跡からも見つかっていますが、形が様々です。限られた住居跡からしか見つかっていないため、特殊な使われ方をした可能性があります。

さらに、古墳時代前期の住居跡からは、前の時代（弥生時代）で使われた土器（弥生式土器）と一緒に出土することもあり、澗沼前川周辺の遺跡で多く見られる傾向です。このことは、弥生時代から生活していた人々が、引き続きこの場所で生活を続けたことを示しています。弥生時代と古墳時代は、それぞれ違った土器を使っていたことから、人々の生活は大きく変わったに違いありません。

一方、澗沼川沿いにある古墳時代前期の奥谷遺跡、南小割遺跡、下土師東遺跡の住居跡からは、弥生式土器と一緒に見つかっていないことから、古墳時代になってこの場所で生活し始めたことを示しています。



澗沼川と澗沼前川沿いの遺跡位置図

【用語の解説】

漆紙 うるし 漆容器の蓋として紙が用いられたことから、漆の成分によって現在まで残ったものです。

大同三年 たいどう 西暦808年にあたります。

炉器台 ろくわい 土器を炉にかけた時に底部に火があたるようにするための台です。

埴輪 はにわ 古墳の上やまわりに立て並べられた土製品で、円筒埴輪と形象埴輪があります。形象埴輪には、家・人物・動物などさまざまなものを表しているものがあります。

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

平成13年7月10日、日本道路公団東京建設局水戸工事事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、東関東自動車道水戸線（茨城南1C～茨城JCT）建設事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及び取り扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は、平成14年3月13・14日、平成16年6月18・22日に現地踏査を、平成17年1月19～21日に第1～4区の試掘調査を実施し、遺跡の所在を確認した。平成17年2月1日、茨城県教育委員会教育長は、日本道路公団東京建設局水戸工事事務所長あてに、事業地内に下土師東遺跡が所在する旨を回答した。茨城県教育委員会は、平成17年7月19・20・22日に第4・6区、10月25・26日に第5・6区、平成18年3月7～9日、11月15・16日、12月1日に第7区の試掘調査を実施し、遺跡の所在を確認した。

平成17年2月22日、日本道路公団東京建設局長は、茨城県教育委員会教育長に対して、文化財保護法第57条の3第1項（現第94条）の規定に基づき、土木工事のための埋蔵文化財包含地の発掘調査について通知した。茨城県教育委員会教育長は、現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると判断し、平成17年3月1日、日本道路公団東京建設局長あてに、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成17年3月7日、日本道路公団東京建設局水戸工事事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、東関東自動車道水戸線（茨城南1C～茨城JCT）建設事業に係る埋蔵文化財の調査について協議した。平成17年3月8日、茨城県教育委員会教育長は、日本道路公団東京建設局水戸工事事務所長あてに、下土師東遺跡の第1・2区について、発掘調査の範囲及び面積などについて回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として、財団法人茨城県教育財団を紹介した。

平成17年11月2日、茨城県教育委員会教育長は、東日本高速道路株式会社関東支社水戸工事事務所長及び、財団法人茨城県教育財団理事長に対して、東関東自動車道水戸線（茨城南1C～茨城JCT）建設事業に係る平成17年度の埋蔵文化財発掘調査計画の変更について協議した。財団法人茨城県教育財団理事長は平成17年11月4日に、東日本高速道路株式会社関東支社水戸工事事務所長は平成17年11月10日に、茨城県教育委員会教育長あてに、埋蔵文化財発掘調査計画の変更について同意する旨回答した。

平成18年2月27日、東日本高速道路株式会社関東支社水戸工事事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、東関東自動車道水戸線（茨城南1C～茨城JCT）建設事業に係る埋蔵文化財の調査について協議した。平成18年2月27日、茨城県教育委員会教育長は、東日本高速道路株式会社関東支社水戸工事事務所長あてに、下土師東遺跡の第3～6区について、発掘調査の範囲及び面積などについて回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として、財団法人茨城県教育財団を紹介した。

平成19年2月22日、東日本高速道路株式会社関東支社水戸工事事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、東関東自動車道水戸線（茨城南1C～茨城JCT）建設事業に係る埋蔵文化財の調査について協議した。平成19年2月26日、茨城県教育委員会教育長は、東日本高速道路株式会社関東支社水戸工事事務所長あてに、下土師東遺跡の第7区について、発掘調査の範囲及び面積などについて回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として、財団法人茨城県教育財団を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は、東日本高速道路株式会社関東支社水戸工事事務所長から埋蔵文化財調査事業

について委託を受け、平成17年10月1日から平成18年3月31日、平成18年4月1日から平成19年3月31日、平成19年6月1日から7月31日、平成20年8月1日から9月30日まで下土師東遺跡の発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査経過

下土師東遺跡の調査は、平成17年10月1日から平成18年3月31日、平成18年4月1日から平成19年3月31日、平成19年6月1日から7月31日、平成20年8月1日から9月30日に実施された。このうち第2区の調査は平成17年12月1日から平成18年3月31日、第3区の調査は平成18年4月1日から7月31日、及び平成19年2月1日から3月31日、第7区の調査は平成19年6月1日から7月31日、及び平成20年8月1日から9月30日に実施された。以下、その概要を表で記載する。

工程	平成17年度				平成18年度												
	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
調査準備 表土除去 遺構確認	■				■	■											
遺構調査		■	■	■			■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
遺物洗浄 注記作業 写真整理		■	■	■			■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
補足調査					■						■						■
撤 収																	

工程	平成19年度		平成20年度	
	6月	7月	8月	9月
調査準備 表土除去 遺構確認	■		■	
遺構調査		■		■
遺物洗浄 注記作業 写真整理		■		■
補足調査			■	
撤 収				■

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

下土師東遺跡は、茨城県東茨城郡茨城町大字下土師字東山2,401番地ほかに所在している。

茨城町は、茨城県の中央部よりやや東に位置し、ほぼ中央部を東流する潤沼川とその東に展開する潤沼によって、南北に二分されている。北部の台地は、標高23～30mの東茨城郡北部台地の先端部にあたり、北西から流れる潤沼前川に向かって大小の支谷が開口している。南部の台地は、西から大谷川、南から寛政川が潤沼に流入し、両河川の間に大小の支谷が樹枝状に台地深くまで侵入している。北部台地に比べて起伏も多く、一層複雑な地勢を形成している。これらの河川流域の沖積低地は主に水田、台地は畑地・樹園地として利用されている。

地質をみると、台地を形成している最も古い地層は新生代第三紀の地層で、岩質は泥岩の水戸層と呼ばれている。水戸層の上には第四紀の地層が不整合に堆積している。さらに、粘土・砂からなる見和層、礫からなる上市層、灰褐色の常総粘土層、関東ローム層の順にはほぼ水平に堆積している¹⁾。

下土師東遺跡は町城南西部の下土師地区に位置し、潤沼川右岸に張り出した標高23～30mの舌状台地上の北部に立地している。調査区の北側は潤沼川に面した標高約22～23mの台地縁辺部で、南側はこの台地の北東から南に入り込む谷津の北斜面部に面している。調査前の現況はいずれも山林・畑地である。

第2節 歴史的環境

遺跡周辺からは、分布調査や発掘調査によって多数の遺跡が確認されている。特に、潤沼川及び潤沼前川流域の台地上には各時代の遺跡が分布しており、この地域が原始・古代から生活の適地であったことがうかがえる。ここでは、当遺跡に関連する主な遺跡について時代を追って述べる。

縄文時代の遺跡は多数確認され、時期は中期を中心としてほぼ全期にわたっている。早期では、当遺跡の南東側に近接する赤坂南坪遺跡²⁾や潤沼南岸台地上の中落遺跡がある。前期では、宮後遺跡³⁾、シッペイ沢遺跡⁴⁾、東山遺跡⁵⁾、奥谷遺跡⁶⁾などがあり、越安貝塚⁷⁾、南小割遺跡⁸⁾では地点貝塚が確認されている。中期に入ると遺跡数は町内全域で増加し、塚越遺跡、天古崎遺跡などがみられる。後・晩期になると遺跡数は減少傾向にあり、小堤貝塚⁹⁾、下土師遺跡¹⁰⁾などを数えるだけとなる。

弥生時代では、中期後半の土器が神谷東遺跡、西台遺跡などで採集されている。後期後半には、長岡式土器が出土している長岡遺跡、奥谷遺跡、小鶴遺跡¹¹⁾などがある。その他、矢倉遺跡¹²⁾、大畑遺跡¹³⁾、石原遺跡¹⁴⁾、宮後遺跡¹⁵⁾、綱山遺跡¹⁶⁾、大塚遺跡¹⁷⁾、大戸下郷遺跡¹⁸⁾などがある。特に矢倉遺跡と大戸下郷遺跡からは県外の樽式土器や二軒屋式土器などが出土しており、他地域との交流を想定することができる。

古墳時代になると、潤沼前川周辺に位置する石原遺跡、綱山遺跡、大塚遺跡や大洗町城の潤沼周辺では、十王台式土器と土師器が共存する住居跡が確認されており、弥生時代から古墳時代への移行期における当地の様相を示した重要な遺跡となっている。一方、潤沼川流域では目立った弥生時代の集落は確認されておらず、十王台式土器と土師器の共存例も確認されていない。

その潤沼川流域に目をむけると、古墳時代前期の豪族居館跡や集落跡が確認された奥谷遺跡¹⁹⁾が右岸に位置している。さらに上流では、4世紀末から5世紀初頭に比定される前方後方墳の宝塚古墳¹⁰⁾が位置しており、当地方における在有力者の存在がうかがえる。さらに、宝塚古墳と谷津を挟んで位置する南小割遺跡¹⁶⁾からは総数127軒の住居跡や方形周溝墓が確認されている。南小割遺跡の住居跡からは、東京湾岸沿いの南関東地方で多く類例が見られる小波状口縁を有する土師器甕が出土している。平成18年度には、下流に位置する中畑遺跡¹⁸⁾の調査が実施されている。特に方形周溝墓と同時期の住居跡が隣接して存在している事例が報告されており、当該期の潤沼川流域も重要な地域として認識されるようになった。後期になると奥谷遺跡、南小割遺跡、大戸下郷遺跡などで住居数が顕著に増加し、河川に近い台地上に集落が形成されていったと考えられる。

平成2年に墳形が確認された前田の上ノ山古墳¹⁷⁾からは、小幡北山埴輪製作遺跡¹⁹⁾で生産されたとされる埴輪(6世紀中頃)が出土している。また、潤沼川を望む台地縁辺部の一角に築造された東山稲荷古墳²⁰⁾(20)では、朝顔形円筒埴輪を配列した円筒列(36本)が発見され、埴輪研究上の重要な資料となっている。本古墳は、潤沼川以南の下土師を中心とした地域を統轄下に収め、埴輪製作にもかかわった職業工人集団の首長層的な人物であった可能性が高いとされている。

奈良時代の当地方は、那賀郡八部郷、茨城郡嶋田郷・白川郷・安侯郷、鹿島郡宮前郷にそれぞれ属しており、当遺跡の所在する下土師地区は茨城郡嶋田郷に比定されている²¹⁾。この時期の遺跡は、町内全域で確認されている。奥谷遺跡では100点以上の墨書土器が出土しており、その中の「曹カヨ」の墨書土器は官衙の庁舎などの意味があることから、当遺跡が官衙的な施設をもつ集落であると想定されている。この他、宮後遺跡や大塚遺跡から出土した「南主」、面山東遺跡²²⁾(21)から出土した「土師神主」なども注目される墨書土器である。特に「土師神主」は、土師部の集団との密接な関連を示しているものであり、土師氏の人々が祀る神(宮・社)に奉斎する神主を意味し、その神主の属人器であることを示している。さらに、下土師東遺跡の9世紀前葉の住居跡からは、「大同三年正口」と記された漆紙文書が出土しており²³⁾、当地域に漆工人や漆を塗る作業を行った工房の存在がうかがえる。この他、宮後遺跡・大塚遺跡・綱山遺跡では、墨書土器の他、円面硯、灰釉陶器、腰帯具などが出土していることから、石原遺跡を含む4遺跡一帯は、官衙的施設が存在した集落であった可能性が高い。

中世の遺跡は主に城館跡であり、宮ヶ崎城跡²⁴⁾、小幡城跡²⁵⁾、海老沢館跡、奥谷館跡、飯沼城跡、平須館跡(22)などが所在している。これらのうち小幡城跡は、現存する町内の城館跡中では最大規模で、平成17年度から調査が実施されている。初期の城主については小田一族や大塚一族などの諸説があるが、詳細は不明である。近年、小幡城跡の7郭の一部が調査されている。7郭からは掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡、墓坑などの他、広大な平場が確認されており、戦国時代末期の城の縄張を考えると重要な資料となっている。また、奥谷遺跡では堀、地下式坑、方形堅穴遺構、井戸跡などが調査され、土師質土器や陶器などが出土している。さらに、常陸大塚系大戸氏一族の所領であった前田の万東山地区からは、13世紀前半の「青白磁蓮牡丹文明梅瓶」が出土しており、中世にもこの潤沼川・潤沼前川沿岸に有力な氏族が居住していたことがうかがえる。

近世になると町の中心部は南北に走る水戸街道に沿った長岡や小幡が宿駅として発展し、潤沼南岸の網掛、宮ヶ崎、海老沢は水上交通の要所として栄え、水戸藩をはじめ仙台藩など奥州諸藩と江戸を結ぶ貨物輸送の中継地として重要な役割を果たした。

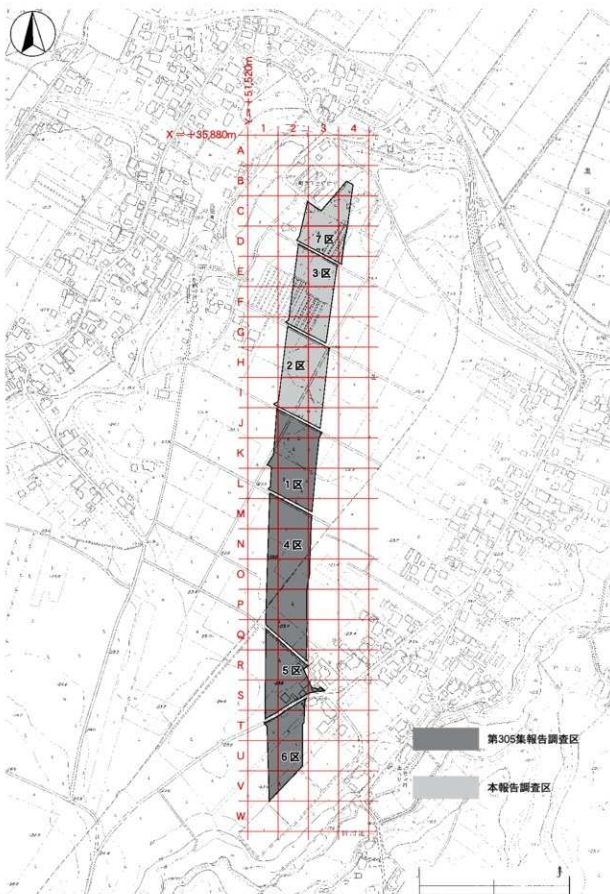
* 文中の()内の番号は、表1及び第1図の該当番号と同じである。

註

- 1) 日本の地質『関東地方』編集委員会『日本の地質3 関東地方』共立出版 1986年1月
- 2) a 川文清明・野田良直・吹野富美夫・浅野和久「宮後遺跡1 やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第188集 2002年3月
b 和田清典・吹野富美夫・浅野和久・荒蔭克一郎・駒澤悦郎「宮後遺跡2 やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅲ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第240集 2005年3月
c 川文清明・浅野和久「宮後遺跡3 やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅳ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第241集 2005年3月
- 3) 経国和彦「一般国道6号改築工事地内埋蔵文化財調査報告書 奥谷遺跡・小鶴遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第50集 1989年3月
- 4) 中村敬治・江幡良夫「茨城中央工業団地造成工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ 南小洞遺跡・権現堂遺跡・親塚古墳・後原遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第129集 1998年3月
- 5) 井上義安「小塚貝塚」茨城町史編さん委員会 1986年11月
- 6) 飯島一生「北関東自動車道(友部～水戸)建設工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 矢倉遺跡・後口原遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第135集 1998年3月
- 7) 長谷川聡「北関東自動車道(友部～水戸)建設工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 大作遺跡・大畑遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第136集 1998年3月
- 8) 村上和彦「やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 石原遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』163集 2000年3月
- 9) 註2文獻に同じ
- 10) 田中幸夫・荒蔭克一郎「綱山遺跡 やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅵ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第243集 2005年3月
- 11) a 長谷川聡・田中幸夫・小野克敏「大塚遺跡1 やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅴ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第242集 2005年3月
b 井上琢哉・小林健太郎「大塚遺跡2 主要地方道内原塩崎線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅴ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第258集 2006年3月
- 12) a 近藤恒重「大戸下郷遺跡 主要地方道内原塩崎線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第216集 2004年3月
b 綿引英樹・松本直人「大戸下郷遺跡2 主要地方道内原塩崎線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第257集 2006年3月
- 13) 註3文獻に同じ
- 14) 茨城町史編さん委員会『茨城町史 通史編』茨城町教育委員会 1995年2月
- 15) 註4文獻に同じ
- 16) 早川嗣司「中塚遺跡 東関東自動車道水戸線(茨城南IC～茨城JCT)建設事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第306集 2008年3月
- 17) 井上義安ほか『茨城町上ノ山古墳』茨城町史編さん委員会 1994年3月
- 18) 大塚初重・井上義安ほか『小幡北山埴輪製作遺跡』茨城町教育委員会 1988年2月
- 19) 井上義安ほか『東山稲荷古墳』茨城町史編さん委員会 1995年11月
- 20) 註14文獻に同じ
- 21) 佐藤次男『面山東遺跡』茨城町史編さん委員会 1997年1月
- 22) 芳賀友博・菊池直哉「下土師東遺跡 東関東自動車道水戸線(茨城南IC～茨城JCT)建設事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第305集 2008年3月
- 23) 野田良直「主要地方道大洗友部線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書2 宮ヶ崎城跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第141集 1999年3月
- 24) 芳賀友博 杉澤季嗣 須賀川正一「小幡城跡 前新堀遺跡 前新堀B遺跡 諏訪山塚群 藤山塚 東関東自動車道水戸線(茨城南IC～茨城JCT)建設事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第314集 2009年3月

表1 下土師東遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代						番号	遺跡名	時代					
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中・近世			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中・近世
①	下土師東遺跡		○		○	○	○	26	小山台遺跡		○		○	○	
2	赤坂南坪遺跡		○		○	○		27	面山遺跡		○			○	
3	宮後遺跡	○	○	○	○	○	○	28	高山遺跡		○		○	○	
4	シッペイ沢遺跡		○		○			29	仲丸遺跡		○		○		
5	東山遺跡		○	○	○	○		30	富士山遺跡		○			○	
6	奥谷遺跡		○	○	○	○	○	31	北山東遺跡		○			○	
7	越安貝塚		○					32	宮上遺跡		○	○	○	○	
8	南小割遺跡	○	○	○	○	○	○	33	西山古墳				○		
9	小堤貝塚		○	○	○			34	大作遺跡	○	○		○		
10	下土師遺跡		○			○		35	蔵作遺跡		○		○		
11	小鶴遺跡		○	○				36	大畑古墳				○		
12	矢倉遺跡		○	○	○	○		37	上の前遺跡		○	○	○	○	
13	大畑遺跡	○	○	○	○	○	○	38	東畑遺跡		○	○	○	○	
14	石原遺跡		○	○	○	○		39	諏訪神社古墳群				○		
15	綱山遺跡		○	○	○	○	○	40	坪戸遺跡			○	○		
16	大塚遺跡		○	○	○	○	○	41	大戸神宮寺遺跡		○		○	○	
17	大戸下郷遺跡		○	○	○	○	○	42	寺坪遺跡		○	○	○	○	
18	中畑遺跡		○	○	○	○		43	神宮前古墳				○		
19	小幡北山埴輪製作遺跡				○			44	羽黒山遺跡			○	○	○	
20	東山稲荷古墳				○			45	稲荷宮遺跡			○	○	○	
21	面山東遺跡					○		46	猫崎遺跡		○	○	○		
22	平須館跡						○	47	木戸遺跡			○		○	
23	高山古墳				○			48	八幡山遺跡		○		○	○	
24	富士山古墳				○			49	近藤前遺跡		○		○	○	
25	小山台古墳				○			50	全山遺跡			○		○	



第2図 下土師東遺跡調査区設定図（茨城町都市計画図 1:2,500）

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要

下土師東遺跡は茨城町の南西部に位置し、潤沼川右岸の標高22～23mの台地上に立地している。

調査は、便宜上第1～7区に分けて調査した。今回報告するのは、平成17～20年度に調査した第2・3・7区の計16,253㎡についてである。

調査の結果、古墳時代前期から後期の集落跡、江戸時代の墓地跡などが確認された。調査前の現況は山林・畑地である。

今回の調査によって、竪穴住居跡69軒（古墳65，時期不明4）、掘立柱建物跡2棟（古墳）、方形竅穴遺構1基（中世・近世）、溝跡16条（古墳1，奈良1，中世・近世1，時期不明13）、井戸跡2基（中世・近世）、墓坑50基（中世・近世）、土坑183基（中世・近世2，時期不明181）、道路跡1条（中世・近世）、柵跡1列（中世・近世）、方形周溝遺構1基（時期不明）、ピット群7か所（時期不明）を確認した。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に65箱出土している。主な遺物は、土師器（坏・碗・埴・器台・高坏・壺・甕・瓶）、須恵器（坏・大甕）、土師質土器（小皿）、土製品（球状土錘・人物埴輪）、石器（石鏃・砥石・磨石）、石製品（白玉・管玉・紡錘車・石製模造品）、金属製品（古銭・煙管）、自然遺物（炭化米）などである。

第2節 基本層序

調査区中央部のK3h3区にテストピットを設定し、深さ2mまで掘り下げて基本土層（第3図）の観察を行った。土層は9層に分層され、第3～6層が関東ローム層、第8層が鹿沼バミス層に相当する。観察結果は以下の通りである。

第1層は、黒褐色を呈する耕作土層である。ローム粒子及び焼土粒子を微量に含み、粘性・締まりとも弱く、層厚は28～38cmである。

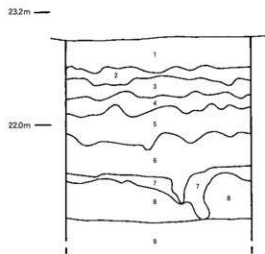
第2層は、暗褐色を呈するローム層への漸移層である。ローム粒子を中量含み、粘性・締まりともやや強く、層厚は4～16cmである。

第3層は、褐色を呈するソフトローム層である。粘性・締まりともやや強く、層厚は4～22cmである。

第4層は、褐色を呈するソフトローム層である。第3層よりロームブロックを多く含み、粘性・締まりともやや強く、層厚は8～26cmである。

第5層は、褐色を呈するハードローム層である。粘性・締まりとも強く、層厚は28～42cmである。

第6層は、褐色を呈するハードローム層である。鹿沼バミス粒子を微量含み、粘性・締まりとも極めて強く、層厚



第3図 基本土層図

は30～46cmである。

第7層は、褐色を呈する鹿沼バミス層への漸移層である。ローム粒子及び鹿沼バミスを中量含み、粘性・締まりとも強く、層厚は15～24cmである。

第8層は、橙色を呈する鹿沼バミスの純層である。粘性は弱く、締まりは強く、層厚は18～38cmである。

第9層は、褐色を呈するハードローム層である。細礫及び粘土粒子を微量含み、粘性・締まりとも極めて強い。下層が未掘のため、本来の層厚は不明である。

遺構の多くは第2層上面で確認している。

第3節 遺構と遺物

1 縄文時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、陥し穴3基が確認されている。以下、遺構と遺物について記述する。

陥し穴

第3号陥し穴（第4図）

位置 調査区北部のD3g4区、標高23.2mの台地縁辺部に位置している。

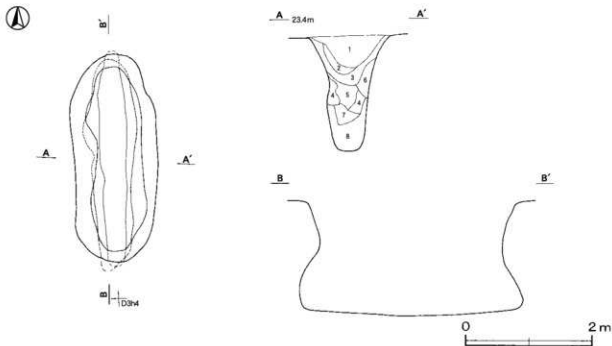
規模と形状 長径3.32m、短径1.34mの長楕円形である。長径方向はN-3°-Eで、台地の傾斜に対してほぼ直交している。深さは180cmで、壁は直立している。

覆土 8層に分層できる。ロームブロックを多く含む人為堆積である。

土層解説

1 黒褐色	ローム粒子微量	5 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
2 黒褐色	ローム粒子少量	6 暗褐色	ロームブロック少量
3 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量	7 褐色	ロームブロック少量
4 褐色	ロームブロック中量	8 褐色	鹿沼バミス粒子中量、ローム粒子少量

所見 時期は、遺構の形状から縄文時代と考えられる。



第4図 第3号陥し穴実測図

第4号陥し穴（第5図）

位置 調査区北部のC3h8区、標高22.4mの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 長径2.00m、短径1.14mの楕円形である。長径方向はN-43°-Eで、台地の傾斜に対してほぼ直交している。深さは162cmで、壁は直立している。

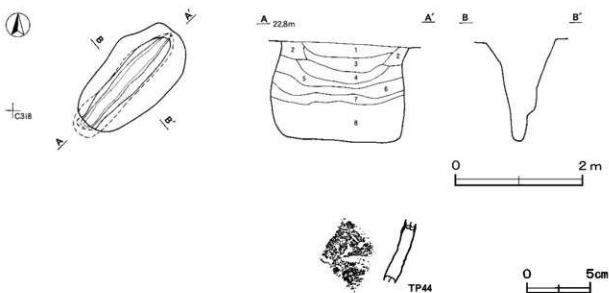
覆土 8層に分層できる。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

1 黒褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	5 褐色	ロームブロック少量
2 褐色	ロームブロック多量、炭化粒子微量	6 褐色	ロームブロック中量
3 暗褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量	7 褐色	ロームブロック多量
4 褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量	8 褐色	ローム粒子多量

遺物出土状況 縄文土器片1点が覆土中から出土している。

所見 時期は、遺構の形状から縄文時代と考えられる。



第5図 第4号陥し穴・出土遺物実測図

第4号陥し穴出土遺物観察表（第5図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP44	縄文土器	深鉢	—	(4.8)	—	長石・石英	明褐色	普通	条痕文	覆土中	

第5号陥し穴（第6図）

位置 調査区北部のC4d1区、標高21.7mの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 長径3.52m、短径1.83mの楕円形である。長径方向はN-34°-Eで、台地の傾斜に対してほぼ直交している。深さは208cmで、壁は直立している。

覆土 17層に分層できる。第1～4層は自然堆積、第5～17層はロームブロックを多く含む人為堆積である。

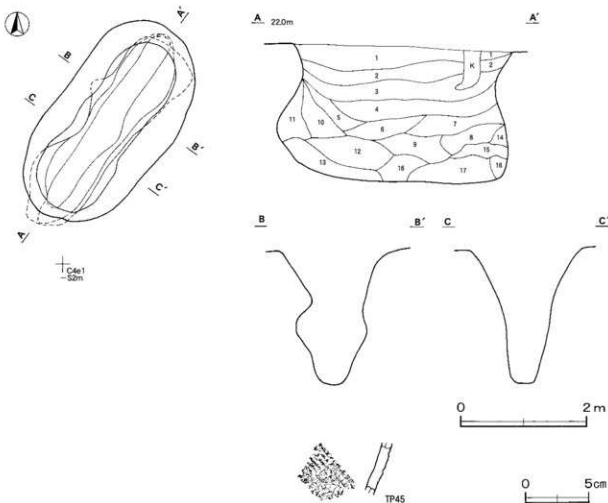
土層解説

1 黒褐色	ローム粒子微量	6 褐色	ロームブロック多量、鹿沼パミスブロック少量、炭化粒子微量
2 黒褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	7 褐色	ロームブロック多量、炭化粒子・鹿沼パミスブロック少量
3 黒褐色	ロームブロック微量	8 暗褐色	ロームブロック多量、鹿沼パミスブロック微量
4 灰褐色	ロームブロック多量		
5 褐色	ロームブロック多量		

9	褐色	ロームブロック中量, 鹿沼パミスブロック少量	14	褐色	ロームブロック多量, 鹿沼パミス粒子中量
10	暗褐色	ロームブロック中量, 鹿沼パミスブロック微量	15	黒褐色	ロームブロック中量, 鹿沼パミスブロック少量
11	褐色	ロームブロック多量, 鹿沼パミスブロック少量	16	褐色	ロームブロック多量, 鹿沼パミス粒子微量
12	褐色	ロームブロック多量, 鹿沼パミス粒子少量	17	暗褐色	ロームブロック中量, 鹿沼パミスブロック少量
13	褐色	ロームブロック中量, 鹿沼パミス粒子微量			

遺物出土状況 縄文土器片2点(深鉢), 礫1点が出土している。TP45は覆土中から出土している。

所見 時期は, 出土土器や遺構の形状から縄文時代と考えられる。



第6図 第5号陥し穴・出土遺物実測図

第5号陥し穴出土遺物観察表(第6図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考
TP45	縄文土器	深鉢	—	(4.1)	—	長石・石英	明褐色	普通	ループ文 地文は単筋LRの縄文 面は丁寧なナデ	内	覆土中

表2 陥し穴一覧表

番号	位置	長軸(径)方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 重複関係 (古→新)
				長軸(径)×短軸(径)(m)	深さ(cm)					
3	D 3 g1	N-3°-E	長楕円形	3.32 × 1.34	180	直立	平坦	人為	—	
4	C 3 h8	N-43°-E	楕円形	2.00 × 1.14	162	直立	平坦	自然	縄文土器	
5	C 4 d1	N-34°-E	楕円形	3.52 × 1.83	208	直立	平坦	自然 人為	縄文土器	

2 古墳時代の遺構と遺物

当時代の遺構は竪穴住居跡65軒、掘立柱建物跡2棟、溝跡1条が確認されている。以下、遺構と遺物について記述する。

(1) 竪穴住居跡

第1号住居跡（第7図）

位置 調査区北部のG2e4区、標高22.8mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 北東部が調査区域外に伸びているため、南北軸は2.88m、東西軸は2.87mだけが確認されている。南壁と西壁の方向、柱穴の位置から主軸方向はN-18°-Wと推測される。壁高は20~28cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、硬化面は確認されなかった。

ピット 2か所。P1は深さ25cmで、規模と配置から南西部の主柱穴と考えられる。P2は深さ21cmで、性格は不明である。

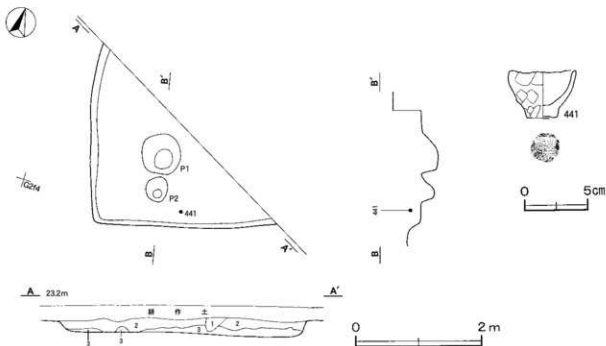
覆土 3層に分層できる。ローム土や炭化粒子を含み、ブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 3 褐色 ローム粒子中量
2 暗褐色 炭化粒子少量、ロームブロック微量

遺物出土状況 土師器片40点（甕39、ミニチュア土器1）、土製品1点（不明）が出土している。441は南壁際の覆土上層から出土しており、埋没過程で混入したものと考えられる。

所見 時期は出土土器が少ないため明確な判定は困難であるが、前期と考えられる。



第7図 第1号住居跡・出土遺物実測図

第1号住居跡出土遺物観察表（第7図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法的特徴ほか	出土位置	備考
441	土師器	ミニチュア土器	5.2	3.8	2.3	長石・石英	にがい橙	普通	口縁端部指頭による押し 体部内・外 面ハナナデ	覆土上層	90%、PL35

第2号住居跡（第8図）

位置 調査区北部のG 2 f6区、標高23mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 北東部が調査区域外に延びているため、南北軸は1.97m、東西軸は3.48mだけが確認されている。南壁と西壁の方向から主軸方向はN-3°-Eと推測される。壁高は30~39cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、硬化面は確認されなかった。

ピット 2か所。P1は深さ48cmで、規模と配置から南西部の主柱穴と考えられる。P2は深さ22cmで、南壁際の中央部に位置していると推測されることから、出入口施設に伴うピットと考えられる。

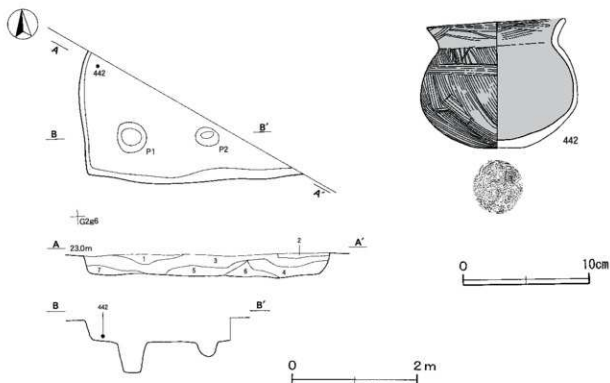
覆土 7層に分層できる。ローム土や焼土、炭化物を含み、ブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

- | | |
|------------------------------|------------------------|
| 1 黒褐色 炭化物粒子少量、ローム粒子微量 | 5 黒褐色 炭化物・ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 2 褐色 ロームブロック少量、炭化物粒子微量 | 6 極暗褐色 ロームブロック・炭化物粒子微量 |
| 3 黒褐色 ローム粒子・炭化物粒子少量、焼土ブロック微量 | 7 褐色 ロームブロック・炭化物粒子微量 |
| 4 暗褐色 焼土ブロック・ローム粒子・炭化物粒子微量 | |

遺物出土状況 土師器片13点（高坏1，壺3，甕9），土製品1点（不明）が出土している。442は西壁際の覆土下層から出土している。

所見 時期は出土土器が少ないため明確な判定は困難であるが、前期と考えられる。



第8図 第2号住居跡・出土遺物実測図

第2号住居跡出土遺物観察表（第8図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
442	土師器	小形甕	11.0	10.2	4.1	長石・石英・雲母・赤色粒子	赤褐色	普通	口縁部内・外面へラ磨き 体部外面へケ目調整後へラ磨き 内面へラナゲ 底部へラ磨り	覆土下層	100% PL30

第3号住居跡（第9～12図）

位置 調査区北部のG2h6区、標高22.7mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第4号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸5.98m、短軸5.70mの方形で、主軸方向はN-10°-Eである。壁高は36cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部から西側の炉周辺が踏み固められている。東壁下に最大で幅約1m、長さ約3mの範囲で、高さ6cmほどの高まり部が確認されている。また、中央部の床には炭化材が集中してみられ、中央部から南東コーナー部を除く、ほぼ全面に焼土が堆積している。壁溝が全周している。

炉 西壁側のやや南寄りに位置している。長径107cm、短径76cmの楕円形で、地山の床面をわずかに掘りくぼめた地床炉である。炉床面は皿状を呈し、火を受けて赤変硬化している。

伊土層解説

- | | |
|-----------------------|--------------------------|
| 1 暗赤褐色 焼土粒子中量 | 4 暗赤褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子微量 |
| 2 暗赤褐色 焼土粒子多量、ローム粒子微量 | 5 にごり褐色 焼土粒子少量、ロームブロック微量 |
| 3 赤褐色 焼土粒子中量 | |

ピット 9か所。P1・P3は深さ46cm・62cm、P2は25cmと浅いが、規模や配置から支柱穴と考えられる。

P4は深さ15cmで、南壁際の中央部に位置していることから、出入り口施設に伴うピットである。P5～P9は深さ9～46cm、P7は高まり部の下から確認されたピットで、それぞれ性格は不明である。

貯蔵穴 2か所。貯蔵穴1は南東コーナー部に位置している。径50cmの円形で、深さは52cmである。底面は平坦で、壁は直立している。貯蔵穴2は南西コーナー部に位置している。径62cmの円形で、深さは45cmである。底面は皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。覆土は人為堆積の状況を示している。

貯蔵穴1土層解説

- | | |
|-----------------------------|---------------------------|
| 1 褐色 ロームブロック・炭化物少量、焼土ブロック微量 | 4 暗褐色 ローム粒子少量、炭化物・焼土粒子微量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量 | 5 灰褐色 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 焼土粒子少量、ロームブロック・炭化粒子微量 | |

貯蔵穴2土層解説

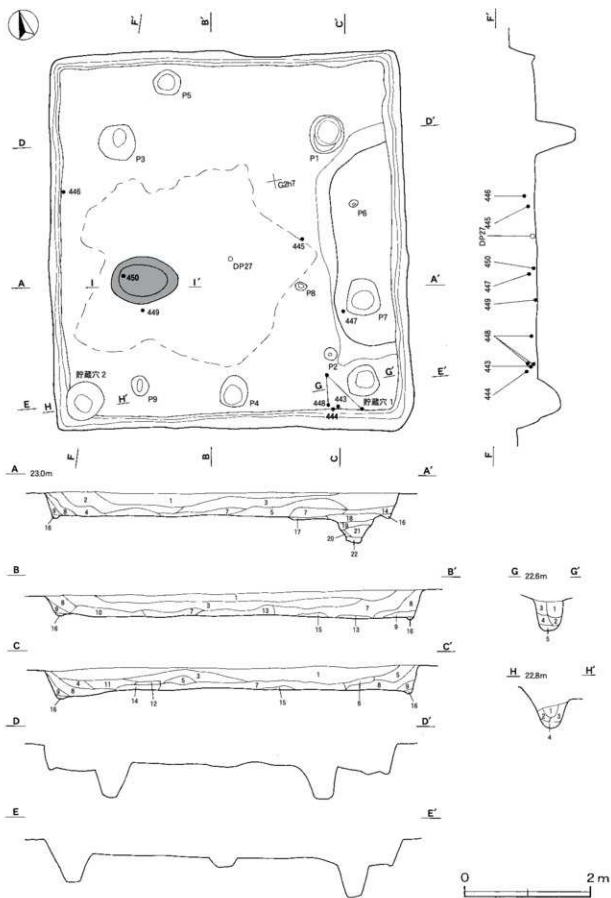
- | | |
|-----------------------------|-------------------------|
| 1 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化物少量、ローム粒子微量 | 3 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量 | 4 暗褐色 ローム粒子少量 |

覆土 22層に分層できる。ローム土や焼土、炭化物を含み、ブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。第7・14層は高まりの構築土、第19～22層はP7の覆土である。

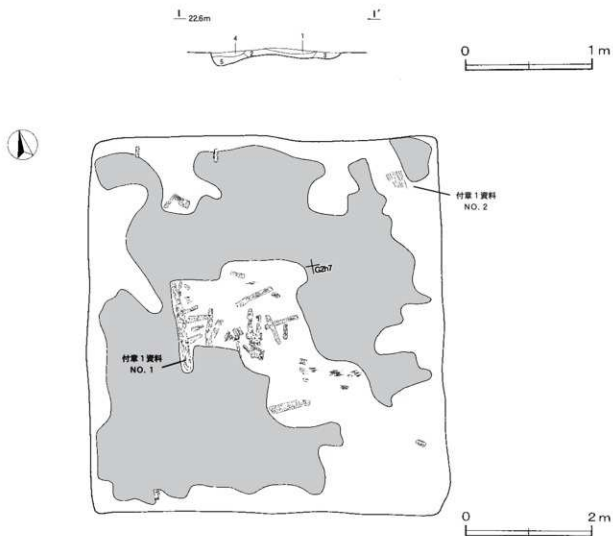
土層解説

- | | |
|--------------------------------|-------------------------------|
| 1 黒褐色 焼土ブロック多量、炭化物・ローム粒子微量 | 12 黒褐色 炭化物少量、ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 2 黒褐色 ロームブロック・炭化物・焼土粒子微量 | 13 黒褐色 炭化物多量 |
| 3 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 14 暗褐色 焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化物微量 |
| 4 赤褐色 焼土ブロック少量、炭化粒子微量 | 15 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 5 黒褐色 炭化物少量、焼土ブロック・ローム粒子微量 | 16 黒褐色 ロームブロック微量 |
| 6 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子少量、ローム粒子微量 | 17 褐色 炭化物・ローム粒子少量 |
| 7 にごり褐色 焼土ブロック中量、炭化物少量、ローム粒子微量 | 18 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子少量、炭化物微量 |
| 8 極暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 19 暗褐色 ロームブロック少量 |
| 9 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 20 褐色 ローム粒子中量、糞沼バミス微量 |
| 10 赤褐色 焼土ブロック中量 | 21 暗褐色 糞沼バミス中量、ロームブロック少量 |
| 11 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量 | 22 褐色 ローム粒子中量、糞沼バミス少量 |

遺物出土状況 土師器片580点（坏14、埴2、高坏6、壺1、甕555、小形甕1、炉器台1）、土製品9点（炉器台8、球状土錘1）が出土している。また、流れ込んだ縄文土器片2点、刺片2点も出土している。443・444・448は南東コーナー部、445は中央部、447は東部、446は西壁際、DP27は中央部の覆土下層からそれぞれ出土している。449は炉南側の床面から潰れた状態、450は炉内の覆土に埋められた状態で出土しており、住居廃絶時に遺棄されたものと考えられる。土製炉器台が西壁際と中央部やや北寄りに8点出土しているが、火を



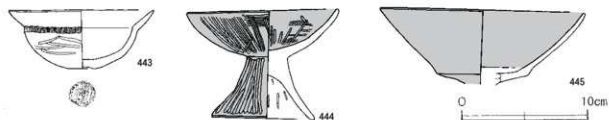
第9图 第3号住居跡実測図(1)



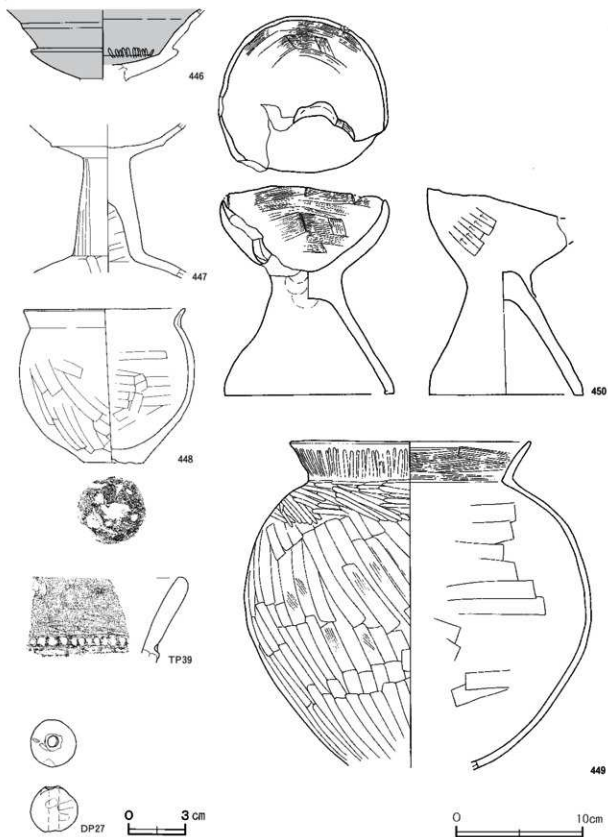
第10図 第3号住居跡実測図(2)

受けて脆くなっており、図示することができない。これらの炉器台は、住居廃絶時に遺棄されたものと考えられる。

所見 中央部に炭化材が集中し、中央部から南東コーナー一部を除く、ほぼ全面から焼土が検出されていることから焼失住居と考えられる。本跡の形態は周囲の住居跡と比べ、内部施設に高まり部分をもつなど差異が認められる。時期は、出土土器から4世紀後葉と考えられる。



第11図 第3号住居跡出土遺物実測図(1)



第12图 第3号住居跡出土遺物実測図(2)

第3号住居跡出土遺物観察表(第11・12図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
443	土師器	埴	11.5	4.7	2.0	長石・石英	橙	普通	口縁部内・外面ハケ目調整後ナダ 体部外面へラナダ	覆土下層	85% PL23
444	土師器	高坏	11.9	8.8	8.0	長石・石英	にぶい赤褐	普通	体部内・外面へラナダ 器部外面へラナダ 内面へラナダ 器部内面一部赤褐色あり	覆土下層	80%
450	土師器	伊呂台	12.9	16.5	13.5	長石・石英	にぶい褐	普通	内面ハケ目調整後へラナダ 外面へラナダ 器部内・外面部押圧痕 輪縁みあり	伊呂面	90% 漆付き 円28
445	土師器	高坏	16.3	(5.9)	—	石英・雲母・赤色粒子	赤褐	普通	坏部内・外面器面荒れのため調整不明	覆土下層	50%
446	土師器	高坏	—	(5.6)	—	長石・石英	赤褐	普通	坏部内面へラナダ	覆土下層	30%
447	土師器	高坏	—	(12.0)	—	長石・石英	明赤褐	普通	坏部器面荒れのため調整不明 脚部外面へラナダ 内面へラナダ	覆土下層	60%
448	土師器	小形壺	12.8	12.3	4.8	長石・石英	にぶい褐	普通	体部内・外面へラナダ	覆土下層	70% PL30
449	土師器	壺	19.6	(26.3)	—	長石・石英・黒色粒子	明赤褐	普通	口縁部内面ハケ目調整後ナダ 外面へラナダ 体部内面へラナダ 外面上段へラナダ 中位から下位ハケ目調整後へラナダ	床面	85% PL31
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP39	土師器	壺	—	(6.7)	—	長石・石英・赤色粒子・黒色粒子	にぶい黄褐	普通	頸部外面棒状工具による刺突列	覆土中	PL37
番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質(胎土)	特 徴		出土位置	備考	
DF27	環状土師	2.4	2.4	0.6	12.0	長石・石英・赤色粒子	へラナダ	一方両からの穿孔	覆土下層		

第4号住居跡(第13図)

位置 調査区北部のG2g7区、標高22.8mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第3号住居に掘り込まれている。

規模と形状 北東部が調査区域外に延びているため、南北軸は5.22m、東西軸は4.62mだけが確認されている。壁の方向から主軸方向はN-27°-Wと推測される。壁高は18~20cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、中央部から東部が踏み固められている。南東コーナー部下と北壁下に壁溝が確認されている。

炉 中央部のやや北寄りに位置している。長径86cm、短径48cmの楕円形で、地山の床面をわずかに掘りくぼめた地床炉である。炉床面は皿状を呈し、火を受けて赤変硬化している。

伊土層解説

1 赤 赤褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量

ピット 5か所。P1は深さ46cm、P2は深さ19cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P3は深さ19cmで、南壁際の中央部に位置していることから、出入り口施設に伴うピットである。P4は深さ11cm、P5は深さ13cmで、性格は不明である。

覆土 3層に分層できる。ローム土や焼土、炭化物を含み、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

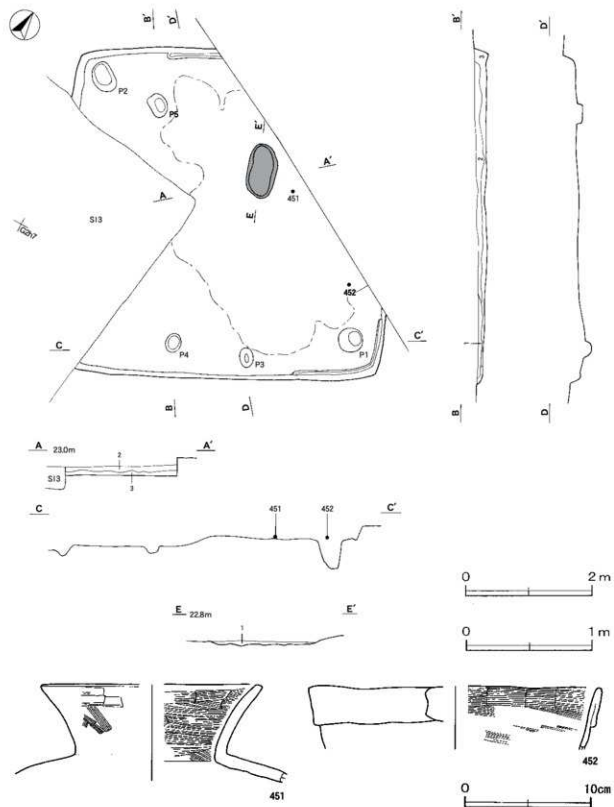
1 黒 褐色 炭化粒子少量、ロームブロック・焼土ブロック微量

3 黒 褐色 ロームブロック・炭化物・焼土粒子微量

2 黒 褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片170点(坏32, 高坏2, 壺1, 甕135), 土製品2点(伊呂台)が出土している。また、流れ込んだ縄文土器片4点も出土している。451は中央部東寄り、452は南東コーナー部の床面からそれぞれ出土しており、住居廃絶時に廃棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器や重複関係から4世紀中葉と考えられる。



第13图 第4号住居跡・出土遺物実測図

第4号住居跡出土遺物観察表 (第13図)

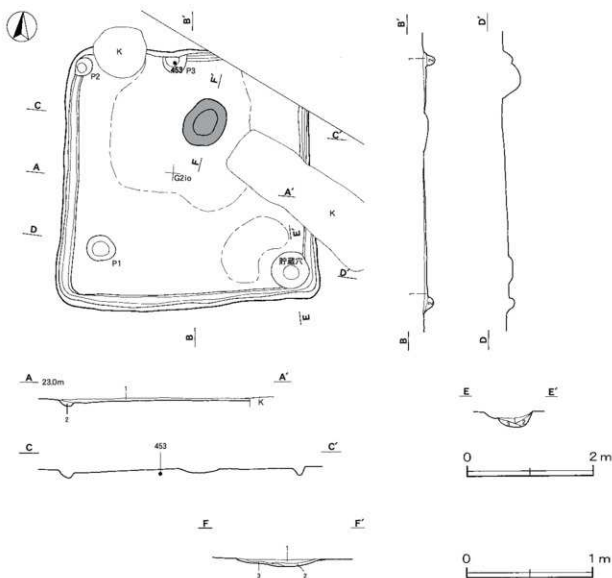
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
451	土師器	壺	[17.0]	(7.7)	—	長石・石英	橙	普通	口縁部内・外面ハケ目調整	床面	5%
452	土師器	甕	[23.0]	(5.0)	—	長石・石英・雲母	赤彩	普通	複合口縁 口縁部内面ハケ目調整	床面	5%

第5号住居跡 (第14・15図)

位置 調査区北部のG210区、標高22.8mの台地平坦部に位置している。南東約7mに第6号住居跡が位置している。

規模と形状 北東コーナー一部が調査区域外に延びている。長軸4.20m、短軸4.12mの方形で、主軸方向はN-6°-Wである。壁高は4cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部から北側の炉周辺と南東コーナー一部に確認された貯藏穴周辺の西側が踏み固められている。壁溝がほぼ全周している。



第14図 第5号住居跡実測図

炉 中央部のやや北寄りに位置している。長径78cm、短径61cmの楕円形で、地山の床面を掘りくぼめた地床炉である。炉床面は皿状を呈し、火を受けて赤変硬化している。

伊土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量 3 暗褐色 焼土ブロック少量
2 暗赤褐色 焼土粒子中量

ピット 3か所。P1は深さ9cm、P2は深さ14cm、P3は深さ10cmで、いずれも性格は不明である。

貯蔵穴 南東コーナー部に位置している。径60cmの円形で、深さは28cmである。底面は皿状で、壁は外傾している。覆土は人為堆積の状況を示している。

貯蔵穴土層解説

- 1 褐色 ローム粒子少量 3 暗褐色 ローム粒子少量
2 褐色 ローム粒子中量

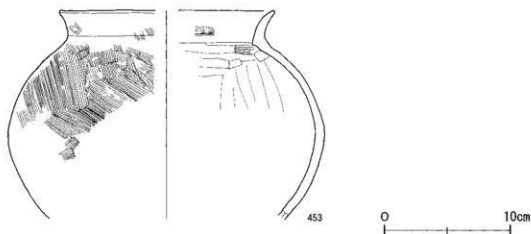
覆土 2層に分層できる。層厚が薄く、堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量 2 暗褐色 ロームブロック微量

遺物出土状況 土師器片93点（坏2、高坏1、甕90）が出土している。453はP3の覆土下層から出土している。住居廃絶時に遺棄されたものと考えられる。

所見 出土土器が少ないため明確な判定は困難であるが、時期は出土土器から前期と考えられる。



第15図 第5号住居跡出土遺物実測図

第5号住居跡出土遺物観察表（第15図）

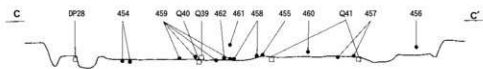
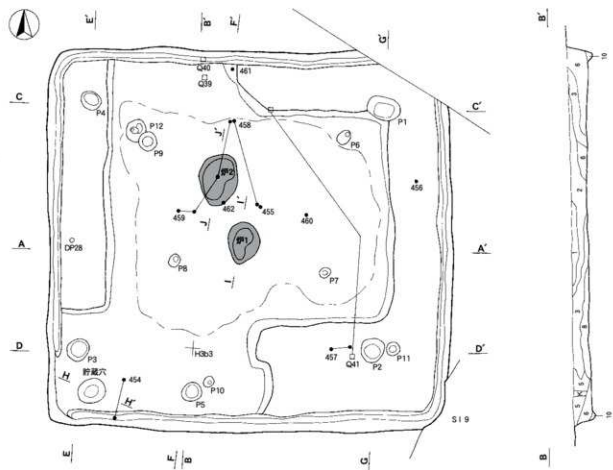
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
453	土師器	甕	[17.0]	(16.5)	-	長石・石英・赤色 粒子	橙	普通	口縁部内・外面ハケ目調整後ナデ 体 部内面ハケ目調整後ヘラナデ 外面ハ ケ目調整	P3 覆上下層	

第6号住居跡（第16～19図）

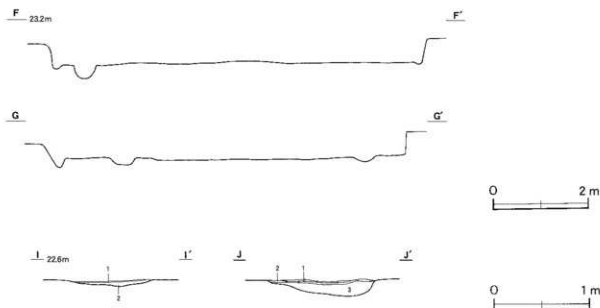
位置 調査区北部のH3a3区、標高22.8mの台地平坦部に位置している。

重複関係 北東コーナー部が調査区域外に延びている。第9号住居に南東コーナー部を掘り込まれている。

規模と形状 長軸8.55m、短軸8.02mの方形で、主軸方向はN-6°-Wである。壁高は30～40cmで、外傾して立ち上がっている。



第16图 第6号住居跡実測图(1)



第17図 第6号住居跡実測図(2)

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。西壁際と北東壁際から南東壁際にかけて、床面を10cmほど掘り残した高まりが確認されている。壁溝は南西コーナー部下で途切れるが、ほぼ全周している。

炉 2か所。炉1は中央部に位置している。長径89cm、短径70cmの楕円形で、地山の床面を掘りくぼめた地床炉である。炉床面は皿状を呈し、やや赤変している。炉2は中央部のやや北寄りに位置している。長径112cm、短径85cmの楕円形で、地山の床面を掘りくぼめた地床炉である。炉床面は皿状を呈し、火を受け赤変硬化している。炉1・2の新旧関係は不明である。

伊1土層解説

- | | |
|--------------|--------------------------|
| 1 暗褐色 焼土粒子少量 | 2 暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量 |
|--------------|--------------------------|

伊2土層解説

- | | |
|---------------------|------------------------|
| 1 黒褐色 焼土ブロック・炭化粒子微量 | 3 暗赤褐色 焼土ブロック多量、炭化粒子微量 |
| 2 暗赤褐色 焼土ブロック少量 | |

ピット 12か所。P1～P4は深さ13～25cmと浅いが、配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ37cmで、南壁中央のやや西に位置しており、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6～P9は深さ13～80cmで、中央部の硬化面の四隅に配されていることから、柱穴の可能性も考えられるが、柱穴の深さに差があるため、明確ではない。P10～P12は深さ14～65cmで、性格は不明である。

貯蔵穴 南西コーナー部に位置している。径56cmの円形で、深さは43cmである。底面は皿状で、壁は外傾している。覆土は人為堆積の状況を示している。

貯蔵穴土層解説

- | | |
|-----------------------|-----------------------|
| 1 極暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量 | 2 黒褐色 鹿沼パミス少量、ローム粒子微量 |
|-----------------------|-----------------------|

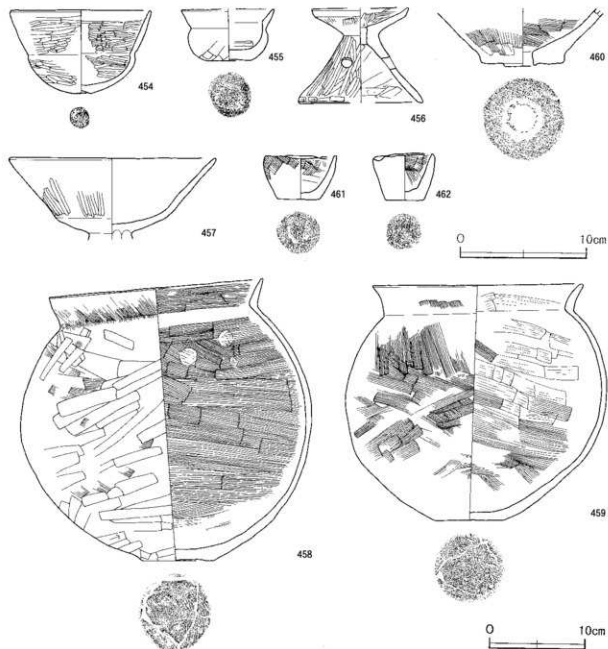
覆土 10層に分層できる。ローム土や焼土、炭化物を含み、ブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

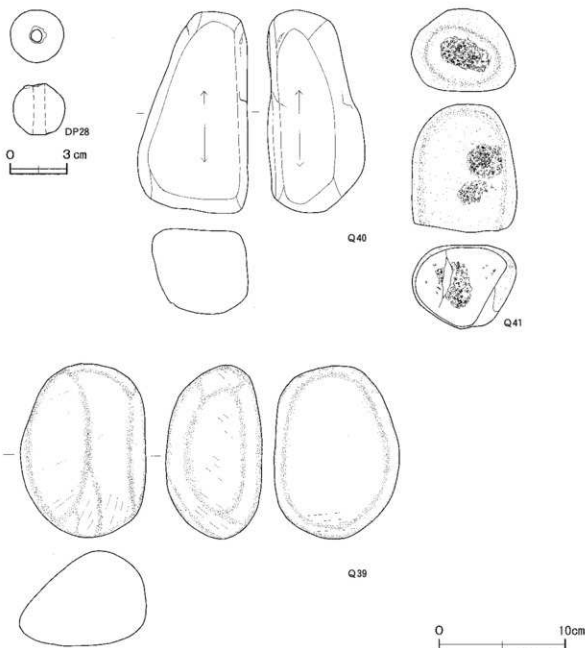
- | | |
|-----------------------------|----------------------|
| 1 極暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量 | 6 極暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量 | 7 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量 |
| 3 褐色 ロームブロック微量 | 8 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 4 暗褐色 炭化粒子少量、ロームブロック・焼土粒子微量 | 9 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 5 褐色 ロームブロック少量 | 10 暗褐色 ローム粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片892点(坏5, 埴3, 器台1, 高坏5, 壺1, 甕874, 甌1, ミニチュア土器2), 土製品1点(球状土錘), 石器3点(磨石, 砥石, 礮石)が出土している。また, 流れ込んだ縄文土器片6点, 混入した平瓦1点, 鉄滓2点も出土している。455・458・459・462は中央部, 457は東部, 454は西寄りの南壁際, Q39・Q40は北壁際, DP28は西壁際の床面からそれぞれ出土している。Q41は北部と南部から出土した破片が接合した礮石である。

所見 本跡は, 当遺跡における同時期の住居跡の中では大形で, 内部に地山を掘り残した高まりがみられるなど, 差異が認められる。時期は, 出土土器から4世紀前葉と考えられる。



第18図 第6号住居跡出土遺物実測図(1)



第19図 第6号住居跡出土遺物実測図(2)

第6号住居跡出土遺物観察表(第18・19図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
454	土師器	埴	11.2	6.6	1.4	長石・雲母	橙	普通	口縁部内・外面へラ磨き 体部内・外面へラナデ	床面	90% PL23
455	土師器	埴	[7.3]	4.1	3.4	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部内・外面ナデ 体部内・外面へラ磨き	床面	80% PL23
456	土師器	器台	[7.6]	7.5	[9.9]	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	受部内面へラ磨き 外面ハケ目調整後へラ磨き 器内面へラナデ 外面へラ磨き 受部中央に貫通孔 3箇所	覆土中層	70%
457	土師器	高坏	16.4	(6.5)	—	長石・石英	橙	普通	坏部内面器面荒れのため調整不明 外面へラ磨き	床面	60%
460	土師器	瓶	—	(4.6)	6.5	長石・石英	橙	普通	体部内・外面ハケ目調整	覆土中層	5%
458	土師器	甕	22.2	29.3	7.5	長石・雲母	明橙	普通	口縁部内面ハケ目調整 外面ハケ目調整後ナデ 体部外面ハケ目調整後へラナデ 内面ハケ目調整 指頭痕	床面	80%
459	土師器	甕	21.8	24.6	7.3	長石・石英	にぶい黄橙	普通	口縁部内・外面ハケ目調整後ナデ 体部内面ハケ目調整後ナデ 外面ハケ目調整	床面	80% 煤付着
461	土師器	ミコテツト土器	5.7	3.5	3.3	長石・石英	にぶい地	普通	体部内面ハケ目調整後ナデ 外面ハケ目調整	覆土上層	100% PL35

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
462	土師器	ヒレフユツ土器	4.7	3.7	3.0	長石	にがい赤褐色	普通	体部内面ハケ目調整 外面ナデ	炉内	100%
番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質(胎土)	特 徴		出土位置	備考	
DP28	球状土埴	2.4	2.4	0.6	20.3	長石・雲母	ナデ	一方向からの穿孔	床面		
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴		出土位置	備考	
Q39	磨石	13.7	10.0	7.7	1510	砂岩	使用面3面		床面		
Q40	砥石	16.2	8.8	7.8	1610	砂岩	砥面2面		床面		
Q41	礮石	10.2	8.3	6.5	798	砂岩	礮打痕4か所		床面		

第7号住居跡（第20図）

位置 調査区北部のH3a5区、標高23mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第10号溝に掘り込まれている。

規模と形状 中央部から北部が調査区域外に延びているため、南北軸は2.35m、東西軸は3.06mだけが確認されている。南壁と西壁の位置から主軸方向はN-10°-Wと推測される。壁高は20~28cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で中央部が踏み固められている。

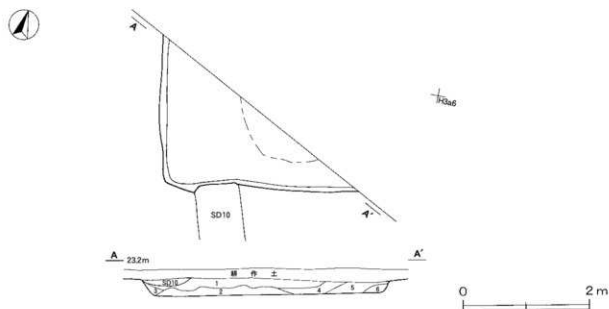
覆土 6層に分層できる。ローム土や焼土・炭化粒子を含み、ブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

- | | | | |
|--------|----------------|--------|---------------------|
| 1 極暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 4 黒褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 5 極暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子微量 |
| 3 黒褐色 | 炭化粒子少量、ローム粒子微量 | 6 黒褐色 | 炭化粒子少量、ロームブロック微量 |

遺物出土状況 土師器片6点(甕)が出土しているが、細片で図示できない。

所見 時期は出土土器が少ないため明確な判定は困難であるが、前期と考えられる。



第20図 第7号住居跡実測図

第8号住居跡（第21図）

位置 調査区北部のH3b6区、標高23mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 大部分が調査区域外に伸びているため、確認できたのは北西コーナー部の南北軸1.41m、東西軸0.95mだけである。北壁と西壁の位置から主軸方向はN-5°-Wと推測される。壁高は22~31cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。

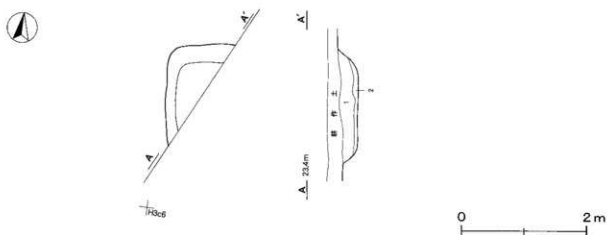
覆土 2層に分層できる。ローム土や炭化粒子を含み、ブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量 2 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片2点（環）が出土しているが、細片で図示できない。

所見 時期は出土土器が少ないため、明確な判定は困難であるが、前期と考えられる。



第21図 第8号住居跡実測図

第9号住居跡（第22~24図）

位置 調査区北部のH3b4区、標高22.8mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第6号住居跡を掘り込み、第10号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.89m、短軸4.85mの方形で、主軸方向はN-21°-Eである。壁高は34~42cmで、外傾して立ち上がっている。

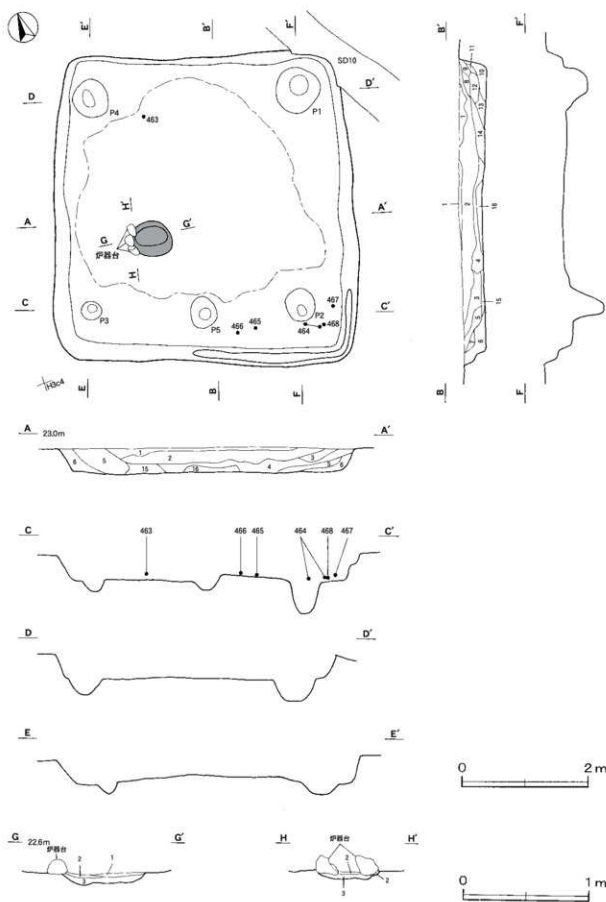
床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。南東コーナー部からは壁溝が確認されている。また、中央部から西寄りの床面に炭化材や焼土が検出されている。

炉 中央部のやや西寄りに位置している。長径65cm、短径55cmの楕円形で、地山の床面を掘りくぼめた地床炉である。炉床面は皿状を呈し、火を受けて赤変硬化している。西部から炉器台3個が出土している。

炉土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量 3 暗赤褐色 焼土ブロック中量、炭化物微量
2 暗褐色 焼土粒子少量、炭化物・ローム粒子微量

ピット 5か所。P1~P4は深さ15~51cmで、配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ18cmで、南壁際の中央部に位置しており、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

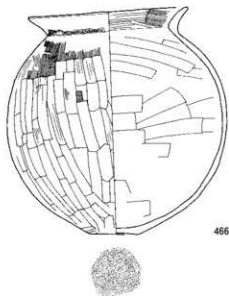
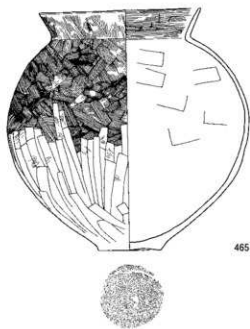
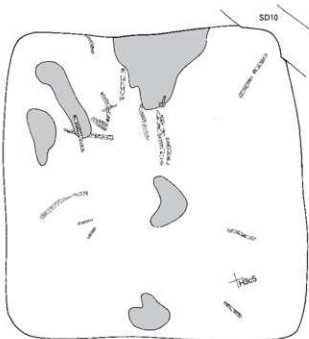


第22图 第9号住居跡実測图

覆土 16層に分層できる。ローム土や焼土・炭化粒子を含み、ブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

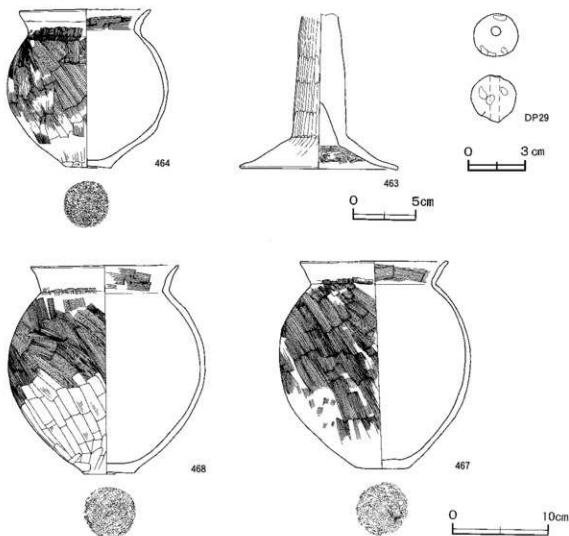
- | | | | |
|--------|-----------------------|---------|----------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子微量 | 9 種暗褐色 | 焼土ブロック少量、炭化物・ローム粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 10 褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・炭化物・焼土粒子少量 | 11 種暗褐色 | 焼土ブロック・炭化粒子少量 |
| 4 褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 12 赤褐色 | 焼土ブロック少量、炭化粒子微量 |
| 5 種暗褐色 | 炭化物・ローム粒子少量、焼土ブロック微量 | 13 暗赤褐色 | 焼土ブロック・炭化粒子微量 |
| 6 黒褐色 | 焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量 | 14 暗褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 7 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量 | 15 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 8 暗褐色 | 炭化粒子少量、ロームブロック・炭化粒子微量 | 16 暗褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 |



第23図 第9号住居跡・出土遺物実測図

遺物出土状況 土師器片162点(坏11, 高坏2, 甕149), 土製品4点(炉台3, 球状土錘1)が出土している。465は南部の床面, 464・467・468は南東コーナー一部, 463は北西部の覆土下層からそれぞれ出土しており, 住居廃絶時に遺棄されたものと考えられる。また, 炉台が炉の西部に据えられたような状態で出土しているが, 2個体は火を受けて脆くなっており, 図示することができなかった。

所見 床面に炭化材や焼土が検出されており, 焼失住居と考えられる。時期は, 出土土器や重複関係から4世紀後葉と考えられる。



第24図 第9号住居跡出土遺物実測図

第9号住居跡出土遺物観察表 (第23・24図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
463	土師器	高坏	—	(12.3)	12.6	長石・石英・雲母	黒艶	普通	脚部外面へラ磨き 内面ハケ目調整	床面	60%
464	土師器	甕	13.5	16.5	4.8	長石・石英・黒色 矽子	赤	普通	口縁部外面ナデ 内面ハケ目調整後ナデ 体部外面ハケ目調整 内面器面荒 れのため磨き不明	床面	90%
465	土師器	甕	16.8	25.1	6.5	長石・石英	赤艶	普通	口縁部内・外面ハケ目調整後ナデ 体 部外面ハケ目調整後中位以下へラナデ 外面へラナデ	床面	95% PL31
466	土師器	甕	16.5	23.7	5.4	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部内面ハケ目調整後ナデ 外面ナ デ 体部内面上位ハケ目調整後ナデ中 位以下へラナデ 外面ハケ目調整後 中位以下へラナデ	覆土下層	100% 煤付着 PL31

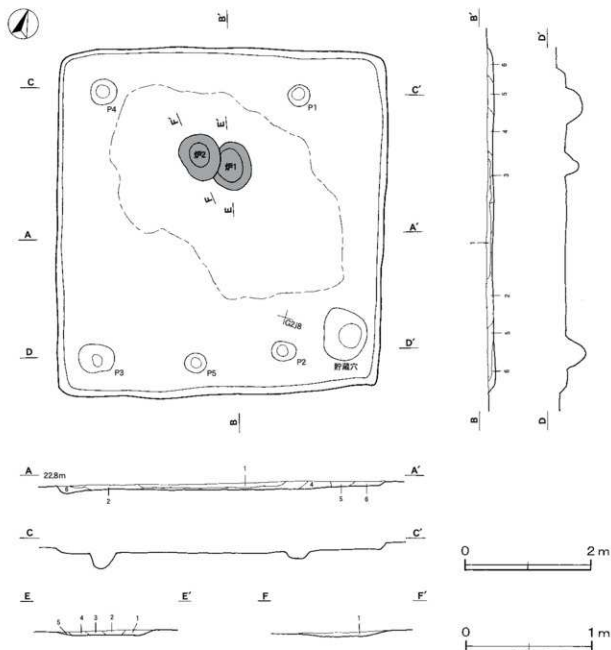
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
467	土師器	甕	15.4	21.8	5.6	長石・石英	赤	普通	口縁部内・外面ハケ目調整後ナデ 体部外至ハケ目調整 内面器面荒れのた め調整不明	床面	90% 煤付着 PL31
468	土師器	甕	15.2	21.7	5.5	長石・石英	明赤褐	普通	口縁部内面ハケ目調整後ナデ 外面ナ デ 体部ハケ目調整後中位以下ヘラナ デ 内面器面荒れのため調整不明	床面	90% 煤付着

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質(胎土)	特 徴	出土位置	備考
DP29	球状土埴	2.3	2.3	0.5	11.6	長石・石英・雲母	ナデ 一方向からの穿孔	覆土中	

第10号住居跡 (第25図)

位置 調査区北部のG 2 17区、標高22.6mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸5.56m、短軸5.26mの方形で、主軸方向はN-17°-Wである。壁高は8~12cmで、外傾して立ち上がっている。



第25図 第10号住居跡実測図

床 ほぼ平坦で、炉周辺の中央部が踏み固められている。

炉 2か所。2基とも中央部のやや北寄りに位置している。炉1は長径75cm、短径62cmの楕円形で、地山の床面をわずかに掘りくぼめた地床炉である。炉床面は皿状を呈し、やや赤変している。炉2は長径73cm、短径60cmの楕円形で、地山の床面をわずかに掘りくぼめた地床炉である。炉床面は皿状を呈し、火を受けて赤変硬化している。重複関係から炉1から炉2へ作り替えが行われたものと考えられる。

炉1土層解説

- | | |
|----------------------------|----------------------|
| 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量 | 4 黒褐色 焼土粒子少量、ローム粒子微量 |
| 2 褐色 ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量 | 5 黒褐色 焼土粒子微量 |
| 3 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子微量 | |

炉2土層解説

- 1 に似る褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子微量

ピット 5か所。P1～P4は深さ14～31cmで、配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ16cmで、南壁際中央部やや西寄りに位置しており、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴 南東コーナー部に位置している。長径86cm、短径68cmの楕円形で、深さは36cmである。底面は皿状で、壁は外傾している。

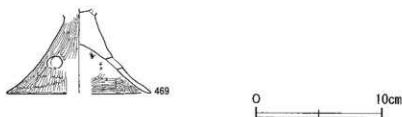
覆土 6層に分層できる。ローム土や焼土・炭化粒子を含み、ブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

- | | |
|---------------------------|--------------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 極暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 極暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量 | 6 暗褐色 炭化粒子少量、ローム粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片46点（高坏14、甕32）が出土している。また、流れ込んだ縄文土器片1点（深鉢）も出土している。469は覆土中から出土している。

所見 時期は出土土器が少ないため明確な判定は困難であるが、前期と考えられる。



第26図 第10号住居跡出土遺物実測図

第10号住居跡出土遺物観察表（第26図）

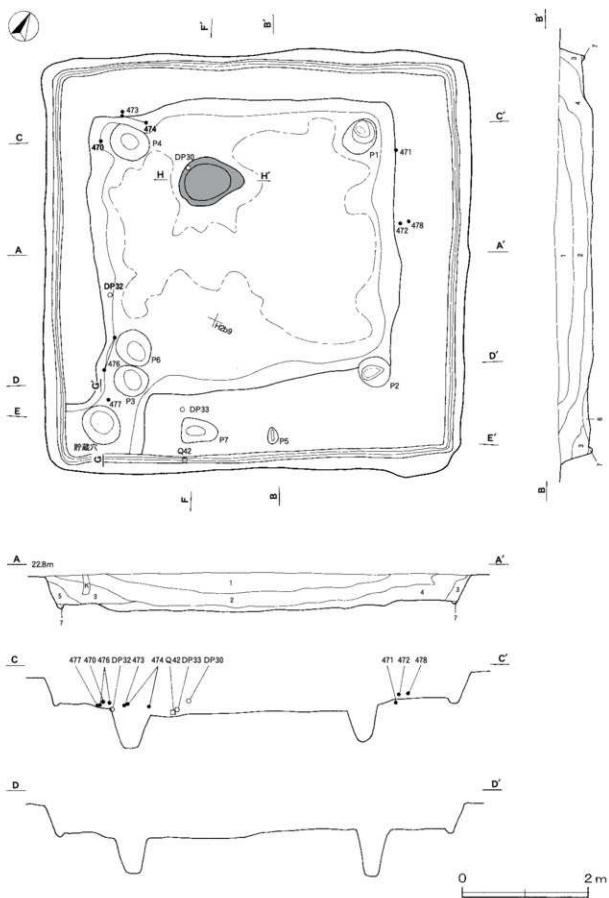
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
469	土師器	高坏	—	(6.7)	[11.5]	長石・石英	にが黄緑	普通	脚部外面へラ磨き 内面ハケ目調整後 へラ磨き 4室	覆土中	20%

第11号住居跡（第27～30図）

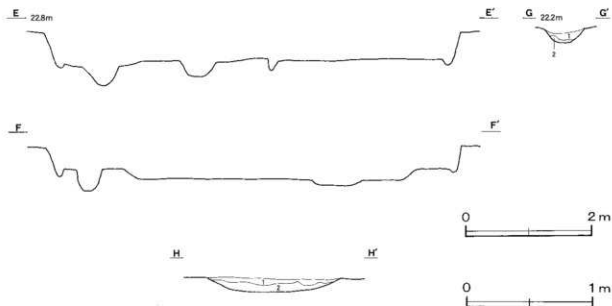
位置 調査区北部のH2a8区、標高22.6mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸6.68m、短軸6.62mの方形で、主軸方向はN-25°-Wである。壁高は40～46cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。壁際から80～150cmの範囲で、地山を掘り残した高さ10cmほどの高まりが南西コーナー部を除いて確認されている。壁溝が全周している。



第27图 第11号住居跡実測図(1)



第28図 第11号住居跡実測図(2)

炉 中央部の西寄りに位置している。長径104cm、短径52cmの楕円形で、床面を10cmほど皿状に掘りくぼめて炉床とした地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

伊土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子少量、ローム粒子微量 2 稀暗赤褐色 焼土ブロック少量

ピット 7か所。P1～P4は深さ50～74cmで、規模と配置から主柱穴である。P5は深さ18cmで、南壁際の中央に位置していることから、出入り口施設に伴うピットである。P6は深さ55cm、P7は深さ24cmで、性格は不明である。

貯蔵穴 南西コーナー部に位置している。長径66cm、短径58cmの楕円形で、深さは30cmである。底面は皿状で、壁は外傾している。覆土は人為堆積の状況を示している。

貯蔵穴土層解説

- 1 褐色 ロームブロック少量 2 褐色 ローム粒子中量

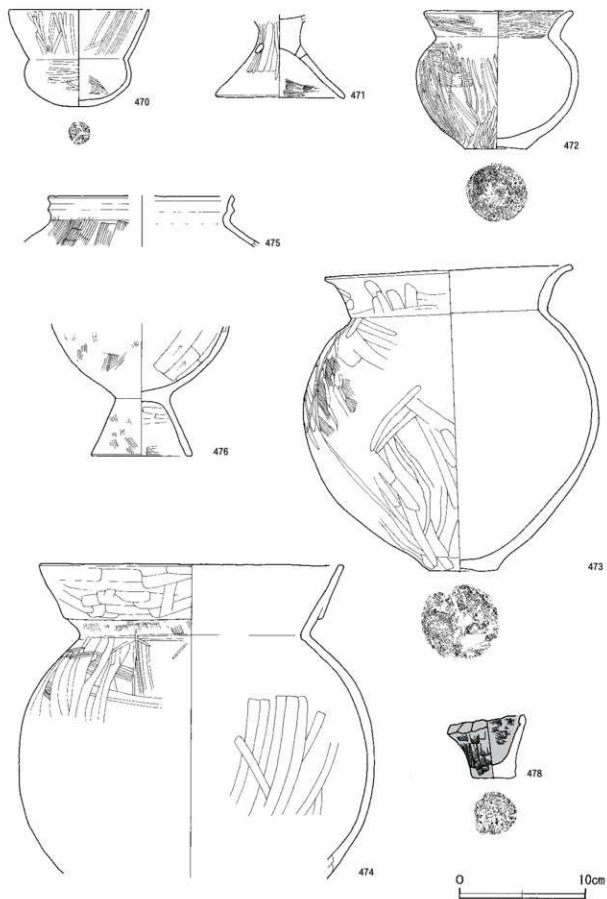
覆土 7層に分層できる。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

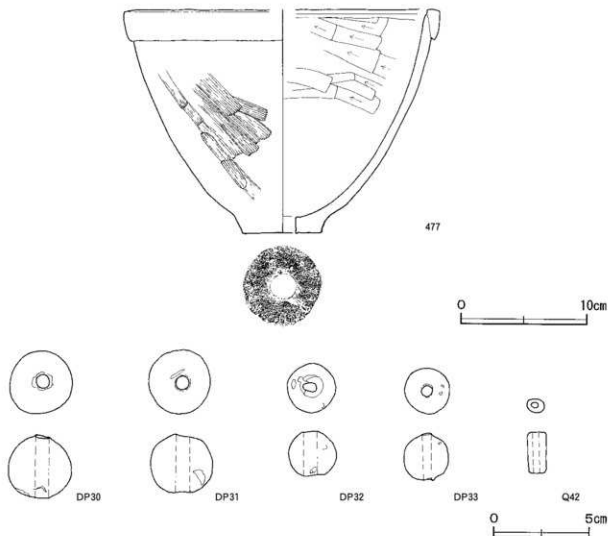
- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 5 暗褐色 ロームブロック少量
 2 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 6 褐色 ロームブロック微量
 3 褐色 ロームブロック少量 7 黒褐色 ローム粒子微量
 4 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片807点(坏4, 埴4, 高坏3, 壺3, 甕789, 小形甕1, 台付甕1, 瓶1, ミニチュア土器1), 土製品4点(球状土錘), 石製品1点(管玉)が西側のピット周辺や東部の覆土下層から床面にかけて出土している。また、混入した須恵器片2点(坏), 流れ込んだ縄文土器片3点(深鉢)も出土している。Q42は南壁溝内から出土している。図示したものを含めて遺物の多くが覆土下層から床面にかけて出土しており、廃絶時もしくは廃絶直後に廃棄されたものと考えられる。

所見 壁際に高まりを巡らせたベット状遺構を有し、周囲の住居と比較して特異である。出土土器や北西約10mに位置し、前期中葉に比定される第4号住居跡と主軸方向を同じくすることから、時期は4世紀中葉と考えられる。



第29图 第11号住居跡出土遺物実測図(1)



第30図 第11号住居跡出土遺物実測図(2)

第11号住居跡出土遺物観察表(第29・30図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
470	土師器	埴	11.1	7.7	1.5	長石・石英	にひい黄橙	普通	口縁部内面へラ磨き 外面ハケ目調整後へラ磨き 体部外面へラ目調整後へラ磨き 内面ハケ目調整	覆土下層	95% PL.23
471	土師器	高坪	—	(6.5)	10.2	長石・石英	明黄橙	普通	脚部外面ハケ目調整後へラ磨き 内面ハケ目調整後ナデ	床面	60%
472	土師器	小形壺	11.6	10.9	4.9	長石・石英・赤色 粘土	にひい黄橙	普通	口縁部内・外面へラ磨き 体部外面ハケ目調整後へラ磨き 内面ナデ	覆土下層	80% PL.30
473	土師器	壺	19.6	24.4	6.0	長石・石英・雲母	にひい黄橙	普通	口縁部内面ナデ 外面へラナデ 体部内面ナデ 外面ハケ目調整後へラナデ	覆土下層	90% PL.31
474	土師器	壺	24.0	(25.0)	—	長石・石英	にひい黄橙	普通	口縁部内面ナデ 外面へラナデ 体部内面へラナデ 外面ハケ目調整後へラナデ	覆土下層	70%
475	土師器	台付椀	[14.6]	(4.0)	—	長石・石英	橙	普通	体部外面ハケ目調整 S字状口縁	覆土中	5%
476	土師器	台付壺	—	(10.4)	8.0	長石・石英・赤色 粘土	橙灰	普通	体部内面へラ磨り 外面ハケ目調整 右面内面ハケ目調整後へラナデ 外面ハケ目調整	床面	30%
477	土師器	甗	[26.1]	17.7	6.3	長石・石英	橙	普通	体部内面へラ磨り 外面ハケ目調整 埋孔式	床面	50%
478	土師器	ミニチュア土器	5.6	5.0	3.4	長石・雲母	にひい黄橙	普通	体部内・外面ハケ目調整後ナデ	覆土下層	85% PL.35

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質(胎土)	特徴	出土位置	備考
DP30	球状土埴	3.4	3.4	0.7	32.1	長石・石英	ナデ 一方向からの穿孔	覆土中層	
DP31	球状土埴	3.4	3.1	0.8	31.2	長石・石英	ナデ 一方向からの穿孔	覆土中層	
DP32	球状土埴	2.4	2.6	0.7	13.4	長石・石英	ナデ 一方向からの穿孔	床面	
DP33	球状土埴	2.9	2.5	0.5	12.3	長石・石英	ナデ 一方向からの穿孔	覆土下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q12	管玉	2.20	0.95	0.7	2.8	滑石	丁寧な磨き 一方向からの穿孔 孔径0.3cm	南壁溝内	PL40

第12号住居跡（第31図）

位置 調査区北部のH2b0区、標高22.6mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸4.23m、短軸3.67mの長方形で、主軸方向はN-16°-Wである。壁高の残存は8～10cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、東部の柵周辺だけが踏み固められている。壁溝が北西から南西コーナーにかけて確認されている。

炉 中央部のやや東寄りに位置している。径60cmの円形である。

ピット 10か所。P1～P4は深さ8～38cmで、規模においてやや規則性を欠いているが、配置から支柱穴と考えられる。P5は深さ10cmで、南壁際の中央に位置していることから、出入口施設に伴うピットである。P6～P10は深さ8～22cmで、性格は不明である。

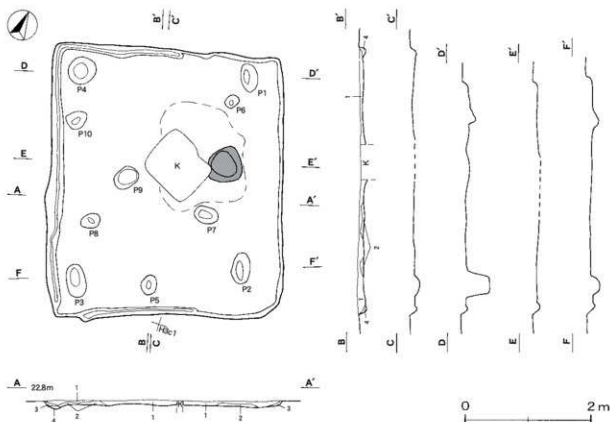
覆土 4層に分層できる。層厚が薄いため堆積状況は不明である。

土層解説

- | | |
|---------------|---------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子少量 | 3 暗褐色 ローム粒子微量 |
| 2 褐色 ローム粒子中量 | 4 黒褐色 ローム粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片19点（埴2、甕17）が出土しているが、細片で図示できない。

所見 時期は、出土土器が少ないため明確な時期判定は困難であるが、前期と考えられる。



第31図 第12号住居跡実測図

第13号住居跡（第32～34図）

位置 調査区北部のH3d4区、標高22.5mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸6.14m、短軸5.34mの長方形で、主軸方向はN-4°-Wである。壁高は24～40cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。壁溝が全周している。

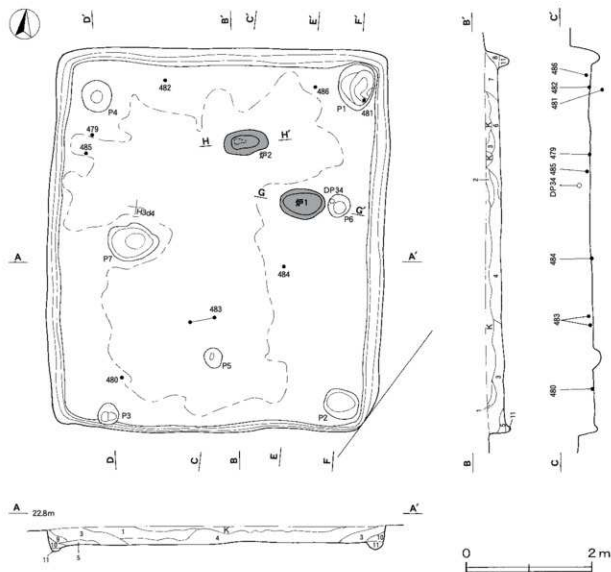
炉 2か所。炉1は中央部のやや東寄り、炉2は中央部のやや北寄りに位置している。炉1は長径76cm、短径46cmの楕円形で、床面を6cmほど皿状に掘りくぼめて炉床とした地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。炉2は長径68cm、短径40cmの楕円形で、床面を8cmほど皿状に掘りくぼめて炉床とした地床炉である。また、炉1と炉2の新旧関係は不明である。

伊1土層解説

1 暗赤褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量

伊2土層解説

1 暗赤褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量 3 褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量
2 暗赤褐色 焼土ブロック中量、炭化粒子少量



第32図 第13号住居跡実測図

ピット 7か所。P1～P4は深さ20～57cmで、規模と配置から主柱穴である。P5は深さ15cmで、南部の中央に位置していることから、出入り口施設に伴うピットである。P6の深さは11cm、P7の深さは51cmで、性格は不明である。

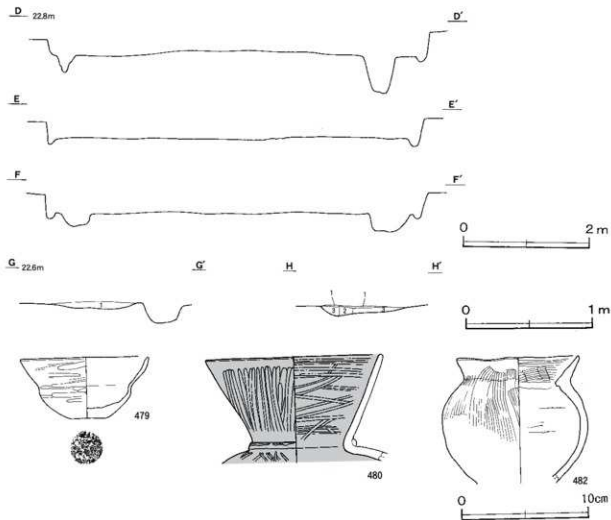
覆土 11層に分層できる。ローム土や焼土を含み、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

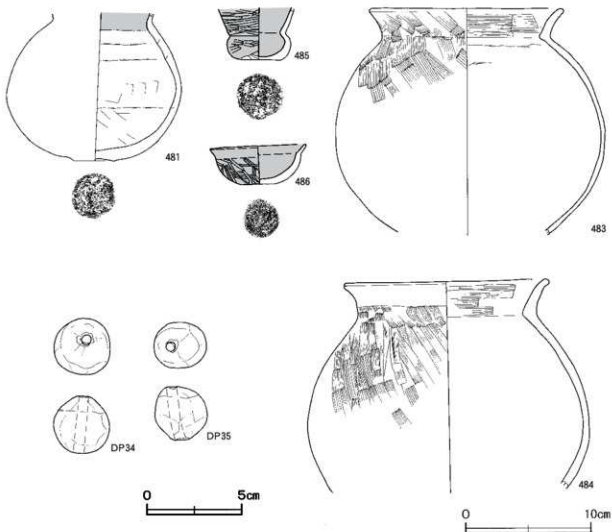
1 褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量	7 極暗褐色	ロームブロック少量
2 褐色	ロームブロック微量	8 褐色	ローム粒子中量
3 暗褐色	ロームブロック少量	9 暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子少量
4 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量	10 褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量
5 褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量	11 黒褐色	ロームブロック微量
6 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量		

遺物出土状況 土師器片415点（坏4，埴34，高坏21，壺1，甕350，小形甕2，ミニチュア土器3），土製品2点（球状土錘）が出土している。また、混入した須恵器片1点（甕），流れ込んだ縄文土器片2点（深鉢）も出土している。479・482は北部，480は南西部，484は中央部の床面からそれぞれ出土している。483は中央部，485・486は北部の覆土下層，481はP1内から出土している。遺物は北部の床面や中央部の覆土下層から床面にかけて出土しており、廃絶時もしくは廃絶直後に廃棄されたものと考えられる。

所見 炬が中央部の東寄りに付設されているのが特徴で、同じような様相は北西約10mに位置する第12号住居跡にも見られる。時期は、出土土器から4世紀前葉と考えられる。



第33図 第13号住居跡・出土遺物実測図



第34図 第13号住居跡出土遺物実測図

第13号住居跡出土遺物観察表 (第33・34図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
479	土師器	埴	10.1	4.9	2.3	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい褐色	普通	口縁部外面へラ磨き 内面器面荒れ	床面	100% PL23
480	土師器	埴	13.9	(8.4)	—	長石・石英	にぶい赤褐色	普通	口縁部内・外面へラ磨き 体部外面へラ磨き 胴部器面	床面	20%
481	土師器	埴	—	(11.7)	3.2	長石・石英・細礫	褐色	普通	体部内面へラ磨り 外面器面荒れ 輪縁みぞ	P 1 内	80%
482	土師器	小形埴	9.6	(10.0)	—	長石・石英	にぶい褐色	普通	口縁部内面ハケ目調整後ナデ 外面ナデ 体部外面ハケ目調整後ナデ 輪縁みぞ	床面	70%
483	土師器	甕	15.3	(17.9)	—	長石・雲母	にぶい褐色	普通	口縁部内・外面ハケ目調整 体部内面ナデ 外面ハケ目調整 輪縁みぞ	覆土下層	75% 保付着
484	土師器	甕	15.9	(16.9)	—	長石・石英・雲母	にぶい褐色	普通	口縁部内・外面ナデ 体部外面ハケ目調整	床面	65%
485	土師器	【ミナチア】土埴	—	(4.2)	3.4	長石・石英	赤褐色	普通	口縁部外面へラ磨き 内面器面荒れ	体部外面へラ磨き	90%
486	土師器	【ミナチア】土埴	7.6	3.0	2.9	長石・石英	にぶい赤褐色	普通	口縁部内・外面ナデ 体部外面へラ磨き 内面器面荒れ	覆土下層	100% PL35

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質(胎土)	特徴	出土位置	備考
DP34	球状土埴	3.0	3.0	0.6	22.2	長石・石英	ナデ 一方向からの穿孔	覆土中層	
DP35	球状土埴	2.7	2.8	0.6	16.2	長石・石英	ナデ 一方向からの穿孔	覆土中	

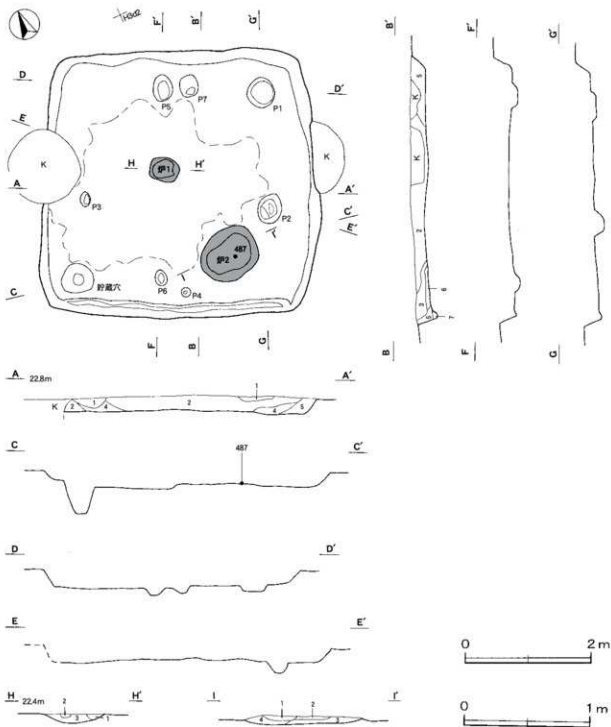
第14号住居跡 (第35・36図)

位置 調査区北部のH3d1区、標高22.5mの台地平坦部に位置している。北東約8mに第9号住居跡が位置している。

規模と形状 長軸4.44m、短軸4.23mの方形で、主軸方向は $N-24^{\circ}-E$ である。壁高は14~28cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。南壁際に壁溝が確認されている。

炉 2か所。炉1は中央部、炉2は南東部に位置している。炉1は長径48cm、短径38cmの楕円形で、床面を7



第35図 第14号住居跡実測図

や柱穴の位置から主軸方向はN-5°-Wと推測される。壁高は40~55cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、壁際を除く広い範囲が踏み固められていると推測される。壁溝が壁際にかけて確認されている。

ピット 2か所。P1の深さは15cm、P2の深さは19cmで、配置から東部2か所の支柱穴に相当すると思われる。

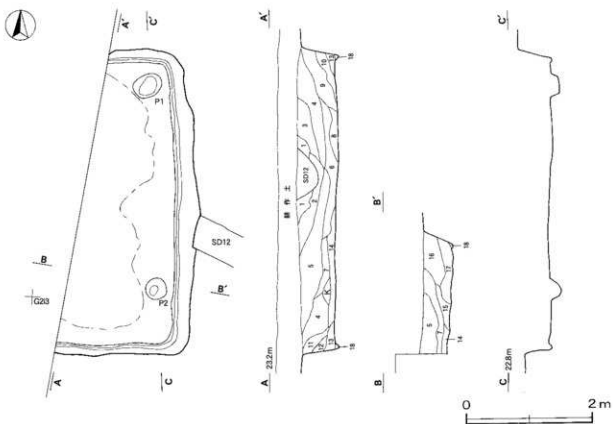
覆土 18層に分層できる。ローム土や焼土を含み、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- | | | | |
|--------|----------------------|--------|----------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量 | 10 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 2 極暗褐色 | ロームブロック少量 | 11 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 3 極暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子微量 | 12 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量 | 13 褐色 | ロームブロック中量 |
| 5 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 14 暗褐色 | ロームブロック微量 |
| 6 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量 | 15 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 7 極暗褐色 | 焼土粒子少量、ローム粒子微量 | 16 褐色 | ローム粒子中量 |
| 8 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量 | 17 褐色 | ロームブロック少量 |
| 9 極暗褐色 | ロームブロック少量、炭化物・焼土粒子微量 | 18 黒褐色 | ローム粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片147点(埴4, 器台1, 高坏11, 甕131)が覆土下層から出土しているが、細片で図示できない。

所見 時期は、出土土器が細片のため、明確な時期判定は困難であるが、前期と考えられる。



第37図 第15号住居跡実測図

第16号住居跡 (第38・39図)

位置 調査区北部のG2i5区、標高22.6mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第12号溝に掘り込まれている。

規模と形状 一边が4.33mの方形である。壁高は16~26cmで、外傾して立ち上がっている。

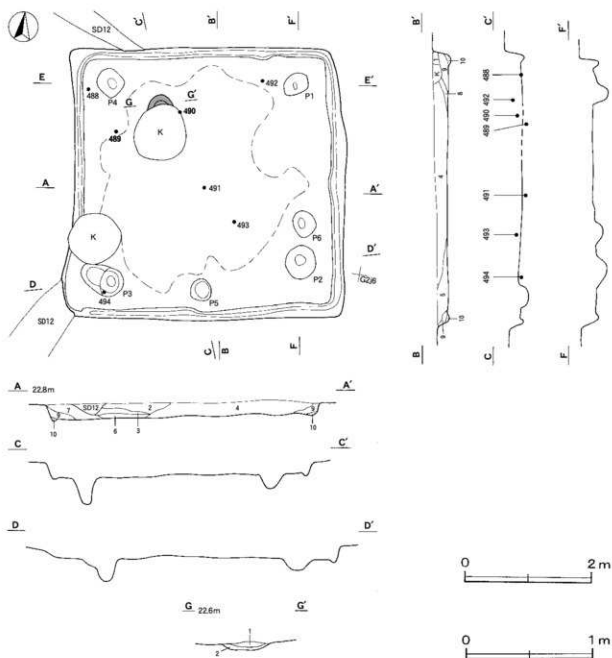
床 ほぼ平坦で、中央部を中心に広い範囲が踏み固められている。壁溝が南西部を除いて確認されている。

炉 北部の西寄りに位置している。南部が攪乱を受けているため、東西軸は40cm、南北軸は14cmだけが確認されている。平面形は円形または楕円形と推測される。床面を7cmほど皿状に掘りくぼめて炉床とした地床炉で、炉床面は火を受けて赤変硬化している。

伊土層解説

1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量

2 灰褐色 焼土ブロック少量、炭化粒子微量



第38図 第16号住居跡実測図

ピット 6か所。P1～P4は深さ18～42cmで、規模と配置から主柱穴である。P5は深さ16cmで、南壁際の中央に位置していることから、出入り口施設に伴うピットである。P6は深さ14cmで、性格は不明である。

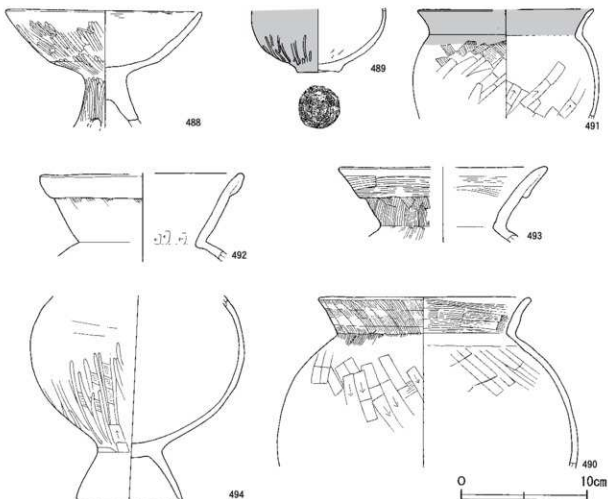
覆土 10層に分層できる。ローム土や焼土を含み、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- | | | | |
|--------|----------------|--------|---------------------|
| 1 極暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量 | 6 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土ブロック微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック微量 | 7 極暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック微量 | 8 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 4 褐色 | ローム粒子中量 | 9 黒褐色 | ローム粒子少量 |
| 5 暗褐色 | ローム粒子少量 | 10 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片579点（高坏6，埴1，壺2，甕569，台付甕1）が出土している。また、混入した須恵器片1点（蓋）、磁器片1点（碗）も出土している。488・489は北西部、491は中央部の床面、494はP3内から出土しており、住居廃絶時に遺棄されたものと考えられる。490は北部、493は中央部の覆土下層、492は北部の覆土中層からそれぞれ出土しており、住居廃絶後の埋設過程で廃棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から4世紀前葉と考えられる。



第39図 第16号住居跡出土遺物実測図

第16号住居跡出土遺物観察表 (第39図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
488	土師器	高坏	15.5	(9.9)	—	長石・石英・赤色 粒子	にぶい褐	普通	耳部外面へラ磨き 内面ナデ 脚部外 面へラ磨き 3京	床面	60%
489	土師器	壺	—	(5.0)	3.5	長石・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	体部外面へラ磨き 内面ナデ	床面	20%
490	土師器	甕	16.6	(13.5)	—	長石・石英	にぶい褐	普通	口縁部外面ハケ目調整後ナデ 体部内 面へラナデ 外面へラ磨り	覆土下層	10% 残付着
491	土師器	甕	[14.0]	(8.7)	—	長石・石英・雲母 ・赤色粒子	にぶい褐	普通	口縁部内・外面ナデ 体部外面ハケ 目調整後へラナデ 内面へラ磨り	床面	20%
492	土師器	壺	[16.0]	(7.0)	—	長石・石英・赤色 粒子	にぶい赤褐	普通	口縁部内面へラ磨り後横ナデ 外面ハ ケ目調整後横ナデ 複合口縁	覆土中層	5%
493	土師器	壺	[16.4]	(6.0)	—	長石・石英	明赤褐	普通	口縁部内・外面ハケ目調整 複合口縁	覆土下層	5%
494	土師器	台付壺	—	(16.1)	8.2	長石・雲母・赤色 粒子	にぶい褐	普通	体部内面へラナデ 外面ハケ目調整後 へラ磨き 右部内・外面ナデ	P 3内	60%

第17号住居跡 (第40～42図)

位置 調査区北部のG 2 j3区、標高22.6mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第12号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.92m、短軸5.88mの方形で、主軸方向はN-2°-Wである。壁高は40～46cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、壁際を除いて全体的に踏み固められ、壁溝が全周している。

炉 北部の中央やや西寄りに位置している。長径80cm、短径70cmの楕円形で、床面を5cmほど皿状に掘りくぼめて炉床とした地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

伊土層解説

1 極暗赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子微量

2 赤 褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子微量

ピット 12か所。P 1～P 4は深さ37～49cmで、配置から主柱穴と考えられる。P 5～P 8は深さ10～67cmで、規模において規則性を欠いているが、P 1～P 4の壁跡へそれぞれ対応していることから補助的な柱穴の可能性が考えられる。P 9～P 12は深さ24～58cmで、性格は不明である。

覆土 21層に分層できる。ローム土や焼土、炭化物を含み、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

1 極暗褐色 ロームブロック少量

12 褐 色 ロームブロック少量

2 暗 褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量

13 黒 褐色 ロームブロック微量

3 暗 褐色 ロームブロック・炭化物微量

14 暗 褐色 焼土粒子少量、ロームブロック・炭化物微量

4 暗 褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量

15 暗 褐色 ロームブロック少量

5 極暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量

16 黒 褐色 ロームブロック少量、炭化物微量

6 暗 褐色 ロームブロック・炭化物少量

17 暗 赤褐色 焼土粒子中量

7 黒 褐色 ロームブロック・炭化物少量

18 褐 色 ローム粒子中量

8 黒 褐色 ロームブロック少量

19 極暗褐色 ローム粒子少量、焼土ブロック微量

9 暗 褐色 ロームブロック・炭化物少量

20 黒 褐色 ローム粒子・炭化物少量

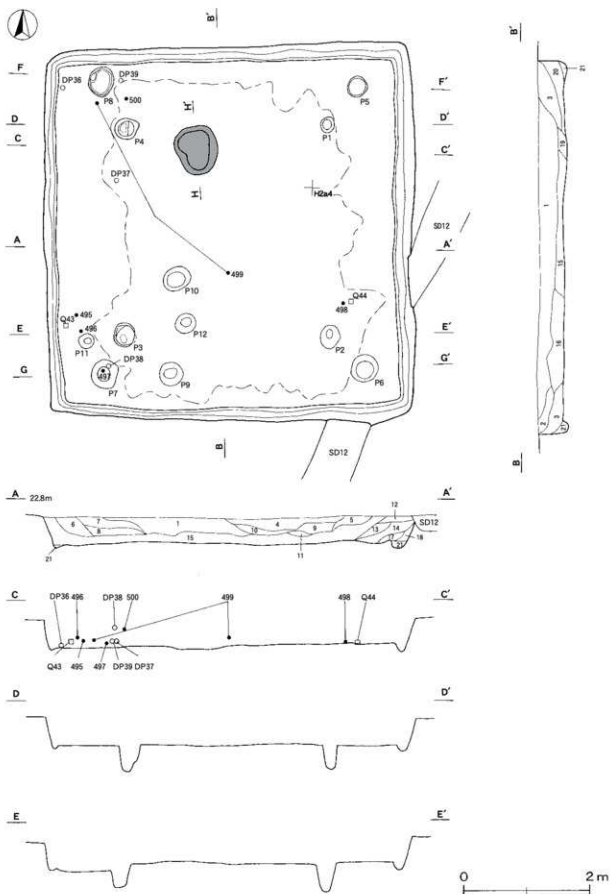
10 黒 褐色 炭化物・ローム粒子少量

21 黒 褐色 ローム粒子微量

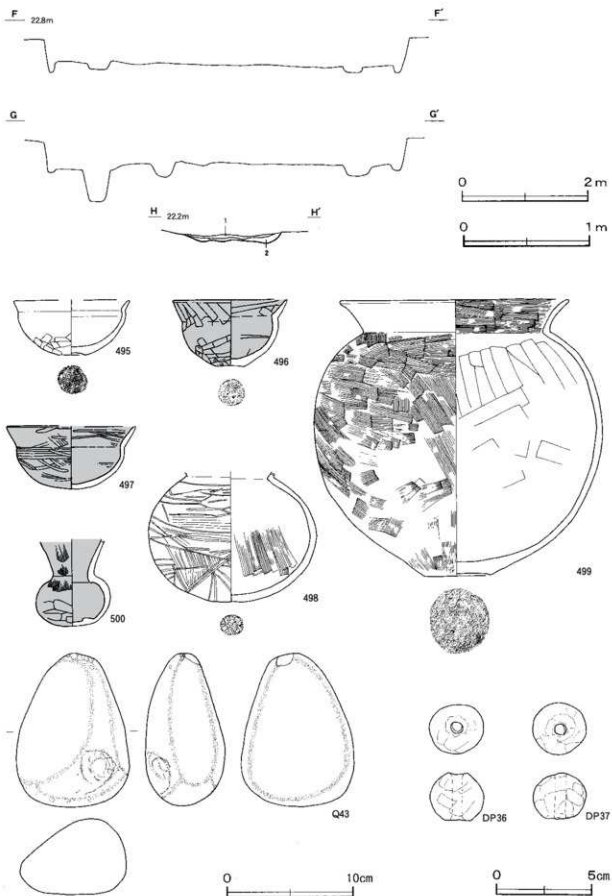
11 暗 褐色 ロームブロック微量

遺物出土状況 土師器片226点 (柄1, 埴8, 甕216, ミニチュア土器1), 土製品5点 (球状土錘), 石器2点 (磨石, 砥石)の多くが、北西部と南西部の覆土下層から床面にかけて廃棄されたような状態で出土している。495～497は南西部, 499は北西部の覆土下層と中央部の覆土中層から出土した破片が接合したものである。球状土錘は5点出土しており, DP36・DP37・DP39は北西部の覆土下層, DP38は南西部の覆土上層, DP40は覆土中からそれぞれ出土している。498・Q44は南東部の床面から出土しており, 廃絶時に遺棄されたものと考えられる。

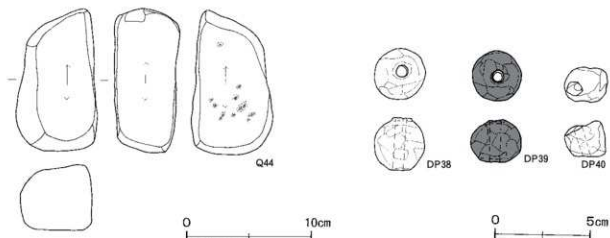
所見 時期は, 出土土器から4世紀前葉と考えられる。



第40图 第17号住居跡実測図



第41图 第17号住居跡・出土遺物実測図



第42図 第17号住居跡出土遺物実測図

第17号住居跡出土遺物観察表 (第41・42図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考
495	土師器	碗	[9.1]	4.3	2.2	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口縁部内・外面ナデ 体部内面ナデ 外面へラ削り	覆土下層	60%
496	土師器	埴	9.2	5.3	2.2	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	口縁部内・外面へラナデ 体部内面へ ラナデ 外面へラ削り	覆土下層	95% PL.23
497	土師器	埴	[10.3]	4.9	—	長石・雲母	明赤褐	普通	口縁部内面へラ削き 外面ハケ目調整後へラ削き 体部内面へラ削き 外面ハケ目調整後へラ削き	覆土下層	60%
498	土師器	埴	—	(10.3)	1.7	長石・雲母・赤色 粒子	にぶい真褐	普通	体部内面ハケ目調整 外面ハケ目調整 後へラ削き	床面	90%
499	土師器	甕	18.0	21.9	5.2	長石・石英・雲母	黒褐	普通	口縁部内面へラ削き 外面ハケ目調整 体部内面へラ削き 外面ハケ目調整	覆土下層	95% PL.32
500	土師器	コブツ 土器	—	(6.8)	—	長石・石英	赤褐	普通	口縁部外面ハケ目調整 体部外面ハケ 目調整後ナデ	覆土中層	80%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質(胎土)	特徴	出土位置	備考
DP36	球状土埴	2.9	2.5	0.5	17.7	長石・石英	ナデ 一方方向からの穿孔	覆土下層	
DP37	球状土埴	2.8	2.4	0.6	18.5	長石・石英	ナデ 一方方向からの穿孔	覆土下層	
DP38	球状土埴	2.7	2.8	0.6	18.5	長石・石英	ナデ 一方方向からの穿孔	覆土上層	
DP39	球状土埴	2.6	2.3	0.6	15.9	長石・石英	ナデ 一方方向からの穿孔	覆土下層	
DP40	球状土埴	(2.2)	(1.9)	0.3	(7.5)	長石・石英	ナデ 一方方向からの穿孔	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q43	磨石	12.1	9.0	6.0	900	凝灰岩	両端部を使用	覆土下層	
Q44	砥石	11.4	6.4	5.3	620	凝灰岩	砥面3面	床面	

第18号住居跡 (第43・44図)

位置 調査区北部のD 2 h7区、標高23mの台地平坦部に位置している。東約5mには第24号住居跡が隣接している。

重複関係 第40号土坑に掘り込まれ、第91・92号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 西部が調査区域外に伸びているため、南北軸4.52m、東西軸は4.18mだけが確認された。東・南壁や柱穴の位置から長軸方向はN-16°-Wと推測される。壁高は10~20cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、中央部を中心に広い範囲が踏み固められている。

ピット 5か所。P1~P3は深さ10~36cmで、規模においてやや規則性を欠いているが、柱間寸法は3.6m(12尺)であり、4本主柱の北西側を除く3か所に相当すると考えられる。P4の深さは10cm、P5の深さは

7 cmで、性格は不明である。

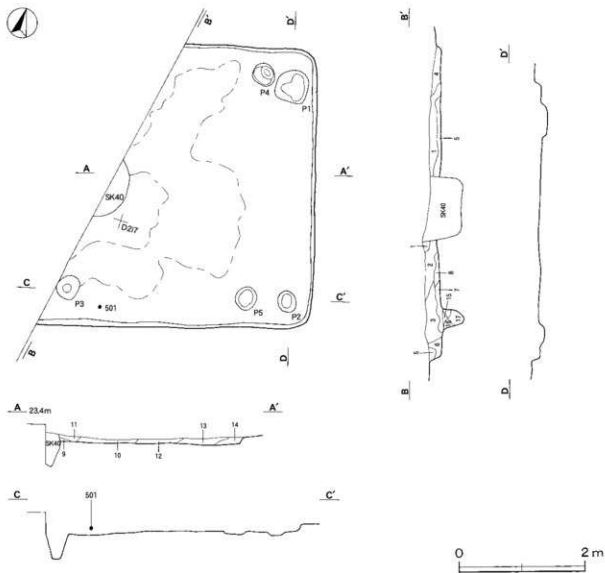
覆土 17層に分層できる。ローム土や焼土を含み、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。第15～17層はP3の覆土である。

土層解説

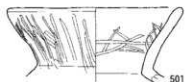
- | | | | |
|--------|------------------|---------|---------------------|
| 1 黒 褐色 | ロームブロック・焼土粒子微量 | 10 暗 褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 極暗褐色 | ロームブロック少量、炭化物微量 | 11 褐色 | ロームブロック多量 |
| 3 極暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子微量 | 12 暗 褐色 | ロームブロック多量、炭化物微量 |
| 4 褐色 | ロームブロック中量 | 13 暗 褐色 | ローム粒子中量 |
| 5 褐色 | ロームブロック多量、炭化粒子微量 | 14 暗 褐色 | ローム粒子少量 |
| 6 暗 褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子微量 | 15 暗 褐色 | ロームブロック・焼土粒子微量 |
| 7 黒 褐色 | ロームブロック中量 | 16 暗 褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 |
| 8 暗 褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 17 暗 褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 9 褐色 | ロームブロック少量、炭化物微量 | | |

遺物出土状況 土師器片73点(埴1, 高坏45, 壺1, 甕26)が覆土下層から出土している。また混入した磁器片3点(碗)も出土している。501は南壁際の覆土下層から出土している。土器は破片の状態で散在していることから、廃絶時に廃棄されたものと考えられる。

所見 前期中葉に比定される第24号住居跡とはほぼ同じ主軸方向をとることや出土土器から、時期は4世紀中葉と考えられる。



第43図 第18号住居跡実測図



第44図 第18号住居跡出土遺物実測図

第18号住居跡出土遺物観察表（第44図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	筋土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
501	土師器	壺	13.6	(5.9)	—	長石・雲母・黒色 粒子	にがい赤黒	普通	口縁部内面ハケ目調整後へラ磨き 外面ハケ目調整後へラ磨き	覆土下層	45%

第19号住居跡（第45・46図）

位置 調査区北部のH2c6区、標高22.5mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第20号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸5.64m、短軸5.61mの方形で、主軸方向はN-14°-Wである。壁高は20~30cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部の一部分が踏み固められ、壁溝が全周している。中央部やや東寄りに焼土が検出されている。

ピット 8か所。P1~P3は深さ4~48cmで、位置と規模からP3は主柱穴と考えられるが、P1・P2は深さに差があり明確ではない。P4は深さ12cmで、南壁際の中央部に位置しており、出入り口施設に伴うピットである。P5~P8は深さ6~17cmで、性格は不明である。

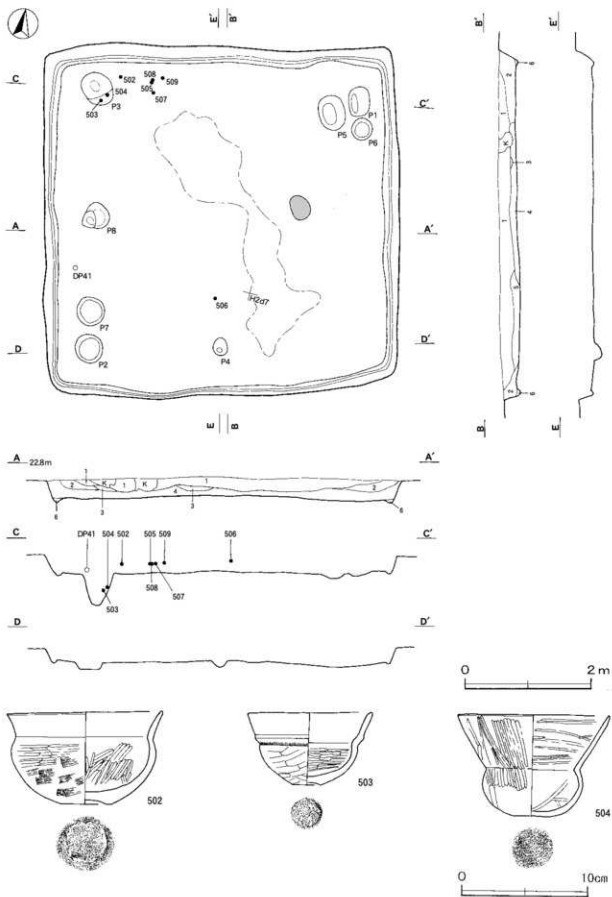
覆土 6層に分層できる。レンズ状の堆積状況を示していることから自然堆積と考えられる。

土層解説

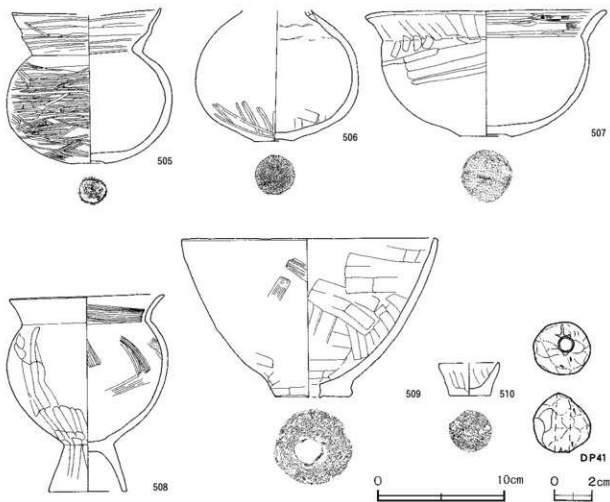
- | | |
|---------------------------|-----------------|
| 1 黒褐色 炭化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量 | 4 暗褐色 ローム粒子少量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 褐色 ロームブロック少量 |
| 3 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量 | 6 黒褐色 ロームブロック微量 |

遺物出土状況 土師器片367点（埴9、高坏15、鉢1、壺5、甕334、台付甕1、瓶1、ミニチュア土器1）、土製品1点（球状土鐘）が出土している。遺物は北西壁寄りを中心に覆土中層から出土している。502・505・507~509は北西壁際の覆土中層からほぼ完形の状態でも出土しており、廃絶後に廃棄されたものと考えられる。503・504はP3内からほぼ完形の状態でも出土しており、時期判断できる遺物である。また、覆土中層と床面から出土した遺物の間に明確な時期差は認められないことから、比較的短期間に埋没した土層と判断される。

所見 覆土中層から出土した遺物とピット内から出土した遺物の間にあまり時期差が認められない。覆土中層から出土した遺物は、第4層堆積後に一括して廃棄されたものと考えられる。時期は、ピット内から出土した土器から、4世紀中葉と考えられる。



第45图 第19号住居跡・出土遺物実測図



第46図 第19号住居跡出土遺物実測図

第19号住居跡出土遺物観察表(第45・46図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
502	土師器	埴	12.2	7.5	4.0	長石・石英・赤色 粒子	明褐色	普通	体部外面ハケ目調整後ヘラ磨き 内面 ヘラ磨き 口縁部内・外面ナデ	覆土中層	100% PL23
503	土師器	埴	9.8	5.9	2.4	長石・石英・赤色 粒子	にぶい褐色	普通	体部外面ヘラナデ 内面ヘラ削り後ヘ ラ磨き 口縁部内・外面ナデ	P3内	95% PL23
504	土師器	埴	11.9	8.0	2.8	長石・石英・雲母	灰黄褐色	普通	口縁部外面ヘラ磨き 内面ハケ目調整 後ヘラ磨き 体部外面ヘラ磨き後ナデ 内面ヘラ磨き	P3内	95% PL23
505	土師器	埴	[11.6]	12.2	2.1	長石・石英	明赤褐色	普通	口縁部内・外面ヘラ磨き 体部外面ヘ ラ磨き	覆土中層	90% PL22
506	土師器	埴	—	(10.3)	3.2	長石・雲母	褐色	普通	体部外面ヘラ磨き 内面ハケ目調整後 ヘラナデ 輪積み	覆土中層	40%
507	土師器	鉢	19.1	9.9	4.1	長石・石英・赤色 粒子	褐色	普通	口縁部外面ナデ 内面ハケ目調整後ヘ ラ磨き 体部外面ヘラナデ 内面ナデ 口縁部外面ナデ 内面ハケ目調整後ナ デ 体部外面ハケ目調整後ナデ 内面 ハケ目調整 右部ハケ目調整後ナデ	覆土中層	100% PL26
508	土師器	台付甕	12.4	15.5	6.2	長石・石英・赤色 粒子	浅黄褐色	普通	体部外面ハケ目調整後ナデ 内面 ハケ目調整 右部ハケ目調整後ナデ	覆土中層	100% PL34
509	土師器	甕	20.1	12.5	6.0	長石・石英	明赤褐色	普通	体部外面ハケ目調整後ヘラナデ 内面 ハケ目調整	覆土中層	90% PL34
510	土師器	ミニチュア 土器	[4.3]	2.6	3.2	赤色粒子・白色 粒子	にぶい褐色	普通	体部内・外面ナデ	覆土中	70%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質(胎土)	特 徴	出土位置	備考
DP41	環状土塊	3.0	3.1	0.9	20.3	長石・石英	ナデ 一方向からの穿孔	覆土下層	

第20号住居跡（第47図）

位置 調査区北部のH2d7区、標高22.5mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第19号住居に北西部を掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.59m、短軸3.28mの方形で、主軸方向はN-21°-Wである。壁高は15~20cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、壁際を除いて全体的に踏み固められ、壁溝が全周している。

炉 東部の中央に位置している。長径74cm、短径42cmの楕円形で、床面をわずかに掘りくぼめて炉床とした地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

伊土層解説

1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量

ピット 5か所。P1~P3は深さ16~36cmで、規模においてやや規則性を欠いているが、配置から主柱穴と考えられる。P4は深さ22cmで、南壁際であることや硬化面の範囲などから、出入り口施設に伴うピットである。P5は深さ14cmで、性格は不明である。

覆土 10層に分層できる。ローム土や焼土を含んだ、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

1 褐色 ロームブロック少量

2 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

3 暗褐色 ローム粒子少量

4 暗褐色 ロームブロック少量

5 暗褐色 ロームブロック少量、炭化物微量

6 褐色 ローム粒子中量

7 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子微量

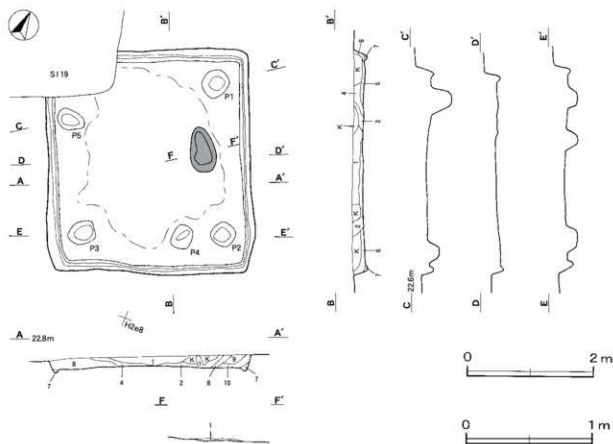
8 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量

9 黒褐色 ローム粒子微量

10 極暗褐色 ローム粒子少量

遺物出土状況 土師器片57点（坏5、高坏1、甕51）が出土しているが、細片で図示できない。

所見 時期は、出土土器が少ないため明確な時期判定は困難であるが、前期と考えられる。



第47図 第20号住居跡実測図

第21号住居跡（第48～52図）

位置 調査区北部のI 2a1区、標高22.6mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 調査区域外に伸びているため、南北軸は3.50m、東西軸は4.20mだけが確認されている。東・南壁から主軸方向はN-44°-Wと推測される。壁高は50～52cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められていると推測され、壁溝が東壁際で確認されている。貯蔵穴の周辺には最大で幅50cmの高まり、南東コーナー部には円形のピット1か所が確認されている。また、南東コーナー部の床面から炭化材が検出されている。

炉 南北軸60cm、東西軸は30cmだけが確認され、床面を10cmほど皿状に掘りくぼめて炉床とした地床炉である。

伊土層解説

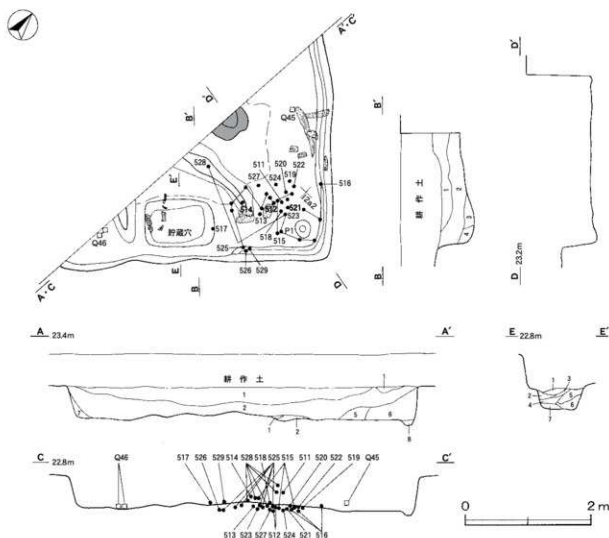
- 1 暗褐色 ロームブロック少量、炭化物微量 2 暗赤褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子微量

ピット 1か所。径30cm、深さは10cmで、遺物の出土状況から大甕を据えたピットと考えられる。

貯蔵穴 南壁際に付設されている。長軸112cm、短軸74cmの長方形で、深さは32cmである。底面は平坦で、壁は直立している。覆土は炭化物や焼土ブロックを多く含む人為堆積の状況を示している。

貯蔵穴土層解説

- 1 極暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量 5 暗褐色 焼土ブロック・炭化物少量、ロームブロック微量
 2 黒褐色 炭化物・焼土粒子少量、ローム粒子微量 6 極暗褐色 焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化物少量
 3 暗褐色 炭化物・焼土粒子少量、ローム粒子微量 7 黒褐色 焼土ブロック・炭化物少量、ローム粒子微量
 4 黒褐色 炭化粒子中量、焼土ブロック少量、ローム粒子微量



第48図 第21号住居跡実測図

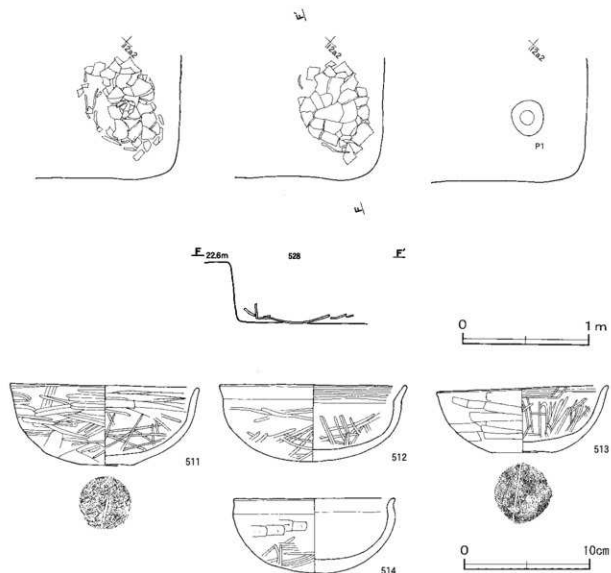
覆土 8層に分層できる。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

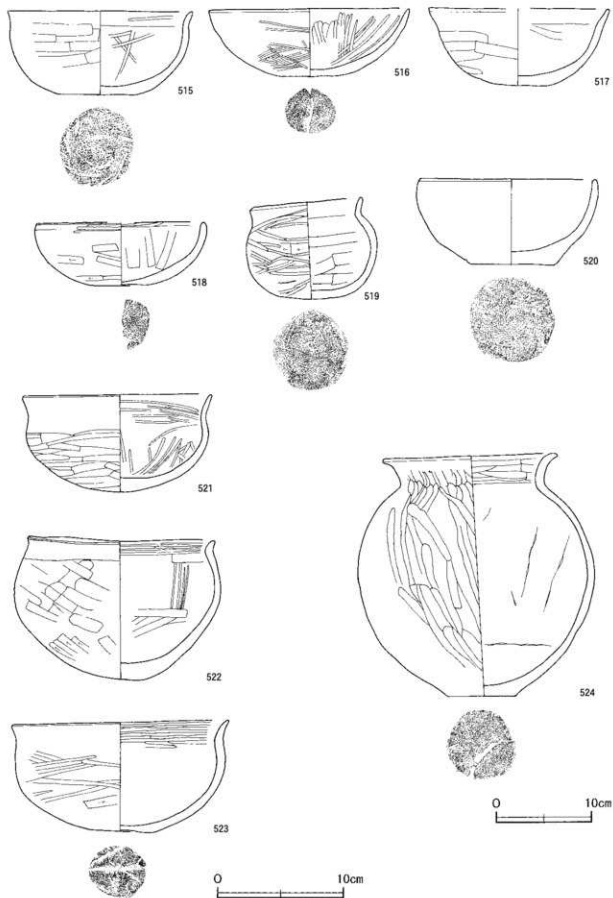
- | | |
|------------------------------|----------------------------|
| 1 暗褐色 炭化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量 | 5 極暗赤褐色 焼土ブロック少量、ロームブロック微量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量 | 6 褐色 ロームブロック・炭化物少量、焼土粒子微量 |
| 3 極暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量 | 7 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 4 黒褐色 炭化物少量、ロームブロック・焼土粒子微量 | 8 黒褐色 炭化物・ローム粒子少量 |

遺物出土状況 土師器片203点（坏8，碗5，甕189，瓶1），須恵器片1点（甕），石製品1点（剣形品）が出土している。坏・碗類の完形が床面から覆土下層にかけて多く出土している。528は流通時期や胎土から搬入品と思われ、南東コーナー部の床面から破砕された状態で出土している。同コーナー部の床面には、528が据えられたと思われる円形の落ち込みが認められる。また、角材と推定される炭化材が南東コーナー部の床面から覆土下層にかけて出土している。

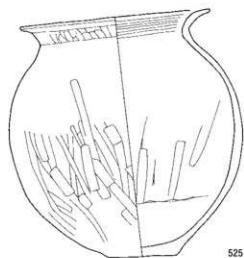
所見 遺物や炭化材の出土状況から、住居廃絶に伴う焼失住居と考えられる。住居南東コーナー部は須恵器大甕が据えられていた場所と推測され、当住居は集落内において有力者の居宅であった可能性が高い。時期は、出土土器から5世紀後葉と考えられる。



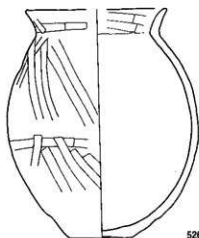
第49図 第21号住居跡・出土遺物実測図



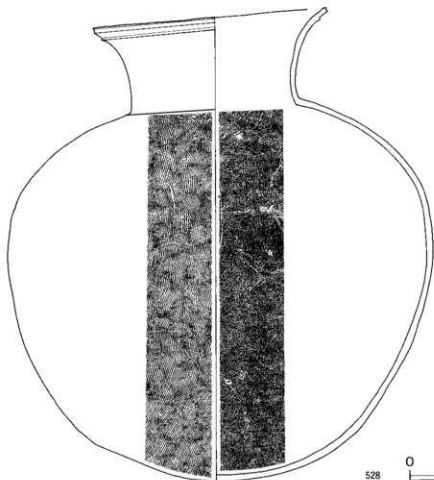
第50图 第21号住居跡出土遺物実測図(1)



525



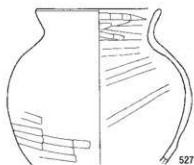
526



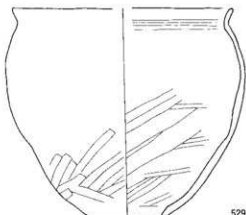
528



第51图 第21号住居跡出土遺物実測図(2)

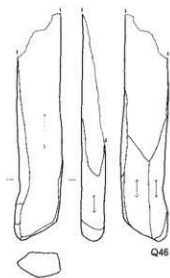


527



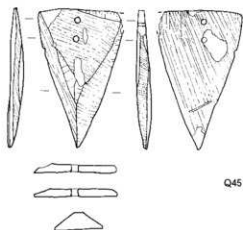
529

0 10cm



Q46

0 5cm



Q45

0 2cm

第52図 第21号住居跡出土遺物実測図(3)

第21号住居跡出土遺物観察表 (第49~52図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
511	土師器	坏	15.0	6.5	4.1	雲母	橙	普通	体部内・外面ヘラ磨き	覆土中層	100% ヘラ記号PI21
512	土師器	坏	14.8	6.0	—	長石・石英	にぶい・橙	普通	口縁部内・外面ナゲ 体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き 内面ヘラ磨き	床面	95% PI.21
513	土師器	坏	13.6	5.2	4.6	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	体部外面ヘラナゲ 内面ヘラ磨き	床面	100% ヘラ記号PI.21
514	土師器	坏	12.8	6.0	—	長石・雲母	明赤褐	普通	口縁部内・外面ナゲ 体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き 内面磨面付	覆土下層	90%
515	土師器	坏	14.7	6.6	6.9	長石・石英	褐	普通	口縁部内面ヘラ磨き 体部外面ヘラ削り後ヘラナゲ 内面ヘラ磨き	床面	85% PI.21
516	土師器	坏	15.8	5.3	4.2	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き 内面ヘラ磨き	床面	70%
517	土師器	坏	[14.3]	6.1	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい・赤褐	普通	体部内・外面ヘラ削り後ヘラナゲ	床面	50%
518	土師器	坏	[13.3]	5.0	[4.3]	長石・雲母・赤色粒子	赤褐	普通	体部内・外面ヘラ削り後ヘラナゲ	床面	40%
519	土師器	碗	8.6	8.0	4.9	長石・石英・雲母	橙	普通	体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き 内面ヘラナゲ	床面	100%
520	土師器	碗	13.8	6.8	6.5	長石・石英	にぶい・橙	普通	体部内・外面ナゲ 底部ヘラ削り	床面	100% PI.22
521	土師器	碗	15.0	7.7	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい・褐	普通	口縁部外面ナゲ 内面ヘラ磨き 体部外面ヘラナゲ 内面ヘラ磨き	床面	100% PI.22
522	土師器	碗	14.8	11.2	—	長石・石英	にぶい・褐	普通	口縁部外面ナゲ 内面ヘラ磨き 体部外面ヘラ削り後ヘラナゲ 内面ヘラ磨き	床面	95%
523	土師器	碗	17.2	9.2	4.9	長石・石英・雲母	暗褐	普通	口縁部外面ナゲ 内面ヘラ磨き 体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き 内面ヘラ磨き	床面	95%
524	土師器	甕	18.6	25.8	7.2	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部内面ヘラナゲ 外面ナゲ 体部内・外面ヘラナゲ 輪状彫	床面	95%
525	土師器	甕	20.3	25.5	7.0	長石・石英・雲母	暗褐	普通	口縁部内面ヘラナゲ 外面ヘラ削り後ナゲ 体部内面ヘラナゲ 外面ヘラ削り後ヘラナゲ	床面	80% 覆付着

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
526	土師器	甕	[14.9]	24.2	6.5	長石・石英・雲母	にぶい赤褐色	普通	口縁部内・外面ヘラナデ 内部外面ヘラナデ 内面外面ヘラナデ	床面	80%
527	土師器	甕	13.0	(16.5)	—	長石・石英・雲母	にぶい褐色	普通	口縁部外面ナデ 内面ヘラナデ 後ナデ 体部内・外面ヘラナデ	床面	80%
528	須恵器	大甕	37.0	75.1	—	長石・石英	灰	普通	体部外面平行印キ 内面当て具取	床面	95% PL32
529	土師器	甕	[23.2]	22.0	8.0	長石・石英・雲母	明赤褐色	普通	口縁部内・外面ナデ 体部内・外面ヘラナデ	床面	85%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特	徴	出土位置	備考
Q45	前期埴土品	3.7	(2.2)	0.5	(3.22)	滑石	全面磨削により平滑	孔2か所 孔径0.1cm 一方向からの穿孔	覆土下層	PL40
Q46	砥石カ	(18.0)	(3.8)	2.0	(52.5)	凝灰岩	砥面4面	片側欠損	床面	

第22号住居跡 (第53・54図)

位置 調査区北部の12e1区、標高22.6mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸4.52m、短軸3.56mの長方形で、主軸方向はN-59°-Eである。壁高は36cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部の広い範囲が踏み固められている。壁溝が東と西の壁際から確認されている。南壁際の中央には半円形状の高まりが認められる。また、北壁際に炭化材、北西・南壁際から焼土が検出されている。

竈 東壁の南寄り付設されている。規模は、焚口部から煙道部まで56cm、袖部幅86cmである。袖部は床面と同じ高さを基部とし、砂質粘土を積み上げて構築されている。火床面の痕跡はない。煙道部は火床面から外傾して立ち上がっている。竈土層中の第8～11層は袖部の土層、第12～15層は貯蔵穴の上部に構築された粘土層である。

竈土層解説

1	極暗赤褐色	焼土ブロック少量、ローム粒子微量	9	黄褐色	粘土ブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子微量
2	暗褐色	焼土ブロック少量、ローム粒子微量	10	暗灰黄色	粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
3	暗赤褐色	焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量	11	褐色	粘土粒子・ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量
4	褐色	ローム粒子少量	12	にぶい黄色	粘土ブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量
5	暗褐色	焼土ブロック・ローム粒子少量	13	オレンジ褐色	粘土ブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量
6	暗褐色	焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量	14	暗灰黄色	粘土ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量
7	にぶい褐色	焼土ブロック微量	15	暗オレンジ色	粘土ブロック・ロームブロック・炭化粒子微量
8	にぶい黄色	粘土ブロック多量、焼土ブロック・炭化粒子微量			

貯蔵穴 南東コーナー部に付設され、竈と隣接している。長軸88cm、短軸50cmの長方形で、深さは44cmである。底面は平坦で、壁は直立している。西側を除いた上部からは幅10～14cm、高さ10cmの粘土帯が付設されている。覆土は人為堆積の状況を示している。

貯蔵穴土層解説

1	黒褐色	ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量	4	暗褐色	ローム粒子少量、炭化物・焼土粒子微量
2	極暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量	5	黄褐色	裏沼バミスブロック中量、炭化粒子微量
3	黒褐色	炭化粒子少量、焼土ブロック・ローム粒子微量			

覆土 12層に分層できる。第1・2層はレンズ状の堆積状況から自然堆積、第3～12層は焼土ブロックや炭化物を含み、焼失に伴って埋め戻された層である。

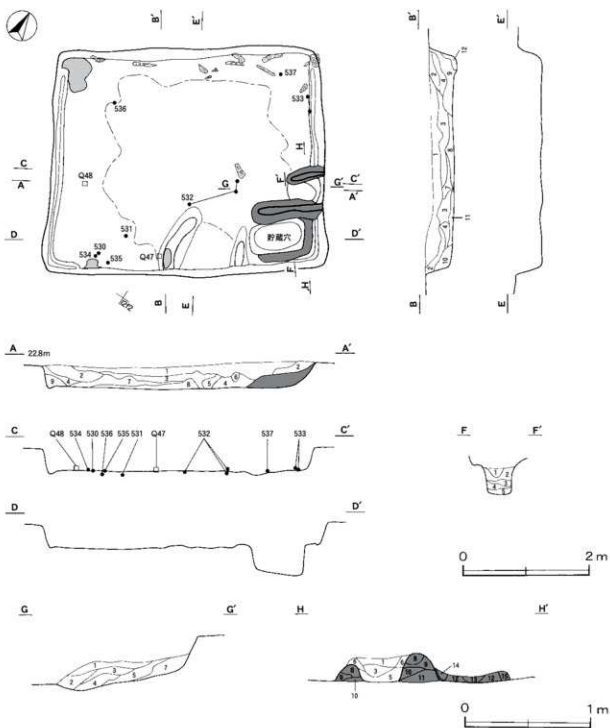
土層解説

1	黒褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	7	暗赤褐色	焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化物微量
2	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	8	暗褐色	ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化物微量
3	黒褐色	炭化物・ローム粒子・焼土粒子微量	9	極暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量
4	暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量	10	暗赤褐色	焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量
5	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	11	暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
6	暗褐色	焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量	12	褐色	ロームブロック中量、炭化物少量

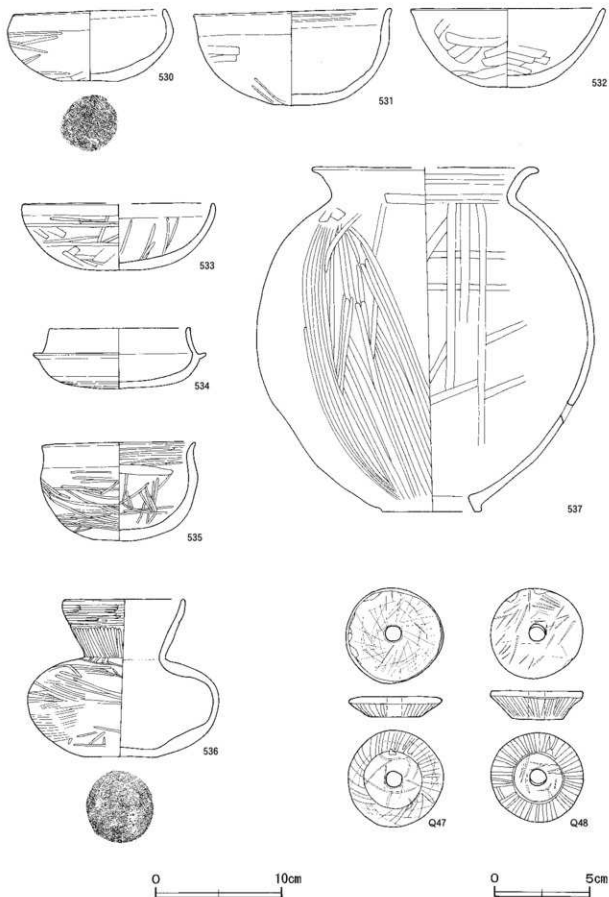
遺物出土状況 土師器片35点(坏6, 椀1, 増1, 壺1, 甕25, 甕1), 須恵器片2点(坏, 甕), 石製品2点(紡錘車)が出土している。坏・椀の完形が多く、530・531・534・535は南壁際, 532は中央部, 533は東壁際

の床面からそれぞれ出土しており、530は534の上に重なった状態で出土している。536は北西部、537は北東部の床面から逆位で出土している。また、角材や丸材と推定される炭化材が北部の床面から検出されており、上屋の建築材と考えられる。

所見 遺物や炭化材の出土状況から、住居廃絶に伴う焼失住居と考えられる。煙道部が壁外への掘り込みをもたない竈の形状であることや竈と隣接して付設されている貯蔵穴など、当該期における住居の内部構造上特異である。時期は、出土土器から5世紀末と考えられる。



第53図 第22号住居跡実測図



第54图 第22号住居跡出土遺物実測図

第22号住居跡出土遺物観察表（第54図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
530	土師器	坏	12.0	5.7	4.4	長石・雲母・赤色 粒子	明赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ 体部外面へラ 磨き・内面磨面磨れ 内面へラ磨き	床面	100% へラ取身付21
531	土師器	坏	15.6	7.8	—	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデより調整不明 体部 下縁に2条の彫痕あり	床面	95% 火熱痕
532	土師器	坏	15.4	6.3	—	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	にぶい褐	普通	体部内・外面へラ削り後へラナデ	床面	95%
533	土師器	坏	[15.2]	5.3	—	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ 体部外面へラ 削り後へラ磨き 内面へラ磨き	床面	50%
534	須恵器	坏	11.2	4.8	—	長石・黒色粒子	暗灰黄	普通	内・外面口ロナデ 体部回転へラ削り	床面	100% PL22
535	土師器	椀	12.1	7.8	—	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部内面へラ磨き 外面ナデ 体部 内・外面へラ磨き	床面	100% PL22
536	土師器	埴	9.6	12.5	5.3	長石・雲母	浅黄	普通	口縁部外面へラ磨き 内面ナデ 体部 外面へラ磨き 口縁部に沈み	床面	100% 埋付着 PL22
537	土師器	甌	[17.6]	27.2	7.8	長石・石英・雲母	にぶい黄褐	普通	口縁部内面へラナデ 外面ハタケ調整後ナデ 体部外面へラ削り後へラ磨き 内面へラナデ	床面	95%

番号	器種	径	孔径	厚さ	重量	材質	特	徴	出土位置	備考
Q17	紡錘車	5.0	0.75	1.05	40.8	蛇紋岩	円錐台形	全面研磨 二方向からの穿孔	床面	PL40
Q18	紡錘車	4.2	0.8	1.45	43.9	蛇紋岩	円錐台形	全面工具研 二方向からの穿孔	床面	PL40

第23号住居跡（第55～58図）

位置 調査区北部のI2d5区。標高22.8mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第3号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.86m、短軸4.20mの長方形で、主軸方向はN-46°-Eである。壁高は45～54cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。壁溝が東壁から北壁際で確認されている。また、北東部から南部にかけて帯状に炭化材が検出されている。

竈 東壁の南寄りに付設されている。規模は、焚口部から煙道部まで140cm、袖部幅72cmである。袖部は床面と同じ高さを基部とし、砂質粘土を積み上げて構築されている。火床部は床面をわざわざ掘りくぼめて使用しており、火床面は火により赤変硬化している。煙道部は火床面から外傾して立ち上がっている。竈土層中の第13・14層は袖部の土層である。

竈土層解説

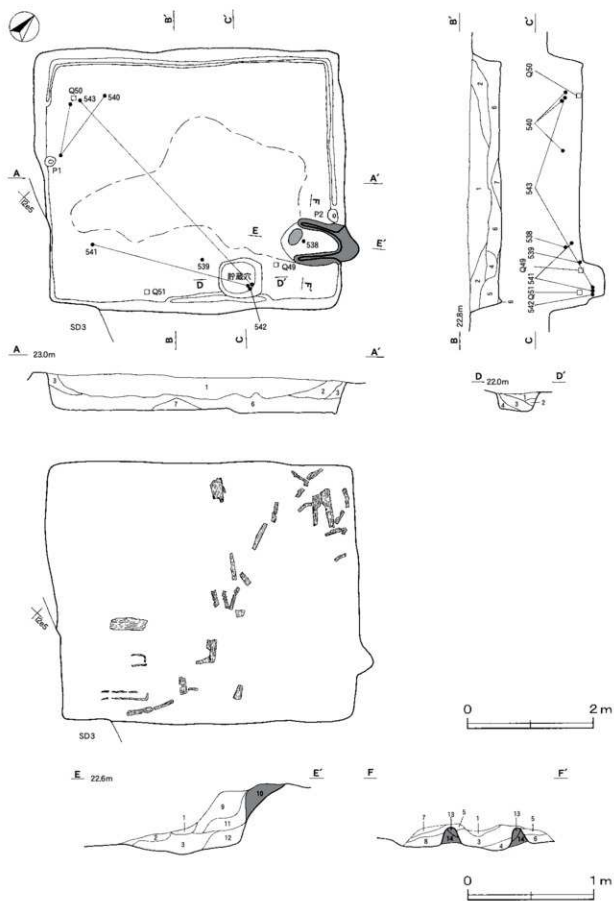
1	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子微量	9	暗褐色	焼土ブロック・ローム粒子少量
2	暗赤褐色	焼土ブロック少量	10	褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量
3	暗赤褐色	焼土ブロック少量、炭化物微量	11	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子少量
4	褐色	ローム粒子少量、炭化物少量	12	褐色	ローム粒子・焼土粒子微量
5	暗褐色	炭化物少量、ロームブロック微量	13	にぶい黄褐色	ロームブロック少量、炭化物粒子微量
6	暗褐色	焼土ブロック・ロームブロック・炭化物少量	14	オリーブ褐色	粘土ブロック多量、焼土粒子・炭化物粒子微量
7	暗褐色	焼土粒子少量、ローム粒子微量			
8	褐色	焼土ブロック少量、ロームブロック微量			

ピット 2か所。P1は深さ15cmで西壁際、P2は深さ12cmで竈左袖際からそれぞれ確認されているが、対応するピットがなく、性格は不明である。

貯蔵穴 南壁際やや東寄りに付設されている。長軸68cm、短軸64cmの方形で、深さは26cmである。底面は平坦で、壁は直立している。覆土は人為堆積の状況を示している。

貯蔵穴土層解説

1	黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量	3	褐色	ロームブロック・炭化物・焼土粒子少量
2	褐色	ローム粒子多量	4	褐色	ロームブロック微量



第55图 第23号住居跡実測图

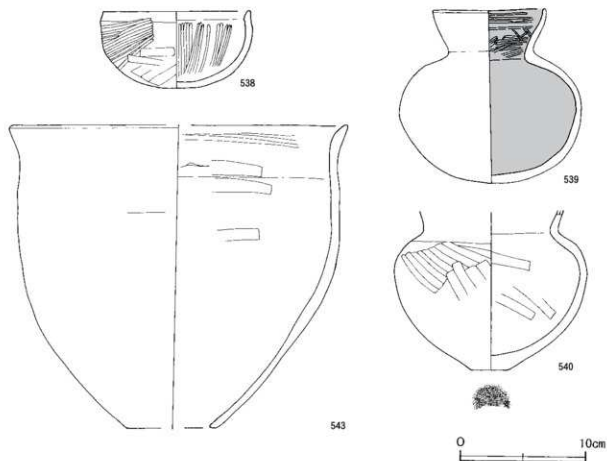
覆土 7層に分層できる。第1～3層はレンズ状の堆積状況から自然堆積，第4～7層は焼土ブロックや炭化物を含む暗褐色及び褐色土で，焼失に伴って埋め戻された層である。

土層解説

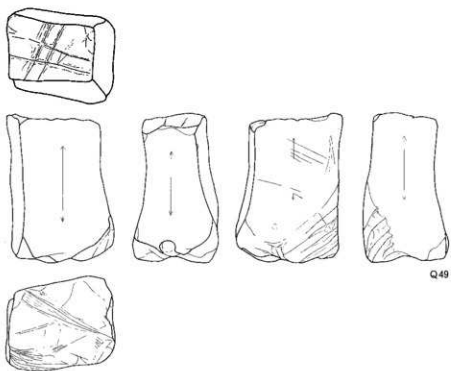
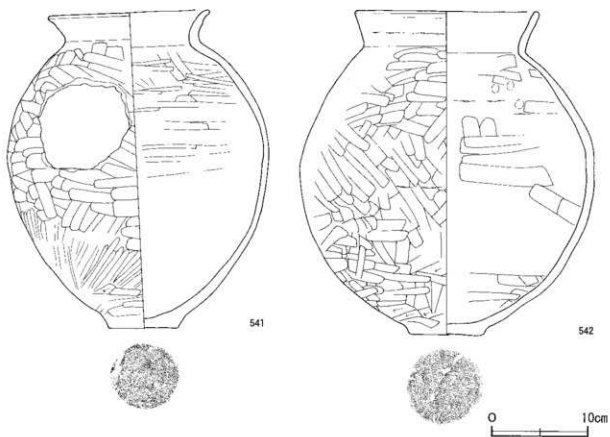
1 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	5 暗褐色	焼土ブロック少量，炭化物・ローム粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	6 暗褐色	焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量
3 暗褐色	ローム粒子少量，炭化粒子微量	7 褐色	ロームブロック・炭化粒子微量
4 褐色	ロームブロック少量		

遺物出土状況 土師器片101点（坏2，埴2，壺1，甕94，小形甕1，瓶1），石器3点（砥石）が出土している。538は竈内から出土しているが，火を受けた痕跡がないことから，廃絶後まもなく廃棄されたものと考えられる。539は床面，541～543は貯蔵穴内から出土しており，541・543は西部から出土した破片が接合されたものである。541の体部には一辺が約10cmの方形に穿孔された痕跡が見られる。Q49・Q51は南部の床面，Q50は北西部の覆土下層から出土しており，Q49の2面には研磨痕が認められる。

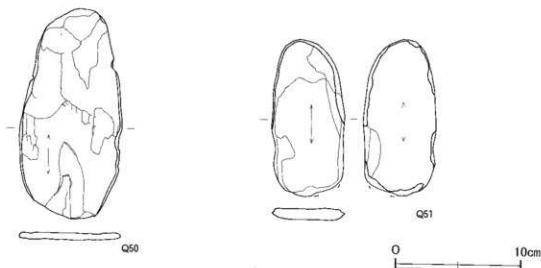
所見 遺物や炭化材の出土状況から，住居廃絶に伴う焼失住居と考えられる。竈の煙道部が壁外へ掘り込む形状である点では異なるが，竈や貯蔵穴の付設位置など，南西10mに位置する第22号住居跡の内部構造と共通している。時期は，5世紀末に比定される第22号住居跡と同じ主軸方向をとることや出土土器から，同時期と考えられる。



第56図 第23号住居跡出土遺物実測図(1)



第57图 第23号住居跡出土遺物実測図(2)



第58図 第23号住居跡出土遺物実測図(3)

第23号住居跡出土遺物観察表 (第56~58図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考
538	土師器	碗	11.5	6.1	—	石英・黒色粒子・雑	橙	普通	口縁部内・外面ナデ 体部外面へラ磨き後ナデ 内面へラ磨き	竪内	100% PL22
539	土師器	埴	8.8	13.7	—	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口縁部内面へラ磨き 口縁部・体部外面磨面荒れ	床面	100% PL25
540	土師器	小形甕	—	(12.6)	2.9	長石・雲母	明赤褐	普通	口縁部内・外面ナデ 体部内・外面ナデ	覆土中層	65%
541	土師器	甕	16.8	33.7	7.2	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄	普通	口縁部内・外面積ナデ 体部下端へラ磨り 体部口位に歌 (焼成前)	貯蔵穴内	93% 僅付着 PL32
542	土師器	甕	19.1	34.4	7.9	長石・石英・細砂	にぶい黄	普通	口縁部内・外面ナデ 体部内・外面へラナデ 体部下端へラ磨り 輪埴み肌 指通肌	貯蔵穴内	90% PL31
543	土師器	甕	[26.9]	23.9	7.2	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄	普通	口縁部内・外面ナデ 内面へラナデ 外面磨面荒れ	貯蔵穴内	80%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q49	砥石	11.8	6.8	8.6	898	砂岩	砥面4面 研磨痕2面	床面	
Q50	砥石	16.7	8.0	0.6	127.0	粘板岩	砥面1面	覆土下層	
Q51	砥石	12.3	5.7	0.9	(119.2)	粘板岩	砥面2面	床面	

第24号住居跡 (第59・60図)

位置 調査区北部のD 2 19区、標高23.2mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 調査区域外に延びているため、東西軸は5.89m、南北軸は3.74mだけが確認されている。南・西壁から長軸方向はN-34°-Wと推測される。壁高は25cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、壁際を除き踏み固められている。壁際から100cmほどに、幅20cm、高さ5cmほどの直線上の高まりが設けられている。南壁際には炭化材と焼土範囲2か所が検出されている。

ピット 深さ30cmで、配置から主柱の南西部柱穴に相当すると考えられる。

貯蔵穴 南西コーナー部に付設されている。長軸84cm、短軸74cmの長方形で、深さは56cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。覆土は人為堆積の状況を示している。

貯蔵穴土層解説

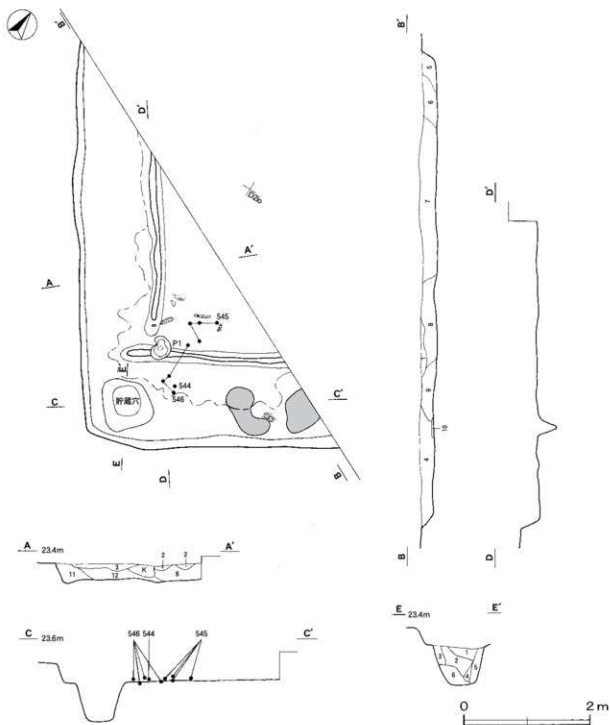
1 暗褐色	ロームブロック少量	4 黒褐色	炭化物少量、焼土ブロック微量
2 暗褐色	ローム粒子中量、炭化物・焼土粒子微量	5 褐色	ロームブロック中量
3 暗褐色	ローム粒子少量	6 褐色	焼土粒子・炭化粒子微量

覆土 12層に分層できる。ローム土を含み、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|--------------------|--------|------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量 | 7 黒褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック微量 | 8 暗褐色 | ローム粒子中量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 | 9 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化物微量 |
| 4 暗褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子少量 | 10 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 5 黒褐色 | ローム粒子少量 | 11 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子微量 |
| 6 暗褐色 | ロームブロック少量 | 12 褐色 | ロームブロック中量 |

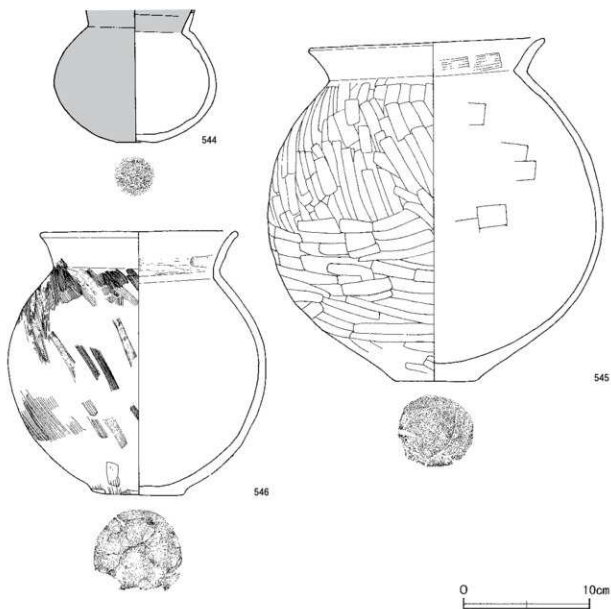
遺物出土状況 土師器片142点（坏11，埴1，壺1，甕129），石器1点（砥石）が床面から覆土下層にかけて出土している。また、混入した陶器片1点（碗）も出土している。545・546は床面，544は覆土下層からそれ



第59図 第24号住居跡実測図

ぞれ出土している。また、角材や雲状の炭化材、焼土塊が南壁際の床面から検出されている。

所見 遺物や炭化材などの出土状況から、住居廃絶に伴う焼失住居と考えられる。時期は、出土土器から4世紀中葉と考えられる。



第60図 第24号住居跡出土遺物実測図

第24号住居跡出土遺物観察表 (第60図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
544	土師器	壺	—	(10.5)	3.0	長石・石英・雲母	にぶい地	普通	口縁部内・外面横ナデ 体部外面ハケ目調整後ナデ 内面ナデ	裡土下層	90% P.29
545	土師器	甕	18.6	27.2	6.1	長石・石英	暗褐色	普通	口縁部内面ハケ目調整後ナデ 外面横ナデ 体部内・外面ヘラナデ	床面	95% 煤付層 P.32
546	土師器	甕	15.3	21.0	7.2	長石・雲母	にぶい黄褐色	普通	口縁部内・外面ハケ目調整後ナデ 体部外面ハケ目調整 内面ヘラナデ	床面	60%

第25号住居跡 (第61～63図)

位置 調査区北部のD3j1区、標高23.3mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第13号溝に掘り込まれている。

規模と形状 調査区域外に延びているため、南北軸5.65m、東西軸5.16mだけが確認されている。南・西壁や柱穴の位置から、主軸方向はN-20°-Wと推測される。壁高は15cmで、外傾して立ち上がっている。

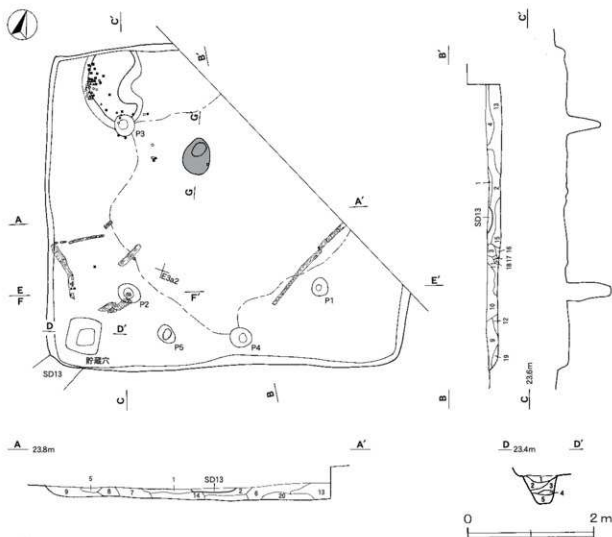
床 平坦で、中央部が踏み固められている。南西コーナー部からは炭化材が検出されている。

炉 中央部に位置している。長径58cm、短径46cmの楕円形で、床面を10cmほど皿状に掘りくぼめて炉床とした地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

伊土層解説

- | | |
|-----------------|------------------|
| 1 暗赤褐色 焼土粒子微量 | 4 極暗赤褐色 焼土粒子少量 |
| 2 暗赤褐色 焼土ブロック中量 | 5 極暗赤褐色 焼土ブロック少量 |
| 3 暗赤褐色 焼土粒子中量 | |

ピット 5か所。P1～P3は深さ50～68cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P4は深さ17cmで、南壁際の中央に位置することから、出入口施設に伴うピットと考えられる。P5は深さ38cmで、性格は不明である。



第61図 第25号住居跡実測図(1)

貯蔵穴 南西コーナー部に付設されている。長軸58cm, 短軸50cmの長方形で、深さは42cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。覆土は人為堆積の状況を示している。

貯蔵穴土層解説

1 暗褐色	ローム粒子・炭化粒子少量	4 褐色	ローム粒子中量
2 褐色	ローム粒子中量, 炭化粒子少量	5 褐色	ローム粒子少量
3 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量		

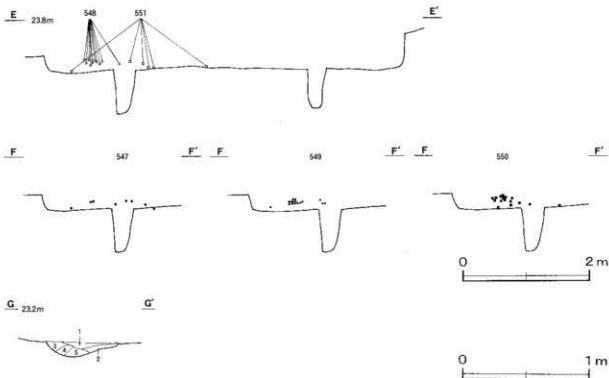
覆土 20層に分層できる。ローム土や焼土を含み、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

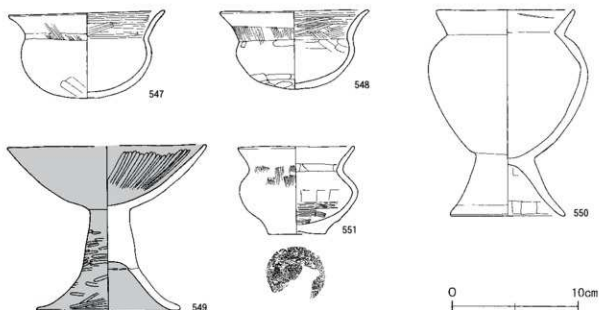
1 極暗褐色	焼土ブロック微量	11 褐色	ロームブロック中量, 焼土粒子少量
2 黒褐色	ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量	12 黒褐色	ロームブロック中量
3 暗褐色	ローム粒子少量, 炭化粒子微量	13 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子微量
4 黒褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	14 暗褐色	ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
5 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	15 極暗褐色	ロームブロック少量
6 暗褐色	ローム粒子中量, 焼土粒子少量, 炭化粒子微量	16 暗褐色	ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
7 暗褐色	ロームブロック微量	17 暗褐色	ロームブロック少量
8 暗褐色	ロームブロック少量, 炭化粒子微量	18 暗褐色	ローム粒子少量, 焼土粒子微量
9 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック微量	19 褐色	ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子微量
10 暗褐色	ローム粒子中量	20 暗褐色	ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片124点(環10, 埴4, 高環3, 甕104, 台付甕2, ミニチュア土器1)が北西部を中心に、覆土中層から下層にかけて出土している。548は北西部の覆土中層から下層, 547・549~551は北西部と西部の覆土中層から床面にかけて出土した破片が接合したものである。図示できたものを含め、土師器片はほとんどが細片で、接合関係も多く見られる。南西壁際の床面から出土した炭化材は角材である。

所見 焼失住居と推測される。しかし、遺棄された遺物が見あたらないことから、廃絶後の意図的な焼却の可能性が高い。出土土器は、焼失後の埋め戻しの段階で投棄されたものと考えられる。時期は、出土土器から4世紀後葉と考えられる。



第62図 第25号住居跡実測図(2)



第63図 第25号住居跡出土土物実測図

第25号住居跡出土土物観察表 (第63図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
547	土師器	埴	12.2	7.0	—	長石・石英・赤色 粒子	にぶい椀	普通	口縁部外面ハケ目調整後ナデ 内面ハケ目調整後 ヘラ磨き 体部外面ヘラ磨きナデ 内面ナデ	床面～下層	80% PL.23
548	土師器	埴	11.8	6.1	—	長石・石英	にぶい椀	普通	口縁部外面ハケ目調整後ナデ 内面ハケ目調 整後ヘラ磨き 体部外面ヘラナデ 内面ナデ	中層～下層	70% PL.24
549	土師器	高坏	[15.9]	13.1	11.2	長石・石英	赤	普通	坏部内面ヘラ磨き 脚部外面ヘラ磨き	中層～下層	75%
550	土師器	台付甕	11.0	16.3	9.0	長石・石英・赤色 粒子	にぶい椀	普通	口縁部・体部・台部ナデ	覆土下層	60% PL.34
551	土師器	ミニチュア 土器	9.2	6.9	4.6	長石・石英・赤色 粒子	にぶい椀	普通	口縁部外面ハケ目調整後ナデ 内面ナデ 体部外面ハケ目調整後ナデ 内面ヘラナデ	床面	80% PL.35

第26号住居跡 (第64図)

位置 調査区北部のE 3e9区、標高23.5mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第14号溝・第90号墓坑に掘り込まれている。

規模と形状 調査区域外に延びているため、南北軸は3.89m、東西軸は2.27mだけが確認されている。北・西壁から主軸方向はN-1°-Wと推測される。壁高は34~42cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、壁際を除く全体が踏み固められている。北壁際に焼土が検出されている。

炉 規模は長径60cm、短径54cmの楕円形で、床面を8cmほど皿状に掘りくぼめて炉床とした地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

伊土層解説

1 埴 赤褐色 焼土粒子少量

ピット 2か所。P 1は深さ38cm、P 2は深さ18cmで、やや深さに差があるが、規模と配置から西部2か所の主柱穴と考えられる。

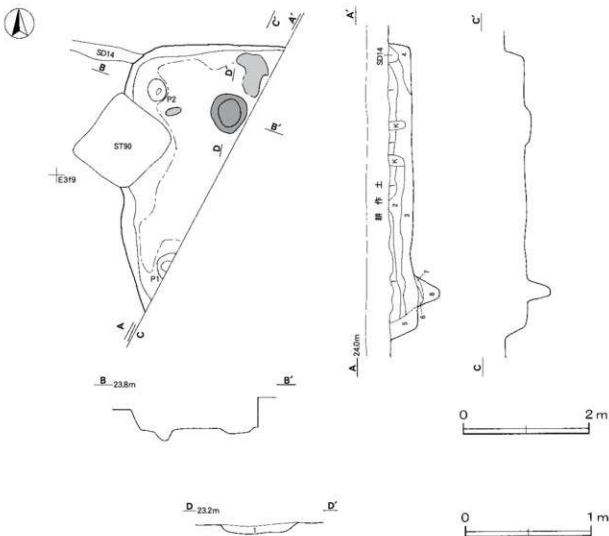
覆土 8層に分層できる。ローム土や焼土を含み、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。第6～8層はP1の覆土である。

土層解説

1 極暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	5 黒褐色	炭化物少量、ローム粒子微量
2 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子微量	6 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	7 黒褐色	ローム粒子微量
4 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子微量	8 黒褐色	ローム粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片124点（埴3，高坏18，壺2，甕99，小形甕2）が廃棄されたような状態で覆土上層から出土している。いずれも細片で、図示できるものはない。

所見 覆土中から出土している土師器片から、本跡は4世紀後葉には廃絶されていたと考えられる。



第64図 第26号住居跡実測図

第27号住居跡（第65～67図）

位置 調査区北部のE3f7区、標高23.5mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第32号住居・第91～93号墓坑に掘り込まれている。

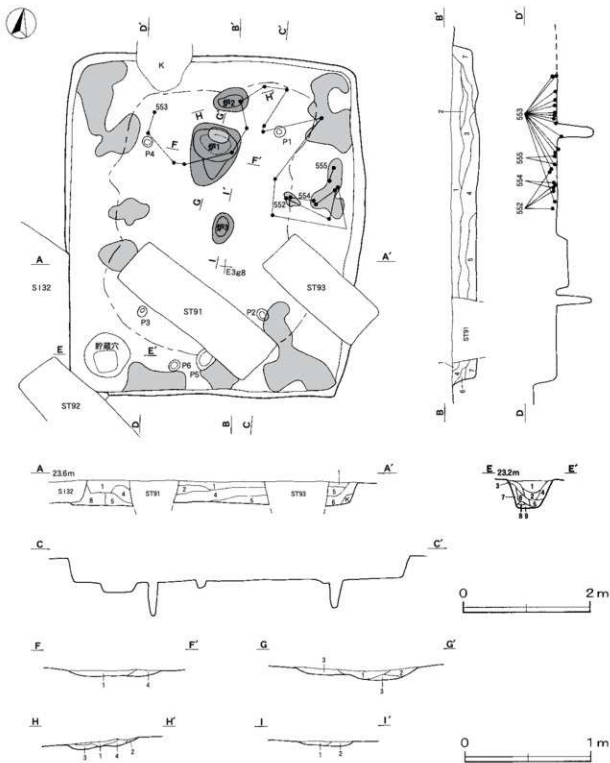
規模と形状 長軸5.37m，短軸4.71mの長方形で、主軸方向はN-2°-Wである。壁高は38cmで、外傾して

立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。北壁と南壁際を中心に焼土塊が検出されている。

炉 3か所。炉1・2は北部、炉3は中央部に位置している。炉1は長径100cm、短径78cmの楕円形で、床面を5cmほど皿状に掘りくぼめて炉床とした地床炉である。炉床面の北部は火を受けて特に赤変硬化している。

炉2は長径56cm、短径38cmの楕円形で、床面を5cmほど皿状に掘りくぼめて炉床とした地床炉である。炉3は



第65図 第27号住居跡実測図

長径50cm、短径32cmの楕円形で、床面を5cmほど皿状に掘りくぼめて炉床とした地床炉である。炉2・3とも炉床面は火を受けて赤変硬化しているが、炉1ほどではない。赤変硬化が激しい炉1が最終使用炉と推測されるが、明確ではない。なお炉2と炉3の新旧関係は不明である。

炉1土層解説

- | | |
|------------------------|----------------------|
| 1 暗赤褐色 焼土粒子少量 | 3 暗赤褐色 焼土粒子中量 |
| 2 暗赤褐色 焼土ブロック少量、炭化粒子微量 | 4 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子少量 |

炉2土層解説

- | | |
|-------------------------|-------------------------|
| 1 黒褐色 焼土粒子微量 | 3 暗赤褐色 焼土ブロック・ローム粒子少量 |
| 2 暗赤褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子微量 | 4 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量 |

炉3土層解説

- | | |
|----------------------|-----------------------|
| 1 暗赤褐色 炭化粒子少量、焼土粒子微量 | 2 に似る褐色 焼土ブロック・炭化粒子少量 |
|----------------------|-----------------------|

ピット 6か所。P1～P4は深さ44～56cmで、配置から主柱穴である。P5は深さ15cmで、南壁際の中央部に位置していることから、出入り口施設に伴うピットである。P6は深さ10cmで、性格は不明である。

貯蔵穴 南西コーナー部に付設されている。径70cmの円形で、深さは42cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。覆土は人為堆積の状況を示している。

貯蔵穴土層解説

- | | |
|----------------------|-----------------------|
| 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 赤褐色 焼土ブロック中量、炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 焼土粒子少量、炭化粒子微量 | 7 に似る褐色 焼土粒子中量、炭化粒子微量 |
| 3 暗赤褐色 焼土粒子中量、炭化粒子少量 | 8 黒褐色 炭化粒子中量 |
| 4 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子少量 | 9 暗褐色 ローム粒子少量 |
| 5 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子微量 | |

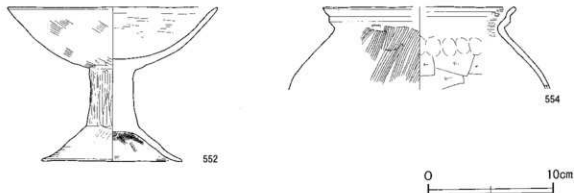
覆土 8層に分層できる。ローム土や焼土、炭化物を含み、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

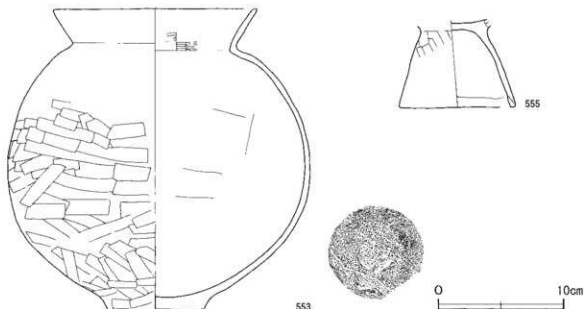
- | | |
|---------------------------|---------------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子多量、炭化粒子微量 | 6 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 3 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量 | 7 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 4 黒色 ローム粒子微量 | 8 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片293点（坏13、埴1、高坏4、鉢2、甕271、台付甕1、瓶1）、銅製品1点（不明）が出土している。また、混入した須恵器片1点（蓋）、陶器片1点（碗）、縄土土器片5点（深鉢）も出土している。遺物は炉の北側の覆土下層に集中する傾向が見られ、北壁方向からの廃棄によるものと考えられる。552・553は覆土下層から出土しており、北部で出土した破片が接合したものである。554・555は床面から覆土下層にかけて出土し、器種や胎土から同一個体の可能性がある。また、焼土塊が床面から検出されている。

所見 焼失住居と推測される。しかし、遺棄された遺物が見あたらないことから、廃絶後の意図的な焼却と考えられる。時期は、出土した土器は4世紀後葉であることから、当該期には廃絶されていたものと考えられる。



第66図 第27号住居跡出土遺物実測図(1)



第67図 第27号住居跡出土遺物実測図(2)

第27号住居跡出土遺物観察表 (第66・67図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
552	土師器	高坏	16.6	12.2	11.2	長石・石英	明褐色	普通	环部外面ハケ目調整 内面ヘラ磨き 胴部外面ヘラ磨き 内面ハケ目調整	覆土下層	70%
553	土師器	甕	16.1	24.0	7.6	長石・石英	にぶい褐色	普通	口縁部内面ハケ目調整後ナデ 外面ナデ 体部外面ヘラナデ 内面ナデ	覆土下層	80%
554	土師器	台付甕	(15.2)	(6.5)	—	長石・石英・雲母	にぶい褐色	普通	口縁部内・外面ナデ 体部外面ハケ目調整 内面ヘラ磨り 内面指頭磨	覆土下層	30% 35%目-器体上
555	土師器	台付甕	—	(6.9)	9.2	長石・石英・雲母	にぶい褐色	普通	台部外面ヘラナデ 内面ナデ	床面	15% 35%目-器体上

第28号住居跡 (第68図)

位置 調査区北部のE 3g5区、標高23.5mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸2.32m、短軸2.25mの方形で、長軸方向はN-42°-Eである。壁高は20~27cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、南西部が踏み固められている。

ピット 深さ5cmで、性格は不明である。

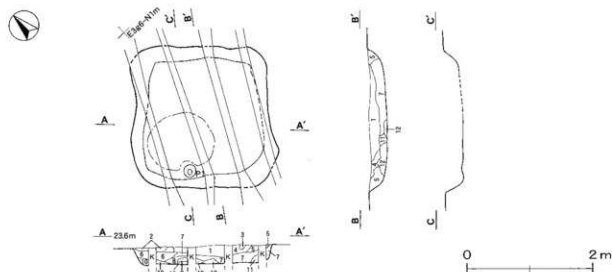
覆土 12層に分層できる。ローム土や焼土を含み、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

1	暗褐色	ローム粒子中量、粘土ブロック少量、炭化粒子微量	7	黒褐色	色	ローム粒子微量
2	黒褐色	ローム粒子中量	8	黒褐色	色	ローム粒子中量、粘土ブロック少量
3	褐色	ローム粒子多量、焼土ブロック少量	9	黒褐色	色	ローム粒子少量
4	暗褐色	ローム粒子少量	10	褐色	色	ローム粒子多量
5	黒褐色	ローム粒子中量、粘土ブロック・炭化粒子少量	11	暗褐色	色	ローム粒子中量
6	黒褐色	ローム粒子・炭化粒子少量	12	暗褐色	色	粘土ブロック多量、ローム粒子少量

遺物出土状況 土師器片41点(高坏3, 甕8)が出土しているが、細片で図示できない。

所見 土器が少数であるため明確ではないが、出土した土師器片は前期の様相を呈している。炉及び柱穴と判断できるピットが検出されていないが、形状や一部硬化面が検出されていることから、住居以外の機能を果たした施設なども想定することができる。



第68図 第28号住居跡実測図

第29号住居跡 (第69・70図)

位置 調査区北部のE 2 f0区、標高23.5mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸6.48m、短軸6.32mの方形で、主軸方向はN-20°-Wである。壁高は27cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められ、壁溝が全周している。壁際から幅最大で100cm、高さ5cmほどの高まりが北壁際を除いて確認されている。南・東壁際の床面から炭化材が検出されている。

炉 北部の中央に位置している。長径80cm、短径70cmの楕円形で、床面を10cmほど皿状に掘りくぼめて炉床とした地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。北部からは炉器台が据えられていたと想定されるピット2か所が検出されている。P1・P2とも径18cm、深さ5cmである。

伊土層解説

- | | |
|-----------------|------------------|
| 1 暗赤褐色 焼土粒子少量 | 4 に似赤褐色 焼土粒子少量 |
| 2 暗赤褐色 焼土粒子微量 | 5 暗赤褐色 焼土粒子中量 |
| 3 暗赤褐色 焼土ブロック少量 | 6 に似赤褐色 焼土ブロック中量 |

伊ピット1・2土層解説

- | | |
|--------------|---------------|
| 1 黒褐色 焼土粒子微量 | 2 暗赤褐色 焼土粒子少量 |
|--------------|---------------|

ピット 8か所。P1～P8は深さ10～15cmで、規模や配置に規則性がなく、性格は不明である。

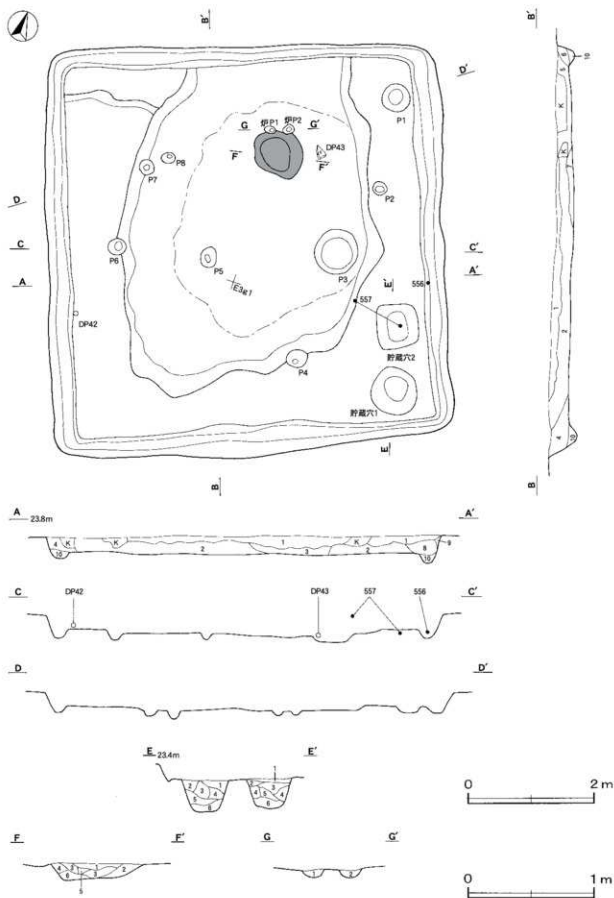
貯蔵穴 2か所。2基とも南東コーナー部に付設されている。貯蔵穴1は径70cmの円形で、深さは50cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。貯蔵穴2は長軸66cm、短軸64cmの方形で、深さは48cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。貯蔵穴2の第1層は貼床構築土であることから、貯蔵穴2が古く、貯蔵穴1が新しいと推測される。

貯蔵穴1土層解説

- | | |
|--------------------------|-------------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量 | 4 褐色 ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 炭化粒子少量、ローム粒子微量 | 5 褐色 ローム粒子少量 |
| 3 褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 褐色 ローム粒子微量 |

貯蔵穴2土層解説

- | | |
|------------------------|----------------|
| 1 褐色 ローム粒子多量 | 4 褐色 ロームブロック中量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 5 黒褐色 ローム粒子微量 |
| 3 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量 | 6 褐色 ローム粒子中量 |



第69图 第29号住居跡実測图

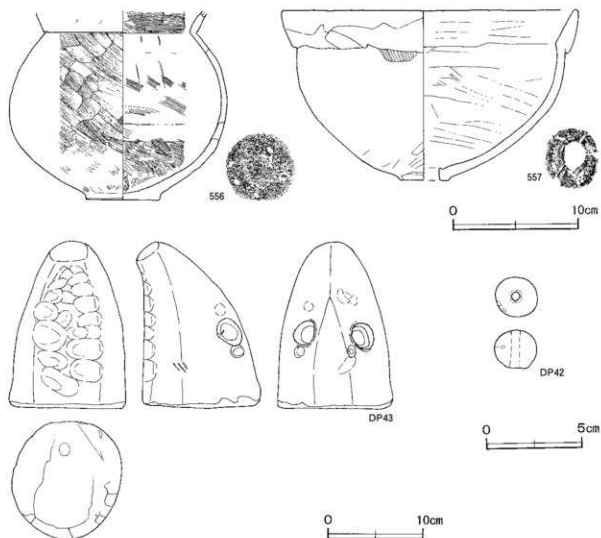
覆土 10層に分層できる。ローム土や焼土、炭化物を含み、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------|--------|------------------|
| 1 黒褐色 | 焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 黒褐色 | ロームブロック微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 7 黒褐色 | 炭化物・焼土粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子微量 | 8 黒褐色 | 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子微量 | 9 褐色 | ローム粒子多量 |
| 5 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子微量 | 10 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片231点（増2，高坏7，甕221，甌1），土製品4点（炉器台3，球状土鍾1），金属製品1点（刀子）が出土している。ほとんどが破片で、覆土上層から出土していることから、廃絶後の廃棄と考えられる。また、556は東壁溝内，557は貯蔵穴2内，DP43は炉の東側床面から横位で出土しており，557・DP43は住居廃絶時に遺棄されたものである。この他，火を受けて脆くなっている炉器台2個体が炉の西側の床面から出土しているが，図示することができなかった。これらは炉で使用されていたものが廃棄されたと考えられる。

所見 焼失住居であり，出土した炭化材は上屋などの建築材と推測される。遺物は焼失前に遺棄されたものと，上層から出土する焼失後に廃棄された破片に分けることができる。また，炉北側にピット2か所が検出されており，炉器台の使用法を考える上で貴重な事例となる。時期は，貯蔵穴内から出土した土器から，4世紀中葉と考えられる。



第70図 第29号住居跡出土遺物実測図

第29号住居跡出土遺物観察表 (第70図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
556	土師器	甕	—	(15.0)	5.7	長石・石英・雲母	にがい褐色	普通	口縁部外面ナデ 内面ハケ目調整 体部外面ハケ目調整 内面ハケ目調整後ナデ	東壁溝内	80%
557	土師器	甕	22.5	13.5	3.8	長石・石英	褐色	普通	口縁部外面ナデ 内面ハケ目調整後ナデ 内面ヘラナデ	貯蔵穴2内	100% PL.34

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質(胎土)	特	徴	出土位置	備考
DP42	球状土埴	2.15	2.05	0.5	9.1	長石・石英	ナデ	一方からの穿孔	礎土下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質(胎土)	特	徴	出土位置	備考
DP43	伊器台	17.2	12.5	12.5	1,620	長石・石英・礫	指頭痕	火熱痕	床面	PL.38

第30号住居跡 (第71・72図)

位置 調査区北部のE3h3区、標高23.5mの台地平坦部に位置している。

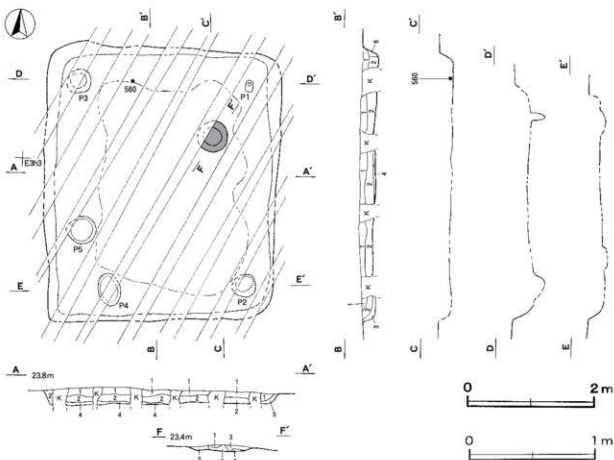
規模と形状 長軸4.45m、短軸3.75mの長方形で、主軸方向はN-2°-Wである。壁高は24cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、壁際を除いて全体的に踏み固められている。

炉 北東部に位置している。一部攪乱を受けているが、径48cmの円形で、床面をわずかに掘りくぼめて炉床とした地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

伊土層解説

- | | | | |
|------|----------------|-------|--------------|
| 1 褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量 | 3 灰褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量 |
| 2 褐色 | 焼土粒子多量、ローム粒子中量 | 4 暗褐色 | ローム粒子中量 |



第71図 第30号住居跡実測図

ピット 5か所。P1～P3は深さ12～23cmとやや浅いが、配置から主柱穴と考えられる。P4は深さ7cm、P5は深さ6cmであり、性格は不明である。

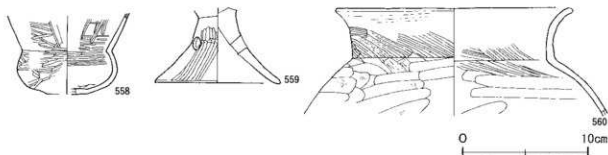
覆土 6層に分層できる。ローム土や焼土、炭化物を含み、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

1 黒褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	4 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
2 黒褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	5 褐色	ロームブロック・炭化粒子少量
3 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	6 褐色	ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片247点（増11、高坏17、甕219）が覆土中層から、廃棄されたような状況で出土している。また、流れ込んだ縄文土器片1点（深鉢）、混入した磁器片1点（碗）も出土している。560は床面、559はP5覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から4世紀後葉と考えられる。



第72図 第30号住居跡出土遺物実測図

第30号住居跡出土遺物観察表（第72図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考	
558	土師器	増	—	(6.9)	[2.8]	長石・石英・赤色粒子	にぶい	普通	口縁部内・外面へラ磨き	体内内・外面へラ磨き	覆土中	40%
559	土師器	高坏	—	(5.8)	10.0	長石・石英・雲母・黒色粒子	にぶい	粗	脚部外面へラ磨き	内面ハケ目調整後ナゲ	P5覆土中	40%
560	土師器	甕	18.6	(8.6)	—	長石・石英	にぶい	粗	口縁部内・外面ハケ目調整後ナゲ	体内内・外面ハケ目調整後へラナゲ	床面	20%

第31号住居跡（第73図）

位置 調査区北部のE2c6区、標高23.5mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第11・15号溝に掘り込まれている。

規模と形状 調査区域外に延びているため、南北軸3.80m、東西軸は3.12mだけが確認されている。長軸方向はN-28°-Wの隅丸方形と推測される。壁高は26cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、壁際を除く広い範囲が踏み固められている。

ピット 9か所。P1は深さ20cm、P2は深さ15cmで、規模がやや小さいが、配置から東側の主柱穴2か所と考えられる。P3は深さ32cmで、南壁際の中央に位置すると推測されることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P4～P9は深さ11～16cmで、性格は不明である。

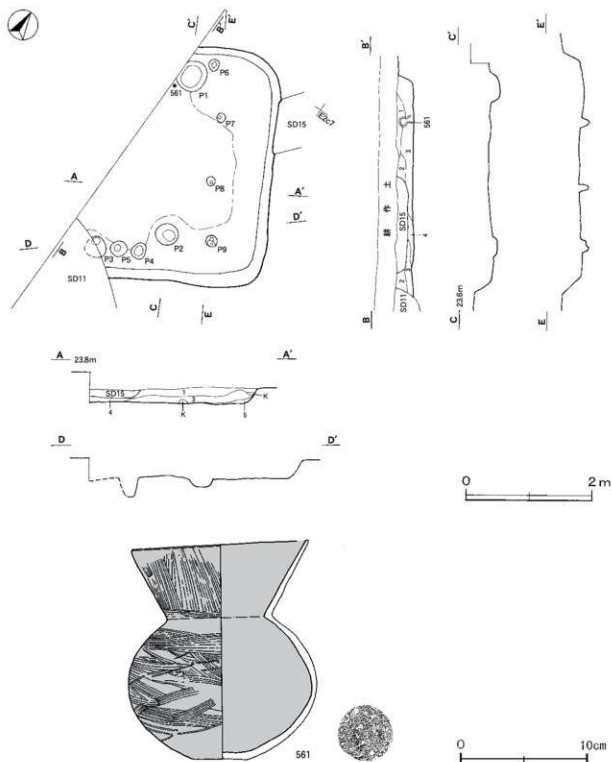
覆土 5層に分層できる。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

1 黒褐色	ローム粒子微量	4 黒褐色	炭化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量
2 黒褐色	ロームブロック微量	5 暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
3 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量		

遺物出土状況 土師器片102点(坏21, 埴3, 壺5, 甕73)が出土している。遺物は破片が多く、覆土中層から上層にかけて散在した状況で出土している。その中でも561はほぼ完形で、P1周辺の覆土下層から逆位で出土している。

所見 覆土中層から上層にかけて出土した破片の多くは、第3・4層の堆積後に廃棄されたものと考えられる。出土土器は、4世紀中葉とみられるものが多く、当該期には廃絶されていたと考えられる。



第73図 第31号住居跡・出土遺物実測図

第31号住居跡出土遺物観察表（第73図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
961	土師器	埴	14.0	17.4	4.2	長石・石英・炭母	明赤褐	普通	口縁部外面ハケ目調整後へラ磨き・内面砂面荒れ・体部外面ハケ目調整後へラ磨き・内面ハケ目調整	覆土下層	90% PL25

第32号住居跡（第74図）

位置 調査区北部のE 3g7区、標高23.5mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第27号住居跡を掘り込み、第92号墓坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.38m、短軸3.33mの方形で、主軸方向はN-29°-Eである。壁高は38cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、炉の周辺が踏み固められている。西壁際の中央には階段状の段差を付設している。

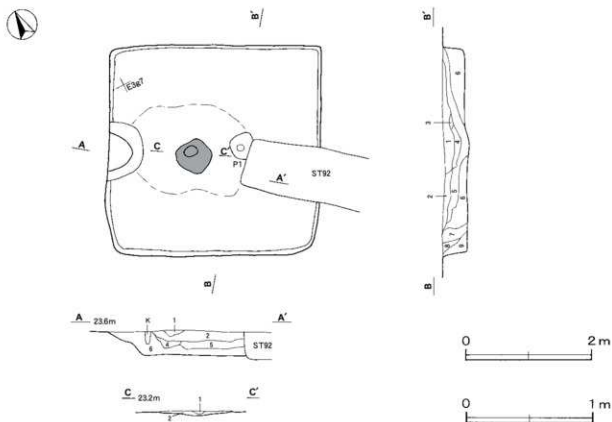
炉 中央部のやや西寄りに位置している。一辺約50cmの方形で、床面をわずかに皿状に掘りくぼめて炉床とした地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

伊土層解説

1 極暗赤褐色 炭化物・焼土粒子少量

2 黒褐色 炭化物中量、焼土粒子微量

ピット 深さ20cmで、性格は不明である。



第74図 第32号住居跡実測図

覆土 9層に分層できる。全体的にロームブロックを含んだ、不規則な堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- | | | | |
|--------|----------------|--------|--------------------|
| 1 黒 色 | ローム粒子・焼土粒子微量 | 6 暗 褐色 | 炭化物・焼土粒子少量、ローム粒子微量 |
| 2 暗 褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 | 7 黒 褐色 | ロームブロック微量 |
| 3 暗 褐色 | ローム粒子微量 | 8 黒 褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 4 黒 色 | ローム粒子微量 | 9 極暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 5 暗 褐色 | ロームブロック少量 | | |

遺物出土状況 土師器片29点(瓿)が出土しているが、細片で図示できない。

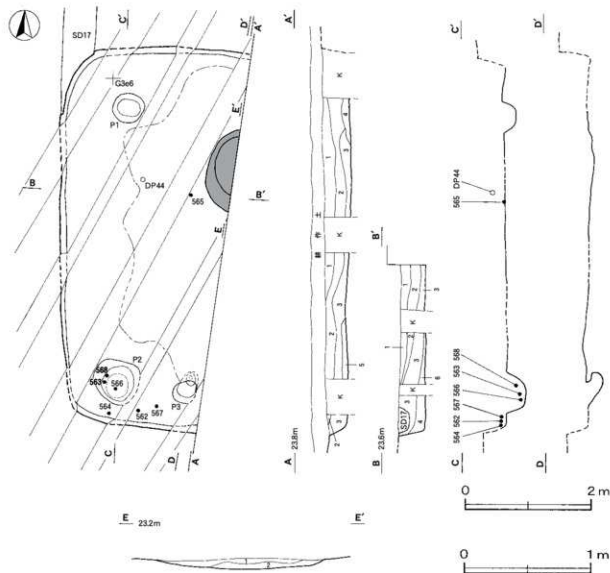
所見 壁際に階段状の段差を設けるなど、他の住居と比べると内部構造において違いが見られる。時期は、出土土器が少ないため明確な判定は困難であるが、前期と考えられる。

第33号住居跡 (第75・76図)

位置 調査区北部のG3e6区、標高23.5mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第17号溝に掘り込まれている。

規模と形状 東部が調査区域外に延びているため、南北軸6.08m、東西軸は2.90mだけが確認されている。長軸方向はN-6°-Eの隅丸方形と推測される。壁高は40cmで、外傾して立ち上がっている。



第75図 第33号住居跡実測図

床 ほぼ平坦で、壁際を除く広い範囲が踏み固められている。

炉 南北軸128cm, 東西軸は42cmだけが確認され、床面を8cmほど皿状に掘りくぼめて炉床とした地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

伊土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量 2 暗赤褐色 焼土ブロック少量、炭化物・ローム粒子微量

ピット 3か所。P1は深さ24cm, P2は深さ34cmで、規模と配置から4本主柱の西側の主柱穴と考えられる。P3は深さ26cmで、性格は不明である。

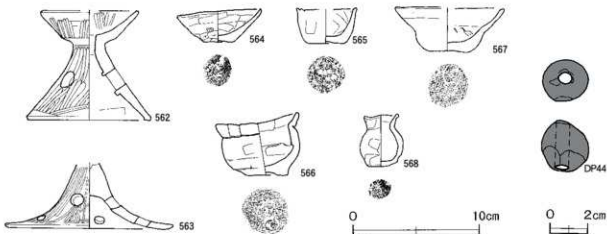
覆土 6層に分層できる。ローム粒子が多めに含まれているが、堆積状況に大きな乱れが見られないことから自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 4 褐色 ローム粒子・焼土粒子中量
2 黒褐色 ローム粒子中量 5 褐色 ローム粒子中量, 焼土ブロック少量
3 暗褐色 ローム粒子多量, 炭化粒子微量 6 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片398点(器台1, 高坏1, 鉢1, 壺3, 甕386, ミニチュア土器6), 土製品1点(球状土鍾)が出土している。また、混入した陶器片7点, 磁器片4点も出土している。遺物は、南西部壁際付近の覆土下層やP2内にかけて集中している。563・566・568はP2内の覆土下層から出土しており、住居の埋没が自然堆積と考えられると、P2周辺に置かれていたものが、ピット内に転落したとも想定される。

所見 出土状況から、ミニチュア土器6個体が南西部のP2周辺から多く出土していることから、屋内祭祀を行った可能性が高い住居である。時期は、出土土器から4世紀中葉と考えられる。



第76図 第33号住居跡出土遺物実測図

第33号住居跡出土遺物観察表(第76図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
562	土師器	器台	[7.6]	8.7	9.8	長石・雲母	灰黄褐色	普通	受部内・外面ヘラ磨き 脚部外面ヘラ磨き 内面ナゲ 3意	覆土下層	70%
563	土師器	高坏	—	(5.2)	13.4	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	脚部外面ヘラ磨き 内面ナゲ 7意	P2内下層	40%
564	土師器	ミニチュア土器	6.7	2.6	2.2	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄褐色	普通	外面ヘラ目調整後ヘラナゲ 内面ヘラナゲ	覆土下層	100% PL35
565	土師器	ミニチュア土器	[4.7]	2.8	3.0	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	内・外面ヘラナゲ	床面	90% PL35
566	土師器	ミニチュア土器	6.5	4.9	3.4	長石・石英	橙	普通	内・外面ヘラナゲ 輪積み痕	P2内下層	100% PL35
567	土師器	ミニチュア土器	[8.6]	3.4	3.3	長石・石英	橙	普通	内・外面ナゲ 輪積み痕	覆土下層	50%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
568	土師器	ヒメフエ土器	2.7	4.2	1.7	長石・石英	橙	普通	外面ナデ 内・外面輪積み底	P 2内中層	100% PL35
番号	器種	径	厚さ	口径	重量	材質(胎土)	特 徴		出土位置	備考	
DP44	球状土埴	2.5	2.7	0.7	14.4	長石・石英・矽	ナデ	一方向からの穿孔	覆土中層		

第34号住居跡 (第77・78図)

位置 調査区北部のG 3 e5区、標高23.3mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸3.66m、短軸3.36mの方形で、主軸方向はN-27°-Eである。壁高は8cmで、外傾して立ち上がっている。炉の北側に焼土が確認されている。

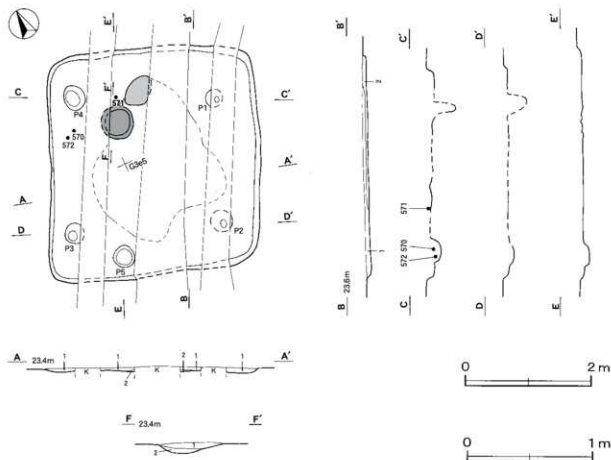
床 平坦で、中央部が踏み固められている。炉の北側に焼土が検出されている。

炉 北部のやや西寄りに位置している。長径58cm、短径54cmの円形で、床面を8cmほど皿状に掘りくぼめて炉床とした地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

伊土層解説

1 暗赤褐色 焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子微量 2 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量

ピット 5か所。P 1～P 4は深さ8～32cmで、配置から主柱穴と考えられるが、西側の2か所は規模が小さい。P 5は深さ6cmで、性格は不明である。



第77図 第34号住居跡実測図

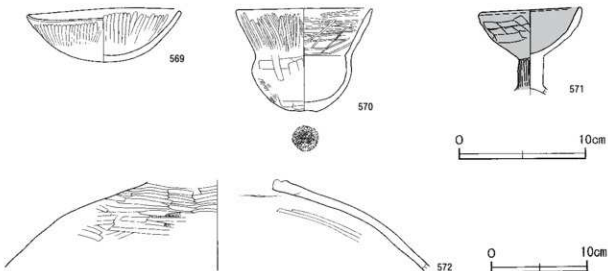
覆土 2層に分層できる。層厚が薄いため堆積状況は不明である。

土層解説

1 極暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量 2 暗褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片95点(埴1, 高环4, 甕90)が北西部付近を中心に, 覆土下層から床面にかけて出土している。570~572は北西部の床面から出土している。

所見 時期は, 出土土器から4世紀後葉と考えられる。



第78図 第34号住居跡出土遺物実測図

第34号住居跡出土遺物観察表 (第78図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
569	土師器	坏	12.2	4.3	-	長石・石英	にじい黄緑	普通	内・外面へラ磨き	覆土中	100% PL21
570	土師器	埴	10.7	8.1	2.1	長石・石英	明赤褐	普通	口縁部内・外面へラ磨き 体部外面ハタ目調整後へラナゲ 内面磨面荒れ	床面	90% PL24
571	土師器	高环	8.0	(6.9)	-	長石・石英・雲母	赤	普通	坏部内・外面ナゲ 脚部外面へラ磨き	床面	70%
572	土師器	甕	-	(9.6)	-	長石・石英・雲母	にじい黄緑	普通	体部外面ハタ目調整後へラナゲ 内面ナゲ	床面	5%

第35号住居跡 (第79図)

位置 調査区北部のG3d3区, 標高23.3mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第524号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.94m, 短軸3.71mの方形で, 主軸方向はN-17°-Wである。壁高は15~20cmで, 外傾して立ち上がっている。

床 平坦で, 中央部が踏み固められている。

炉 中央部のやや北東寄りに位置している。第524号土坑に掘り込まれているため, 南北軸は66cm, 東西軸は40cmだけが確認されており, 床面を5cmほど皿状に掘りくぼめて炉床とした地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

1 暗赤褐色 焼土ブロック少量, 炭化物・ローム粒子微量

ピット 5か所。P1～P4は深さ14～28cmで、規模においてやや差があるものの、配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ19cmで、南壁際のほぼ中央に位置することから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴 南東コーナー部に付設されている。長径70cm、短径50cmの楕円形で、深さは35cmである。底面は平坦で、壁は直立している。覆土はレンズ状の堆積状況を示すが、ブロック状のローム土を多く含むことから、人為堆積と考えられる。

貯蔵穴土層解説

- | | |
|-----------------------|----------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量 | 3 褐色 ロームブロック中量 |
| 2 黒暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量 | |

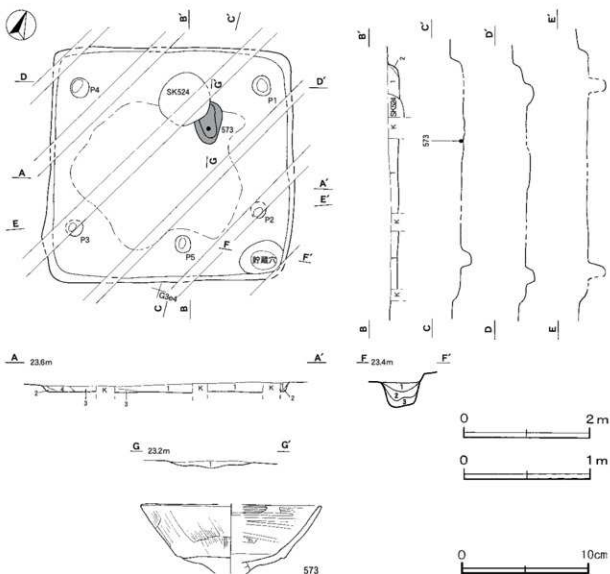
覆土 4層に分層できる。層厚が薄いため堆積状況は不明である。

土層解説

- | | |
|----------------------|--------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量 | 3 極暗褐色 ロームブロック少量 |
| 2 褐色 ロームブロック少量 | 4 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片126点(埴1、高环13、甕112)が出土している。また、混入した須恵器片3点も出土している。573は炉火床面から出土しており、内面には火を受けた痕跡が見られる。

所見 時期は、出土土器が少ないため明確な判定は困難であるが、前期と考えられる。



第79図 第35号住居跡・出土遺物実測図

第35号住居跡出土遺物観察表（第79図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
573	土師器	高坏	[14.2]	(5.5)	—	長石・石英	にぶい橙	普通	坏部外面ハケ目調整 後ヘラ置き	伊内	25%

第36号住居跡（第80図）

位置 調査区北部のG 3 f4区、標高23.2mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸2.69m、短軸2.59mの方形で、長軸方向はN-26°-Eである。壁高は22~28cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。北部を中心に焼土が確認されている。

ピット 4か所。P1~P4は深さ10~16cmで、配置から支柱穴と考えられるが、規模が小さく明確ではない。

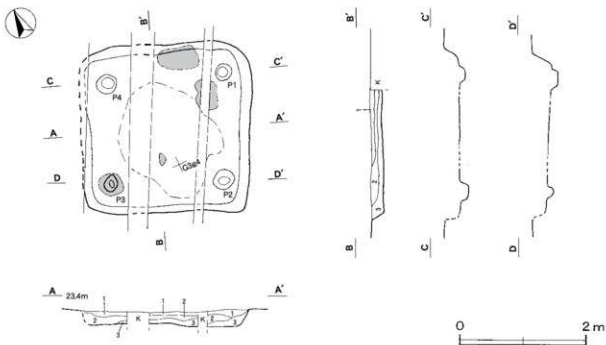
覆土 3層に分層できる。各層にローム土が多く含まれるが、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子微量 3 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子微量
2 黒褐色 ローム粒子中量

遺物出土状況 土師器片62点(瓿)が出土しているが、細片で図示できない。

所見 時期は、出土土器が少ないため明確な判定は困難であるが、前期と考えられる。



第80図 第36号住居跡実測図

第37号住居跡（第81図）

位置 調査区北部のG 3 f3区、標高23.2mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第99・102号墓坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.52m、短軸4.35mの方形で、主軸方向はN-64°-Wである。壁高は5~10cmで、外傾し

で立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

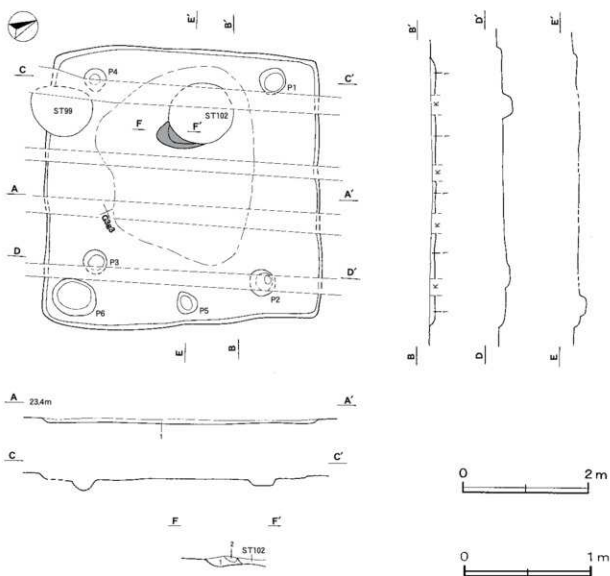
炉 中央部より西寄りに位置している。第102号墓坑に掘り込まれており東西軸54cm、南北軸は30cmだけが確認されている。床面を5cmほど皿状に掘りくぼめて炉床とした地床炉で、炉床面の中心部は火を受けて特に赤変硬化している。

伊土層解説

1 黒色 ロームブロック微量

2 赤褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子微量

ピット 6か所。P1～P4は深さ6～34cmで、配置から支柱穴と考えられるが、規模が小さく明確ではない。P5・P6とも深さ12cmで、P5は東壁際の中央に位置することから、出入り口施設に伴うピットと考えられ、P6は性格不明である。



第81図 第37号住居跡実測図

覆土 単一層である。層厚が薄いため堆積状況は不明である。

土層解説

1 黒褐色 ローム粒子微量

遺物出土状況 土師器片61点(甕)が出土している。また、混入した陶器片3点、磁器片3点も出土している。出土した土器は細片で図示できない。

所見 時期は、出土土器が少ないため明確な判定は困難であるが、前期と考えられる。

第38号住居跡 (第82・83図)

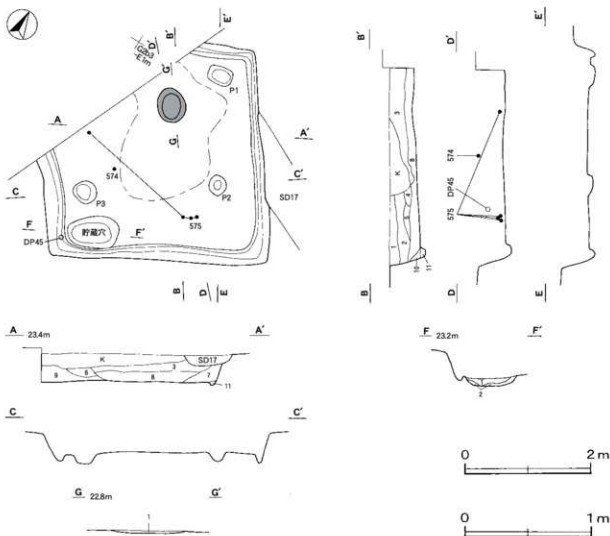
位置 調査区北部のG 2b3区、標高23.2mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第17号溝に掘り込まれている。

規模と形状 北西部が調査区域外に延びているため、東西軸は3.57m、南北軸は3.48mだけが確認されている。長軸方向はN-29°-Wの方形と推測される。壁高は42~48cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、炉を中心に中央部が踏み固められている。

炉 中央部より北寄りに位置している。長径54cm、短径45cmの楕円形で、床面をわずかに掘りくぼめて炉床と



第82図 第38号住居跡実測図

した地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

伊土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量

ピット 3か所。P1～P3は深さ8～12cmで、配置から主柱穴と考えられるが、規模が小さく明確ではない。

貯蔵穴 南西コーナー部に付設されている。長径82cm、短径50cmの楕円形で、深さは12cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。堆積状況は明確ではない。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量 2 暗褐色 ロームブロック微量

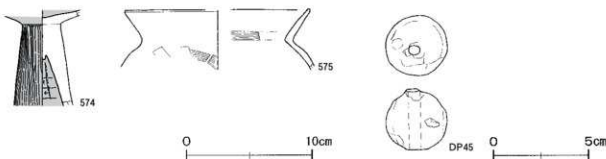
覆土 11層に分層できる。ローム土や焼土、炭化物を含み、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量 7 極暗褐色 焼土ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量
 2 褐色 ローム粒子中量 8 暗褐色 ロームブロック少量
 3 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量 9 暗褐色 炭化物・焼土ブロック・ローム粒子少量
 4 褐色 ロームブロック多量 10 褐色 ローム粒子多量
 5 極暗褐色 ローム粒子中量 11 褐色 ロームブロック少量
 6 暗褐色 ローム粒子少量、炭化物微量

遺物出土状況 土師器片592点（埴3、高坏14、甕574、手捏土器1）、土製品1点（球状土錘）が出土している。遺物は覆土上層から下層にかけて出土しており、住居廃絶後に廃棄されたと考えられる。574とDP45は覆土上層、575は南東部と西部の覆土下層から出土した破片が接合したものである。

所見 出土土器は、4世紀後葉とみられるものが多く、当該期には廃絶されていたと考えられる。



第83図 第38号住居跡出土遺物実測図

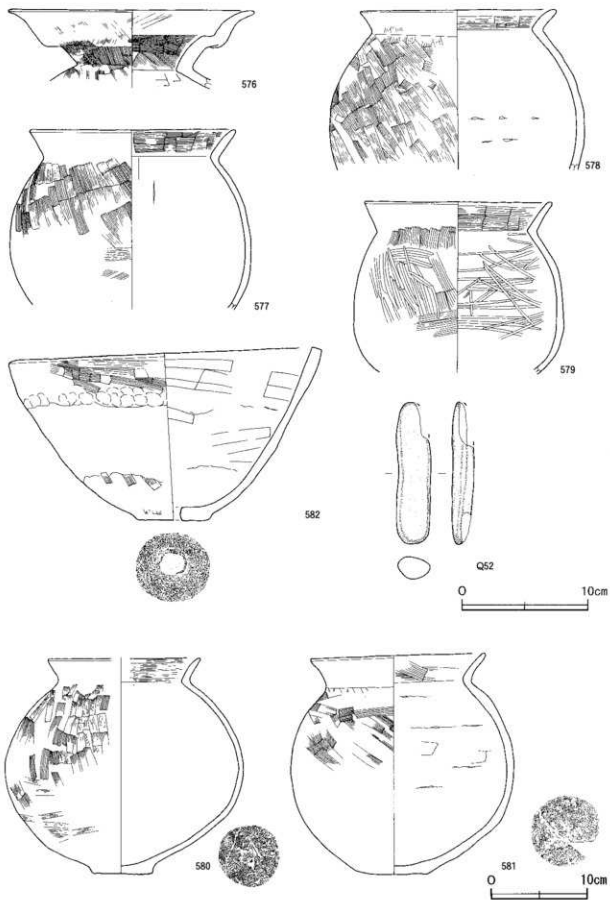
第38号住居跡出土遺物観察表（第83図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
574	土師器	高坏	—	(7.6)	—	長石・石英・雲母	赤	普通	脚部外面へラ磨き 内面へラ削り	覆土上層	50%
575	土師器	甕	[14.6]	(4.2)	—	長石・石英・雲母	にぶい褐色	普通	口縁部外面ナデ 内面ハケ目調整後ナデ 体部外面ハケ目調整後ナデ	覆土下層	5%
番号	器種	径	厚さ	口径	重量	材質(胎土)	特 徴		出土位置	備考	
DP45	球状土錘	3.3	3.3	0.6	(33.0)	長石・石英・籾	ナデ	一方からの穿孔	覆土上層		

第39号住居跡（第84・85図）

位置 調査区北部のF312区、標高23.5mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸3.82m、短軸3.77mの方形で、主軸方向はN-42°-Wである。壁高は10～15cmで、外傾し



第85图 第39号住居跡出土遺物実測図

第39号住居跡出土遺物観察表（第85図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
576	土師器	壺	19.2	(6.2)	—	長石・石英	明赤褐	普通	口縁部内・外面ハケ目調整後ナデ 体 部外面ハケ目調整 内面ヘラナデ	P 3内下層	20% PL28
577	土師器	甕	16.2	(14.3)	—	長石・石英	黄褐	普通	口縁部外面ナデ 内面ハケ目調整 体部外面ハケ目調整 内面ヘラナデ	炉内	80%
578	土師器	壺	15.3	(12.7)	—	長石	にぶい黄褐	普通	口縁部内・外面ハケ目調整後ナデ 体 部外面ハケ目調整 内面ヘラナデ	炉内	50%
579	土師器	甕	14.7	(13.6)	—	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部外面ナデ 内面ハケ目調整 体 部外面ハケ目調整後ヘラ磨き 内面ヘ ラナデ	炉内	70%
580	土師器	甕	[16.0]	22.8	6.5	長石・石英・雲母 ・緑	にぶい橙	普通	口縁部外面ハケ目調整後ナデ 内面ナ デ 体部外面ハケ目調整後ナデ 内面 ハケ目調整	床面	75%
581	土師器	甕	18.2	23.0	7.4	長石・石英・砂粒	明赤褐	普通	口縁部外面ナデ 内面ハケ目調整後ナ デ 体部外面ハケ目調整 内面ヘラナ デ 輪積み痕	覆土下層	80% PL32
582	土師器	甕	23.6	13.7	5.7	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部外面ハケ目調整 内面ヘラナ デ 体部外面ハケ目調整後ナデ 内面ヘ ラナデ	床面	100% PL34

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備考
Q52	磨石	11.3	2.7	1.7	(78.6)	砂岩	使用面2面 井割欠損	覆土中	

第40号住居跡（第86～89図）

位置 調査区北部のG 3 1区。標高23.2mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 南西部が調査区域外に延びているため、東西軸は6.76m、南北軸は6.55mだけが確認されている。主軸方向はN-44°-Wの隅丸方形と推測される。壁高は50～56cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦で、中央部が踏み固められている。全域で炭化材と焼土が検出されている。

炉 北部の中央に位置している。長径88cm、短径46cmの楕円形で、床面を10cmほど皿状に掘りくぼめて炉床とした地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。東側からは炭化米が出土している。

炉土層解説

- 1 黒褐色 焼土ブロック・炭化物・ローム粒子微量 2 黒褐色 焼土ブロック少量

ピット 5か所。P 1～P 4は深さ66～76cmで、配置から主柱穴である。P 5は深さ38cmで、南壁際中央に位置することから出入り口施設に伴うピットである。

貯蔵穴 南東コーナー部に付設されている。長径90cm、短径70cmの楕円形で、深さは40cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。覆土は人為堆積の状況を示している。

貯蔵穴土層解説

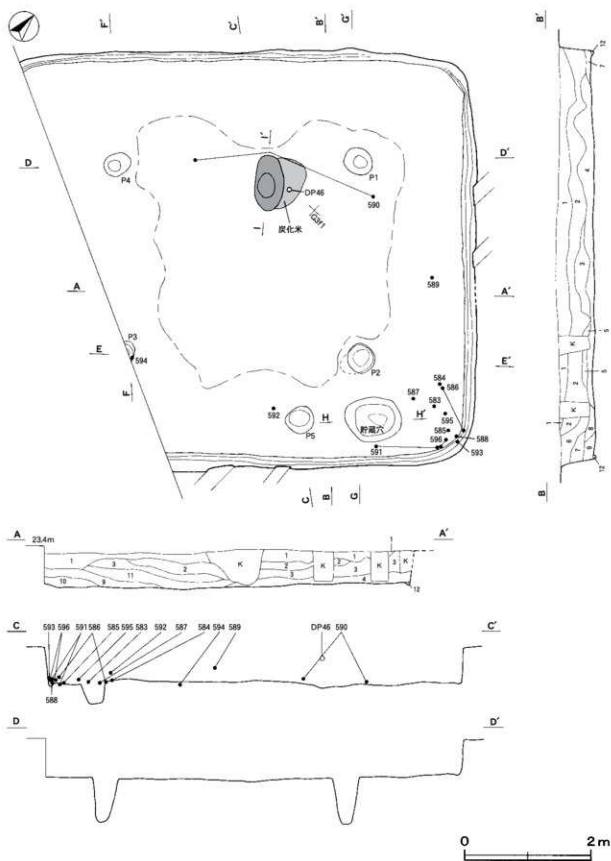
- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 4 黒褐色 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量
2 暗褐色 ロームブロック少量・炭化粒子微量 5 黒褐色 黒沼バミス粒子少量・ローム粒子微量
3 極暗褐色 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量

覆土 12層に分層できる。ローム土や焼土を少量含み、レンズ状の堆積状況を示すことから、自然堆積と考えられる。第4・8・10層は焼土ブロックや炭化物を含有していることから、焼失に伴って形成されたと考えられる。

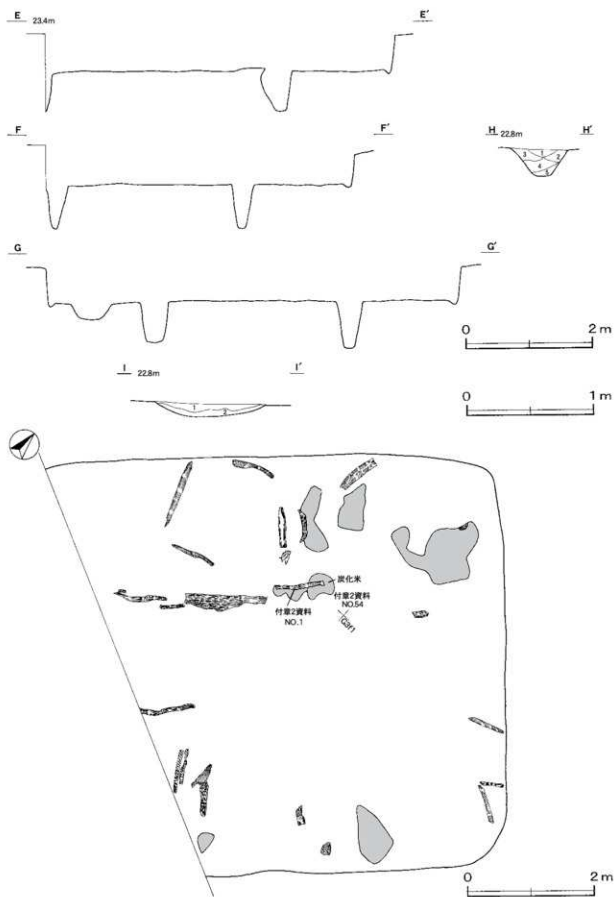
土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 7 暗褐色 炭化物・ロームブロック少量
2 黒褐色 ロームブロック少量・炭化粒子微量 8 暗赤褐色 焼土ブロック少量・炭化物・ローム粒子微量
3 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子微量 9 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
4 黒褐色 焼土ブロック・炭化物・ローム粒子微量 10 黒褐色 炭化物・ローム粒子・焼土粒子少量
5 褐色 ロームブロック少量・焼土粒子・炭化粒子微量 11 暗灰色 ローム粒子・炭化粒子微量
6 極暗褐色 ロームブロック・炭化物少量 12 黒褐色 ローム粒子微量

遺物出土状況 土師器片1,189点（埴5, 器台3, 高坏15, 鉢1, 壺1, 甕1, 164）、土製品2点（球状土鐘）、炭化米が出土している。また、混入した陶器片8点（碗7, 鉢1）も出土している。遺物は南東コーナー部の覆土下層から床面にかけて集中し、接合関係も多くみられる。また、これらの遺物は、炭化材や焼土の出土レ



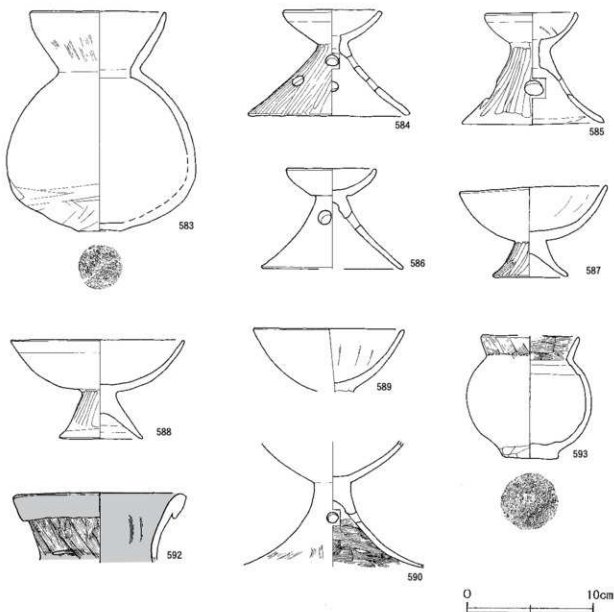
第86图 第40号住居跡実測图(1)



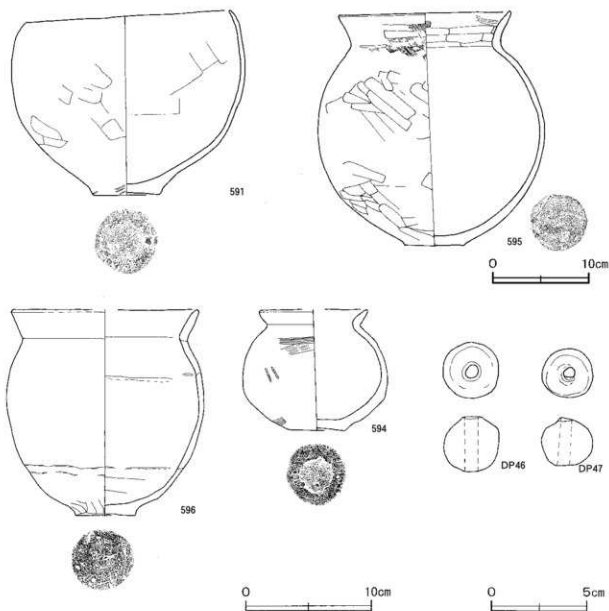
第87図 第40号住居跡実測図(2)

ベルと同じことから、廃絶時または直後に廃棄されたものと考えられる。炭化材はほぼ全城、焼土範囲は北部を中心に分布し、炭化材は壁際に直交ないし平行していることから、焼失した上屋の建築材が脱落したものと考えられる。炭化米は炉の東側の床面から出土している。

所見 炭化材や焼土塊が多量に出土していることや遺物出土状況から、廃絶時に焼失したものと考えられる。出土遺物は焼失直後に一括廃棄されたものと想定され、時期は出土土器から前期後葉と考えられる。炭化材の科学分析の結果、樹種はハンノキ垂属と同定されており、当遺跡周辺に生育するハンノキの可能性が高いとされている。炉の東側から検出された炭化米は、稲穂主体で稈や葉などの他の部位が確認されないことから、穂摘みされた状態で保管された可能性がある。このことから、本遺跡周辺におけるイネの利用が推定され、稲穂の状態で保管されていたものが、火を受け炭化したことが想定される。時期は、出土土器から4世紀前葉と考えられる。



第88図 第40号住居跡出土遺物実測図(1)



第89図 第40号住居跡出土遺物実測図(2)

第40号住居跡出土遺物観察表(第88・89図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
583	土師器	埴	10.7	17.4	3.4	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外面ハケ目調整後ナデ 内面ナデ 体部内・外面ナデ 底部木象嵌	床面	95% P125
584	土師器	器台	7.5	8.4	12.8	石英・白色粒子	橙	普通	交部内・外面ナデ 脚部外面ヘラナデ 内面ナデ 3窓	床面	95%
585	土師器	器台	7.3	8.9	11.3	長石・石英	明赤褐	普通	交部内・外面ナデ 脚部外面ヘラナデ 内面ナデ 3窓	床面	70%
586	土師器	器台	7.0	8.0	[11.2]	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	交部内・外面ナデ 脚部内・外面ナデ 3窓	束壁溝内	50% 煤付着
587	土師器	高环	11.6	7.2	5.8	長石・黒色粒子	にぶい橙	普通	外部内・外面ナデ 脚部外面ヘラナデ 内面ナデ	床面	95%
588	土師器	高环	13.6	7.8	6.5	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	外部外面ナデ 内面器面荒れ 脚部外面ヘラナデ	床面	85% 煤付着
589	土師器	高环	11.9	(4.9)	-	長石・石英	にぶい黄橙	普通	外部内・外面ナデ	覆土中層	40%
590	土師器	高环	-	(10.0)	-	白色粒子	浅黄橙	普通	外部内・外面ナデ 脚部外面ハケ目調整後ナデ 内面ハケ目調整 3窓	覆土下層	40%
591	土師器	鉢	21.6	19.5	6.8	長石・石英・雲母	赤褐	普通	体部内・外面ヘラナデ	床面	80%
592	土師器	甕	12.9	(5.5)	-	白色粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部内・外面ナデ 頂部外面ハケ目調整 内面ナデ	覆土中層	10%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
593	土師器	小形埴	[7.6]	9.7	4.4	長石・石英	橙	普通	口縁部外面ハケ目調整後ナデ 内面ハケ目調整 体部内・外面ナデ 体部下縁部別注によるナデ	覆土下層	80% P1.30
594	土師器	小形埴	[8.5]	9.6	4.2	長石・石英	灰黄褐	普通	口縁部内・外面ナデ 体部内・外面ナデ 底部輪高台状	床面	70% 残付着
595	土師器	甕	18.2	25.0	6.1	長石	にぶい黄褐	普通	口縁部内・外面ハケ目調整後ナデ 体部外形ヘラナデ 高面ナデ	覆土下層	90% P1.33
596	土師器	甕	[14.8]	16.3	4.8	長石・石英	にぶい黄褐	普通	口縁部内・外面ナデ 体部内・外面ナデ 輪積み痕	覆土下層	50% 残付着

番号	器種	径	厚さ	口径	重量	材質(胎土)	特	徴	出土位置	備考
DP46	球状土錘	3.0	2.9	0.6	25.5	長石・石英・礫	ナデ	一方向からの穿孔	覆土上層	
DP47	球状土錘	2.7	2.8	0.6	18.1	長石・石英・礫	ナデ	一方向からの穿孔	覆土上層	

第41号住居跡（第90～93図）

位置 調査区北部のG3d1区、標高23.2mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第17号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸6.32m、短軸6.24mの方形で、主軸方向はN-18°-Eである。壁高は30～40cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中心部が広い範囲で踏み固められている。ほぼ全域で、炭化材と焼土が確認されている。

炉 北部の中央に位置している。長径96cm、短径70cmの楕円形で、床面をわずかに掘りくぼめて炉床とした地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化し、中央には炉器台3点が出土している。覆土は確認されなかった。

ピット 6か所。P1～P4は深さ10～56cmで、規模において規則性を欠いているが、配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ22cmで、南壁際中央に位置することから出入り口施設に伴うピットである。P6は深さ16cmで、性格は不明である。

貯蔵穴 南西コーナー部に付設されている。長径110cm、短径70cmの楕円形で、深さは64cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。覆土は人為堆積の状況を示している。

貯蔵穴土層解説

1	黒 褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	3	暗 褐色	ローム粒子・炭化粒子微量
2	黒 褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	4	黒 色	ローム粒子微量

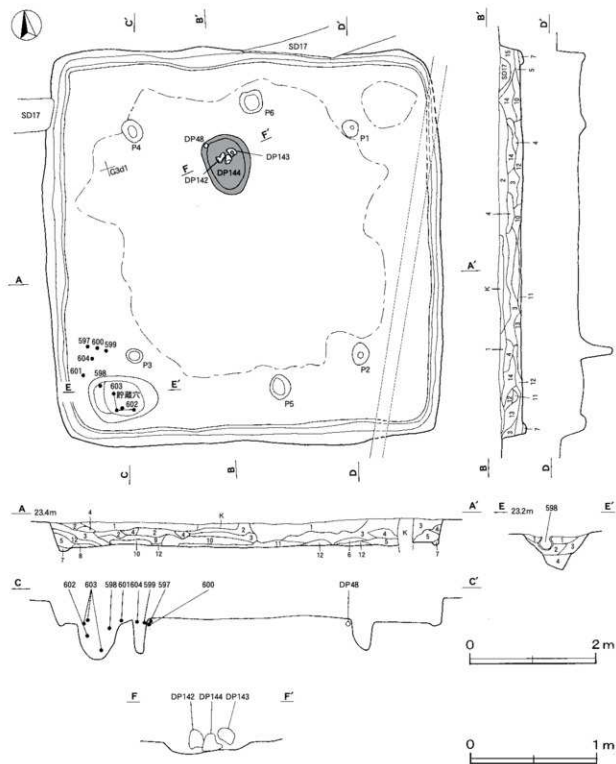
覆土 15層に分層できる。ローム土や焼土、炭化物を含み、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

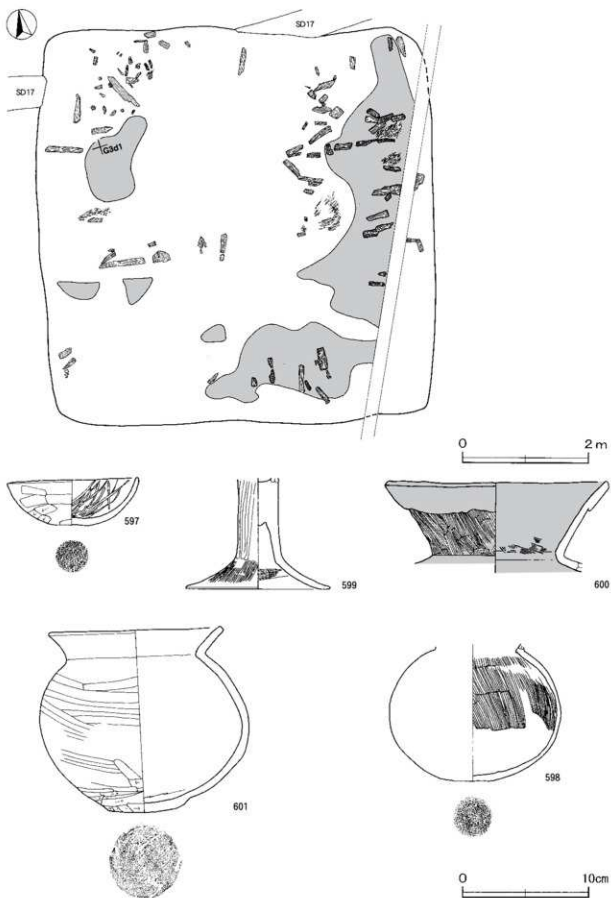
1	黒 褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	9	暗 褐色	炭化粒子少量、焼土ブロック微量
2	暗 褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	10	黒 色	炭化材多量、焼土ブロック少量
3	灰 褐色	焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量	11	暗 赤褐色	焼土ブロック多量、炭化材微量
4	にぶい褐色	ロームブロック少量	12	にぶい暗褐色	焼土ブロック多量、炭化粒子微量
5	黒 褐色	ロームブロック微量	13	黒 色	炭化粒子中量
6	黒 褐色	炭化物少量、焼土ブロック微量	14	黒 褐色	炭化材少量、ローム粒子微量
7	暗 灰色	ロームブロック少量	15	黒 褐色	炭化粒子中量、ローム粒子微量
8	暗 褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量			

遺物出土状況 土師器片757点（坏1、埴23、高坏20、壺2、甕706、ミニチュア土器5）、土製品6点（炉器台5、球状土錘1）が貯蔵穴内およびその周辺の床面に集中して出土している。598・602・603は貯蔵穴内の覆土上層から中層にかけて出土しており、603は貯蔵穴内の覆土下層から出土した破片と接合したものである。597・599～601・604は貯蔵穴の北側の床面、DP48・142～144は炉内からそれぞれ出土している。この他、火を受けて脆くなっている炉器台2個体が北部の床面から出土している。これらは廃絶時に遺棄されたものと考えられる。また、炭化材や焼土は覆土下層にかけて出土しており、炭化材は角材や板材などが多く見られ、壁に直交するように出土していることから、崩落した上層等の建築材と考えられる。

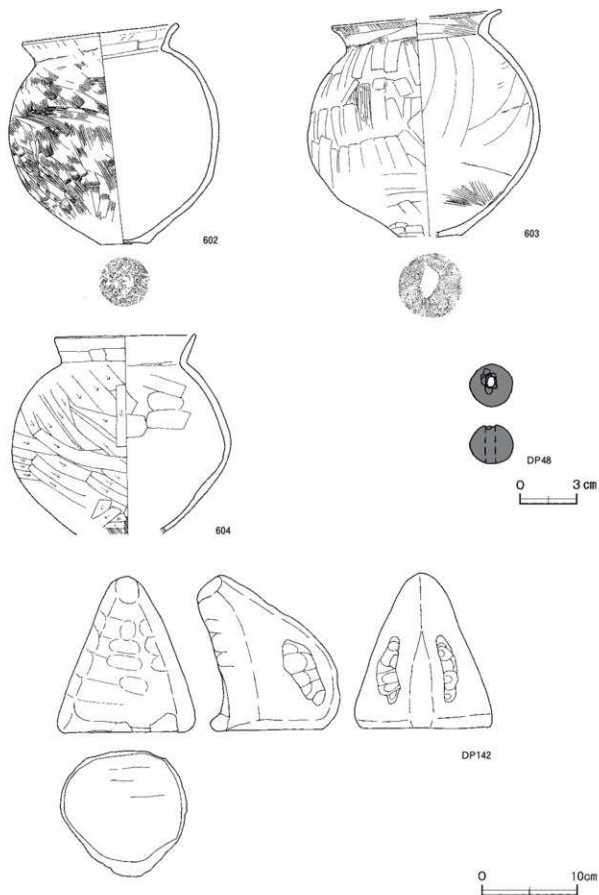
所見 本跡は遺物や炭化材の出土状況等から、火災による焼失住居である。時期は、遺棄された出土土器から、4世紀後葉と考えられる。



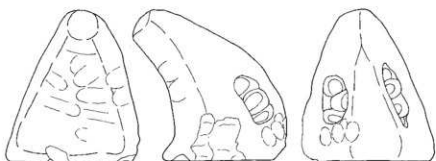
第90図 第41号住居跡実測図



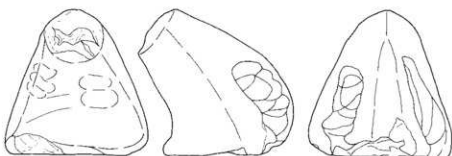
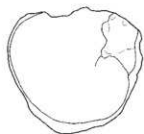
第91图 第41号住居跡・出土遺物実測図



第92图 第41号住居跡出土遺物実測図(1)



DP143



DP144



第93図 第41号住居跡出土遺物実測図(2)

第41号住居跡出土遺物観察表(第91~93図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
597	土師器	坏	10.3	3.9	2.4	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	体部外面ヘラ削り後ナゲ 内面ヘラ磨き	床面	100% PL.21
598	土師器	埴	—	(10.9)	3.0	長石・石英	にぶい黄橙	普通	内面ハケ目調整 外面器面荒れ	貯蔵穴内	85% PL.26
599	土師器	高坏	—	(8.8)	11.5	長石・石英	橙	普通	脚部外面ヘラナゲ 根部外面ハケ目調整 内面ハケ目調整後ナゲ	床面	20% PL.28
600	土師器	壺	17.4	(7.2)	—	白色粒子	橙	普通	頸部外面ハケ目調整 内面ハケ目調整後ナゲ	床面	10% PL.28
601	土師器	甕	13.6	14.7	5.7	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部内・外面ナゲ 体部外面ヘラ削り後ヘラナゲ 内面ナゲ	床面	100% PL.30
602	土師器	甕	16.3	23.2	5.1	長石・石英	にぶい黄橙	普通	口縁部外面ハケ目調整後ナゲ 内面ハケ目調整 体部外面ハケ目調整後ナゲ 内面器面荒れ	貯蔵穴内	95% 煤付着 PL.32
603	土師器	甕	[17.8]	24.0	[6.7]	長石・石英	にぶい黄橙	普通	口縁部内・外面ハケ目調整後ヘラナゲ 体部外面ハケ目調整後ヘラナゲ 内面ハケ目調整後ヘラナゲ	貯蔵穴内	90% PL.33
604	土師器	甕	14.8	(21.0)	—	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部内・外面ヘラナゲ 体部外面ハケ目調整後ヘラ削り 内面ヘラナゲ	床面	80% 煤付着

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質(胎土)	特 徴	出土位置	備考
DP48	球状土埴	2.3	2.1	0.6	18.3	長石・石英・纈	ナデ 一方向からの穿孔	伊内	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質(胎土)	特 徴	出土位置	備考
DP12	伊器台	16.5	14.5	13.2	2,040	長石・石英・雲母	指頭痕 火熱痕	伊内	PL38
DP13	伊器台	16.0	14.4	13.5	(2,170)	長石・雲母	指頭痕 火熱痕 一部欠け	伊内	PL38
DP14	伊器台	15.5	15.3	13.9	2,320	長石・雲母	指頭痕 火熱痕	伊内	PL38

第42号住居跡 (第94・95図)

位置 調査区北部のG 2 8区、標高23.2mの台地平坦部に位置している。

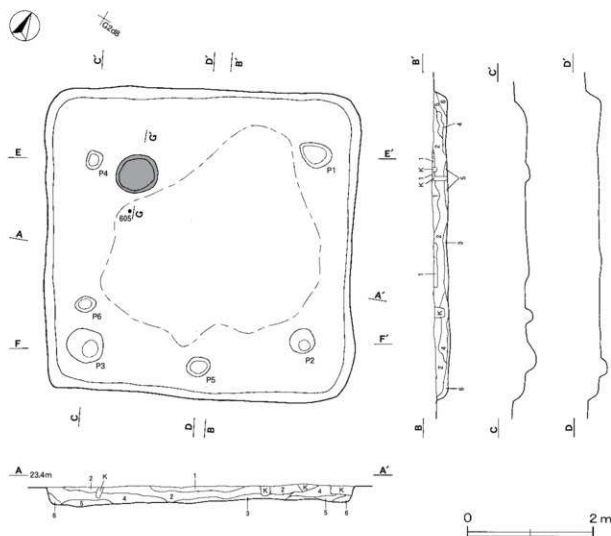
規模と形状 長軸5.05m、短軸4.90mの方形で、主軸方向はN-28°-Wである。壁高は20~25cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

炉 北西部に位置している。径64cmの円形で、床面をわずかに掘りくぼめて炉床とした地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

伊土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量



第94図 第42号住居跡実測図

ピット 6か所。P 1～P 4は深さ5～20cmで、主柱穴と考えられるが、規模が小さく明確ではない。P 5は深さ12cmで、南壁際の中央に位置することから出入り口施設に伴うピットと考えられる。P 6は深さ12cmで、性格は不明である。

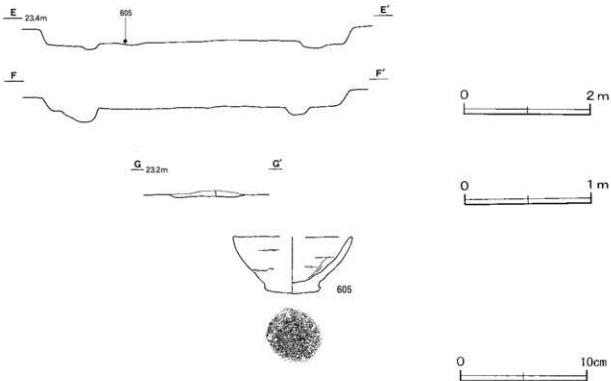
覆土 6層に分層できる。レンズ状の堆積状況を示すことから自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------|-------|-----------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック微量 | 5 褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 黒色 | ロームブロック微量 | 6 褐色 | ロームブロック少量 |

遺物出土状況 土師器片449点（埴16、高坏1、甕429、瓶1、ミニチュア土器1、手握土器1）が出土している。また、混入した陶器片1点（碗）も出土している。遺物は細片が多く、覆土下層から床面にかけて出土しており、廃絶後まもなく廃棄されたものと考えられる。605は西部の床面から出土している。

所見 南西約5mに位置し、4世紀中葉に比定される第4号住居跡とほぼ主軸方向と同じにすることから、同時期に存在した可能性が高い。



第95図 第42号住居跡・出土遺物実測図

第42号住居跡出土遺物観察表（第95図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
605	土師器	千穂土器	[9.4]	4.5	4.3	長石・石英・赤色 粒子	にじみ青	普通	外面ナデ 内面ヘラナデ	輪積み瓶	床面 50%

第43号住居跡（第96～99図）

位置 調査区北部のG 2 b5区、標高23.2mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第17・18号溝、第94・101号墓坑、第98号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸6.02m、短軸5.67mの長方形で、主軸方向はN-47°-Wである。壁高は25～50cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が広い範囲で踏み固められている。また、全域で炭化材と焼土範囲が検出されている。

炉 北部の西寄りに位置している。長径74cm、短径64cmの楕円形で、床面をわずかに掘りくぼめて炉床とした地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。北側には炉器台3個体が出土している。

伊土層解説

1 暗 赤 褐色 炭化粒子少量、焼土ブロック微量

ピット 11か所。P1～P4は深さ54～80cmで、規模と配置から主柱穴である。P9は深さ81cm、P6は深さ10cmとやや浅いが、北・南部のそれぞれ中央に位置することから、棟持ち柱の可能性がある。P7～P11は深さ50～62cmで、性格は不明である。

貯蔵穴 南西コーナー部に付設されている。長径90cm、短径70cmの楕円形で、深さは60cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。覆土は人為堆積の状況を示している。

貯蔵穴土層解説

1 黒 色 炭化粒子少量、ローム粒子・焼土ブロック微量 3 暗 褐色 ローム粒子・炭化粒子少量
2 暗 褐色 ローム粒子微量 4 褐色 ロームブロック少量

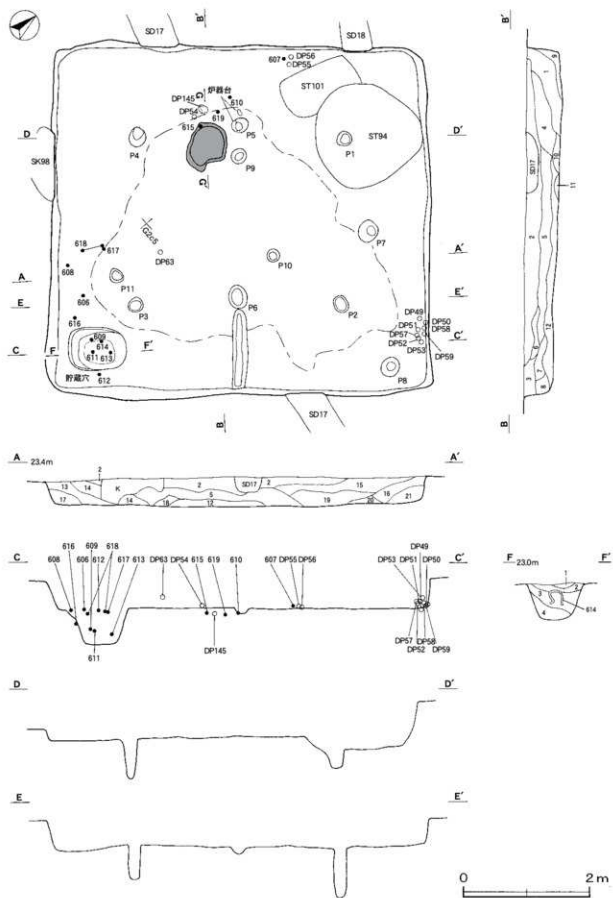
覆土 21層に分層できる。ローム土や炭化物を含み、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

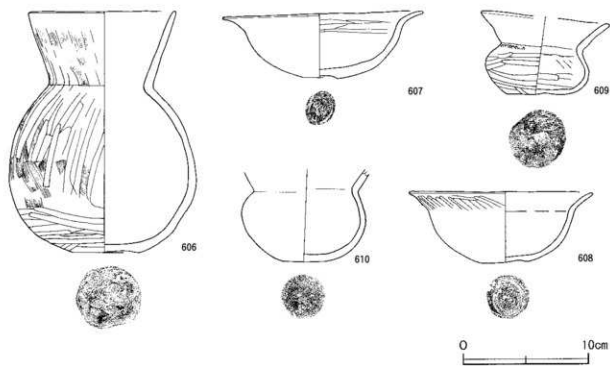
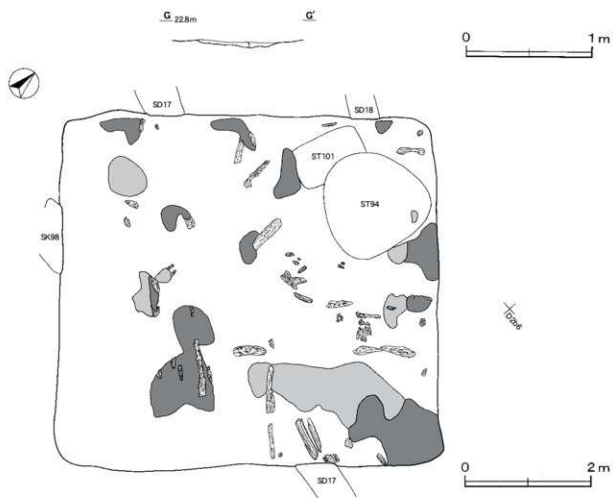
1 暗 褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	12 極 暗 褐色 ローム粒子中量、焼土ブロック少量、炭化物微量
2 黒 色 焼土ブロック・ローム粒子微量	13 褐色 ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子微量
3 褐色 ローム粒子中量、炭化物微量	14 褐色 ローム粒子多量、炭化粒子微量
4 暗 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量	15 暗 褐色 ローム粒子中量
5 暗 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子微量	16 黒 褐色 炭化物・ローム粒子中量
6 黒 褐色 ローム粒子少量	17 黒 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子微量
7 褐色 ローム粒子中量、炭化物・焼土粒子微量	18 暗 褐色 ローム粒子・焼土粒子中量、炭化粒子少量
8 黒 褐色 ローム粒子中量、炭化物・焼土粒子微量	19 褐色 ローム粒子多量
9 暗 褐色 ローム粒子多量、炭化物微量	20 褐色 焼土ブロック・炭化物・ローム粒子中量
10 黒 褐色 ローム粒子少量、炭化物微量	21 極 暗 褐色 ローム粒子中量
11 黒 色 焼土粒子少量、ローム粒子微量	

遺物出土状況 土師器片840点（埴8、高坏11、鉢2、壺6、甕811、小形甕1、ミニチュア土器1）、土製品18点（炉器台3、球状土鍾14、鏡形土製品カ1）が出土している。遺物は貯蔵穴内と南西壁際、北部の覆土下層から床面にかけて多く出土している。609・611・613・614は貯蔵穴の覆土中層から出土しており、廃絶時に遺棄されたものと考えられる。また、炭化材や焼土も覆土下層から床面にかけて検出されており、貯蔵穴周辺や北部から出土している遺物は、廃絶に伴い廃棄されたものと推測される。さらに、球状土鍾が南東壁際で8個体、北壁際と炉北側でそれぞれ2個体がまとまって出土している。この他、火を受けて脆くなっている炉器台3個体も、炉北側の床面から出土している。

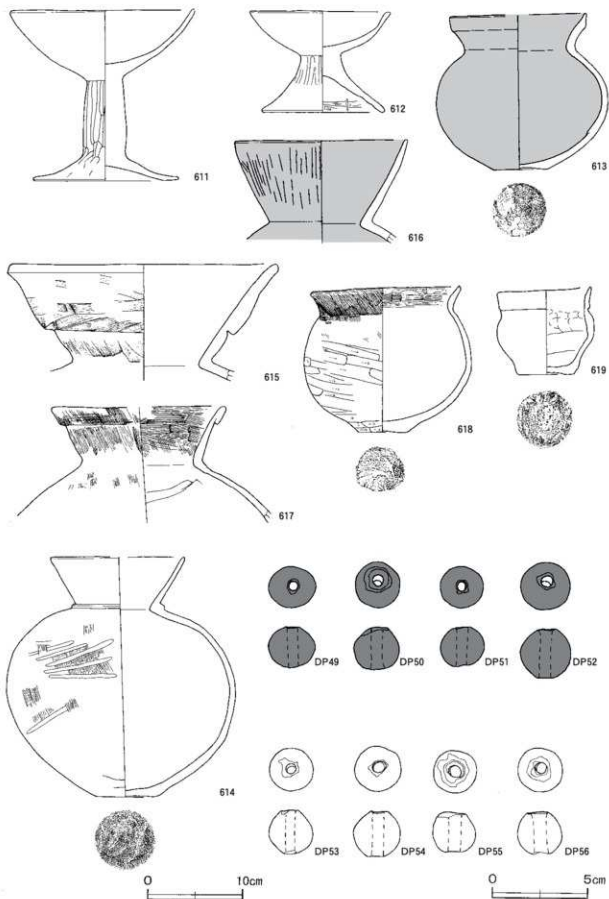
所見 遺物や炭化材・焼土の出土状況等から、廃絶に伴う焼失住居と考えられる。時期は、貯蔵穴から出土した土器などから、4世紀後葉と考えられる。



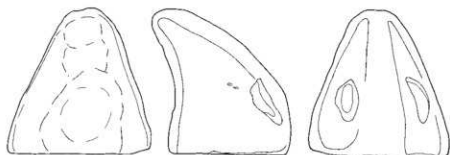
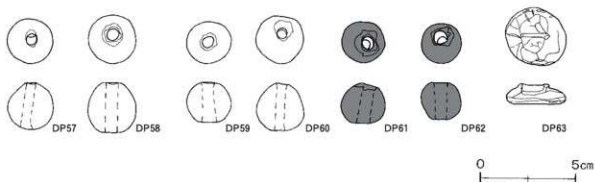
第96图 第43号住居跡実測图



第97图 第43号住居跡・出土遺物実測図



第98图 第43号住居跡出土遺物実測図(1)



DP145



第99図 第43号住居跡出土遺物実測図(2)

第43号住居跡出土遺物観察表 (第97~99図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
606	土師器	埴	11.5	19.2	5.1	白色粒子	にじい黄緑	普通	口縁部外面ハケ目調整 内面ナデ 体部外面ハケ目調整後ヘラナデ 内面ナデ	床面	100% 煤付着目.25
607	土師器	鉢	15.9	5.3	2.6	長石・石英	にじい黄緑	普通	口縁部内・外面ナデ 体部外面ナデ 内面顔面荒れ	覆土下層	90% 煤付着目.26
608	土師器	鉢	14.4	5.6	3.3	白色粒子	にじい黄緑	普通	口縁部外面ヘラナデ 内面顔面荒れ	床面	90% P.26
609	土師器	埴	[10.2]	6.4	4.7	長石・石英・雲母・赤色粒子	にじい黄緑	普通	口縁部内・外面横ナデ 体部内・外面ヘラナデ	貯蔵穴内	70% 煤付着目.24
610	土師器	埴	—	(7.3)	3.4	長石・石英・雲母	にじい黄緑	普通	口縁部内・外面横ナデ 体部内・外面ナデ	床面	50% 煤付着目.26
611	土師器	高坏	14.5	13.6	11.6	長石・石英・赤色粒子	緑	普通	坏部内・外面ナデ 脚部外面ヘラナデ 腹部外面ナデ 内面ハケ目調整	貯蔵穴内	95% 煤付着目.27
612	土師器	高坏	11.1	8.0	9.4	長石・石英	明赤褐	普通	坏部内・外面ナデ 脚部外面ヘラナデ 腹部外面ナデ 内面ハケ目調整後ナデ	床面	95%
613	土師器	甕	[16.7]	12.3	4.2	白色粒子	にじい黄緑	普通	口縁部内・外面ナデ 体部内・外面ナデ	貯蔵穴内	90% P.29
614	土師器	甕	[14.2]	25.4	6.2	長石・石英	明赤褐	普通	口縁部内・外面ナデ 体部外面ハケ目調整後ナデ 内面顔面荒れ	貯蔵穴内	90% P.29
615	土師器	甕	21.0	(8.5)	—	長石・石英	にじい黄緑	普通	口縁部外面ヘラナデ 内面ナデ 頸部外面ハケ目調整後ナデ 内面ナデ	床面	30% P.28
616	土師器	甕	13.6	(8.2)	—	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部外面ヘラナデ 内面ナデ	床面	30%
617	土師器	甕	[13.6]	(9.2)	—	長石・石英・赤色粒子	にじい橙	普通	口縁部内・外面ハケ目調整 体部外面ハケ目調整後ナデ 内面ナデ 折り返し口縁	床面	20%
618	土師器	小形甕	11.7	11.6	3.9	白色粒子	にじい橙	普通	口縁部内・外面ハケ目調整 体部外面ヘラナデ 内面ナデ	床面	95% 煤付着目.30
619	土師器	コテツト土器	7.2	6.9	4.5	長石・石英	黒褐	普通	内・外面ナデ 内面指頭痕	床面	90% 煤付着目.35

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質(胎土)	特 徴	出土位置	備考
DP49	球状土埴	2.5	2.2	0.6	10.7	長石	丁寧なナデ 一方方向からの穿孔	床面	PL39
DP50	球状土埴	2.4	2.3	0.6	12.4	長石・石英・礫	ナデ 一方方向からの穿孔	覆土下層	PL39
DP51	球状土埴	2.4	2.1	0.6	10.4	長石・石英	丁寧なナデ 一方方向からの穿孔	覆土下層	PL39
DP52	球状土埴	2.7	2.6	0.6	16.0	長石・礫	丁寧なナデ 一方方向からの穿孔	覆土下層	煤付着 PL39
DP53	球状土埴	2.4	2.4	0.5	11.2	長石・石英	丁寧なナデ 一方方向からの穿孔	覆土下層	PL39
DP54	球状土埴	2.5	2.4	0.6	13.8	長石・石英	ナデ 一方方向からの穿孔	覆土下層	PL39
DP55	球状土埴	2.3	2.1	0.7	10.2	長石・石英	ナデ 一方方向からの穿孔	覆土下層	
DP56	球状土埴	2.4	2.3	0.8	11.4	長石・石英・礫	ナデ 一方方向からの穿孔	覆土下層	
DP57	球状土埴	2.4	2.5	0.5	12.9	長石・石英	ナデ 一方方向からの穿孔	覆土下層	煤付着
DP58	球状土埴	2.6	2.7	0.6	(16.1)	長石・石英	丁寧なナデ 一方方向からの穿孔 一部欠け	覆土下層	煤付着
DP59	球状土埴	2.4	2.1	0.8	9.9	長石・石英・礫	ナデ 一方方向からの穿孔	覆土下層	
DP60	球状土埴	2.6	2.6	0.5	(14.5)	長石・石英・礫	ナデ 一方方向からの穿孔 一部欠け	覆土中	煤付着
DP61	球状土埴	2.4	2.2	0.7	10.2	長石・石英	ナデ 一方方向からの穿孔	覆土中	
DP62	球状土埴	2.1	2.0	0.7	8.5	長石・石英・礫	ナデ 一方方向からの穿孔	覆土中	
DP63	縄文土製品カ	3.2	1.1	-	(9.3)	長石・石英・礫	指頭痕	覆土中層	煤付着 PL37

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質(胎土)	特 徴	出土位置	備考
DP45	炉器台	15.3	14.9	13.1	2.130	長石・石英・雲母	指頭痕 火熱痕	床面	

第44号住居跡 (第100・101図)

位置 調査区北部のG 3b2区、標高23.4mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸5.73m、短軸4.99mの長方形で、主軸方向はN-73°-Wである。壁高は15~21cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。

炉 2か所。いずれも中央部のやや北西寄りに位置している。炉1は径70cmの円形、炉2は径66cmの円形で、どちらも床面をわずかに掘りくぼめて炉床とした地床炉である。

炉1土層解説

- | | | | |
|----------|-----------------|--------|----------------|
| 1 に灰・赤褐色 | 焼土ブロック少量、炭化粒子微量 | 3 褐 灰色 | ロームブロック・焼土粒子微量 |
| 2 暗 赤 褐色 | 焼土ブロック少量、炭化粒子微量 | | |

炉2土層解説

- | | | | |
|----------|---------------|----------|--------------|
| 1 暗 赤 褐色 | 焼土ブロック・炭化粒子微量 | 3 極 暗 褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗 赤 褐色 | 焼土粒子少量、炭化粒子微量 | 4 暗 褐色 | ロームブロック微量 |

ピット 5か所。P1~P4は深さ16~48cmで、規模にやや規則性を欠いているが、配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ12cmで、南壁跡の中央に位置することから、出入り口施設に伴うピットである。

貯蔵穴 2か所。貯蔵穴1は北東コーナー部、貯蔵穴2は南西コーナー部に付設されている。貯蔵穴1は長径60cm、短径50cmの楕円形で、深さは48cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。貯蔵穴2は長径70cm、短径60cmの楕円形と推定され、深さは44cmである。底面は皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。いずれも人為堆積の状況を示している。

貯蔵穴1土層解説

- | | | | |
|----------|----------------|---------|--------------|
| 1 黒 褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 3 にぶい褐色 | ローム粒子中量 |
| 2 極 暗 褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量 | 4 黒 褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |

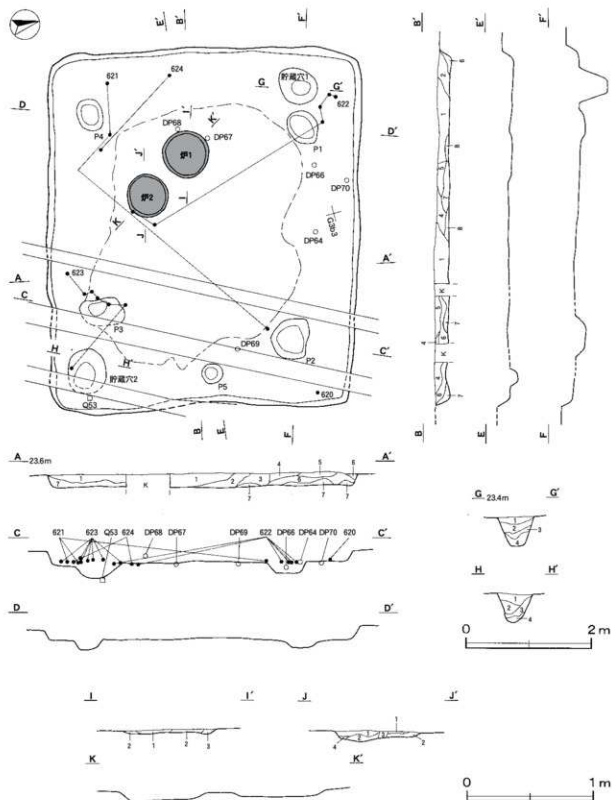
貯蔵穴2土層解説

- | | | | |
|--------|------------------|--------|------------------|
| 1 黒 褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 3 褐 色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 2 暗 褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 4 黒 褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |

覆土 8層に分層できる。ローム土や炭化物を含み、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

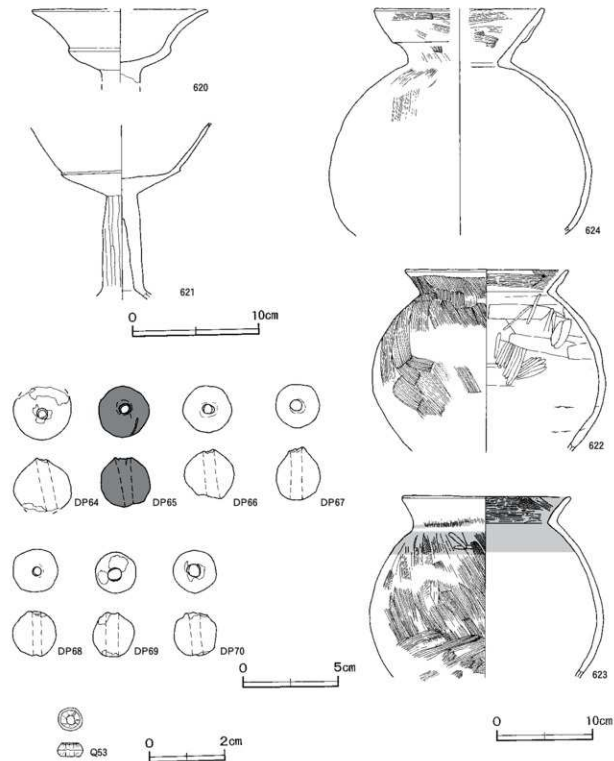
- | | | | |
|--------|------------------|--------|-------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 5 黒褐色 | 炭化粒子少量、ローム粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 6 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 極暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 7 褐色 | ローム粒子中量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 8 暗赤褐色 | 焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子微量 |



第100図 第44号住居跡実測図

遺物出土状況 土師器片1,111点（埴20，高坏7，甕1,084），土製品7点（球状土鍾），石製品1点（白玉）が出土している。620～624は床面から出土しており，623は南東部，621は南西部から北東部，622は中央部から北西部にかけて出土した破片がそれぞれ接合したものである。いずれも細片で，廃絶後まもなく廃棄されたと考えられる。球状土鍾7個体が，炉周辺から北・東部の覆土下層から床面にかけて出土している。

所見 出土した土器は4世紀後葉の様相を呈しており，時期は住居の廃絶とそれほど差がないものと考えられる。



第101図 第44号住居跡出土遺物実測図

第44号住居跡出土遺物観察表（第101図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
620	土師器	高坏	[13.8]	(5.8)	—	長石・石英・赤色 粒子	にぶい黄橙	普通	坏部内・外面ナデ	床面	30%
621	土師器	高坏	—	(13.9)	—	長石・石英・赤色 粒子	橙	普通	坏部内・外面ナデ 脚部内・外面ヘナ ナデ	床面	40%
622	土師器	甕	17.6	(19.3)	—	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部内・外面ハケ目調整後ナデ 体部外 面ハケ目調整 内面ヘラナデ 輪縁み頃	床面	65% 煤付着
623	土師器	甕	17.4	(19.1)	—	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部外面ハケ目調整後ナデ 内面ハケ目調整 体部外面ハケ目調整後ナデ 内面ヘラナデ	床面	50%
624	土師器	壺	[17.8]	(24.0)	—	長石・赤色粒子	橙	普通	口縁部内・外面ハケ目調整後ナデ 体部外 面ハケ目調整後ナデ 内面ナデ 新り直し口縁	床面	20%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質(胎土)	特 徴	出土位置	備考
DP64	球状土埴	3.1	(2.7)	0.6	(11.1)	長石・石英・礫	ナデ 一方向からの穿孔 一部欠け	床面	
DP65	球状土埴	2.7	2.6	0.7	18.0	長石・石英・礫	ナデ 一方向からの穿孔	覆土中	
DP66	球状土埴	2.6	2.6	0.6	14.4	長石・石英・礫	ナデ 一方向からの穿孔	床面	
DP67	球状土埴	2.3	2.6	0.7	13.1	長石・石英・礫	ナデ 一方向からの穿孔	床面	
DP68	球状土埴	2.3	2.4	0.5	12.5	長石・石英・礫	丁寧なナデ 一方向からの穿孔	覆土下層	
DP69	球状土埴	2.2	2.3	0.7	10.5	長石・石英	丁寧なナデ 一方向からの穿孔	床面	
DP70	球状土埴	2.2	2.3	0.7	10.3	長石・雲母	ナデ 一方向からの穿孔	床面	

番号	器種	径	孔径	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備考
Q53	白玉	0.62	0.2	0.33	0.2	滑石	両面平滑 全面研磨調整 中央部穿孔	床面	PL40

第45号住居跡（第102・103図）

位置 調査区北部のE 3 j3区、標高23.5mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第45号墓坑、第42号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.72m、短軸5.64mの方形で、主軸方向はN-38°-Wである。壁高は32~43cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。

炉 中央部に位置している。長径84cm、短径70cmの槽円形で、床面をわずかに掘りくぼめて炉床とした地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 黒褐色 色 焼土ブロック少量、ローム粒子微量 3 褐色 色 ローム粒子多量、焼土ブロック中量
2 暗褐色 色 焼土ブロック・ローム粒子中量

ピット 6か所。P 1~P 3は深さ17~24cmで、規模はやや小さいが、配置から支柱穴と考えられる。P 4は深さ10cmで、南壁際のほぼ中央部に位置することから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P 5は深さ20cm、P 6は深さ10cmで、貯蔵穴の可能性もあるが、規模が小さく明確ではない。

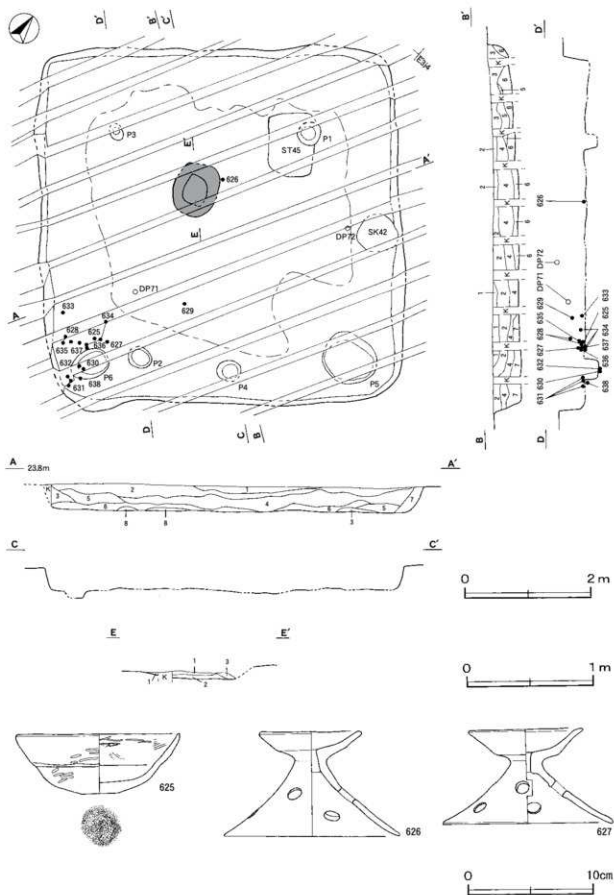
覆土 8層に分層できる。ローム土や炭化粒子を含み、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

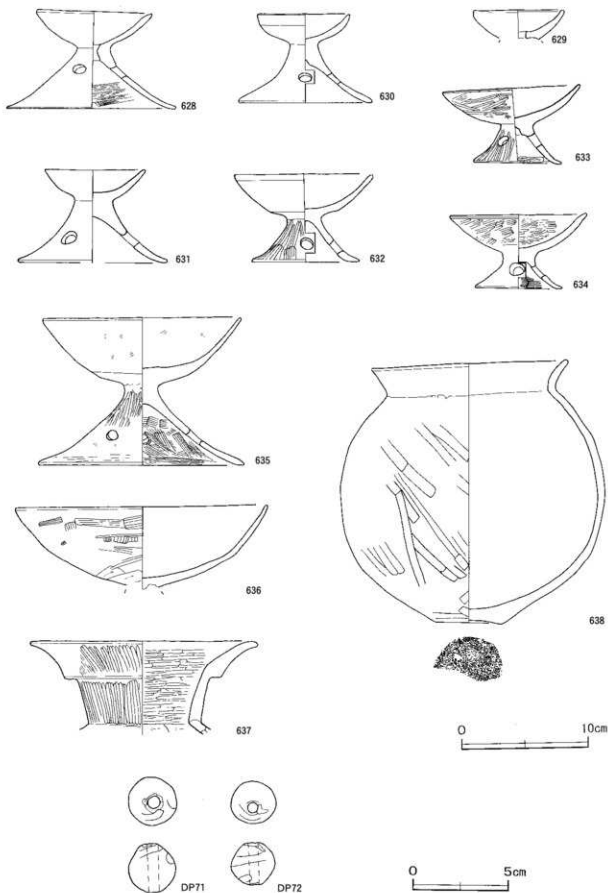
- 1 黒褐色 色 ローム粒子微量 5 暗褐色 色 炭化物・ローム粒子少量
2 黒褐色 色 ローム粒子・炭化粒子少量 6 灰褐色 色 ローム粒子中量、焼土ブロック・炭化物少量
3 暗褐色 色 ローム粒子微量 7 暗褐色 色 ローム粒子中量、炭化物少量
4 黒褐色 色 炭化物・ローム粒子少量 8 褐色 色 ローム粒子中量

遺物出土状況 土師器片389点（増1、器台7、高坏25、壺2、甕354）、土製品2点（球状土埴）が出土している。また、混入した須恵器片1点（坏）、陶器片9点（碗1、鉢5、皿2、德利1）も出土している。遺物は南西壁際のP 6内とその周辺の床面に集中して出土している。630・632はP 6の底面、その他の土器は、南西壁際の床面から出土している。特に、南西壁際から出土している遺物は、横位で出土しているものが多く、遺棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から4世紀前半と考えられる。



第102図 第45号住居跡・出土遺物実測図



第103图 第45号住居跡出土遺物実測図

第45号住居跡出土遺物観察表 (第102・103図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考
625	土師器	埴	13.2	4.9	2.9	雲母・砂粒	橙	普通	口縁部・体部外面へラ磨き後ナデ 口縁部・体部内面磨き入れ	床面	100% PL24
626	土師器	器台	7.9	8.4	13.8	長石・雲母・砂粒	浅黄橙	普通	文部内・外面ナデ 器部外面へラ磨き後ナデ 内面ハケ目調整 6窓	床面	100%
627	土師器	器台	8.9	7.1	13.4	長石・雲母	明黄橙	普通	文部内・外面ナデ 器部外面へラ磨き内面ハケ目調整 6窓	床面	95%
628	土師器	器台	9.4	7.9	13.2	長石・石英	にぶい赤橙	普通	文部内・外面ナデ 器部外面へラ磨き内面ハケ目調整 既付4窓	覆土下層	90%
629	土師器	器台	7.3	(2.3)	—	長石・石英	にぶい橙	普通	文部外面ナデ 内面へラ磨き後ナデ	覆土中層	30%
630	土師器	器台	7.2	7.1	10.5	石英	橙	普通	環部・器部内・外面ナデ 3窓	P 6内	80% 保存者
631	土師器	器台	7.8	7.4	[11.4]	長石・石英・赤色粒子	明赤橙	普通	環部・器部内・外面ナデ 3窓カ	床面	70% 保存者
632	土師器	高坏	10.9	7.0	8.4	雲母・砂粒	にぶい橙	普通	器部外面へラ磨き後ナデ 内面ナデ 器部外面ハケ目調整後ナデ 3窓	P 6内	100%
633	土師器	高坏	10.8	6.2	7.0	長石・石英・雲母	にぶい赤橙	普通	器部外面へラ磨き 内面ハケ目調整後ナデ 3窓	覆土下層	100% 保存者
634	土師器	高坏	10.9	6.1	6.9	石英・雲母	橙	普通	環部内・外面へラ磨き 器部外面ナデ内面ハケ目調整 3窓	床面	85%
635	土師器	高坏	15.7	11.6	16.4	長石・雲母	にぶい橙	普通	環部内・外面ナデ 器部外面へラ磨き内面ハケ目調整 3窓	覆土下層	80% PL27
636	土師器	高坏	20.2	(6.7)	—	長石・石英・雲母	にぶい赤橙	普通	器部外面へラ磨き後ナデ 内面ナデ	床面	50% PL28
637	土師器	壺	18.0	(7.4)	—	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部外面へラ磨き後ナデ 内面ナデ	覆土下層	29% PL28
638	土師器	甕	15.3	21.0	5.2	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部内・外面ナデ 体部外面ハケ目調整後ヘラナデ 内面ナデ	床面	80% PL33

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質(胎土)	特 徴	出土位置	備考
D71	球状土埴	2.5	2.5	0.6	14.6	長石・赤色粒子	丁寧なナデ 一方からの穿孔	覆土中層	
D72	球状土埴	2.3	2.2	0.5	10.6	長石・石英・礫	ナデ 一方からの穿孔	覆土上層	

第46号住居跡 (第104図)

位置 調査区北部のG 2b9区、標高23.4mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸4.12m、短軸3.96mの方形で、主軸方向はN-46°-Wである。壁高は42~50cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

炉 中央部のやや北西寄りに位置している。長径94cm、短径64cmの楕円形で、床面をわずかに掘りくぼめて炉床とした地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

土層解説

- 1 にぶい赤褐色 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量 2 暗赤褐色 焼土ブロック少量、炭化粒子微量

ピット 2か所。P 1は深さ22cmで、配置から4本柱の南西部の柱穴と考えられる。P 2は深さ8cmで、性格は不明である。

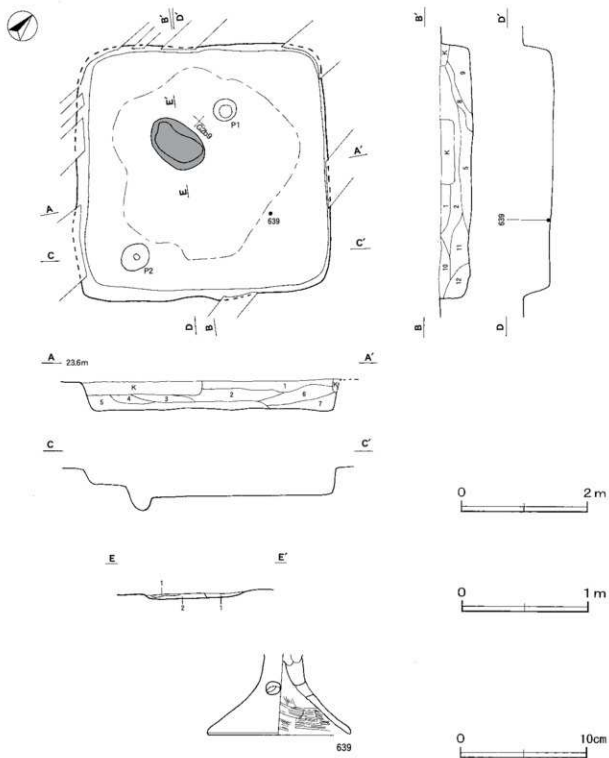
覆土 12層に分層できる。各層にローム土がやや多く含まれるが、レンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量 7 暗褐色 ロームブロック少量
2 褐色 ロームブロック少量 8 黒褐色 ロームブロック微量
3 褐色 ロームブロック中量 9 褐色 ローム粒子多量、炭化粒子微量
4 暗褐色 ローム粒子中量 10 褐色 ローム粒子多量、焼土粒子微量
5 暗褐色 ロームブロック中量 11 褐色 ローム粒子多量
6 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量 12 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片137点(高坏20, 甕117)が出土している。遺物のほとんどが細片で、図示できたものは少ない。639は南東部の床面から出土している。

所見 時期は、出土土器が少ないため詳細な時期判定は困難であるが、北約5mに位置し、4世紀後葉に比定される第52・53号住居跡とほぼ主軸方向を同じにすることから、同時期に存在した可能性が高い



第104図 第46号住居跡・出土遺物実測図

第46号住居跡出土遺物観察表 (第104図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考	
639	土師器	高坏	—	(6.4)	11.3	長石・石英	明黄褐色	普通	脚部外面ナデ 内面ハケ目調整	3窓	床面	50%

第47号住居跡 (第105図)

位置 調査区北部のF 2 j4区、標高23.6mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第48・49号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 北西部が調査区域外に伸びているため、東西軸は2.80m、南北軸は2.70mだけが確認されている。長軸方向はN-40°-Wの長方形と推測される。壁高は6~18cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、壁際を除く、広い範囲が踏み固められている。

ピット 3か所。P1は深さ24cm、P2は深さ34cmで、配置から支柱穴と考えられる。P3は深さ38cmで、南壁際の中央に位置することから、出入り口施設に伴うピットである。

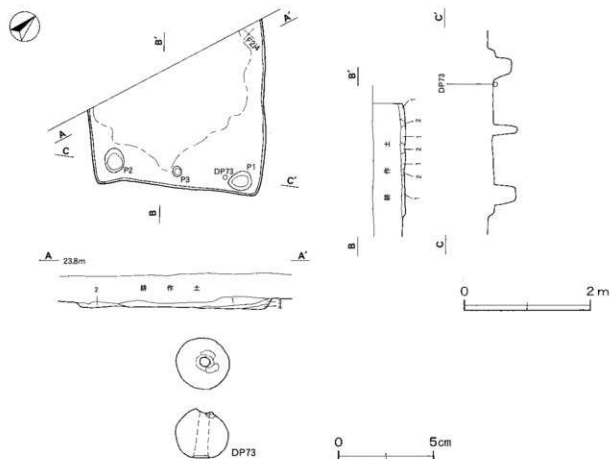
覆土 4層に分層できる。層厚が薄いため堆積状況は不明である。

土層解説

- | | |
|---------------------|-----------------------|
| 1 黒色 炭化粒子少量、ローム粒子微量 | 3 暗褐色 ロームブロック少量 |
| 2 灰褐色 粘土ブロック多量 | 4 黒褐色 ロームブロック少量、炭化物微量 |

遺物出土状況 土師器片49点(高坏2, 甕47)、土製品1点(球状土錘)が出土している。遺物のほとんどが細片で、図示できたものは少ない。DP73は南東部の床面から出土している。

所見 時期は、出土土器が少ないため詳細な時期判定は困難であるが、南東約5mに位置し、4世紀後葉に比定される第38・43号住居跡とほぼ主軸方向を同じにすることから、同時期に存在した可能性が高い。



第105図 第47号住居跡・出土遺物実測図

第47号住居跡出土遺物観察表（第105図）

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質(胎土)	特徴	出土位置	備考
DP73	球状土埴	2.8	2.6	0.5	17.5	長石・赤色粒子	ナデ 一方向からの穿孔	床面	

第48号住居跡（第106・107図）

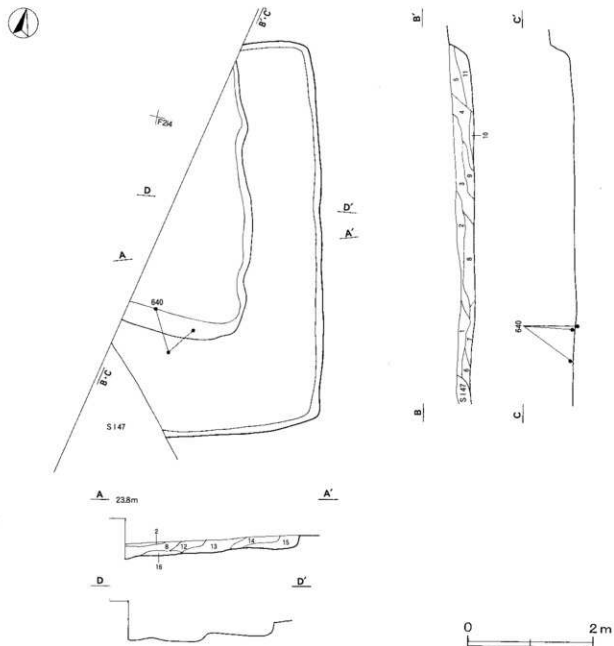
位置 調査区北部のF 2 i 4区、標高23.6mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第47号住居に掘り込まれている。

規模と形状 北西部が調査区域外に延びているため、南北軸6.18m、東西軸は4.20mだけが確認されている。

長軸方向はN-9°-Wの方形と推測される。壁高は22cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、壁際から1.5mほどの範囲で、地山を掘り残した高さ10cmの段差が見られる。



第106図 第48号住居跡実測図

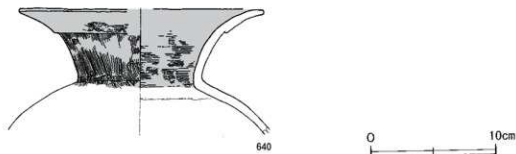
覆土 16層に分層できる。ローム土や焼土を含み、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

1	にぶい褐色	ローム粒子多量	9	暗褐色	ロームブロック少量
2	暗褐色	ローム粒子中量、炭化粒子少量	10	黒褐色	ロームブロック少量
3	暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子微量	11	極暗褐色	ローム粒子少量
4	黒褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	12	暗褐色	ロームブロック中量
5	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量	13	褐色	ローム粒子中量、炭化物微量
6	暗褐色	ローム粒子中量	14	黒褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量
7	褐色	ローム粒子中量	15	黒褐色	炭化物・焼土粒子微量
8	黒褐色	ローム粒子少量	16	にぶい黄褐色	ローム粒子中量

遺物出土状況 土師器片153点（高坏2，壺1，甕150）が出土している。遺物のほとんどが細片で、図示できたものは少ない。640は南部の床面から出土した破片が接合したものである。

所見 壁際に高まりを形成したベット状遺構を有す住居である。出土土器がいずれも細片であったため明確ではないが、形状などから、時期は4世紀中葉と考えられる。



第107図 第48号住居跡出土遺物実測図

第48号住居跡出土遺物観察表(第107図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
640	土師器	壺	[19.4]	(9.9)	—	石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部内・外面ハケ目調整 外面ナデ 軸積み煎	床面	15%

第49号住居跡（第108～111図）

位置 調査区北部のF2j4区、標高23mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第47号住居，第18号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.36m，短軸5.14mの方形で，主軸方向はN-18°-Wである。壁高は35～66cmで，外傾して立ち上がっている。

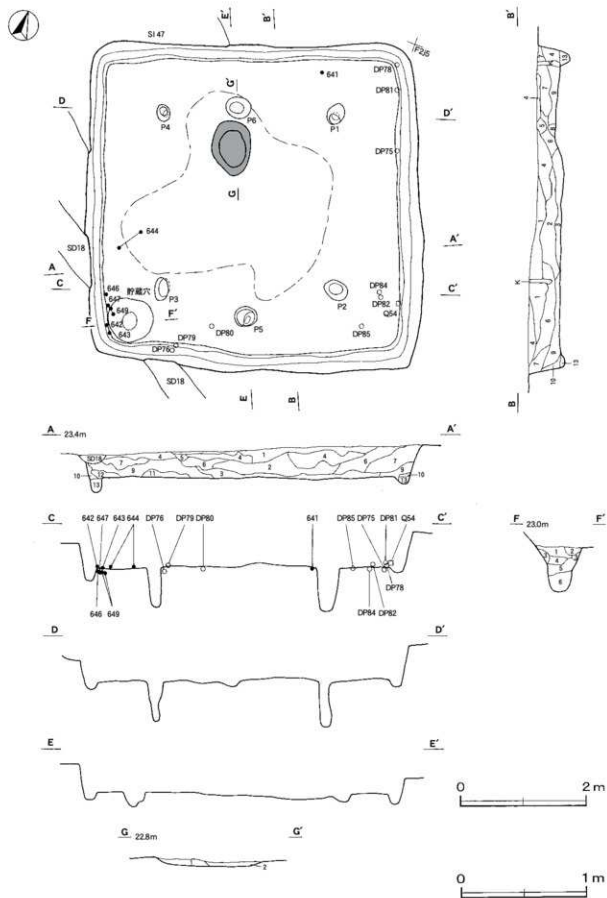
床 ほぼ平坦で，炉を中心とした中央部が踏み固められている。ほぼ全域で炭化材と焼土が検出されている。

炉 北部の中央に位置している。長径86cm，短径60cmの楕円形で，床面をわずかに掘りくぼめて炉床とした地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

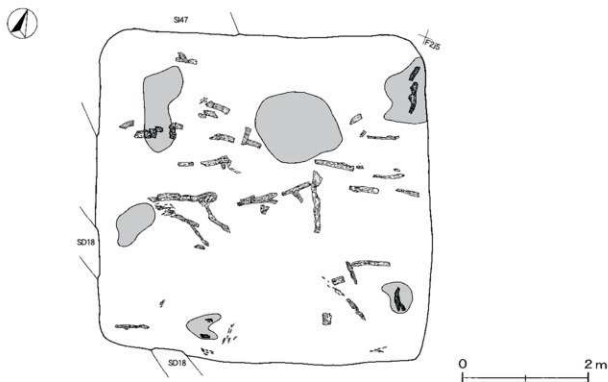
伊土層解説

1	褐灰色	ロームブロック・焼土粒子微量	2	暗赤褐色	焼土ブロック少量、炭化粒子微量
---	-----	----------------	---	------	-----------------

ピット 6か所。P1～P4は深さ60～70cmで，規模と配置から主柱穴である。P5は深さ22cmで，南壁際の中央に位置することから，出入り口施設に伴うピットである。P6は深さ14cmで，性格は不明である。



第108图 第49号住居跡実測図(1)



第109図 第49号住居跡実測図(2)

貯蔵穴 南西コーナー部に付設されている。径70cmの円形で、深さは70cmである。底面は皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。覆土は人為堆積の状況を示している。

貯蔵穴土層解説

- | | | | |
|--------|---------------------|-------|-------------------|
| 1 緑褐色 | 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量 | 4 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | 炭化物・ローム粒子・焼土粒子微量 | 5 緑褐色 | ローム粒子微量 |
| 3 ぶい褐色 | ロームブロック少量 | 6 暗褐色 | ローム粒子・炭化パミスブロック微量 |

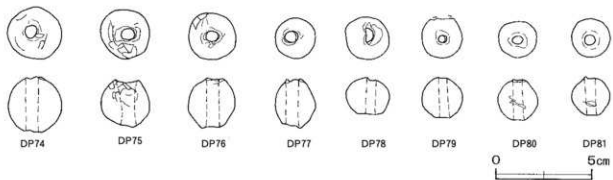
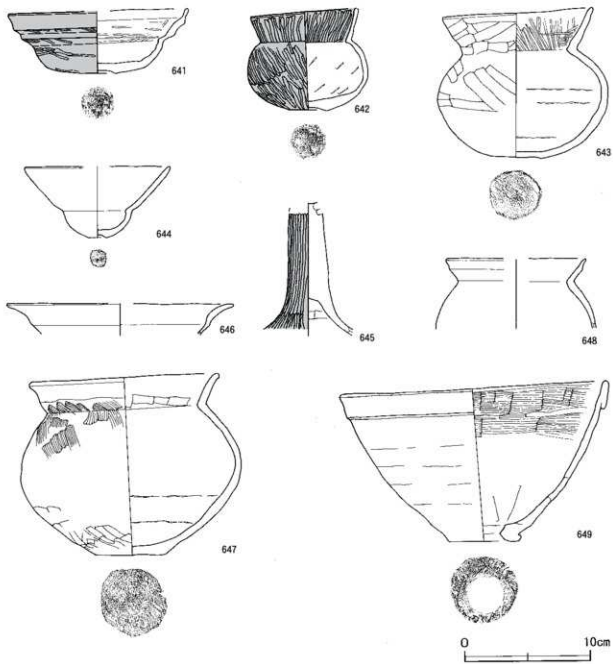
覆土 13層に分層できる。ローム土や焼土、炭化物を含み、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

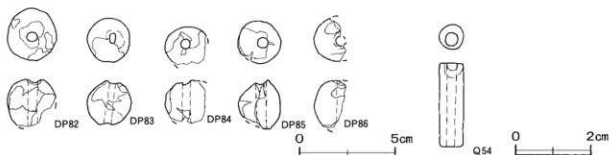
- | | | | |
|--------|-----------------------|---------|-------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 8 褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 2 ぶい褐色 | ロームブロック少量 | 9 暗赤褐色 | 焼土ブロック・炭化物・ローム粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 10 明褐色 | ロームブロック少量 |
| 4 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 11 暗赤褐色 | 焼土ブロック・炭化物少量、ローム粒子微量 |
| 5 褐色 | ロームブロック中量 | 12 緑赤褐色 | 炭化粒子中量、焼土ブロック少量、ローム粒子微量 |
| 6 緑褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量 | 13 黒褐色 | ロームブロック微量 |
| 7 褐色 | ロームブロック中量、炭化物微量 | | |

遺物出土状況 土師器片358点(埴30, 高坏21, 壺1, 甕304, 瓶2), 土製品13点(球状土鍾), 石製品1点(管玉)が東から南西壁際にかけての床面から多く出土している。642・643・646は南西壁溝内, 647・649は南西壁際の床面から出土しており, 649は貯蔵穴の覆土上層から出土した破片が接合したものである。出土した土器は, 廃絶後まもなく廃棄されたものと推測される。東から南壁際の覆土下層から床面にかけて, 球状土鍾9個体が出土している。炭化材は中央部に集中し, 壁に直交ないし平行するように検出されている。

所見 遺物や炭化材の出土状況等から, 廃絶に伴う焼失住居と考えられる。時期は出土土器から4世紀後葉と考えられる。



第110图 第49号住居跡出土遺物実測図(1)



第111図 第49号住居跡出土遺物実測図(2)

第49号住居跡出土遺物観察表 (第110・111図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考
641	土師器	坏	[14.2]	5.1	2.7	長石・石英・雲母	明赤褐色	普通	口縁部内・外面ナデ 体部内・外面ヘラ磨き	床面	90% PL21
642	土師器	埴	8.5	8.1	3.0	長石・石英・雲母	明赤褐色	普通	口縁部内・外面ヘラ磨き 体部外面ヘラ磨き 内面ナデ	西壁溝内	100% PL24
643	土師器	埴	12.0	12.1	4.0	長石・石英	赤	普通	口縁部外面ナデ 内面ヘラ磨き 体部外面ヘラナデ 内面ナデ 輪積み痕	西壁溝内	95% 保存着PL25
644	土師器	埴	[11.6]	5.6	1.3	長石・石英・赤色粒子	灰黄褐色	普通	口縁部・体部内・外面ナデ 一部内面輪積み痕	床面	50%
645	土師器	高坏	—	(10.5)	—	長石・石英	浅黄褐色	普通	側部外面ヘラ磨き 内面ハケ目調整後ナデ	貯蔵穴内	15%
647	土師器	小形埴	14.3	14.4	5.5	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部外面ハケ目調整後ナデ 内面ヘラナデ 体部外面ハケ目調整後ナデ 内面ナデ 輪積み痕	床面	80% PL30
648	土師器	甕	[10.8]	(5.5)	—	長石・石英	橙	普通	口縁部内・外面横ナデ 体部内・外面ナデ	貯蔵穴内	15%
646	土師器	壺	[17.8]	(2.5)	—	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄褐色	普通	口縁部内・外面横ナデ	西壁溝内	10%
649	土師器	瓶	21.1	12.8	5.7	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部外面ナデ 内面ハケ目調整 体部外面ナデ 内面ヘラ調整後ナデ 複合口縁 輪積み痕	貯蔵穴内	95% PL34

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質(胎土)	特 徴	出土位置	備考
DP74	球状土埴	2.9	2.9	0.7	19.2	長石・雲母	ナデ 一方向からの穿孔	貯蔵穴内	PL39
DP75	球状土埴	2.6	2.6	0.7	14.7	長石	ナデ 一方向からの穿孔	床面	PL39
DP76	球状土埴	2.6	2.5	0.7	14.6	長石・石英・雲母	ナデ 一方向からの穿孔	床面	PL39
DP77	球状土埴	2.2	2.7	0.7	10.2	長石・石英	丁寧なナデ 一方向からの穿孔	貯蔵穴内	PL39
DP78	球状土埴	2.2	1.9	1.1	(9.5)	長石・石英	ナデ 一方向からの穿孔 一部欠け	床面	PL39
DP79	球状土埴	2.1	(2.1)	0.5	(9.6)	長石・石英	ナデ 一方向からの穿孔 一部欠け	覆土下層	PL39
DP80	球状土埴	2.0	1.9	0.6	8.0	長石・雲母	ナデ 一方向からの穿孔	床面	PL39
DP81	球状土埴	2.1	2.0	0.5	7.6	長石・石英	丁寧なナデ 一方向からの穿孔	覆土下層	
DP82	球状土埴	2.7	(2.5)	0.5	(11.4)	長石・雲母	ナデ 一方向からの穿孔 一部欠け	貯蔵穴内	
DP83	球状土埴	2.3	2.3	0.4	(10.2)	長石・雲母	ナデ 一方向からの穿孔 一部欠け	覆土下層	
DP84	球状土埴	(2.2)	2.2	0.5	(8.0)	長石	ナデ 一方向からの穿孔 一部欠け	床面	
DP85	球状土埴	2.2	2.6	0.5	(7.5)	長石	ナデ 一方向からの穿孔 一部欠け	床面	
DP86	球状土埴	(1.7)	(2.5)	0.5	(7.0)	長石・赤色粒子	ナデ 一方向からの穿孔 一部欠け	炉覆土中	

番号	器種	長さ	径	孔径	重量	材質	特 徴	出土位置	備考
Q54	管玉	2.2	0.6	0.3	1.5	滑石	全面丁寧な磨き 一方向からの穿孔	覆土下層	PL40

第50号住居跡 (第112・113図)

位置 調査区北部のF2 i6区、標高23.4mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸6.00m、短軸5.08mの長方形で、主軸方向はN-75°-Eである。壁高は18~26cmで、外傾して立ち上がっている。

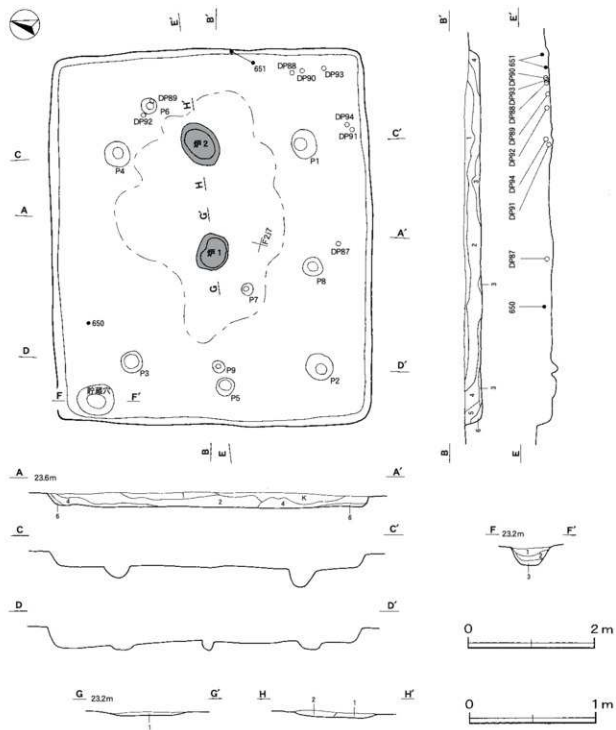
床 ほぼ平坦で、2基の炉を中心とした中央部が踏み固められている。

炉 2か所。炉1は中央部、炉2は北部に位置している。炉1は長径56cm、短径50cmの楕円形、炉2は長径74cm、短径52cmの楕円形で、どちらも床面をわずかに掘りくぼめて炉床とした地床炉である。2基とも炉床面は火を受けて赤変硬化している。

伊1・2土層解説

1 濃い赤褐色 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量

2 灰赤色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量



第112図 第50号住居跡実測図

ビット 9か所。P1～P4は深さ9～27cmで、配置から柱穴と考えられるが、規模が小さく判然としない。P5は深さ9cmで、西壁際の中央に位置することから出入り口施設に伴うビットである。P6～P9は深さ4～40cmで、対応するビットがなく、性格は不明である。

貯蔵穴 北西コーナー部に付設されている。長軸58cm、短軸50cmの楕円形で、深さは28cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。覆土は自然堆積の状況を示している。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
2 黒褐色 ローム粒子微量
3 暗褐色 ロームブロック微量

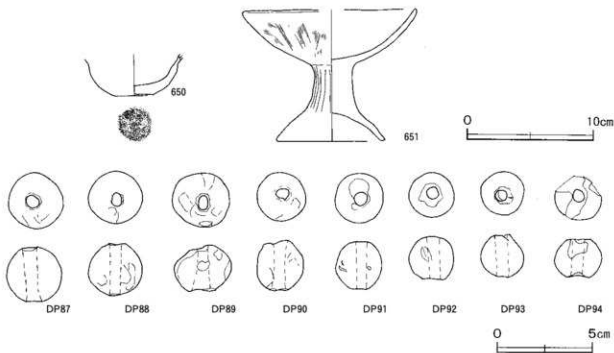
覆土 6層に分層できる。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

- 1 黒色 ローム粒子・炭化粒子微量
2 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
3 褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
4 褐色 ロームブロック少量
5 黒褐色 ローム粒子微量
6 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片413点（増20、高坏25、壺1、甕366、ミニチュア土器1）、土製品8点（球状土鍾）が出土している。また、混入した陶器片1点（鉢）も出土している。ほとんどが細片で、接合できたものが少ない。650は北西部、651は東壁際の覆土下層からそれぞれ出土している。また、南部の覆土下層を中心に球状土鍾6個体も出土している。

所見 時期は出土土器が少ないため詳細な時期判定は困難であるが、西約5mに位置し、4世紀後葉に比定される第48・49号住居跡とほぼ主軸方向と同じにすることから、同時期に存在した可能性が高い。



第113図 第50号住居跡出土遺物実測図

第50号住居跡出土遺物観察表（第113図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
650	土師器	増	—	(3.3)	2.9	長石・石英・赤色粒子	灰黄褐色	普通	内・外面ナデ	覆土下層	40%
651	土師器	高坏	[13.8]	10.4	8.6	長石・石英	橙	普通	環状外面ハケ目調整後ナデ 内面ナデ 器部外面ヘラナデ 内面ナデ	覆土下層	70%

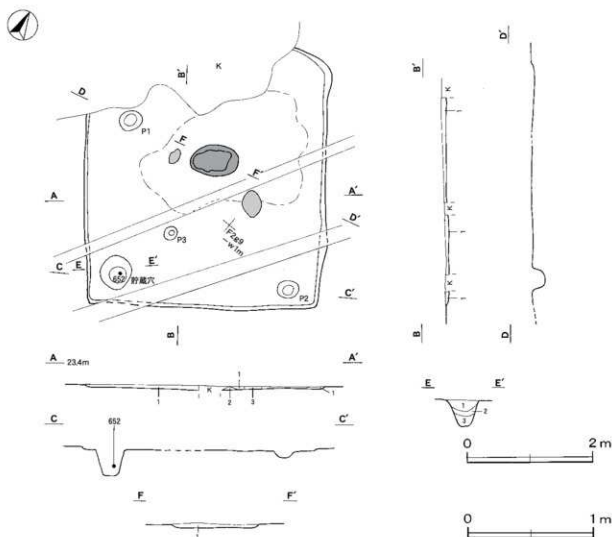
番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質(胎土)	特徴	出土位置	備考
DF87	球状土埴	2.9	2.9	0.6	21.3	長石・石英	丁寧なナデ 一方からの穿孔	覆土下層	PL39
DF88	球状土埴	2.8	2.7	0.5	19.0	長石・石英・雲母	ナデ 一方からの穿孔	覆土下層	PL39
DF89	球状土埴	3.0	2.4	0.7	18.6	長石・石英	ナデ 一方からの穿孔	床面	PL39
DF90	球状土埴	2.6	2.6	0.7	16.5	長石	ナデ 一方からの穿孔	覆土下層	PL39
DF91	球状土埴	2.6	2.5	0.8	15.6	長石・石英	ナデ 一方からの穿孔	覆土下層	PL39
DF92	球状土埴	2.4	2.3	0.7	13.2	長石・石英	丁寧なナデ 一方からの穿孔	覆土下層	PL39
DF93	球状土埴	2.3	2.3	0.7	11.4	長石・石英	丁寧なナデ 一方からの穿孔	床面	PL39
DF94	球状土埴	2.4	2.0	0.6	(10.4)	長石	ナデ 一方からの穿孔	覆土下層	PL39

第51号住居跡 (第114・115図)

位置 調査区北部のF 248区、標高23mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 北部が大きく攪乱を受けており、東西軸3.87m、南北軸4.14mが確認されている。南・東壁から主軸方向はN-35°-Wと推測される。残存している壁高は5cmである。

床 ほぼ平坦で、炉を中心とした中央部が踏み固められている。炉の南部と西部には焼土が検出されている。



第114図 第51号住居跡実測図

炉 中央部に位置している。長径76cm、短径50cmの楕円形で、床面をわずかに掘りくぼめて炉床とした地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 暗赤褐色 炭化粒子少量、ローム粒子微量

ピット 3か所。P1は深さ20cmで、配置から4本主柱の北西部の主柱穴と考えられるが、他は確認されなかった。また、P2・P3はともに深さは10cmと浅く、性格は不明である。

貯蔵穴 南西コーナー部に付設されている。径50cmの円形で、深さは42cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。覆土は人為堆積の状況を示している。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
2 暗褐色 ローム粒子微量
3 暗褐色 ロームブロック少量

覆土 3層に分層できる。層厚が薄く堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
2 にぶい褐色 ロームブロック少量
3 暗褐色 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片32点（坏2、埴1、甕29）が出土している。出土した遺物は細片が多く、図示できた遺物は少ない。652は、貯蔵穴の覆土中層から出土している。

所見 出土した土師器片は、4世紀後葉の様相を呈しており、西5mに位置する第54号住居跡とはほぼ同じ主軸方向をとる。



第115図 第51号住居跡出土遺物実測図

第51号住居跡出土遺物観察表（第115図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
652	土師器	坏	11.2	3.9	—	白色粒子	にぶい褐色	普通	体部外面ハケ目調整後子デ 目調整	西面ハケ目調整	貯蔵穴内 90%

第52号住居跡（第116・117図）

位置 調査区北部のF3h2区、標高23.4mの台地平坦部に位置している。

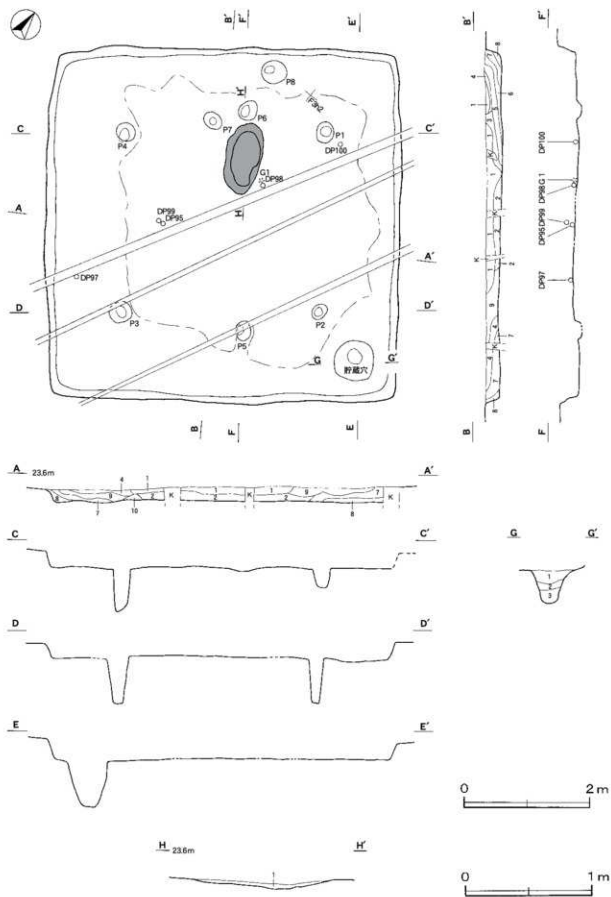
規模と形状 長軸5.68m、短軸5.66mの方形で、主軸方向はN-36°-Wである。壁高は25cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が広い範囲で踏み固められている。

炉 北部の中央に位置している。長径114cm、短径56cmの楕円形で、床面をわずかに掘りくぼめて炉床とした地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量



第116图 第52号住居跡実測图

ビット 8か所。P1～P4は深さ32～76cmで、規模と配置から主柱穴である。P5は深さ16cmで、南壁際の中央に位置することから出入り口施設に伴うビットである。P6～P8は深さ10～20cmで、性格は不明である。

貯蔵穴 南東コーナー部に付設されている。径64cmの円形で、深さは52cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。堆積状況は不明である。

貯蔵穴土層解説

- | | |
|-----------------|------------------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子微量 | 3 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック微量 | |

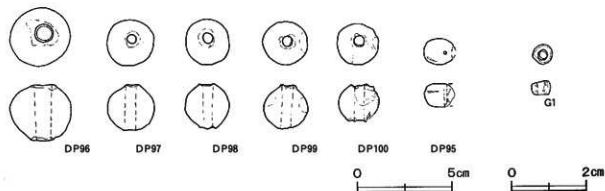
覆土 10層に分層できる。ローム土や焼土、炭化物を含み、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- | | |
|-----------------------|----------------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量 | 6 黒褐色 焼土粒子少量、ローム粒子微量 |
| 2 黒褐色 ロームブロック微量 | 7 黒褐色 ローム粒子微量 |
| 3 暗褐色 ロームブロック少量 | 8 褐色 ロームブロック少量 |
| 4 褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 9 黒褐色 ロームブロック少量 |
| 5 暗赤褐色 焼土ブロック中量、炭化物微量 | 10 褐色 ロームブロック中量 |

遺物出土状況 土師器片855点（埴2、高坏35、甕818）、土製品6点（土玉1、球状土鐘5）、ガラス製品1点（ガラス玉）が出土している。また、混入した磁器片1点（碗）も出土している。球状土鐘DP96～DP100は中央部から北東部の覆土下層から床面、G1は炉の南東側の床面からそれぞれ出土している。細片が多く、土師器片は覆土中に散在する状態で出土していることから、廃絶後に廃棄されたものと考えられる。

所見 出土した土師器片は4世紀後葉の様相を呈しており、隣接する第53号住居跡とほぼ同じ主軸方向をとる。



第117図 第52号住居跡出土遺物実測図

第52号住居跡出土遺物観察表（第117図）

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質(胎土)	特徴	出土位置	備考
DP95	土玉	(1.6)	1.2	0.1	(2.9)	長石	ナデ 一方向からの穿孔 一部欠け	床面	PL39
DP96	球状土鐘	3.3	3.3	1.0	26.7	長石	丁寧なナデ 二方向からの穿孔	貯蔵穴 覆土中	PL39
DP97	球状土鐘	2.5	2.4	0.5	13.5	長石・雲母	ナデ 一方向からの穿孔	床面	PL39
DP98	球状土鐘	2.5	2.4	0.6	13.1	長石・石英・赤色 粒子	ナデ 一方向からの穿孔	床面	PL39
DP99	球状土鐘	2.5	2.4	0.6	11.4	長石・石英	丁寧なナデ 一方向からの穿孔	覆土中層	PL39
DP100	球状土鐘	2.2	2.0	0.6	(8.7)	長石・石英	ナデ 一方向からの穿孔 一部欠け	覆土下層	PL39
G1	ガラス玉	0.5	0.4	0.2	0.1	ガラス	コバルトブルー 側面は円筒形	床面	PL40

第53号住居跡（第118～121図）

位置 調査区北部のF219区、標高23.4mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸6.60m、短軸6.21mの方形で、主軸方向はN-37°-Wである。壁高は46～50cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が広い範囲で踏み固められている。また、南・西側からは2条の間仕切り溝が検出されている。規模は、南側が長さ158cm、幅30cm、西側が長さ120cm、幅24cmであり、いずれもU字状の断面を呈している。南・西壁際から炭化材が検出されている焼失住居である。壁溝が全周している。

炉 北部のやや西寄りに位置している。長径94cm、短径80cmの楕円形で、床面をわずかに掘りくぼめて炉床とした地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

伊土層解説

1 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子微量

ピット 6か所。P1～P4は深さ44～62cmで、規模と配置から主柱穴である。P5は深さ46cmで、南壁際に位置することから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6は深さ20cmで、性格は不明である。

貯蔵穴 2か所。貯蔵穴1は南西コーナー部、貯蔵穴2は北東コーナー部に付設されている。貯蔵穴1は長径66cm、短径60cmの楕円形で、深さは54cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。貯蔵穴2は径58cmの円形で、深さは50cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。いずれも覆土は人為堆積の状況を示している。

貯蔵穴1土層解説

1 暗褐色 ロームブロック・炭化物微量

2 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

3 褐色 ロームブロック微量

貯蔵穴2土層解説

1 黒色 炭化粒子少量、ローム粒子・焼土ブロック微量

2 暗褐色 ローム粒子少量

3 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量

覆土 10層に分層できる。堆積状況から第3～10層は焼失後埋め戻された層、第1・2層は自然堆積した層である。

土層解説

1 暗灰色 ローム粒子微量

2 黒色 ローム粒子微量

3 黒褐色 ロームブロック微量

4 暗褐色 ロームブロック少量

5 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

6 褐色 ロームブロック少量

7 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

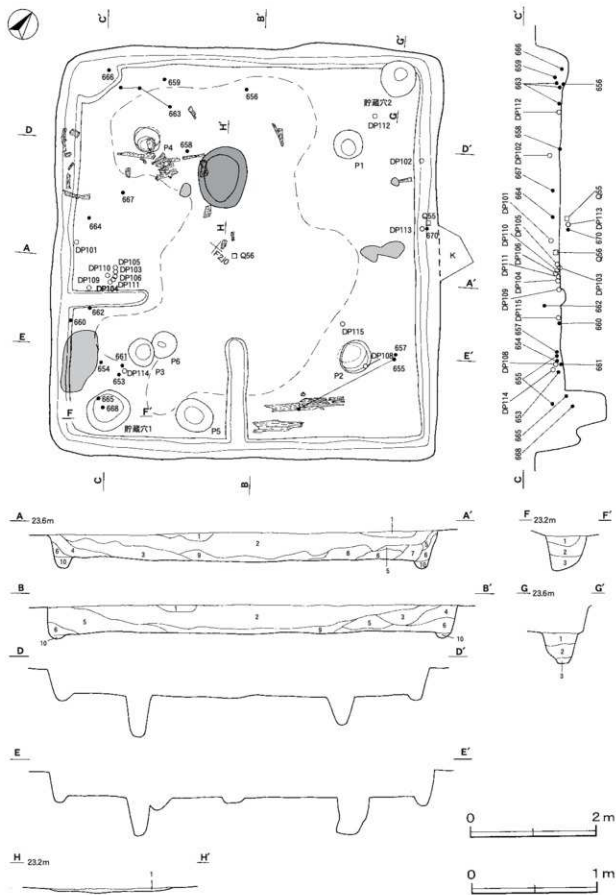
8 暗赤褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

9 暗褐色 ロームブロック微量

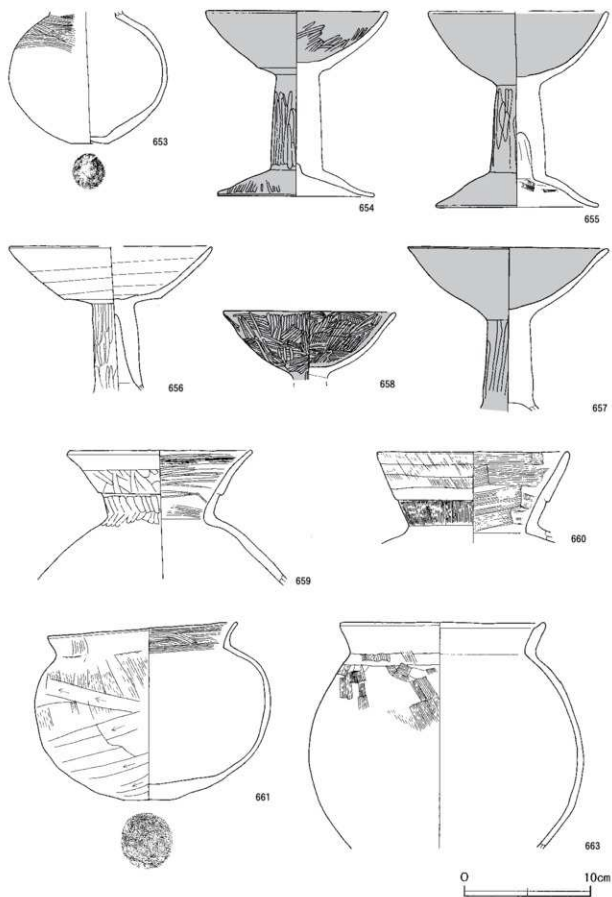
10 暗褐色 ローム粒子微量

遺物出土状況 土師器片1,436点（埴5、高坏17、鉢2、甕1,409、台付甕1、甕2）、土製品16点（球状土錘）、石製品2点（管玉、臼玉）が出土している。また、流れ込んだ磁器片1点（碗）も出土している。遺物は北西部から南西部にかけての覆土中層から床面にかけて出土している。ほとんどが破片で、接合関係が多く見られることから、廃絶からやや時間が経ってから投棄されたものと考えられる。668は貯蔵穴1の覆土上層、DP101・DP103～DP106・DP109～DP111は西側の間仕切り溝の周辺からまとまって出土している。炭化材は、角材や篠材とみられ、北壁と南壁に平行して検出されている。

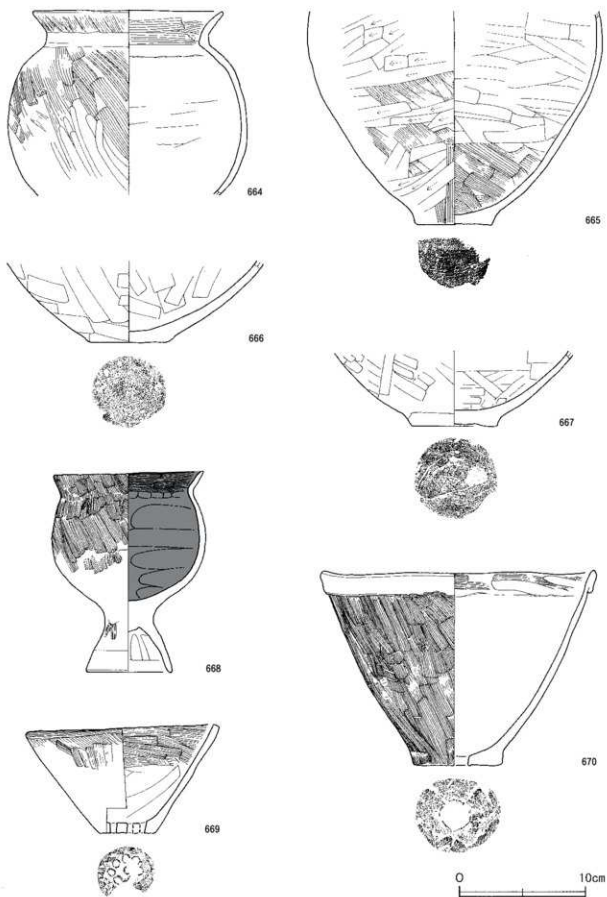
所見 焼失住居であり、角材や篠材などの住居建築材が出土している。出土土器は、焼失後の早い段階で投棄されたものと考えられる。これらの土器は4世紀後葉の様相を呈しており、時期は出土土器とそれほど差がない4世紀後葉と考えられる。



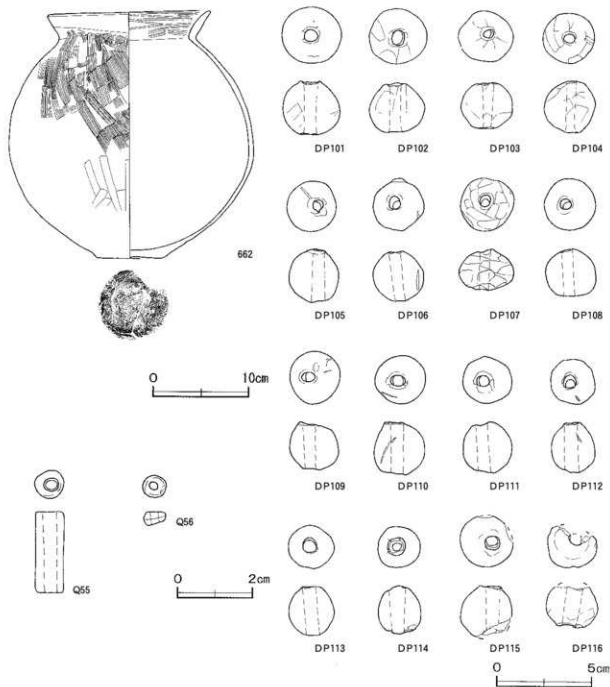
第118图 第53号住居跡実測図



第119图 第53号住居跡出土遺物実測図(1)



第120图 第53号住居跡出土遺物実測図(2)



第121図 第53号住居跡出土遺物実測図(3)

第53号住居跡出土遺物観察表(第119~121図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
653	土師器	埴	—	(10.5)	2.8	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部外面へラ磨き 内面ナデ	床面	80% PL26
654	土師器	高坏	14.2	14.7	12.4	長石・石英・雲母	橙	普通	体部外面へラ調整後ナデ 内面へラ磨き 唇部・底部外面へラ磨き 内面ナデ 内面ナデ 外部ナデ 外部外面へラ磨き 内面ナデ 外部外面へラ調整	覆土下層	90% 煤付着PL27
655	土師器	高坏	[14.1]	15.6	12.8	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	体部内・外面ナデ 外部外面へラ磨き 内面へラ調整	覆土下層	60%
656	土師器	高坏	[16.1]	(11.6)	—	長石・石英・赤色粘土	橙	普通	体部内・外面ナデ 唇部外面へラ磨き 内面へラナデ	床面	70% 煤付着PL28
657	土師器	高坏	15.8	(12.9)	—	白色粘土	にぶい黄橙	普通	体部内・外面ナデ 唇部外面へラ磨き	覆土下層	60%
658	土師器	高坏	13.8	(5.4)	—	長石・石英・雲母	暗赤	普通	体部内・外面へラ磨き	床面	50% 煤付着
659	土師器	甕	14.4	(10.2)	—	長石・石英	にぶい赤褐	普通	口縁部外面へラナデ 内面へラ磨き 唇部へラナデ 内面ハケ目調整	覆土下層	20% PL29

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
660	土師器	壺	15.4	(7.2)	—	長石・石英・赤色 粘土	にぶい黄褐色	普通	口縁部外面ハケ目調整後ナゲ 内面ハケ目調整 胴部ハケ目調整後ナゲ	床面	10% PL29
661	土師器	壺	15.2	14.2	4.1	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	口縁部外面ハケ目調整後ナゲ 内面ハケ目調整 体部外面ハケ目調整後ヘラナゲ	床面	80% 残付着
662	土師器	甕	17.1	26.5	7.6	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	口縁部外面ナゲ 内面ハケ目調整後ヘラナゲ 体部外面ハケ目調整 内面ナゲ	覆土中層	75% 残付着
663	土師器	甕	16.2	(18.0)	—	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	口縁部内・外面ナゲ 体部外面ハケ目調整後ナゲ 内面ナゲ	床面	70%
664	土師器	甕	15.1	(14.6)	—	長石・石英	にぶい褐色	普通	口縁部内・外面ハケ目調整 体部外面ハケ目調整後ヘラナゲ 内面ナゲ 胴部ナゲ 輪積み肌	覆土下層	50%
665	土師器	甕	—	(17.0)	6.0	長石・石英	明赤褐色	普通	体部外面ハケ目調整後ヘラナゲ 内面ハケ目調整後ヘラナゲ	貯蔵穴内	40%
666	土師器	甕	—	(6.5)	6.0	長石・石英	橙	普通	体部内・外面ナゲ	北壁溝内	10% 残付着
667	土師器	甕	—	(6.0)	6.8	長石	にぶい黄褐色	普通	体部内・外面ナゲ	覆土下層	10% 残付着
668	土師器	台付甕	12.0	16.1	7.0	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	口縁部内・外面ハケ目調整 体部外面ハケ目調整 内面ヘラナゲ	貯蔵穴内	95% 残付着 PL34
669	土師器	瓶	14.7	8.7	4.4	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	体部内・外面ハケ目調整後ヘラナゲ 底部8孔	覆土中	90% PL34
670	土師器	瓶	21.6	15.5	6.9	長石	橙	普通	口縁部外面ナゲ 内面ハケ目調整後ナゲ 体部外面ハケ目調整 内面ナゲ 取り返し口縁	東壁溝内	60%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質(胎土)	特 徴	出土位置	備考
PF101	球状土埴	3.1	2.8	0.7	25.7	長石・石英	丁寧なナゲ 一方方向からの穿孔	覆土下層	PL39
PF102	球状土埴	3.0	2.7	0.6	22.3	長石	ナゲ 一方方向からの穿孔	覆土下層	PL39
PF103	球状土埴	2.8	2.5	0.4	18.2	長石	ナゲ 一方方向からの穿孔	床面	PL39
PF104	球状土埴	2.7	2.6	0.4	17.4	長石・石英	ナゲ 一方方向からの穿孔	床面	PL39
PF105	球状土埴	2.6	2.8	0.6	17.4	長石	ナゲ 一方方向からの穿孔	床面	PL39
PF106	球状土埴	2.8	2.7	0.6	16.7	長石	ナゲ 一方方向からの穿孔	床面	PL39
PF107	球状土埴	2.9	2.2	0.6	14.9	長石	ナゲ 一方方向からの穿孔 尊盤玉状	覆土中	PL39
PF108	球状土埴	2.7	2.5	0.6	17.1	長石・石英・雲母	ナゲ 一方方向からの穿孔	P 2 内	PL39
PF109	球状土埴	2.7	2.5	0.7	15.6	長石・石英・雲母	ナゲ 一方方向からの穿孔	床面	PL39
PF110	球状土埴	2.7	2.7	0.7	16.1	長石・石英	ナゲ 一方方向からの穿孔	床面	PL39
PF111	球状土埴	2.1	2.7	0.6	15.1	長石・石英・雲母	ナゲ 一方方向からの穿孔	床面	PL39
PF112	球状土埴	2.3	2.6	0.7	12.9	長石	丁寧なナゲ 一方方向からの穿孔	床面	PL39
PF113	球状土埴	2.4	2.6	0.7	11.8	長石	丁寧なナゲ 一方方向からの穿孔	東壁溝内	PL39
PF114	球状土埴	2.3	2.5	0.9	11.5	長石	丁寧なナゲ 一方方向からの穿孔	覆土下層	PL39
PF115	球状土埴	2.8	(2.7)	0.8	(16.8)	長石・石英・雲母	ナゲ 一方方向からの穿孔 一部欠け	床面	
PF116	球状土埴	2.7	(2.2)	(0.9)	(11.0)	長石・石英・雲母	ナゲ 一方方向からの穿孔 片側欠損	覆土中	

番号	器種	長さ	径	孔径	重量	材質	特 徴	出土位置	備考
Q65	管玉	2.2	0.7	0.4	2.2	滑石	全面丁寧な磨き 一方方向からの穿孔	東壁溝内	PL40

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特 徴	出土位置	備考
Q66	白玉	0.6	0.4	0.2	0.2	滑石	両面平滑 全面研磨調整	床面	PL40

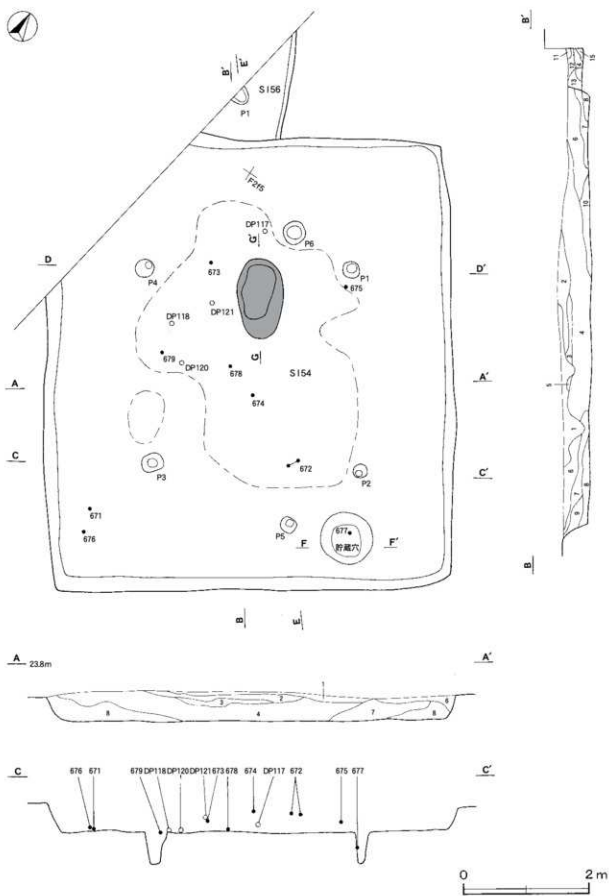
第54号住居跡 (第122～124図)

位置 調査区北部のF 2 f5区、標高23.3mの台地平坦部に位置している。

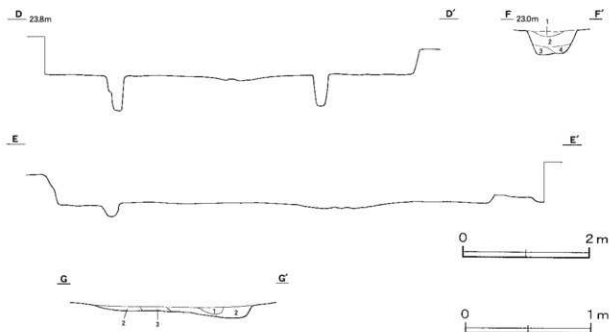
重複関係 第56号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸7.26m、短軸6.60mの長方形で、主軸方向はN-34°-Wである。壁高は42～48cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、炉を中心とした中央部が踏み固められている。



第122图 第54·56号住居跡实测图(1)



第123図 第54・56号住居跡実測図(2)

炉 中央部のやや北寄りに位置している。長径124cm、短径76cmの楕円形で、床面をわずかに掘りくぼめて炉床とした地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

伊土層解説

- | | |
|-------------------------|---------------------|
| 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子微量 | 3 黒褐色 焼土ブロック・炭化粒子微量 |
| 2 極暗赤褐色 焼土ブロック少量、炭化粒子微量 | |

ビット 6か所。P1～P4は深さ48～52cmで、配置や規模から主柱穴である。P5は深さ20cmで、南壁際に位置することから、出入り口施設に伴うビットである。P6は深さ15cmで、性格は不明である。

貯蔵穴 南東部に付設されている。径84cmの円形で、深さは36cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。覆土は人為堆積の状況を示している。

貯蔵穴土層解説

- | | |
|----------------|--------------------------|
| 1 褐色 ロームブロック微量 | 3 褐色 ロームブロック・煮沼パミスブロック微量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子微量 | 4 極暗褐色 ロームブロック微量 |

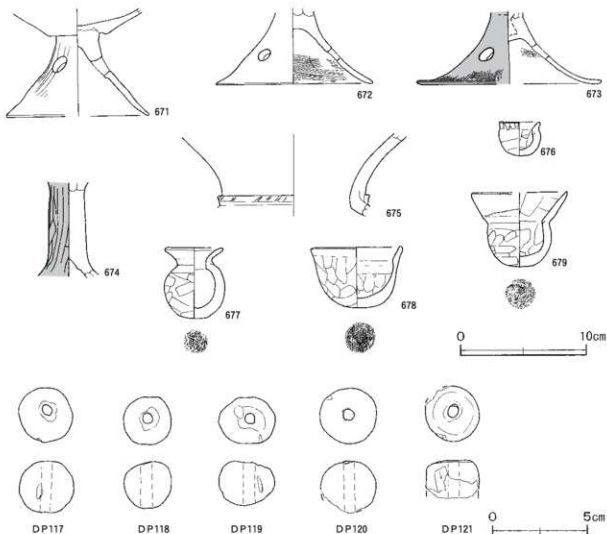
覆土 10層に分層できる。堆積状況から第4～10層は廃絶後短期間で埋め戻された層、第1～3層は自然堆積した層である。

土層解説

- | | |
|--------------------------|-----------------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量 | 6 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 ロームブロック微量 | 7 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 3 極暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 8 暗褐色 ロームブロック少量 |
| 4 極暗褐色 ロームブロック微量 | 9 黒褐色 ローム粒子微量 |
| 5 褐色 ロームブロック微量 | 10 暗赤褐色 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片1,845点(埴壇, 器台1, 高坏39, 壺3, 甕1,749, ミニチュア土器4), 土製品5点(球状土錘4, 管状土錘1)が出土している。また、混入した陶器片1点(碗)も出土している。遺物は中央部の覆土中層から床面ににかけて出土している。出土した土師器片はほとんどが破片の状態で、接合関係があまり見られない。これらは廃絶後に廃棄されたものと考えられる。ミニチュア土器4個体が出土しており、677は貯蔵穴の覆土中層から出土している。

所見 出土した土師器は4世紀後葉の様相を呈しており、隣接する第52号住居跡とほぼ同じ主軸方向をとる。



第124図 第54号住居跡出土遺物実測図

第54号住居跡出土遺物観察表 (第124図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	粘土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
671	土師器	高坏	—	(8.5)	[11.2]	長石・石英	にがい黄緑	普通	脚部外面ヘラナデ 内面ナデ 3意	覆土下層	40%
672	土師器	高坏	—	(5.8)	12.6	長石・石英・赤色 灰子	にがい黄緑	普通	脚部内・外面ナデ 履部内面ハケ目調 整後ナデ 3意	覆土中層	35%
673	土師器	高坏	—	(5.7)	[14.4]	石英	にがい黄緑	普通	脚部外面ナデ 履部外面ナデ 内面ハ ケ目調整後ナデ 3意	覆土中層	30%
674	土師器	高坏	—	(7.5)	—	長石・石英	にがい赤黒	普通	脚部外面ヘラナデ	覆土上層	30%
675	土師器	壺	—	(6.5)	—	長石・石英	にがい黄緑	普通	履部内・外面ナデ 踵帯取り付け 踵 帯には木口状の圧痕	覆土中層	10%
676	土師器	コチャフ 土師	3.1	2.7	—	長石・石英	にがい黄緑	普通	体部外面ナデ 口縁部外面指頭痕 内 面に輪積み痕	覆土下層	90% PL35
677	土師器	コチャフ 土師	4.5	5.6	1.8	長石・石英	にがい黄緑	普通	体部外面ナデ 口縁部内・外面ナデ 内面に輪積み痕	貯蔵穴内	95% PL35
678	土師器	コチャフ 土師	7.1	4.8	2.3	長石・石英	にがい黄緑	普通	体部内・外面ナデ 内面に輪積み痕	床面	100% PL36
679	土師器	コチャフ 土師	(7.5)	5.9	2.2	長石・石英	にがい黄緑	普通	体部内・外面ナデ 外面に輪積み痕	床面	60% PL36

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質(粘土)	特 徴	出土位置	備考
DP117	球状土師	2.9	2.7	0.6	21.1	長石	丁寧なナデ 一方からの穿孔	覆土中層	
DP118	球状土師	2.5	2.4	0.6	15.2	長石	丁寧なナデ 一方からの穿孔	覆土下層	
DP119	球状土師	3.0	2.3	0.5	16.9	長石・石英・雲母	ナデ 一方からの穿孔	覆土中	
DP120	球状土師	3.0	(2.7)	0.7	(18.8)	長石・石英	ナデ 一方からの穿孔 一部欠損	覆土下層	
DP121	管状土師	3.0	(2.1)	0.6	(16.4)	長石・石英・礫	ナデ 欠け	覆土中層	

第55号住居跡（第125～127図）

位置 調査区北部のE 27区、標高23.4mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第16号溝に掘り込まれ、北東部は攪乱を受けている。

規模と形状 長軸7.43m、短軸7.30mの方形で、主軸方向はN-18°-Wである。壁高は42～48cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、壁際と南部の間仕切り溝周辺を除いた広い範囲が踏み固められている。また、南半部から5条の間仕切り溝が検出されている。規模は南壁に接する4条が長さ90～210cm、幅18～24cm、西壁部のものは長さ136cm、幅24cmで、いずれも断面形はU字状を呈している。北西コーナー部の床面からは炭化材が検出されている。壁溝が確認されている。

炉 2か所。いずれも中央部のやや北西寄りに位置している。攪乱を受けているため、炉1は南北軸34cm、東西軸24cm、炉2は南北軸62cm、東西軸24cmが確認されただけである。いずれも床面をわずかに掘りくぼめて炉床とした地床炉で、炉床面は火を受けて赤変硬化している。新旧関係は不明である。

炉1・2土層解説

- | | |
|-------------------------|--------------------------|
| 1 暗赤褐色 焼土ブロック多量、ローム粒子少量 | 2 極暗赤褐色 焼土ブロック多量、ローム粒子少量 |
|-------------------------|--------------------------|

ピット 4か所。P1～P3は深さ52～60cmで、規模と配置から支柱穴である。P4は深さ37cmで、性格は不明である。

貯蔵穴 2か所。2基とも南西コーナー部に付設されている。貯蔵穴1は長軸80cm、短軸70cmの長方形で、深さは58cmである。貯蔵穴2は径60cmの円形で、深さは56cmである。いずれも底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。覆土は人為堆積の状況を示しており、新旧関係は不明である。

貯蔵穴1土層解説

- | | |
|--------------------------|------------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子中量、炭化物・焼土粒子微量 | 3 極暗褐色 ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子中量、焼土ブロック少量 | |

貯蔵穴2土層解説

- | | |
|---------------------------|---------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子中量、炭化物・焼土粒子微量 | 3 暗褐色 ローム粒子中量 |
| 2 暗褐色 炭屑パミスブロック多量、ローム粒子中量 | 4 黒褐色 ローム粒子微量 |

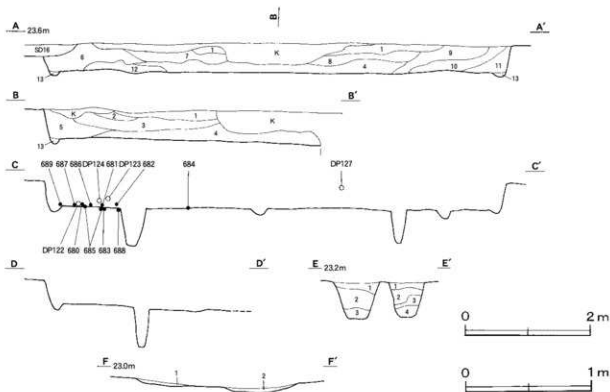
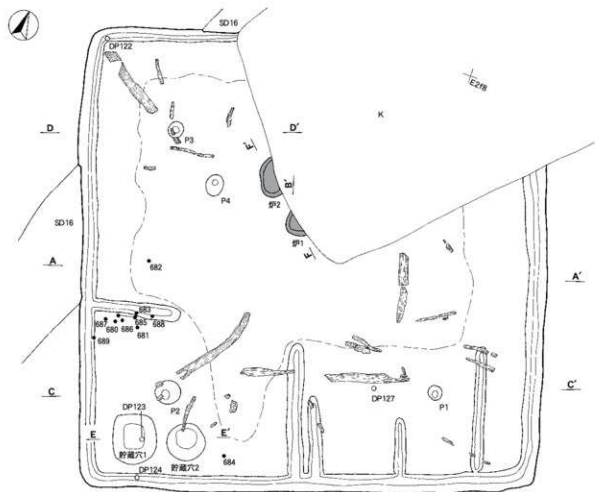
覆土 13層に分層できる。ローム土や炭化物を含み、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

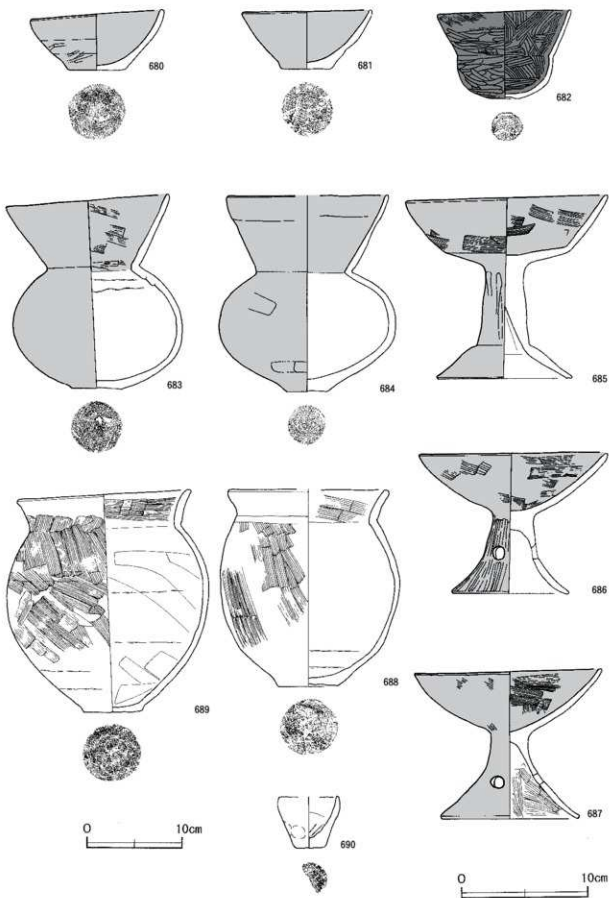
- | | |
|------------------------------|-----------------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子微量 | 8 黒褐色 ローム粒子少量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子中量 | 9 暗褐色 ローム粒子少量 |
| 3 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 10 灰褐色 ローム粒子少量 |
| 4 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子・焼土粒子微量 | 11 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量 |
| 5 極暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量 | 12 黒褐色 ローム粒子中量、炭化物少量、焼土粒子微量 |
| 6 灰褐色 ローム粒子中量、焼土粒子微量 | 13 黒褐色 ロームブロック微量 |
| 7 黒褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量 | |

遺物出土状況 土師器片954点（埴3、高坏51、甕899、ミニチュア土器1）、土製品6点（球状土鐘5、不明1）が出土している。また、混入した陶器片3点（碗）も出土している。遺物は西部の間仕切り溝と貯蔵穴周辺の覆土下層から床面にかけて出土している。680・681・683～687は全てが赤彩されており、西壁際の床面にかけて集中する傾向がみられ、遺棄されたものと考えられる。北西壁際出土の炭化材は角材で、壁に平行し、コーナー部では放射状に検出されていることから、上屋の構築材と考えられる。

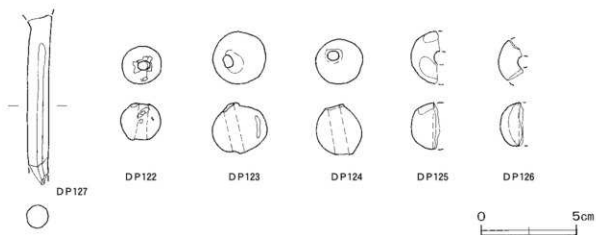
所見 一边が7mを超える大形の焼失住居で、出土土器は4世紀中葉の様相を呈している。



第125图 第55号住居跡実測图



第126图 第55号住居跡出土遺物実測図(1)



第127図 第55号住居跡出土遺物実測図(2)

第55号住居跡出土遺物観察表(第126・127図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
680	土師器	坏	10.6	4.8	4.6	長石・石英・雲母	明赤褐色	普通	体部外面ナデ 内面器面荒れ	床面	100% PL21
681	土師器	坏	10.2	4.6	4.0	長石・石英・雲母	にぶい赤褐色	普通	体部外面ナデ 内面器面荒れ	床面	90% PL21
682	土師器	埴	10.8	7.0	2.3	長石・石英・雲母	黒	普通	体部外面ハケ目調整後へラ磨き 内面へラ磨き 口縁部外面ハケ目調整後ナデ	覆土下層	80% PL24
683	土師器	埴	12.8	15.5	3.9	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	口縁部内・外面ハケ目調整後ナデ 体部外面ナデ 内面ハケ目調整後ナデ 輪縁のみ	西側什切り溝内	95% 履付量目録
684	土師器	埴 [12.8]	15.6	3.1	長石・石英	赤褐色	普通	体部・口縁部外面へラ削り後ナデ	床面	70% PL26	
685	土師器	高坏	16.0	14.5	10.6	長石	赤褐色	普通	坏部外面ハケ目調整後ナデ 内面ハケ目調整 器部外面へラ磨き後ナデ 内面ナデ	床面	100% PL27
686	土師器	高坏	14.9	11.2	9.2	長石・雲母・赤色粒子	赤	普通	坏部内・外面ハケ目調整後ナデ 器部外面へラ磨き 内面ナデ 3窓	床面	100% PL27
687	土師器	高坏	14.8	11.9	10.8	長石・石英	にぶい赤褐色	普通	坏部内・外面ハケ目調整後ナデ 器部外面ナデ 内面ハケ目調整 3窓	床面	100% PL27
688	土師器	小形甕 [12.8]	15.6	4.8	長石・石英	黒褐色	普通	口縁部外面ナデ 内面ハケ目調整後ナデ 体部外面ハケ目調整後ナデ 内面ナデ	西壁溝内	90% PL30	
689	土師器	甕	18.4	23.7	6.2	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部内・外面ハケ目調整後ナデ 体部外面ハケ目調整 内面ナデ 輪縁のみ	西壁溝内	100% PL33
690	土師器	ニシヤフ土器	[4.6]	4.1	[2.6]	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部内・外面ナデ 指頭痕	覆土中	40%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質(胎土)	特	徴	出土位置	備考
BP122	球状土埴	2.1	1.9	0.5	6.6	長石	ナデ	一方向からの穿孔	床面	
BP123	球状土埴	2.9	2.7	0.6	18.0	長石・石英・雲母	ナデ	一方向からの穿孔	覆土下層	
BP124	球状土埴	2.4	2.6	0.7	13.7	長石	丁寧なナデ	一方向からの穿孔	覆土下層	
BP125	球状土埴 (2.8)	2.4	(0.6)	(8.0)	長石・石英・雲母	ナデ	一方向からの穿孔	片側欠損	覆土中	
BP126	球状土埴 (1.3)	2.3	(0.5)	(4.6)	長石・石英	ナデ	一方向からの穿孔	片側欠損	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質(胎土)	特	徴	出土位置	備考
BP127	不明	(9.0)	(1.4)	1.2	(17.2)	長石・雲母	ナデ	棒状	覆土上層	

第56号住居跡(第122図)

位置 調査区北部のF2e4区、標高23.2mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第54号住居に掘り込まれている。

規模と形状 大部分が調査区域外に延び、また、第54号住居の重複を受けていることから、南北軸は1.68m、東西軸は1.27mだけが確認されている。東壁や柱穴から主軸方向はN-24°Wと推測される。残存している壁高は22cmである。

床 ほぼ平坦である。

ピット 深さは8cmで、規模が浅く、性格は不明である。

覆土 5層に分層できる。ローム土や炭化物を含み、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

11 黒色	ローム粒子微量	14 黒褐色	ロームブロック微量
12 暗褐色	ローム粒子微量	15 褐色	ロームブロック少量
13 暗褐色	ロームブロック微量		

遺物出土状況 土師器片9点(埴1, 甕8)が出土しているが、細片で図示できない。

所見 出土土器も少ないため、詳細な判定は困難であるが、土師器片は前期の様相を呈していることから、時期は前期と考えられる。

第57号住居跡 (第128図)

位置 調査区北部のF2f9区、標高23.5mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第538号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.75m、短軸4.21mの長方形で、主軸方向はN-28°-Wである。壁高は15cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、壁際を除いた範囲が踏み固められている。

炉 北部の中央に位置している。長径74cm、短径68cmの楕円形で、床面をわずかに掘りくぼめて炉床とした地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

伊土層解説

1 暗赤褐色	焼土ブロック・炭化物・ローム粒子微量
--------	--------------------

ピット 6か所。P1～P3は深さ8～14cmで、配置から主柱穴の可能性はあるが、規模が小さく判然としにくい。P4は深さ18cmで、南壁際の中央部に位置することから、出入り口施設に伴うピットである。P5は深さ20cm、P6は深さ7cmで、性格は不明である。

貯蔵穴 南西部に付設されている。径60cmの円形で、深さは54cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。覆土は人為堆積の状況を示している。

貯蔵穴土層解説

1 暗褐色	ロームブロック少量	3 暗褐色	ロームブロック微量
2 黒褐色	ロームブロック微量		

覆土 4層に分層できる。第2・4層には炭化物が微量に含まれ、レンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

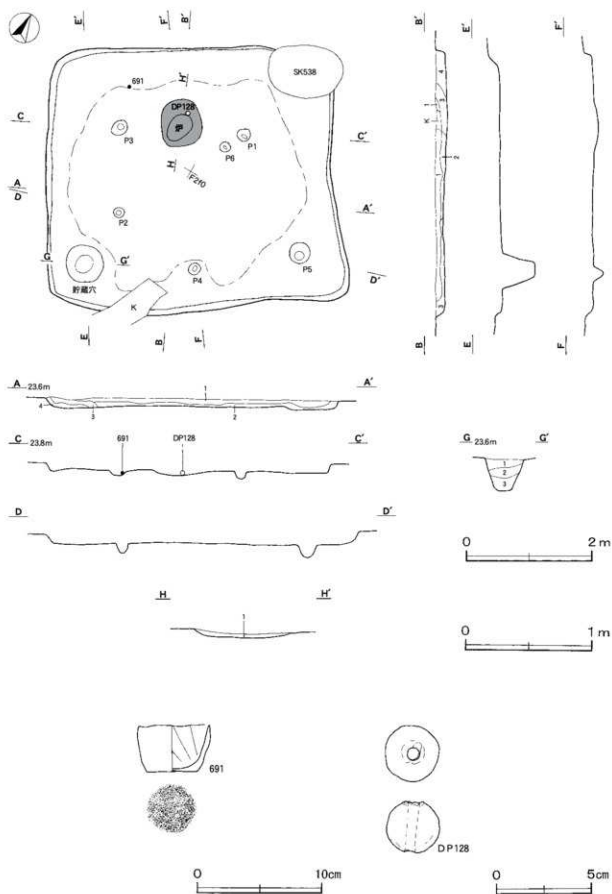
土層解説

1 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子微量	3 暗褐色	ロームブロック少量
2 黒褐色	炭化物・ローム粒子・焼土粒子微量	4 暗褐色	炭化物・焼土粒子少量、ローム粒子微量

遺物出土状況 土師器片123点(埴1, 甕120, ミニチュア土器2), 土製品1点(球状土錘)が出土している。

遺物は細片が多く、図示できた遺物は少ない。691は北部床面、DP128は炉の火床面からそれぞれ出土している。

所見 出土土器も少ないため、詳細な判定は困難であるが、4世紀後葉と考えられる。西約10mに位置する第54号住居跡と主軸方向がほぼ同じである。



第128图 第57号住居跡・出土遺物実測図

第57号住居跡出土遺物観察表（第128図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
691	土師器	ミチブツ土器	5.6	3.7	4.0	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐色	普通	体部外面ナデ 内面ヘラナデ	床面	95% PL36

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質(胎土)	特	徴	出土位置	備考
DP129	球状土埴	3.0	2.7	0.6	21.0	長石・雲母	丁寧なナデ	一方向からの穿孔	炉内	

第58号住居跡（第129・130図）

位置 調査区北部のF 2 d8区、標高23.4mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第109号墓坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.35m、短軸4.75mの長方形で、主軸方向はN-41°-Eである。壁高は17~24cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、炉を中心とした中央部が踏み固められている。

炉 2か所。炉1は中央部よりやや南寄り、炉2は中央部に位置している。炉1は長軸124cm、短軸84cmの不定形、炉2は径50cmの円形である。いずれも床面をわずかに掘りくぼめて炉床とした地床炉で、炉床面は火を受けて赤変硬化している。新旧関係は不明である。

炉1土層解説

- 1 極暗赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子微量 2 に灰褐色 焼土ブロック少量

炉2土層解説

- 1 極暗赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子微量

ピット 4か所。P1~P3は深さ5~12cmで、規模において規則性を欠いているが、配置から柱穴の可能性がある。P4は深さ10cmで、貯蔵穴の可能性もあるが、規模が小さく、性格は不明である。

貯蔵穴 南東部の壁際に付設されている。長軸104cm、短軸66cmの長方形で、深さは44cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。覆土は人為堆積の状況を示している。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量 3 暗褐色 ロームブロック微量
2 暗褐色 ローム粒子少量

覆土 4層に分層できる。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

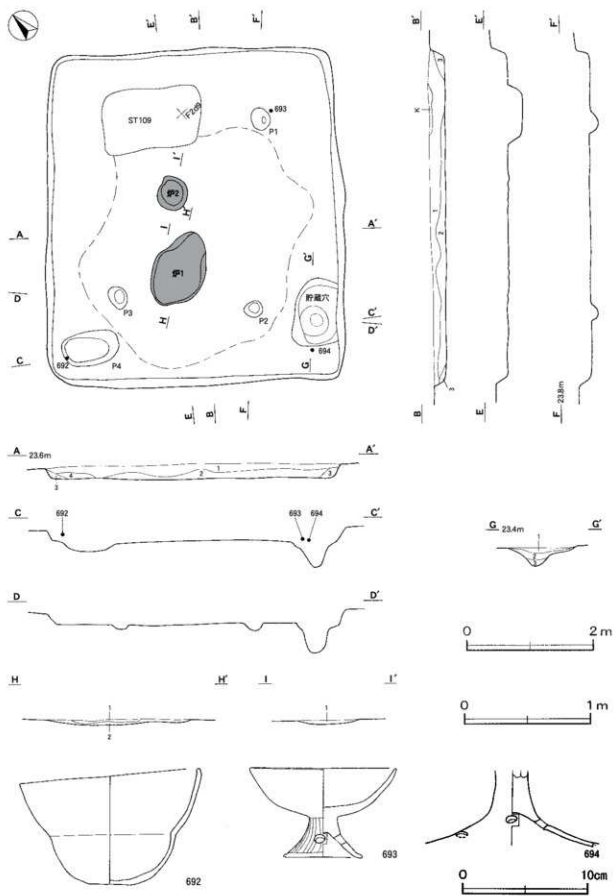
土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量 3 褐色 ロームブロック少量
2 黒褐色 ロームブロック微量 4 暗褐色 ロームブロック微量

遺物出土状況 土師器片298点（埴2、高坏12、甕284）、土製品1点（人面土製品カ）が覆土下層から出土している。692は西壁際、693は北東部の覆土下層、694は南東コーナー部の床面からそれぞれ出土している。

DP129は覆土中から出土している。遺物は壁際付近の覆土中層から下層にかけて出土しており、そのほとんどが細片であり、廃絶後の埋没過程で廃棄されたものと考えられる。

所見 出土した土師器片は4世紀中葉の様相を呈しており、廃絶時期とそれほど差がないものと考えられる。



第129图 第58号住居跡・出土遺物実測図



第130図 第58号住居跡出土遺物実測図

第58号住居跡出土遺物観察表 (第129・130図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
692	土師器	埴	14.3	9.3	2.5	長石・石英・赤色 粒子	明褐色	普通	体部内・外面ナデ	覆土下層	70% PL24
693	土師器	高坏	11.6	7.1	6.2	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	坏部内・外面ナデ 脚部外面ヘラナデ 内面ナデ 3箇所	覆土下層	70%
694	土師器	高坏	—	(6.0)	—	長石・石英・赤色 粒子	にぶい黄褐色	普通	脚部外面 ナデ 坏部内・外面ナデ 6箇所	床面	20%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質(胎土)	特 徴	出土位置	備考
DP129	人面土 製品カ	3.2	2.7	1.3	3.8	長石	ナデ	覆土中	

第96号住居跡 (第131・132図)

位置 調査区北部のF3e1区、標高23.4mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第1号方形竪穴遺構、第4号ピット群に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.93m、短軸4.88mの方形で、主軸方向はN-39°-Wである。壁高は22~25cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部から西部にかけて踏み固められている。

炉 2か所。炉1は北部、炉2は東部に位置している。炉1は長径54cm、短径42cmの楕円形、炉2は長径56cm、短径22cmの楕円形で、いずれも床面をわずかに掘りくぼめて炉床とした地床炉で、炉床面は火を受けて赤変硬化している。新旧関係は不明である。

炉1土層解説

1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量

炉2土層解説

1 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量

ピット 4か所。P1~P4は深さ50~70cmで、規模と配置から主柱穴である。

貯蔵穴 南西コーナー部に付設されている。径60cmの円形で、深さは30cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。覆土は人為堆積の状況を示している。

貯蔵穴土層解説

1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 3 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

2 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

覆土 6層に分層できる。ローム土や炭化粒子を含み、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量 4 黒褐色 ロームブロック微量

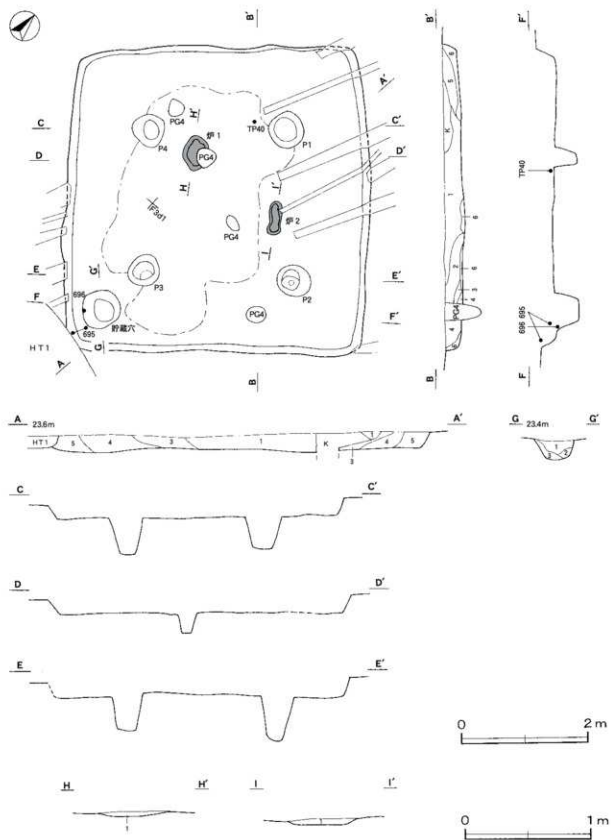
2 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量 5 黒褐色 ローム粒子微量

3 暗褐色 ロームブロック少量 6 暗褐色 ロームブロック中量

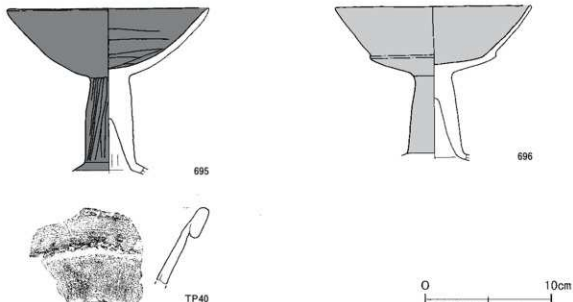
遺物出土状況 土師器片595点(高坏17, 甕578)が出土している。696は貯蔵穴の覆土上層、695は南西コーナー部の覆土下層と上層から出土した破片が接合したものである。土師器片は、細片が多く覆土中に散在する

状態で出土していることから、廃絶後に廃棄されたものと考えられる。

所見 出土した土師器片は、4世紀後葉の様相を呈しており、北西へ約5mに位置する第99号住居跡とほぼ同じ主軸方向をとる。



第131図 第96号住居跡実測図



第132図 第96号住居跡出土遺物実測図

第96号住居跡出土遺物観察表 (第132図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考
695	土師器	高坏	16.0	(13.1)	—	長石・石英	灰黄褐色	普通	坏部外面ナデ 内面ヘラナデ 脚部外面ヘラ磨き	礎土下層	70%
696	土師器	高坏	15.7	(12.2)	—	長石・石英	橙	普通	坏部内・外面ナデ 脚部内・外面ナデ	貯蔵穴内	70%
TP40	土師器	蓋	—	(6.0)	—	長石・石英・雲母	にぶ黄褐色	普通	口縁部外面ヘケ目調整後ナデ 内面ヘラ磨き 折り返し口縁	礎土下層	5% P1.37

第97号住居跡 (第133・134図)

位置 調査区北部のF3e4区、標高23.5mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸4.78m、短軸4.18mの長方形で、主軸方向はN-85°-Eである。壁高は12~16cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、壁際を除いて広い範囲が踏み固められている。

炉 2か所。中央部に位置している。炉1は長径48cm、短径40cmの楕円形、炉2は長径36cm、短径28cmの楕円形で、いずれも床面をわずかに掘りくぼめて炉床とした地床炉で、炉床面は火を受けて赤変硬化している。新旧関係は不明である。

炉1・2土層解説

1 暗赤褐色 焼土ブロック少量

2 にぶ赤褐色 焼土ブロック少量

貯蔵穴 南東コーナー部に付設されている。一部攪乱を受けているが、径80cmの円形と推測され、深さは30cmである。底面は皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。堆積状況は不明である。

貯蔵穴土層解説

1 黒褐色 炭化物・ローム粒子微量

2 黒褐色 ローム粒子少量

覆土 2層に分層できる。層厚が薄いため堆積状況は不明である。

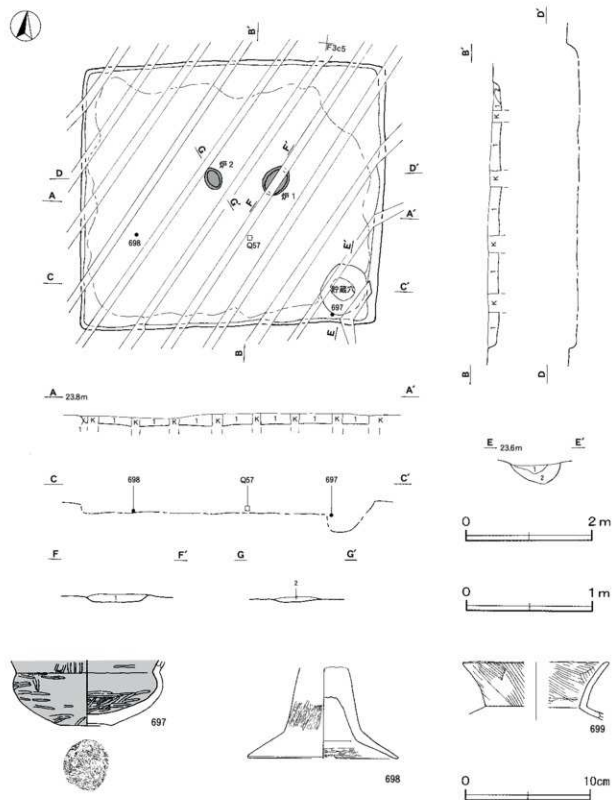
土層解説

1 黒褐色 ロームブロック微量

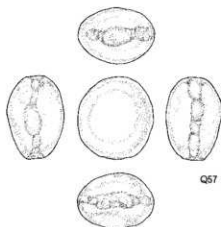
2 暗褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片161点（坏1, 高坏16, 壺1, 甕143）が出土している。また、流れ込んだ陶器片4点も出土している。697は南壁際, 698は西部の床面からそれぞれ出土している。

所見 出土した土師器片は, 4世紀後葉の様相を呈しており, 北約20mに位置する第27・30号住居跡とほぼ同じ主軸方向をとる。



第133図 第97号住居跡・出土遺物実測図



第134図 第97号住居跡出土遺物実測図



0 10cm

第97号住居跡出土遺物観察表 (第133・134図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考
697	土師器	坏	—	(5.2)	3.8	長石・石英・雲母・赤色粒子	赤	普通	体部外面ハケ目調整後ヘラ磨き 内面ヘラ磨き 口縁部内・外面ハケ目調整後ヘラ磨き	床面	70%・PL22
698	土師器	高坏	—	(7.1)	[6.0]	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	脚部外面ハケ目調整後ナデ 内面ナデ 口縁部外面ナデ 内面ハケ目調整後ナデ	床面	25%
699	土師器	壺	[11.6]	(4.6)	—	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部内・外面ハケ目調整	覆土中	18%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特	徴	出土位置	備考
Q57	磨石	6.6	6.1	4.4	230	砂岩	全面研磨痕	側面に敲打痕	覆土下層	
Q58	底石	(7.9)	(2.8)	(2.4)	(61.9)	凝灰岩	紙面4面	両側欠損	覆土中	

第98号住居跡 (第135・136図)

位置 調査区北部のF3b2区、標高23.5mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第510号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.85m、短軸3.80mの方形で、主軸方向はN-33°-Wである。壁高は16~25cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、壁際を除いて広い範囲が踏み固められている。

炉 2か所。炉1は北西部、炉2は中央部に位置している。炉1は径30cm、炉2は径42cmの円形で、床面をわずかに掘りくぼめて炉床とした地床炉である。いずれも炉床面は火を受けて赤変硬化しており、規模等から同時に機能していた可能性が高い。

炉1・2土層解説

1 黒 褐色 焼土ブロック・ローム粒子中量

貯蔵穴 南西コーナー部に付設されている。一部視乱を受けているが、長径56cm、短径50cmの楕円形と推測され、深さは34cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。覆土は人為堆積の状況を示している。

貯蔵穴土層解説

1 黒 褐色 ロームブロック微量

2 黒 褐色 ローム粒子少量

覆土 2層に分層できる。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

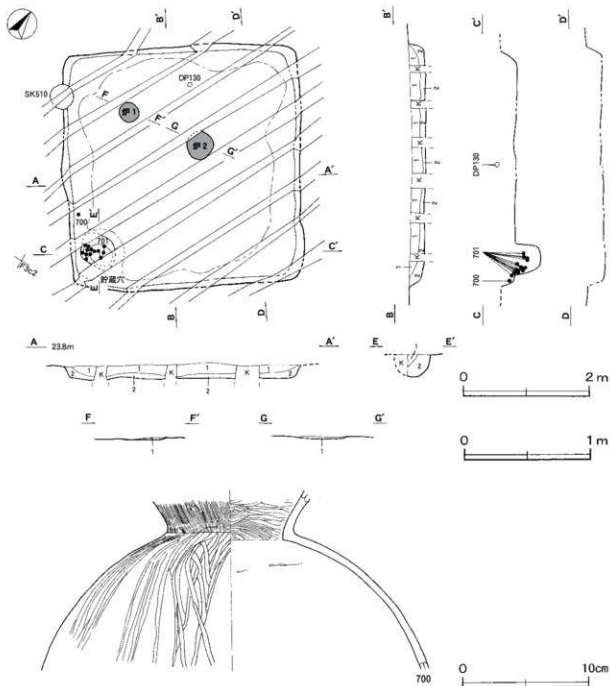
土層解説

1 黒 褐色 ロームブロック・焼土粒子微量

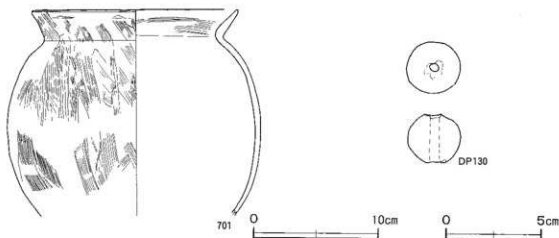
2 黒 褐色 焼土粒子少量、ロームブロック微量

遺物出土状況 土師器片238点（坏3，埴5，高坏1，壺1，甕225，ミニチュア土器3），土製品1点（球状土錘）が出土している。700は西壁際の覆土下層，701は貯蔵穴の覆土上層から中層にかけて出土した破片が接合したものである。細片が多く，その他の土師器片は覆土中に散在する状態で出土していることから，廃絶後に廃棄されたものと考えられる。

所見 出土した土師器片は4世紀前葉の様相を呈しており，東約3mに位置する第45号住居跡と主軸方向はほぼ同じである。



第135図 第98号住居跡・出土遺物実測図



第136図 第98号住居跡出土遺物実測図

第98号住居跡出土遺物観察表 (第135・136図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
700	土師器	壺	—	(14.1)	—	長石・石英・雲母	明褐色	普通	口縁部外面ハケ目調整 内面へラ磨き 体部外面へラ磨き	覆土下層	40%
701	土師器	甕	16.4	(16.3)	—	長石・石英・雲母	褐色	普通	口縁部外面ハケ目調整ナゲ 内面ハケ目調整 体部外面ハケ目調整後ナゲ 内面磨き白	貯蔵穴内	60%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質(胎土)	特	徴	出土位置	備考
DP130	球状土師	2.8	2.6	0.5	19.0	長石・雲母	丁寧なナゲ	一方向からの穿孔	覆土上層	

第99号住居跡 (第137・138図)

位置 調査区北部の12b9区、標高23.5mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第101号住居跡を掘り込み、第507・511・512号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.32m、短軸4.72mの方形で、主軸方向はN-35°-Wである。壁高は38cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、炉を中心とした中央部が踏み固められている。

炉 中央部に位置している。南北軸100cm、東西軸66cmの不定形で、床面を5cmほど掘りくぼめて炉床とした地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 極暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量 2 赤褐色 焼土粒子多量

貯蔵穴 南西部に付設されている。長径90cm、短径56cmの楕円形で、深さは37cmである。底面は平坦で、壁は西側が階段上に立ち上がっている。覆土は人為堆積の状況を示している。

貯蔵穴土層解説

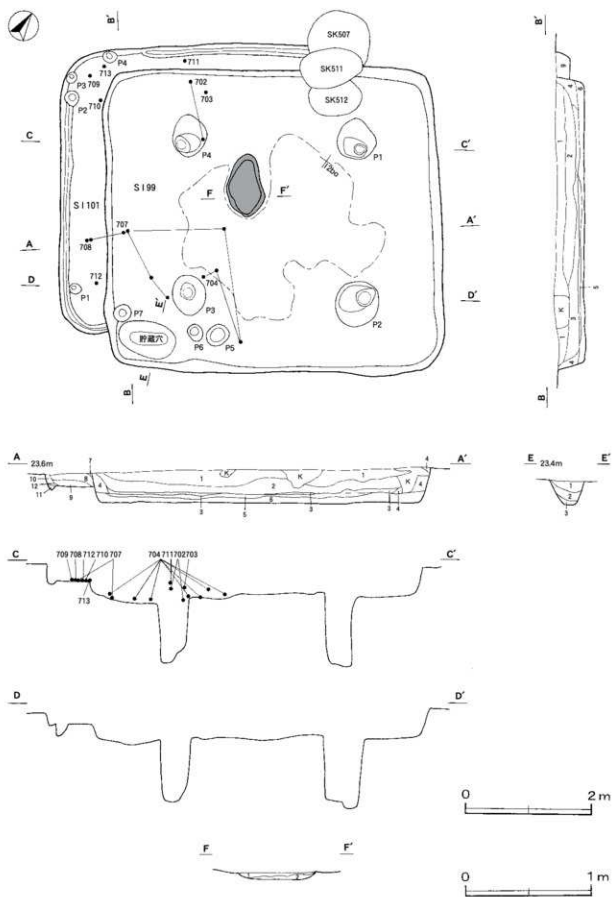
- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 3 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
2 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

ピット 7か所。P1～P4は深さ99～120cmで、規模と配置から主柱穴である。P5～P7は深さ12～28cmで、性格は不明である。

覆土 6層に分層できる。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

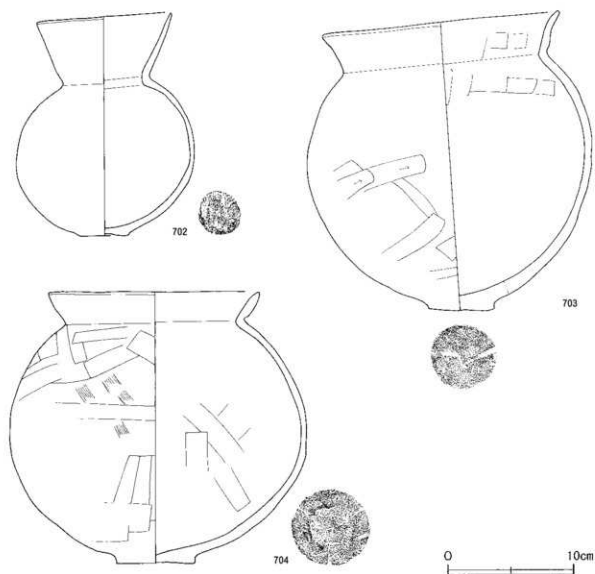
- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量 4 黒褐色 ロームブロック微量
2 黒褐色 ローム粒子少量 5 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量
3 極暗褐色 ローム粒子少量 6 極暗褐色 ロームブロック少量



第137图 第99·101号住居跡実測图

遺物出土状況 土師器片927点（坏19，埴51，高坏19，甕838）が出土している。また、流れ込んだ縄文土器片3点（深鉢）も出土している。遺物は北西部と南西部の覆土下層から床面にかけて出土している。702・703は北西部の覆土下層，704は南西部の床面から出土しており，702・704は出土した破片が接合したものである。その他の土師器片は，細片が多く覆土中に散在する状態で出土していることから，廃絶後に廃棄されたものと考えられる。第101号住居跡の707と接合した破片は，西壁際床面から出土しており，第101号住居跡との重複部分にあったもので，周堤帯などにあったものが，本跡の埋没過程で流れ込んだものと考えられる。

所見 第101号住居跡と規模や形状がほぼ同一であることや，出土した土器が第101号住居と差がみられないことから，本跡は第101号住居跡からの建替後の住居と判断した。時期は第101号住居跡とほぼ同時期の4世紀前半と考えられる。



第138図 第99号住居跡出土遺物実測図

第99号住居跡出土遺物観察表（第138図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
702	土師器	埴	10.7	17.7	3.7	長石・石英・赤色 粒子	にんい黄緑	普通	口縁部内・外面ナデ 体部内・外面ナデ	覆土下層	90% PL26
703	土師器	甕	18.8	24.0	5.2	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部内・外面ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ナデ	覆土下層	100% 煤付着P1.33
704	土師器	壺	16.8	21.7	6.2	長石・石英・雲母	にんい黄緑	普通	口縁部内・外面ヘラナデ 体部外面ハケ目調整後ヘラナデ 内面ヘラナデ	床面	80% 煤付着P1.33

第100号住居跡（第139・140図）

位置 調査区北部のF3e2区、標高23.4mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第1号方形竪穴遺構に掘り込まれている。

規模と形状 長軸6.31m、短軸6.30mの方形で、主軸方向はN-20°-Wである。壁高は60cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、壁際と柱穴を除く広い範囲が踏み固められている。壁溝が全周している。

炉 北部の中央に位置している。長径130cm、短径70cmの楕円形で、床面を5cmほど掘りくぼめて炉床とした地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

伊土層解説

1 埴 褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子微量

ピット 10か所。P1～P4は深さ48～102cmで、規模と配置から主柱穴である。P5・P10とも深さ20cmで、南壁側のほぼ中央部に位置することから、出入り口施設に伴うピットである。P6～P9は深さ7～55cmで、性格は不明である。

貯蔵穴 南西コーナー部に付設されている。長軸84cm、短軸54cmの長方形で、深さは44cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。覆土は人為堆積の状況を示している。

貯蔵穴土層解説

1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

4 黒褐色 ロームブロック微量

2 暗褐色 ロームブロック少量

5 黒褐色 ローム粒子微量

3 暗褐色 ローム粒子少量

6 黒褐色 ローム粒子少量

覆土 10層に分層できる。自然堆積の堆積状況を呈している。

土層解説

1 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

6 明褐色 ローム粒子多量

2 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

7 黒褐色 ローム粒子多量

3 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

8 褐色 ローム粒子多量

4 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

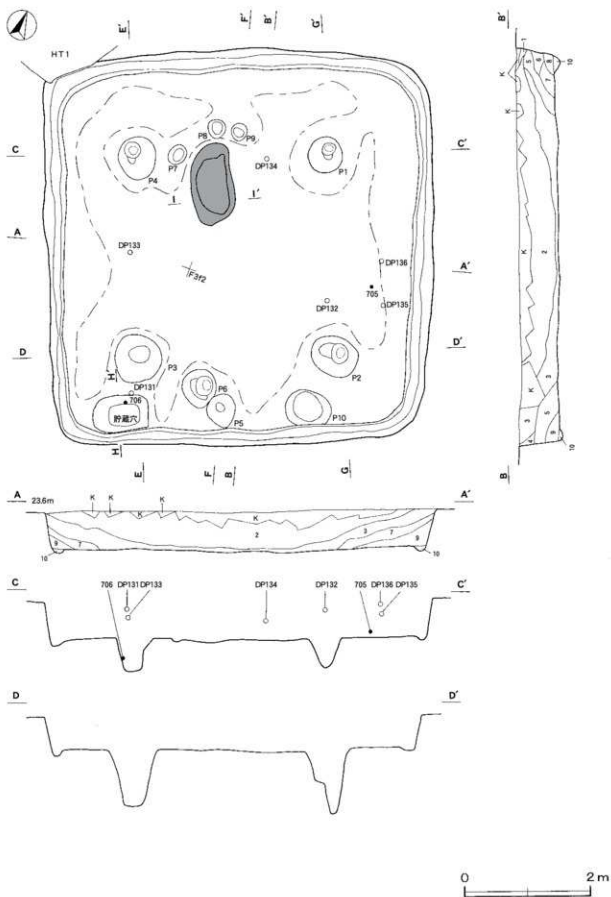
9 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

5 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

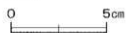
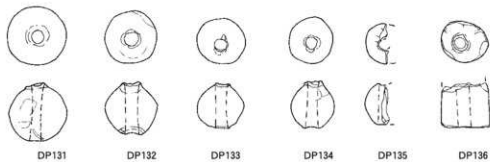
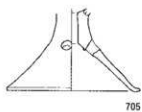
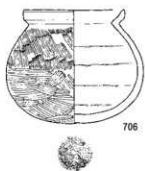
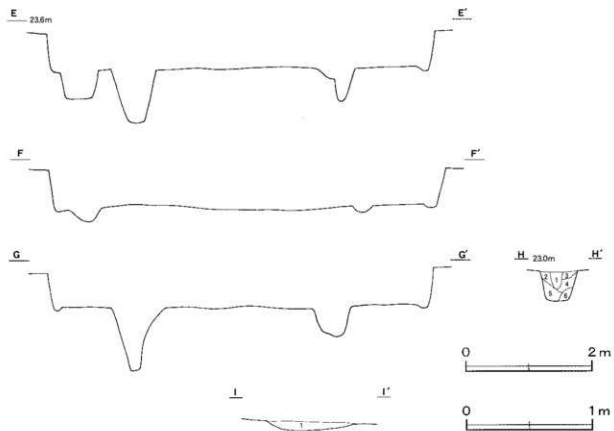
10 暗褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片1,504点（埴55、器台8、高坏10、壺1、甕1,425、ミニチュア土器5）、土製品6点（球状土鍾5、管状土鍾1）が出土している。705は東部の覆土下層、706は貯蔵穴の覆土中層からそれぞれ出土しており、出土状況から706は廃絶時に遺棄されたものと考えられる。その他の土師器片は、細片が多く覆土中に散在する状態で出土している。また、球状土鍾が覆土上層から中層にかけて出土しており、廃絶後の産地に投げ込まれた可能性が高い。

所見 出土した土師器片は細片が多く、接合関係があまりみられないことから、廃絶後の埋没過程で投棄したものと想定される。時期は、貯蔵穴内の出土土器から、4世紀中葉と考えられる。



第139图 第100号住居跡実測图



第140图 第100号住居跡・出土遺物実測図

第100号住居跡出土遺物観察表 (第140図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
705	土師器	器台	—	(6.6)	10.6	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	脚部内・外面ナデ 3窓	覆土下層	40%
706	土師器	壺	8.0	9.0	2.6	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐色	普通	口縁部内・外面ナデ 体部外面下位ハケ目調整後ヘラ磨き 上位ハケ目調整 内面ヘラナデ輪積み痕	貯蔵穴内	100% P1.29

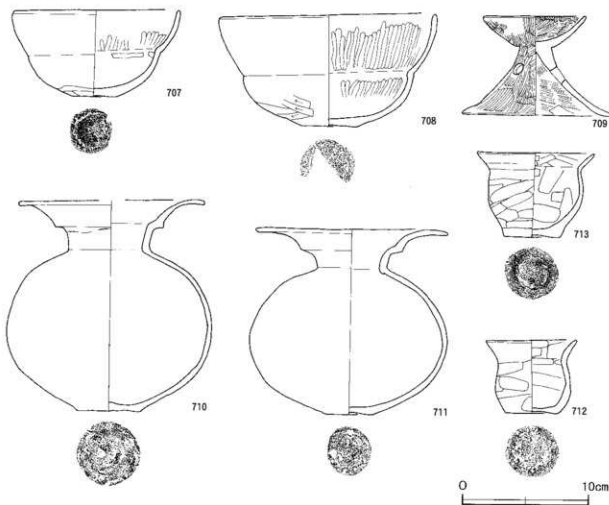
番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質(胎土)	特 徴		出土位置	備考
BF131	球状土埴	3.1	3.1	0.6	25.6	長石	丁寧なナデ	一方方向からの穿孔	覆土上層	
BF132	球状土埴	2.8	2.8	0.7	17.4	長石・石英・雲母・赤色粒子	丁寧なナデ	一方方向からの穿孔	覆土上層	
BF133	球状土埴	2.5	2.4	0.6	11.9	長石・石英・礫	丁寧なナデ	一方方向からの穿孔	覆土中層	
BF134	球状土埴	2.4	2.5	0.7	11.7	長石・石英・雲母	丁寧なナデ	一方方向からの穿孔	覆土中層	
BF135	球状土埴	(1.3)	2.2	(0.6)	(4.5)	長石・石英	ナデ	一方方向からの穿孔 片側欠損	覆土上層	
BF136	管状土埴	2.5	(2.4)	0.8	(16.5)	長石・雲母	ナデ	一方方向からの穿孔 一部欠け	覆土上層	

第101号住居跡 (第137・141図)

位置 調査区北部の12b9区、標高23.4mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第99号住居、第507・511・512号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 大部分が第99号住居に掘り込まれているため、南北軸は3.95m、東西軸4.48mだけが確認されている。北・西壁から主軸方向はN-34°-Wと推測される。残存している壁高は20cmである。



第141図 第101号住居跡出土遺物実測図

床 ほぼ平坦と推測される。北・西壁際で壁溝が確認されている。

ピット 4か所。P1～P4は深さ8～28cmで、規則性はないが、壁柱穴の可能性がある。

覆土 6層に分層できる。ローム土や炭化物を含み、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

7 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子微量	10 黒褐色	ローム粒子微量
8 黒褐色	ローム粒子少量、炭屑バニス粒子微量	11 暗褐色	ロームブロック少量
9 暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	12 暗褐色	ローム粒子少量

遺物出土状況 土師器片171点（増4，器台1，高坏1，甕2，甕161，ミニチュア土器2）が出土している。遺物は残存している西部や北部の床面から出土している。711は北壁際，709・710・713は北西部，707・708・712は西部の床面からそれぞれ出土しており，707は第99号住居の西壁際床面から出土した破片と接合関係が認められた。これらの遺物は接合関係も多数認められることから，廃絶時または直後に廃棄されたものと考えられる。

所見 大部分が重複を受けているため，住居の詳細な判定は困難であるが，規模や主軸方向が第99号住居跡とほぼ同一で，出土土器にさほど差がみられないことから，本跡は第99号住居の建替前の住居と推測される。時期は第99号住居跡とほぼ同じ4世紀前葉と考えられる。

第101号住居跡出土遺物観察表（第141図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考
707	土師器	埴	13.2	7.0	3.4	長石・石英	にじみ黄緑	普通	口縁部外面ナデ 内面ヘラ磨き 体部外面ナデ 内面ヘラ磨き	床面	60% PL24
708	土師器	埴	17.2	9.1	4.4	長石・石英・雲母	にじみ橙	普通	口縁部外面ナデ 内面ヘラ磨き 体部外面ヘラ磨き 内面ヘラ磨き	床面	60%
709	土師器	器台	8.1	8.0	11.7	長石・石英	明赤褐	普通	交差内・外面ヘラ磨き 即原外面ハケ目調 裏面ヘラ磨き 内面ハケ目調 裏面ナデ3煎	床面	90%
710	土師器	甕 [14.8]	16.9	5.0	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部内・外面ナデ 体部内・外面ナデ	床面	90% PL29	
711	土師器	甕	15.2	14.8	3.6	長石・石英	にじみ黄緑	普通	口縁部内・外面ナデ 体部内・外面ナデ	覆土中層	90% PL29
712	土師器	ミニチュア土器	7.2	5.9	4.2	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	体部内・外面ナデ	床面	100% PL36
713	土師器	ミニチュア土器	9.2	6.7	4.4	長石・石英・雲母	にじみ黄緑	普通	体部内・外面ナデ 口縁部内・外面ナデ	床面	90% PL36

第103号住居跡（第142図）

位置 調査区北部のD3g7区，標高23.0～23.3mの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 長軸6.10m，短軸5.68mの方形で，主軸方向はN-24°-Wである。壁高は12～30cmで，外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。中央部から焼土塊が検出されている。

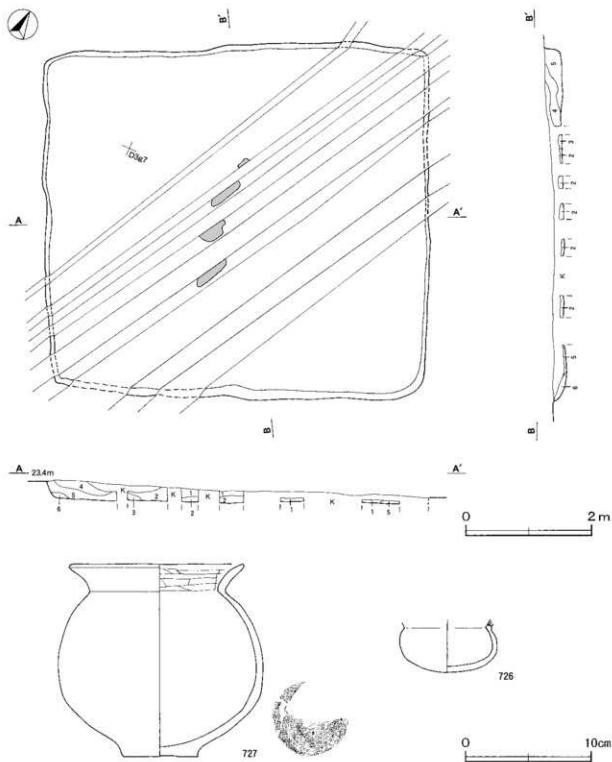
覆土 6層に分層できる。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

1 黒褐色	ロームブロック微量	4 暗褐色	ロームブロック少量
2 黒褐色	ロームブロック少量	5 黒褐色	ロームブロック少量，焼土粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック微量	6 暗褐色	ロームブロック少量，焼土粒子微量

遺物出土状況 土師器片84点（増1，高坏12，甕71）が出土している。また，混入した陶器片3点も出土している。726・727は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は，出土土器から前期と考えられる。



第142図 第103号住居跡・出土遺物実測図

第103号住居跡出土遺物観察表 (第142図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
726	土師器	埴	—	(4.2)	—	長石・石英	にぶい地	普通	体部外面ナデ 内面器面荒れ	覆土中	70% 残存量
727	土師器	小形甕	13.8	15.3	6.0	長石・石英	橙	普通	体部外面器面荒れ 内面ナデ 口縁部外面ナデ 内面ヘラナデ	覆土中	60% 残存量

表3 古墳時代整穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁構	内部施設					礎土	主な出土遺物	時期	備考 重複関係 (古→新)	
								土柱	土間 (土)	ピット	伊 土	石 礎					
1	G 2 e4	N-18°-W	[方形・ 長方形]	(2.88) × (2.87)	20~28	平垣	-	1	-	1	-	-	人為	土師器、土製品	前期		
2	G 2 e6	N-3°-E	[方形・ 長方形]	(3.48) × (1.97)	30~39	平垣		1	1				人為	土師器、土製品	前期		
3	G 2 i6	N-16°-E	方形	5.98×5.70	36	平垣	全周	3	1	5	1	2	人為	土師器、土製品	中葉	S14→本跡	
4	G 2 g7	N-27°-W	[方形]	5.22×(4.62)	18~20	平垣	一部	2	1	2	1	-	人為	土師器、土製品	中葉	本跡→S13	
5	G 2 i0	N-6°-W	[方形]	4.20×(4.12)	4	平垣	(全周)	-	-	3	1	1	不明	土師器	前期		
6	H 3 a3	N-6°-W	方形	8.35×8.02	30~40	平垣	(全周)	4	1	7	2	1	人為	土師器、土製品、 金属製品、石器	中葉	本跡→S19	
7	H 3 a5	N-16°-W	[方形・ 長方形]	(3.06) × (2.35)	20~28	平垣	-	-	-	-	-	-	人為	土師器	前期	本跡→SD10	
8	H 3 i6	N-5°-W	[方形・ 長方形]	(1.41) × (0.95)	22~31	平垣	-	-	-	-	-	-	人為	土師器	前期		
9	H 3 b4	N-21°-E	方形	4.89×4.85	34~42	平垣	一部	4	1	-	1	-	人為	土師器、土製品	中葉	S16→本跡→ SD10	
10	G 2 i7	N-17°-W	方形	5.56×5.26	8~12	平垣	-	4	1	-	2	1	人為	土師器	前期		
11	H 2 a8	N-25°-W	方形	6.68×6.62	40~46	平垣	全周	4	1	2	1	1	自然	土師器、土製品、 石製品	中葉		
12	H 2 i0	N-16°-W	長方形	4.23×3.67	8~10	平垣	一部	4	1	5	1	-	不明	土師器	前期		
13	H 3 a4	N-4°-W	長方形	6.14×5.34	24~40	平垣	全周	4	1	2	2	-	人為	土師器、土製品	中葉		
14	H 3 d1	N-24°-E	方形	4.44×4.23	14~28	平垣	一部	3	1	3	2	1	人為	土師器	中葉		
15	G 2 i3	N-5°-W	[方形・ 長方形]	4.85×(2.08)	40~55	平垣	(全周)	2	-	-	-	-	人為	土師器	前期	本跡→SD12	
16	G 2 i5	-	方形	4.33×4.33	16~26	平垣	[注] 全周	4	1	1	1	-	人為	土師器	中葉	本跡→SD12	
17	G 2 j3	N-2°-W	方形	5.92×5.88	40~46	平垣	全周	4	-	8	1	-	人為	土師器、土製品、 石製品	中葉	本跡→SD12	
18	D 2 e7	N-16°-W	[方形]	4.52×(4.18)	10~20	平垣	-	3	-	2	-	-	人為	土師器	中葉	SK91→本跡→ SK40	
19	H 2 e6	N-14°-W	方形	5.64×5.61	20~30	平垣	全周	3	1	4	-	-	自然	土師器、土製品	中葉	S120→本跡	
20	H 2 d7	N-21°-W	方形	3.59×3.28	15~20	平垣	[注] 全周	3	1	1	1	-	人為	土師器	前期	本跡→S119	
21	I 2 a1	N-44°-W	[方形]	(4.20) × (3.50)	50~52	平垣	(半周)	-	-	1	1	1	自然	土師器、須恵 器、石製品	中葉		
22	I 2 e1	N-56°-E	長方形	4.52×3.56	36	平垣	一部	-	-	-	罹	1	1	自然	土師器、須恵 器、石製品	末	
23	I 2 e5	N-46°-E	長方形	4.86×4.20	45~54	平垣	一部	-	-	2	罹	1	1	自然	土師器、石器	末	本跡→SD 3
24	D 2 i9	N-34°-W	[方形・ 長方形]	(5.89) × (3.74)	25	平垣	-	1	-	-	-	1	人為	土師器、石器	中葉		
25	D 3 j1	N-29°-W	[方形・ 長方形]	(5.78) × (5.16)	15	平垣	-	3	1	1	1	1	人為	土師器	中葉	本跡→SD13	
26	E 3 a9	N-1°-W	[方形・ 長方形]	(3.89) × (2.27)	34~42	平垣	-	2	-	-	1	-	人為	土師器	前期	本跡→ ST90、SD14	
27	E 3 i7	N-2°-W	長方形	5.37×4.71	38	平垣	-	4	1	1	3	1	人為	土師器、金属製 品	中葉	本跡→S132、 ST91~93	
28	E 3 g5	N-42°-E	方形	2.32×2.25	20~27	平垣	-	-	-	1	-	-	人為	土師器	前期		
29	E 2 i0	N-20°-W	方形	6.48×6.32	27	平垣	全周	-	-	8	1	2	人為	土師器、土製品、 金属製品	中葉		
30	E 3 i3	N-2°-W	長方形	4.45×3.75	24	平垣	-	3	-	2	1	-	人為	土師器	中葉		
31	E 2 e6	N-28°-W	[方形・ 長方形]	3.80×(3.12)	26	平垣	-	2	1	6	-	-	自然	土師器	中葉	本跡→SD11、 SD12	
32	E 3 g7	N-29°-E	方形	3.38×3.33	38	平垣	-	-	-	1	1	-	人為	土師器	前期	S127→本跡→ ST92	
33	G 3 e6	N-6°-E	[方形・ 長方形]	6.08×(2.90)	40	平垣	-	2	1	-	1	-	自然	土師器、土製品	中葉	本跡→SD17	
34	G 3 e5	N-27°-E	方形	3.66×3.36	8	平垣	-	4	-	1	1	-	不明	土師器	中葉		
35	G 3 d3	N-17°-W	方形	3.94×3.71	15~20	平垣	-	4	1	-	1	1	不明	土師器	前期	本跡→SK524	
36	G 3 f4	N-26°-E	方形	2.69×2.59	22~28	平垣	-	4					自然	土師器	前期		
37	G 3 i3	N-64°-W	方形	4.52×4.35	5~10	平垣	-	4	1	1	1	-	不明	土師器	前期	本跡→ST99- 102	
38	G 2 n3	N-29°-W	[方形]	3.57×(3.48)	42~48	平垣	(全周)	3	-	-	1	1	人為	土師器、土製品	中葉	本跡→SD17	
39	F 3 i2	N-42°-W	方形	3.82×3.77	10~15	平垣	-	4	-	1	1	-	人為	土師器、石器	中葉		
40	G 3 f1	N-44°-W	隅丸方形	6.76×6.55	50~56	平垣	(全周)	4	1	-	1	1	自然	土師器、土製品	中葉		
41	G 3 d1	N-18°-E	方形	6.32×6.24	30~40	平垣	-	4	1	1	1	1	人為	土師器、土製品	中葉	本跡→SD17	
42	G 2 e8	N-28°-W	方形	5.05×4.90	20~25	平垣	-	4	1	1	1	-	自然	土師器	中葉		
43	G 2 i6	N-47°-W	長方形	6.02×5.67	25~50	平垣	-	4	-	7	1	1	人為	土師器、土製品	中葉	本跡→SD11、 ST91、101、108	
44	G 3 b2	N-73°-W	長方形	5.73×4.99	15~21	平垣	-	4	1	-	2	2	人為	土師器、土製品、 石製品	中葉		

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設				覆土	主な出土遺物	時期	備考 重層関係 (古→新)	
								柱穴	土人形 ピット	穴	石穴					
45	E 3 J3	N-38°-W	方形	5.72×5.64	32~43	平坦		3	1	2	1	人為	土師器、土製品	前期	本跡→ S145, S842	
46	G 2 I9	N-46°-W	方形	4.12×3.96	42~50	平坦	-	1	-	1	1	自然	土師器	前期		
47	F 2 J4	N-40°-W	[方形・ 長方形]	2.80×(2.70)	6~18	平坦	-	2	1	-	-	不明	土師器、土製品	前期	S148→49→本 跡	
48	F 2 I4	N-9°-W	[方形・ 長方形]	6.18×(4.20)	22	平坦	-	-	-	-	-	人為	土師器	中葉	本跡→S147	
49	F 2 J4	N-18°-W	方形	5.36×5.14	35~66	平坦	全周	4	1	1	1	1	人為	土師器、土製 品、石製品	前期	本跡→ S147, SD18
50	F 2 I6	N-75°-E	長方形	6.00×5.08	18~26	平坦		4	1	4	2	1	自然	土師器、土製品	前期	
51	F 2 F8	N-35°-W	[方形]	4.14×(3.87)	5	平坦	-	1	-	2	1	1	不明	土師器	前期	
52	F 3 I2	N-36°-W	方形	5.68×5.66	25	平坦	-	4	1	3	1	1	人為	土師器、土製 品、ガラス製品	前期	
53	F 2 I9	N-37°-W	方形	6.60×6.21	46~50	平坦	全周	4	1	1	1	2	自然 人為	土師器、土製 品、石製品	前期	
54	F 2 I5	N-34°-W	長方形	7.26×6.60	42~48	平坦	-	4	1	1	1	1	自然 人為	土師器、土製品	前期	S156→本跡
55	E 2 I7	N-18°-W	方形	7.43×7.30	42~48	平坦(全周)	3	-	1	2	2	2	人為	土師器、土製品	中葉	本跡→SD16
56	F 2 e4	N-24°-W	[方形・ 長方形]	(1.68)×(1.27)	22	平坦	-	-	1	-	-	-	人為	土師器	前期	本跡→S154
57	F 2 I9	N-28°-W	長方形	4.75×4.21	15	平坦	-	3	1	2	1	1	自然	土師器、土製品	前期	本跡→S8538
58	F 2 d8	N-41°-E	長方形	5.35×4.75	17~24	平坦	-	3	-	1	2	1	人為 自然	土師器、土製品	中葉	本跡→ST109
96	F 3 e1	N-39°-W	方形	4.93×4.88	22~25	平坦	-	4	-	-	2	1	人為	土師器	前期	本跡→HT1, Pg4
97	F 3 e4	N-85°-E	長方形	4.78×4.18	12~16	平坦	-	-	-	-	2	1	不明	土師器	前期	
98	F 3 I2	N-33°-W	方形	3.85×3.80	16~25	平坦	-	-	-	-	2	1	自然	土師器、土製品	前期	本跡→S8510
99	I 2 I9	N-35°-W	方形	5.32×4.72	38	平坦	-	4	-	3	1	1	自然	土師器	前期	S1191→本跡→ SK307-511-512
100	F 3 e2	N-20°-W	方形	6.31×6.30	60	平坦	全周	4	2	4	1	1	自然	土師器、土製品	中葉	本跡→HT1
101	I 2 I9	N-34°-W	[方形]	4.48×(3.95)	20	平坦	一部	-	-	4	-	-	人為	土師器	前期	本跡→S199, SK307-511-512
103	D 3 g7	N-24°-W	方形	6.10×5.68	12~30	平坦	-	-	-	-	-	-	自然	土師器	前期	

(2) 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡(第143区)

位置 調査区北部のG 2 g3区、標高22.7mの台地平坦部に位置している。北東約5mに第1号住居跡、東約10mに第4号住居跡が位置している。

規模と構造 桁行2間、梁行1間の側柱建物跡で、桁行方向がN-21°-Wの南北棟である。規模は桁行3.9m、梁行3.0mで、面積は11.7㎡である。柱間寸法は、桁行が北から1.8m(6尺)、2.1m(7尺)、梁行が3.0m(10尺)で、柱筋はほぼ揃っている。

柱穴 6か所。平面形は円形で、規模は径46~70cmである。深さは27~68cmで、断面形はU字形である。土層はすべて柱抜き取り後の覆土である。

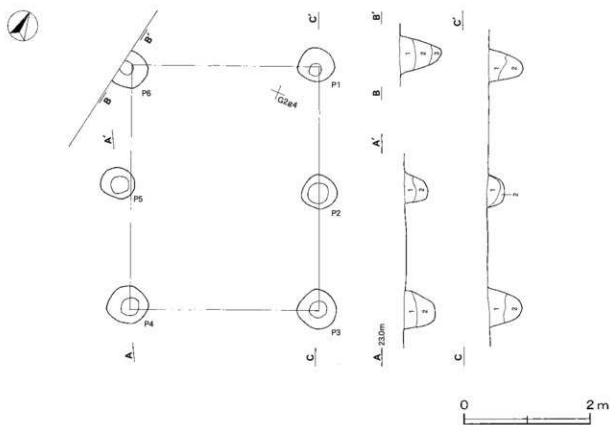
土層解説(各柱穴共通)

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
2 暗褐色 ロームブロック微量

- 3 暗褐色 ローム粒子微量

遺物出土状況 土師器片14点(彙)が出土しているが、いずれも細片のため図示できない。

所見 出土土器が少なく明確な時期判断は困難であるが、前期中葉に比定される第1・4号住居跡と桁行方向を同じにすることから、同時期に存在した建物の可能性が高い。



第143図 第1号掘立柱建物跡実測図

第2号掘立柱建物跡 (第144図)

位置 調査区北部のH2a6区、標高22.8mの台地平坦部に位置している。

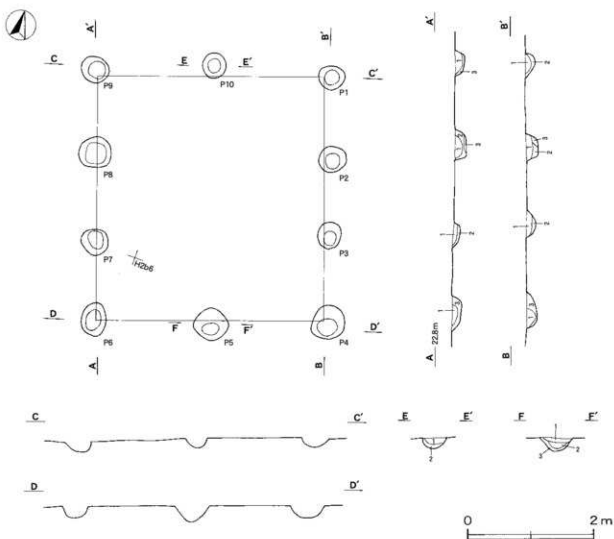
規模と構造 桁行3間、梁行2間の側柱建物跡で、桁行方向がN-19°-Wの南北棟である。規模は桁行3.9m、梁行3.6mで、面積は14.04㎡である。柱間寸法は、桁行が北から1.2m(4尺)、1.5m(5尺)、1.2m(4尺)、梁行が1.8m(6尺)で、柱筋はほぼ揃っている。

柱穴 10か所。平面形は円形または楕円形で、規模は長径40~54cm、短径36~40cmである。深さは11~26cmで、断面形はU字形である。土層はすべて柱抜き取り後の覆土である。

土層解説 (各柱穴共通)

- | | |
|-----------------------|----------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量 | 3 褐色 ロームブロック少量 |
| 2 極暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量 | |

所見 出土土器が少なく明確な時期判断は困難であるが、前期中葉に比定される第10・11号住居跡と桁行方向を同じにすることから、同時期に存在した建物の可能性が高い。



第144図 第2号掘立柱建物跡実測図

表4 古墳時代掘立柱建物跡一覧表

番号	位置	桁行方向	柱間数 (桁×梁)	規模(m) (長軸×短軸)	面積 (m ²)	構造	桁行 柱間 (m)	梁行 柱間 (m)	柱穴平面形	深さ (cm)	主な出土遺物	時期	備考 重複関係 (古-新)
1	G 2 a3	N-21°-W	2×1	3.9×3.0	11.7	側柱	1.8 2.1	3.0	円形	27~68	土師器	前期	
2	H 2 a6	N-19°-W	3×2	3.9×3.6	14.04	側柱	1.2 1.5	1.8	円形 楕円形	11~26	—	前期	

(3) 溝跡

第11号溝跡 (第145・146図)

位置 調査区北部のE 2 d6～E 2 e6区、標高23.5mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第31号住居跡、第65号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 調査区域外と接するE 2 e6区から、北東方向(N-29°-E)に直線的に5mほど延びたところでL字状に屈曲し、調査区域外へ延びている。確認された規模は長さ7.7m、上幅1.48～1.74m、下幅0.83～0.97mで、深さは36～46cmである。断面形は逆台形を呈し、壁は外傾して立ち上がっている。

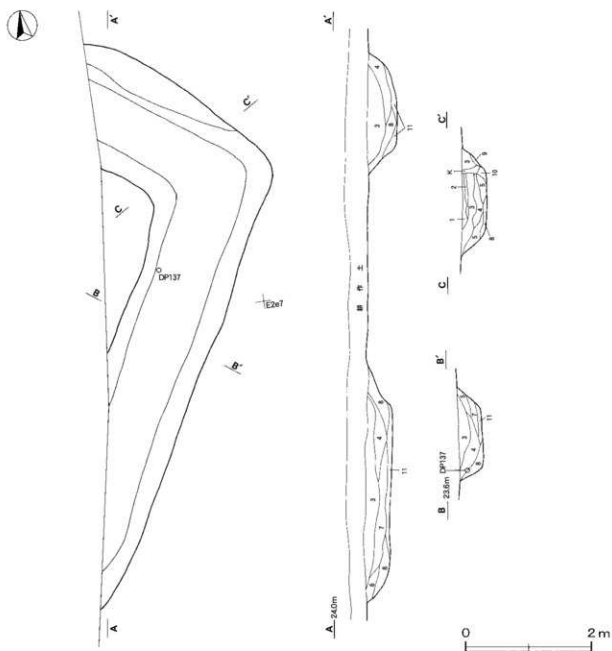
覆土 11層に分層できる。レンズ状の堆積状況を示すことから自然堆積と考えられる。

土層解説

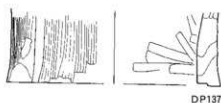
1	黒褐色	ローム粒子微量	7	暗褐色	ローム粒子少量
2	褐色	ローム粒子多量, 炭化粒子微量	8	暗褐色	ローム粒子少量, 炭化粒子微量
3	黒褐色	ローム粒子少量, 炭化粒子微量	9	褐色	ローム粒子多量
4	黒褐色	ローム粒子少量	10	暗褐色	ローム粒子中量
5	暗褐色	ローム粒子中量, 炭化粒子少量	11	褐色	ローム粒子中量
6	暗褐色	ローム粒子中量, 炭化粒子微量			

遺物出土状況 土師器片328点（高坏3，甕325），土製品1点（埴輪）が出土している。また，混入した須恵器片5点（坏）も出土している。土師器片は覆土上層から出土しているが，細片が多く図示できなかった。DP137は土師器片と同様に覆土上層から出土している。

所見 出土した埴輪片は，溝の埋没過程で流れ込んだものと考えられるが，北約30mに，後期古墳に比定されている東山稲荷古墳が位置していることから，本跡は古墳の周溝である可能性が高い。



第145図 第11号溝跡実測図



第146図 第11号溝跡出土遺物実測図

第11号溝跡出土遺物観察表 (第146図)

番号	器種	高さ	器厚	器径	重量	材質(胎土)	特徴	出土位置	備考
DP137	埴輪	(7.9)	1.2~1.3cm	[22.8]	(420)	長石・石英・赤色粒子	外面上から下に反時計回りにヘケ目調整	覆土上層	

3 奈良時代の遺構と遺物

当時代の遺構は溝跡1条が確認されている。以下、遺構と遺物について記述する。

溝跡

第17号溝跡 (第147・148図, 付図)

位置 調査区北部のG 2b3~G 3e5区, 標高23mの台地平坦部に位置している。北側に第18号溝跡が平行して位置している。

重複関係 第33・38・41・43号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 G 3e5区から北西方向 (N-8°-W) へ直線的に延び, G 3d5区で西方向 (N-85°-W) に屈曲して, 調査区域外まで延びている。確認された長さは57.14m, 上幅0.34~0.64m, 下幅0.09~0.46m, 深さ8~20cmである。断面形は逆台形を呈し, 壁は外傾して立ち上がっている。

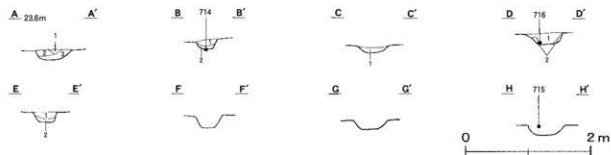
覆土 3層に分層できる。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

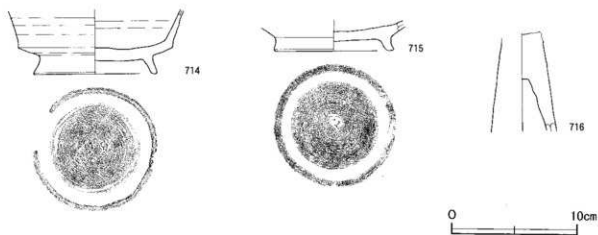
- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
2 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
3 黒褐色 炭化粒子少量, ローム粒子微量

遺物出土状況 土師器片211点 (高坏2, 壺1, 甕208), 須恵器片2点 (高台付坏) が出土している。714は中央部の底面, 715は西部の覆土上層, 716は東部の覆土中層からそれぞれ出土している。

所見 L字の形状から地境溝の可能性が考えられるが, 周囲に関連性を示す遺構が確認できないため, 性格は不明である。時期は, 重複関係や出土した須恵器片が8世紀代を示すことから, 奈良時代に機能していた可能性が高いが, 詳細は不明である。



第147図 第17号溝跡土層断面図



第148図 第17号溝跡出土遺物実測図

第17号溝跡出土遺物観察表（第148図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
714	須恵器	高台付坏	—	(5.1)	9.8	長石・石英・赤色 粒子	灰オリーブ	普通	底部回転ヘラ切り後、高台貼り付け	底面	60%
715	須恵器	高台付坏	—	(2.4)	9.4	長石・石英	黄灰	普通	底部回転ヘラ切り後、高台貼り付け	覆土上層	20%
716	土師器	高环	—	(7.9)	—	長石・石英・赤色 粒子	にじみ黄緑	普通	内・外面ナデ	覆土中層	10%

4 中世・近世の遺構と遺物

当時代の遺構は方形堅穴遺構1基、井戸跡2基、溝跡1条、墓坑50基、土坑2基、道路跡1条、柵跡1列が確認されている。以下、遺構と遺物について記述する。

(1) 方形堅穴遺構

第1号方形堅穴遺構（第149図）

位置 調査区北部のI 3e1区。標高23mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第96・100号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸3.22m、短軸3.18mの方形で、長軸方向はN-23°-Eである。有段式堅穴で、北東部の中央部にはスロープ状の立ち上がりと硬化面が検出されている。

床 ほぼ平坦で、北部が踏み固められている。

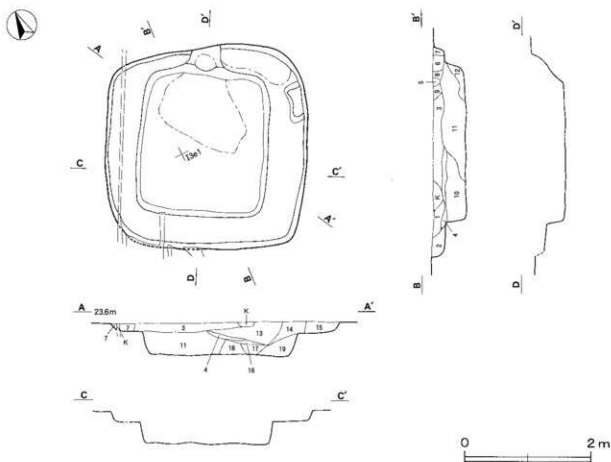
覆土 19層に分層できる。各層にローム土を含む人為堆積である。

土層解説

1 暗褐色	ロームブロック少量	11 極暗褐色	ロームブロック微量
2 黒褐色	ローム粒子少量	12 黒褐色	ロームブロック・炭化粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	13 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子微量
4 黒褐色	ローム粒子微量	14 黒褐色	ロームブロック微量
5 明褐色	ロームブロック中量	15 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子微量
6 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子微量	16 明褐色	ローム粒子多量
7 灰褐色	ロームブロック微量	17 暗褐色	ロームブロック微量
8 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	18 黒褐色	ローム粒子・炭化粒子微量
9 暗褐色	ロームブロック微量	19 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
10 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量		

遺物出土状況 土師器片65点（號）が出土しているが、廃絶後の埋め戻しの段階で流れ込んだものと考えられる。

所見 北東部のスロープ状の立ち上がりと硬化面は出入り口の施設と想定される。時期は出土土器が少ないため明確ではないが、遺構の形状から中世と考えられる。



第149図 第1号方形竪穴遺構実測図

(2) 井戸跡

第1号井戸跡 (第150図)

位置 調査区北部のG2F4区、標高22mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径2.20m、短径2.00mの円形である。上部は確認面から深さ60cmまで漏斗状に掘り込み、下部は円筒状に掘り込んでいる。110cmまで掘り下げたが、下部は湧水のために確認できなかった。

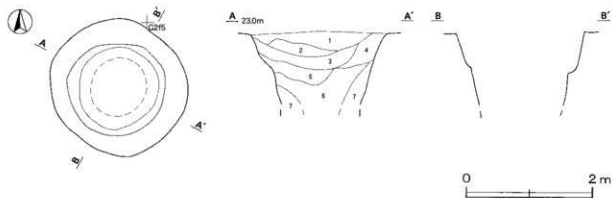
覆土 7層に分層できる。各層にロームブロック・炭化粒子を含む不均質な堆積状況を示しており、人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|------------------------|-----------------|
| 1 黒褐色 炭化粒子少量、ロームブロック微量 | 5 暗褐色 ロームブロック微量 |
| 2 極暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量 | 6 黒褐色 ロームブロック微量 |
| 3 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量 | 7 暗褐色 ロームブロック少量 |
| 4 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量 | |

遺物出土状況 土師器片185点(高坏1、甕184)が出土しているが、細片のため図示できない。

所見 時期は、上部を漏斗状に掘り込む構造から、中世から近世と考えられる。



第150図 第1号井戸跡実測図

第2号井戸跡 (第151図)

位置 調査区北部のH2 e3区、標高22mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径1.64m、短径1.54mの円形である。上部は確認面から深さ50cmまで漏斗状に掘り込み、下部は円筒状に掘り込んでいる。180cmまで掘り下げたが、下部は湧水のために確認できなかった。

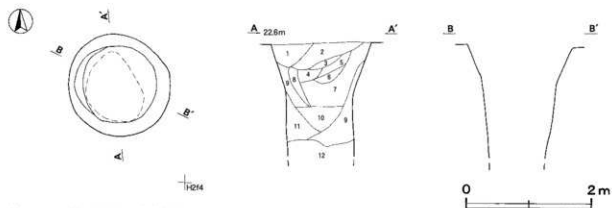
覆土 12層に分層できる。各層にロームブロック・炭化粒子・焼土粒子を含む不均質な堆積状況を示しており、人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|--------|----------------|
| 1 黒色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 7 黒色 | ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 2 黒色 | ロームブロック・焼土ブロック微量 | 8 黒褐色 | ローム粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量 | 9 黒褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 |
| 4 黒色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 10 黒色 | ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 5 黒色 | ローム粒子微量 | 11 暗褐色 | ローム粒子中量 |
| 6 黒褐色 | ローム粒子少量 | 12 黒色 | ローム粒子少量 |

遺物出土状況 土師器片482点(高坏1, 壺1, 甕480)が出土しているが、細片のため図示できない。

所見 時期は、上部を漏斗状に掘り込む構造から、中世から近世と考えられる。



第151図 第2号井戸跡実測図

表5 中世・近世井戸跡一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 重複関係 (古一新)
				長軸(径)×短軸(径)(m)	深さ(cm)					
1	G2 f4	—	円形	2.20 × 2.00	(110)	外積 直立 外積 直立	—	人為	土師器	
2	H2 e3	—	円形	1.64 × 1.54	(180)	外積 直立 外積 直立	—	人為	土師器	

(3) 溝跡

第34号溝跡 (第152図)

位置 調査区北部のB4h5～B4i4区、標高20.5mの台地縁辺部に位置している。また、方向をほぼ同じくする第1号溝跡が西に位置している。

規模と形状 B4i4区から北東方向(N-41°-E)へ直線的に延びている。北東端が調査区域外に延びており、確認できた長さは5.11m、上幅0.70～0.90m、下幅0.39～0.59m、深さ36～40cmである。断面形は逆台形を呈している。

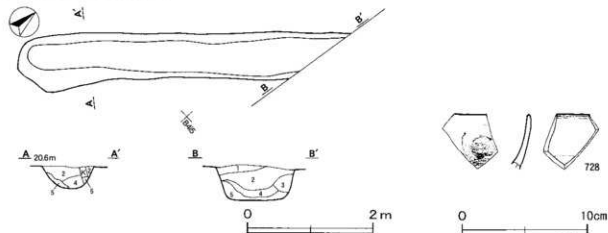
覆土 5層に分層できる。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------|---------|--------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 極暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子微量 | 5 にぶい褐色 | ローム粒子少量 |
| 3 褐色 | ロームブロック微量 | | |

遺物出土状況 土師質土器3点(皿1, 鍋2), 磁器片1点(碗)が出土している。728は覆土中から出土している。

所見 西側に第1号溝跡が位置していることから、区画溝の可能性もあるが、詳細は不明である。時期は、出土土器から近世と考えられる。



第152図 第34号溝跡・出土遺物実測図

第34号溝跡出土遺物観察表 (第152図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
728	磁器	碗	-	(4.3)	-	精良 透明釉	灰白 灰白	緻密	内・外面施釉 外面草花文	覆土中	

(4) 墓坑 (第153～158図)

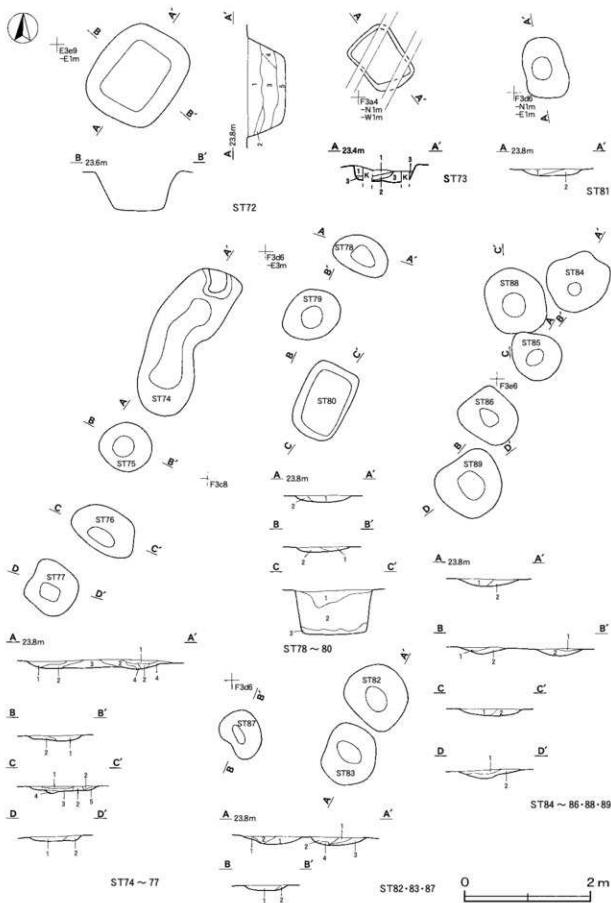
調査区北部で確認された土坑については、覆土中から骨片・骨粉等は確認できなかったが、原則として下記の条件を満たす50基を中世から近世にかけての墓坑と判断した。

ア 直径、長さもしくは長軸が1～1.5m程度で、大きくとも2mを超えないもの。

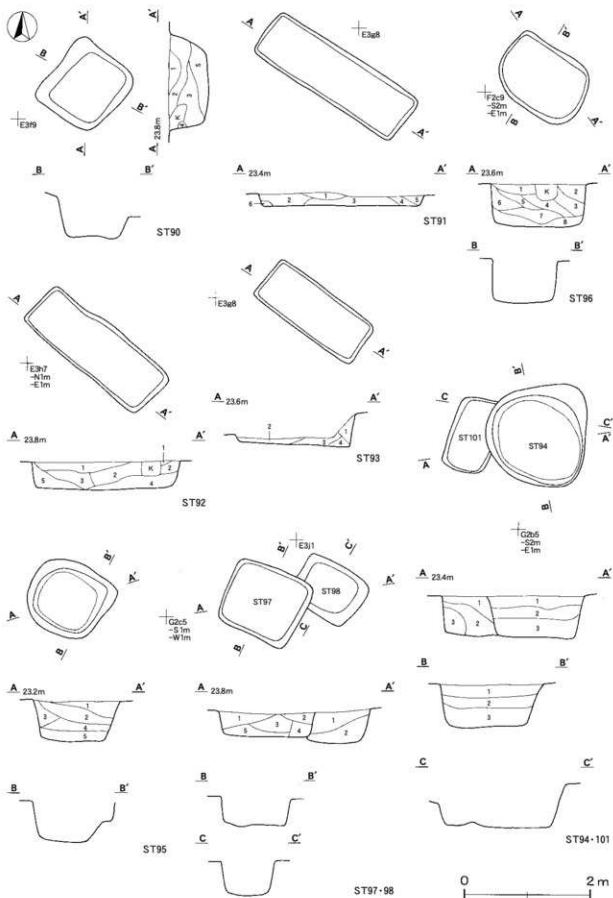
イ 覆土が黒褐色、暗褐色主体であり、ロームブロックを含むなど人為的な埋め戻しと考えられるもの。

ウ 底面がほぼ平坦で、壁が直立しているもの。

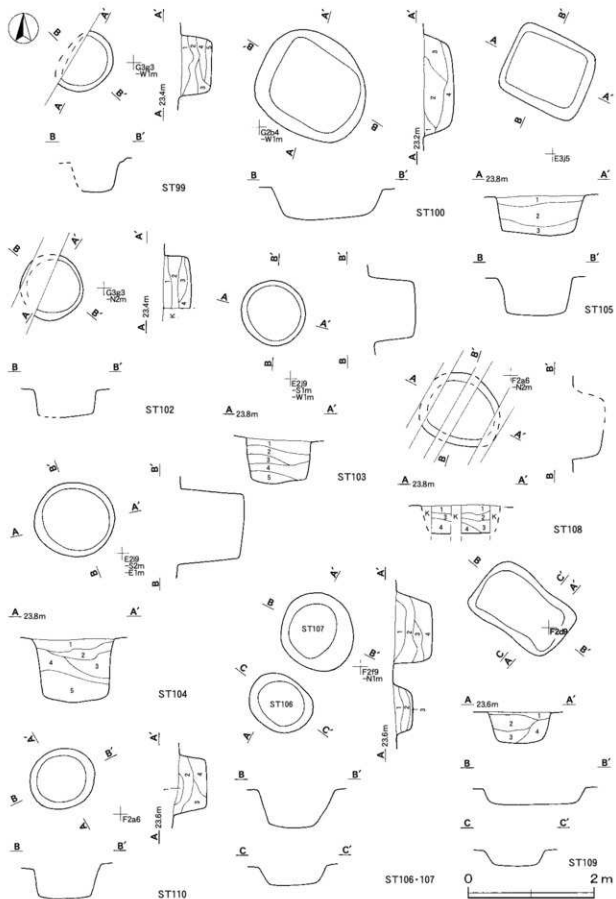
以下、実測図、土層解説、一覧表を記載する。なお、第95号墓坑の出土遺物は最後に掲載する。



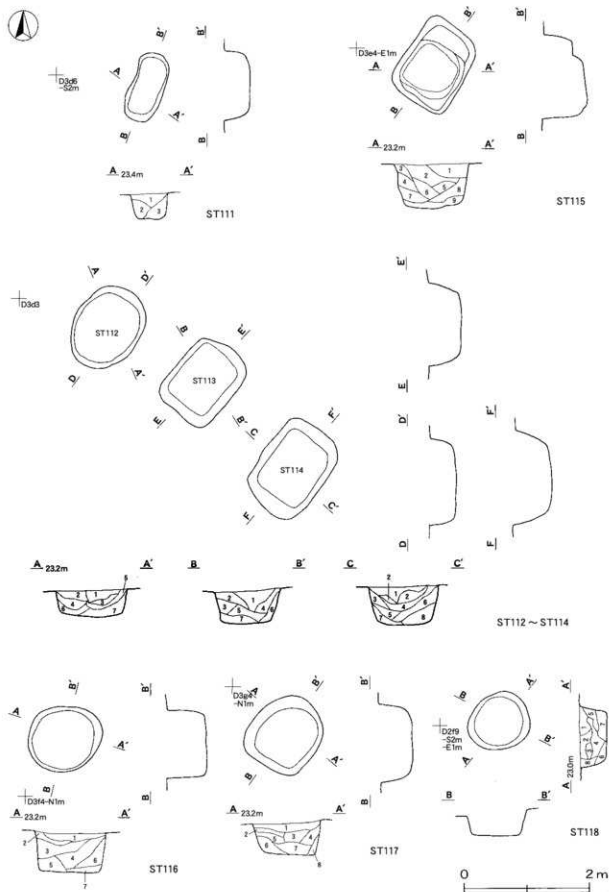
第153图 墓坑实测图(1)



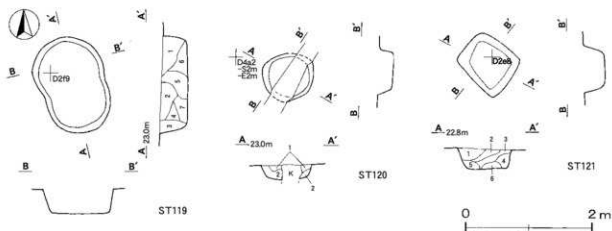
第154图 墓坑实测图(2)



第155图 墓坑实测图(3)



第156图 墓坑实测图(4)



第157図 墓坑実測図(5)

第72号墓坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 褐色 ロームブロック中量
- 3 褐色 ローム粒子中量
- 4 褐色 ロームブロック微量
- 5 褐色 ロームブロック少量

第73号墓坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、埴土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子・埴土粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量

第74号墓坑土層解説

- 1 黒褐色 粘土ブロック中量、ローム粒子少量
- 2 極暗褐色 粘土ブロック・ローム粒子少量
- 3 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量
- 4 褐色 ローム粒子中量

第75号墓坑土層解説

- 1 黒褐色 粘土ブロック中量、ローム粒子少量
- 2 極暗褐色 粘土ブロック・ローム粒子少量

第76号墓坑土層解説

- 1 黒褐色 粘土ブロック中量、ローム粒子少量
- 2 極暗褐色 ローム粒子中量
- 3 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量
- 4 極暗褐色 粘土ブロック・ローム粒子少量
- 5 褐色 ローム粒子中量

第77号墓坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 極暗褐色 粘土ブロック・ローム粒子少量

第78号墓坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 極暗褐色 粘土ブロック・ローム粒子少量

第79号墓坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 極暗褐色 粘土ブロック・ローム粒子少量

第80号墓坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化物微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、炭化物微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量

第81号墓坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 極暗褐色 粘土ブロック・ローム粒子少量

第82号墓坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量
- 2 極暗褐色 ローム粒子中量
- 3 黒褐色 ローム粒子微量
- 4 褐色 ローム粒子中量

第83号墓坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子中量

第84号墓坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 極暗褐色 粘土ブロック・ローム粒子少量

第85号墓坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 極暗褐色 粘土ブロック・ローム粒子少量

第86号墓坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 極暗褐色 粘土ブロック・ローム粒子少量

第87号墓坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 極暗褐色 粘土ブロック・ローム粒子少量

第88号墓坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 極暗褐色 粘土ブロック・ローム粒子少量

第89号墓坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 極暗褐色 粘土ブロック・ローム粒子少量

第90号墓坑土層解説

- 1 褐色 ロームブロック微量
- 2 褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ロームブロック微量
- 4 褐色 ローム粒子多量
- 5 黒褐色 ローム粒子微量

第91号墓坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量
- 3 褐色 ロームブロック少量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量
- 5 灰黄褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量
- 6 褐色 ローム粒子中量

第92号基坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・堆土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 黒褐色 ロームブロック微量
- 4 黒褐色 ロームブロック微量
- 5 黒褐色 ローム粒子少量

第93号基坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 褐色 ロームブロック中量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量

第94号基坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量

第95号基坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子微量
- 4 極暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 5 黒褐色 ロームブロック微量

第96号基坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量、堆土粒子微量
- 4 黒褐色 ロームブロック少量、炭化物・澱沼パミス粒子微量
- 5 極暗褐色 ロームブロック少量
- 6 暗褐色 ローム粒子少量、澱沼パミスブロック微量
- 7 黒褐色 ロームブロック・炭化物・澱沼パミスブロック微量
- 8 黒褐色 ロームブロック・澱沼パミスブロック微量

第97号基坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量、堆土粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック・堆土粒子・炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ロームブロック少量
- 5 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

第98号基坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、炭化物微量
- 2 黒褐色 ロームブロック微量

第99号基坑土層解説

- 1 極暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック微量
- 3 暗褐色 ロームブロック微量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量
- 5 極暗褐色 ロームブロック微量

第100号基坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 3 褐色 ロームブロック中量
- 4 黒褐色 ロームブロック少量

第101号基坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量
- 2 褐色 ロームブロック中量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量

第102号基坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 黒褐色 ロームブロック微量
- 3 極暗褐色 ロームブロック少量
- 4 黒褐色 ローム粒子微量

第103号基坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量、堆土粒子・炭化粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック多量、炭化物微量
- 3 黒褐色 ローム粒子中量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量
- 5 黒褐色 ロームブロック中量

第104号基坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ロームブロック多量、澱沼パミスブロック微量
- 4 褐色 ローム粒子多量
- 5 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

第105号基坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量

第106号基坑土層解説

- 1 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック微量

第107号基坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック微量
- 4 褐色 ロームブロック中量

第108号基坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子多量、炭化粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子中量
- 3 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量
- 4 褐色 ローム粒子多量

第109号基坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 黒褐色 ロームブロック微量
- 4 暗褐色 ロームブロック微量

第110号基坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量
- 4 褐色 ロームブロック多量

第111号基坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量
- 3 暗褐色 ローム粒子微量

第112号基坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、澱沼パミスブロック微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ロームブロック微量、澱沼パミス粒子微量
- 4 黒褐色 ロームブロック・澱沼パミスブロック微量
- 5 黒褐色 ローム粒子微量
- 6 黒褐色 ローム粒子少量
- 7 黒褐色 ロームブロック微量

第113号基坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量
- 3 黒褐色 ロームブロック・澱沼パミスブロック微量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量
- 5 黒褐色 ロームブロック少量、澱沼パミス粒子微量
- 6 暗褐色 ロームブロック少量
- 7 暗褐色 ロームブロック・澱沼パミス粒子微量

第114号基坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ロームブロック・澱沼パミスブロック微量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量、澱沼パミスブロック微量
- 5 黒褐色 ロームブロック微量
- 6 暗褐色 ロームブロック少量
- 7 暗褐色 ロームブロック微量
- 8 暗褐色 ローム粒子微量

第115号墓坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量、鹿沼パミスブロック微量
- 3 暗褐色 ロームブロック微量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子・鹿沼パミスブロック微量
- 5 暗褐色 ロームブロック少量
- 6 暗褐色 ロームブロック中量、炭化物・鹿沼パミスブロック微量
- 7 暗褐色 ロームブロック少量、鹿沼パミスブロック微量
- 8 黒褐色 ローム粒子微量
- 9 暗褐色 ローム粒子少量、鹿沼パミスブロック微量

第116号墓坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量、鹿沼パミスブロック微量
- 3 暗褐色 ロームブロック・鹿沼パミスブロック微量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量、鹿沼パミス粒子微量
- 5 暗褐色 ロームブロック・鹿沼パミスブロック少量
- 6 黒褐色 ロームブロック・鹿沼パミスブロック微量
- 7 暗褐色 ロームブロック少量

第117号墓坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 5 黒褐色 ロームブロック・炭化物微量
- 6 黒褐色 ロームブロック少量
- 7 黒褐色 ロームブロック微量
- 8 暗褐色 ロームブロック少量

第118号墓坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量
- 3 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子微量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量
- 5 黒褐色 ローム粒子中量
- 6 黒褐色 ロームブロック少量
- 7 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 8 黒褐色 ロームブロック微量

第119号墓坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量
- 3 黒褐色 ロームブロック微量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 5 暗褐色 ロームブロック少量
- 6 暗褐色 ロームブロック少量、鹿沼パミス粒子微量
- 7 暗褐色 ローム粒子少量

第120号墓坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量

第121号墓坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック微量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量
- 5 暗褐色 ロームブロック微量
- 6 黒褐色 ローム粒子微量



717



第158図 第95号墓坑出土遺物実測図

第95号墓坑出土遺物観察表 (第158図)

番号	種別	器種	口径	部高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
717	土師土器	火鉢	—	(6.4)	—	長石・石英	灰黄褐色	普通	蹴足面	覆土中	10% 近世

表6 中世・近世墓坑一覧表

番号	位置	長軸(径)方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 重複関係 (古→新)
				長軸(径)×短軸(径)(m)	深さ(cm)					
72	E 3 a9	N-34°-E	長方形	1.56 × 1.34	62	緩斜	平坦	人為	—	
73	E 3 j3	N-35°-W	長方形	1.02 × 0.73	22	外傾	平坦	人為	—	S145→本跡
74	F 3 b7	N-28°-E	不定形	2.46 × 0.93	14	緩斜	平坦	人為	—	
75	F 3 b7	—	円形	0.85 × 0.80	6	緩斜	平坦	人為	—	
76	F 3 c7	N-68°-W	楕円形	1.08 × 0.70	8	緩斜	平坦	人為	—	
77	F 3 c7	—	方形	0.77 × 0.77	7	緩斜	平坦	人為	—	
78	F 3 d7	N-63°-W	楕円形	0.95 × 0.59	10	緩斜	平坦	人為	—	
79	F 3 d6	—	円形	0.85 × 0.81	6	緩斜	皿状	人為	—	
80	F 3 d6	N-28°-E	長方形	1.20 × 0.81	71	直立	平坦	人為	—	

番号	位置	長軸(径)方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 直隸關係 (古→新)
				長軸(径)×短軸(径)(m)	深さ(cm)					
81	F 3 c6	N-7°-W	長方形	0.95 × 0.68	8	緩斜	平坦	人海	—	
82	F 3 c6	N-42°-W	楕円形	0.98 × 0.88	11	緩斜	皿状	人海	—	
83	F 3 c6	—	円形	0.92 × 0.85	12	緩斜	皿状	人海	—	
84	F 3 c6	N-62°-E	不整楕円形	1.03 × 0.90	11	緩斜	皿状	人海	—	
85	F 3 c6	N-36°-W	楕円形	0.90 × 0.74	9	緩斜	皿状	人海	—	本跡→SK88
86	F 3 c5	N-44°-W	長方形	0.90 × 0.78	9	緩斜	皿状	人海	—	
87	F 3 c6	N-37°-W	不定形	0.74 × 0.62	8	緩斜	皿状	人海	—	
88	F 3 c6	N-26°-W	楕円形	1.10 × 0.92	10	緩斜	皿状	人海	—	SK85→本跡
89	F 3 c5	N-53°-E	長方形	1.02 × 0.92	13	緩斜	皿状	人海	—	
90	E 3 e9	—	方形	1.24 × 1.16	63	外傾	平坦	人海	—	S126→本跡
91	E 3 e7	N-56°-W	長方形	2.64 × 0.82	20	直立	平坦	人海	—	S127→本跡
92	E 3 e7	N-50°-W	長方形	2.36 × 0.87	44	直立	平坦	人海	—	S132→本跡
93	E 3 g8	N-53°-W	長方形	1.92 × 0.78	52	直立	平坦	人海	—	S127→本跡
94	G 2 b5	N-35°-E	不整楕円形	1.73 × 1.66	70	外傾	平坦	人海	—	S143, S018, ST101→本跡
95	G 2 e4	—	方形	1.28 × 1.18	64	緩斜	平坦	人海	土師質土器	SK98→本跡
96	F 2 e9	N-55°-W	長方形	1.46 × 1.04	68	直立	平坦	人海	—	
97	E 2 j0	—	方形	1.28 × 1.13	40	直立	平坦	人海	—	ST98→本跡
98	E 3 j1	N-59°-W	長方形	1.10 × 0.88	54	直立	平坦	人海	—	本跡→ST97
99	G 3 g2	N-22°-E	[楕円形]	0.99 × (0.76)	54	直立	平坦	人海	—	S137, SK99→本跡
100	G 2 a3	N-56°-W	長方形	1.78 × 1.58	48	緩斜	平坦	人海	—	
101	G 2 b5	N-17°-E	長方形	1.23 × 0.70	63	直立	平坦	人海	—	S143, S018, 本跡→ST94
102	G 3 f2	—	円形	1.02 × 0.98	40	直立	平坦	人海	—	S137→本跡
103	E 2 i8	—	円形	1.04 × 1.02	70	直立	平坦	人海	—	
104	E 2 i9	—	円形	1.30 × 1.22	100	直立	平坦	人海	—	
105	E 3 i5	N-63°-W	長方形	1.40 × 1.20	60	直立	平坦	人海	—	
106	F 2 e8	N-52°-W	楕円形	1.04 × 0.85	30	緩斜	平坦	人海	—	
107	F 2 e8	—	円形	1.22 × 1.14	64	緩斜	平坦	人海	—	
108	E 2 j5	N-61°-W	[楕円形]	[1.30] × 1.08	47	直立	平坦	人海	—	
109	F 2 e8	N-53°-W	長方形	1.58 × 1.02	51	緩斜	平坦	人海	—	S158→本跡
110	F 2 d5	—	円形	1.05 × 0.96	52	外傾	平坦	人海	—	
111	D 3 c6	N-20°-E	楕円形	1.10 × 0.54	40	直立	平坦	人海	—	
112	D 3 d3	N-40°-E	楕円形	1.38 × 1.06	42	外傾	平坦	人海	—	
113	D 3 d3	N-40°-E	長方形	1.34 × 1.00	52	外傾	平坦	人海	—	
114	D 3 d4	N-40°-E	長方形	1.52 × 1.10	60	外傾	平坦	人海	—	
115	D 3 e4	N-37°-E	長方形	1.32 × 1.04	68	直立	平坦	人海	—	
116	D 3 e3	—	円形	1.12 × 1.08	62	直立	平坦	人海	—	
117	D 3 g4	N-35°-E	長方形	1.26 × 1.12	50	外傾	平坦	人海	—	
118	D 2 f9	—	円形	0.98 × 0.90	42	直立	平坦	人海	—	
119	D 2 f9	N-16°-W	不整楕円形	1.54 × 1.09	38	直立	平坦	人海	—	
120	D 4 e2	—	[円形]	[0.80] × 0.74	12	外傾	平坦	人海	—	
121	D 2 e7	N-50°-W	長方形	0.88 × 0.72	34	直立	平坦	人海	—	

(5) 土坑

第536号土坑 (第159図)

位置 調査区北部のF 2 00区、標高23.5mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸2.30m、短軸2.16mの方形で、主軸方向はN-25°-Eである。壁高は24cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。

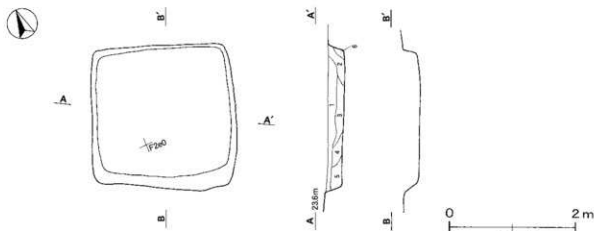
覆土 6層に分層できる。各層にローム土を含む人為堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|-------|-----------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量 | 4 黒褐色 | ロームブロック微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック微量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック・炭化物微量 | 6 黒褐色 | ローム粒子多量 |

遺物出土状況 土師器片20点(高坏1, 甕19)が出土している。遺物は腐絶後の埋め戻しの段階で流れ込んだものと考えられる。

所見 柱穴が検出されないため、上屋等の想定は困難であるが、東約2mに位置する第1号方形竪穴遺構とほぼ同じ主軸方向をとることから、これに付随する施設等の可能性もある。



第159図 第536号土坑実測図

第540号土坑 (第160図)

位置 調査区北部のE 3 j5区、標高23.5mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径2.10m、短径1.96mの円形で、深さは42cm、底面は皿状を呈し、壁は外傾して立ち上がっている。

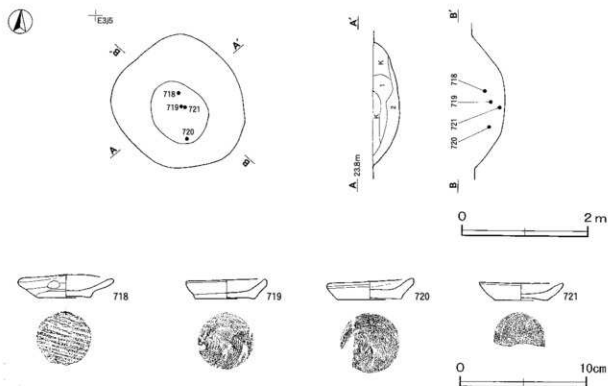
覆土 2層に分層できる。一部攪乱を受けているが、周囲から流入した堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------|------|-----------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量 | 2 褐色 | ロームブロック微量 |
|-------|---------|------|-----------|

遺物出土状況 土師質土器片4点(小皿), 土師器片8点(甕)が出土している。721は覆土下層, 718~720は覆土中層から出土し、腐絶後の窪地に投棄あるいは流入したものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から15世紀代より以前と考えられる。



第160図 第540号土坑・出土遺物実測図

第540号土坑出土遺物観察表(第160図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考	
718	土師質土器	小皿	7.3	1.8	4.2	長石・石英・雲母	にぶい褐色	普通	底部回転糸切り	スノコ状圧痕	覆土中層	95% 保付着PL36
719	土師質土器	小皿	6.3	1.6	4.6	長石・石英・雲母	にぶい褐色	普通	底部回転糸切り		覆土中層	95% 保付着PL36
720	土師質土器	小皿	6.7	1.7	5.0	長石・石英・雲母	にぶい褐色	普通	底部回転糸切り		覆土中層	90% PL36
721	土師質土器	小皿	6.6	1.4	4.2	長石・石英・赤色粘土	褐色	普通	底部回転糸切り		覆土下層	60%

表7 中世・近世土坑一覧表

番号	位置	長軸(径)方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 重複関係 (古-新)
				長軸(径)×短軸(径)(m)	深さ(cm)					
536	F 2.00	N-25°-E	方形	2.30 × 2.16	24	外傾	平坦	人為	土師器	
540	E 3.35	-	円形	2.10 × 1.96	42	外傾	平坦	自然	土師器, 土師質土器	

(6) 道路跡

第1号道路跡(第161図, 付図)

位置 調査区北部のB 4 g2~D 3 f4区, 標高20.3~23.0mの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第563・564号土坑を掘り込み, 第115号墓坑, 第554・574・588・626・635~637・648号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 D 3 f4区から北東方向(N-67°-E)に直線的に延びている。北端の調査区域外まで, 長さ62.77mにわたり掘り込みと硬化面が確認された。掘り込みの上幅は0.32~2.74m, 下幅は0.38~0.62mで,

底面が硬化している。深さは4～60cmで、平坦部から縁辺部にむかう北部は、上幅が広くやや深くなっている。断面形は浅いU字状である。

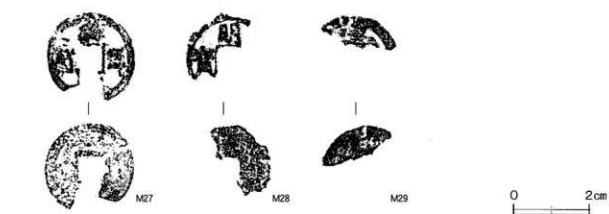
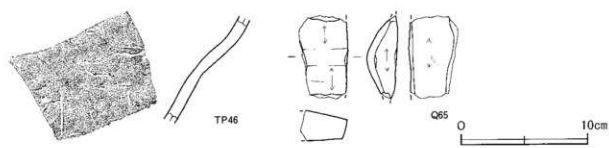
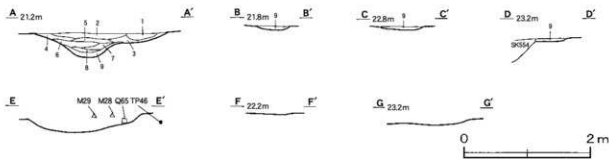
覆土 8層に分層できる。第1～8層は周囲から土砂が流れ込んだ堆積状況を示すことから、自然堆積と考えられる。第9層は底面の硬化層である。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------|-------|------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 6 褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 2 黒色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 7 黒褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 |
| 3 黄褐色 | ロームブロック多量 | 8 黒色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 9 褐色 | ロームブロック多量 |
| 5 黒色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師質土器4点（鍋1，皿3），陶磁器片5点（碗），石器1点（砥石），金属製品3点（古銭）が出土している。TP46・M28・M29は北部，Q65は中央部の覆土中層からそれぞれ出土している。

所見 台地の縁辺部を南北に縦断する溝状の道路跡である。台地上から潤沼川が流れる低地へむかう道路と推測される。時期は、出土土器から近世と考えられる。



第161図 第1号道路跡・出土遺物実測図

第1号道路跡出土遺物観察表 (第161図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP46	陶器	片口鉢	—	(8.5)	—	長石・石英・赤色 粘土 黒繪	増灰黄	普通	体部破片	覆土中層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特	徴	出土位置	備考
Q65	砥石	(6.5)	(3.8)	2.4	(66.3)	凝灰岩	紙面4面		覆土中層	

番号	種別	銭種	外径	孔径	厚さ	重量	材質	初鑄年	特	徴	出土位置	備考
M27	古銭	元豊一貫	2.36	0.68	0.20	(2.18)	銅	1078	欠け		覆土中	
M28	古銭	聖一一貫	[2.60]	—	0.09	(0.72)	銅	621	欠け		覆土中層	
M29	古銭	皇一一貫	[2.60]	—	0.11	(0.59)	銅	—	判読不能	欠け	覆土中層	

(7) 柵跡

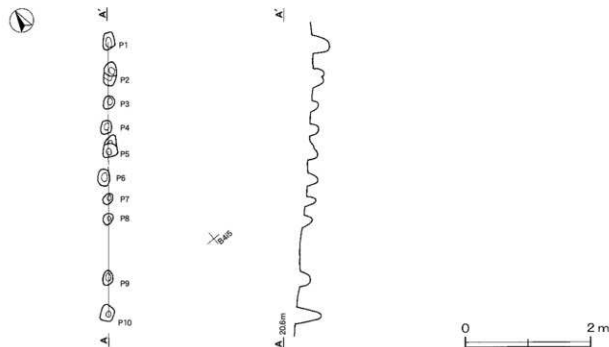
第1号柵跡 (第162図)

位置 調査区北部のB 4h4～B 4h5区、標高20.5mの台地縁辺部に位置している。また、方向を同じくする第34号溝跡が東に位置している。

規模と形状 北東から南西方向に柱穴が並び、確認された長さは4.56mで、方向はN-32°-Eである。柱間寸法は25～90cmと不規則である。

柱穴 10か所。平面形は長径20～30cm、短径12～20cmの円形または楕円形で、深さは10～40cmである。

所見 本跡の東に位置する第34号溝跡と軸線が同じであることから、溝に付随する施設の可能性はあるが、詳細は不明である。時期は、溝跡との関係から近世と考えられる。



第162図 第1号柵跡実測図

5 その他の遺構と遺物

遺物が出土していないことなどから、時期を決定できない遺構として、堅穴住居跡4軒、溝跡13条、土坑181基、方形周溝遺構1基、ピット群7か所が存在する。以下、それらの遺構については、実測図と一覧表を掲載する。

(1) 堅穴住居跡

第59号住居跡（第163図）

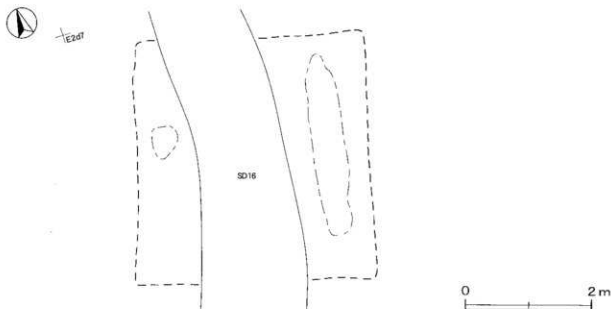
位置 調査区北部のE 2 d7区、標高23mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第16号溝に掘り込まれている。

規模と形状 硬化面の残存状況から、南北軸3.85m、東西軸3.70mの方形と推測される。

床 硬化面の一部が検出されただけである。

所見 硬化面の一部が検出されており、住居跡とも考えられるが、明確ではない。時期は、出土土器がないため不明である。



第163図 第59号住居跡実測図

第102号住居跡（第164図）

位置 調査区北部のD 3 d2区、標高22.9mの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第112号墓坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸6.34m、短軸5.64mの長方形で、長軸方向はN-36°-Wである。遺存している壁高は最大で6cmである。

床 ほぼ平坦である。

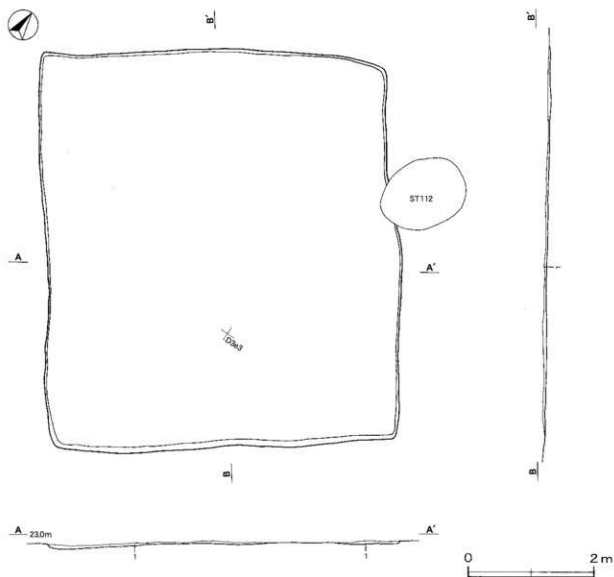
覆土 単一層である。層厚が薄いため堆積状況は不明である。

土層解説

1 暗褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片26点（碗2，高杯1，器台1，甕22）が出土しているが、細片で図示できない。

所見 壁の立ち上がりが確認されていることから住居跡としたが、詳細は不明である。時期は、決定できる出土土器がないため不明である。



第164図 第102号住居跡実測図

第104号住居跡（第165図）

位置 調査区北部のD314区、標高23.2mの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 硬化面の残存から、東西軸4.70m、南北軸3.90mの長方形と推測される。遺存している壁高は3cmである。

床 ほぼ平坦で、炉の南側が広い範囲で踏み固められている。

炉 中央部やや北西壁寄りに位置している。規模は長径30cm、短径24cmの不定形で、床面を8cmほど皿状に掘りくぼめて炉床とした地床炉である。炉床面は火を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

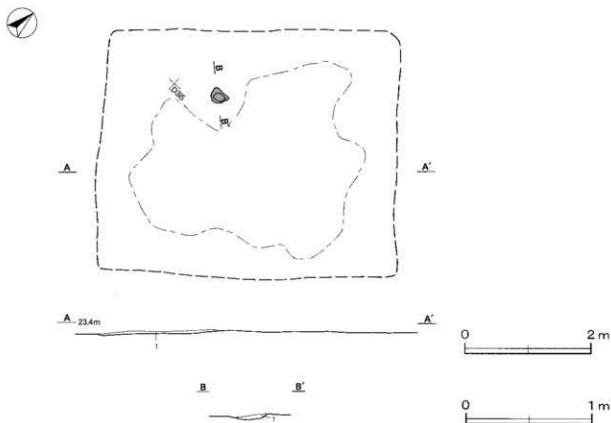
1 にごり色 焼土粒子少量、ローム粒子微量

覆土 単一層である。層厚が薄いため堆積状況は不明である。

土層解説

1 暗褐色 ローム粒子少量

所見 炉・硬化面が検出されていることから住居跡としたが、詳細は不明である。時期は、出土土器がないため不明である。



第165図 第104号住居跡実測図

第105号住居跡 (第166図)

位置 調査区北部のD411区、標高23.2mの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 北西部が削平を受けているため、南北軸5.40m、東西軸5.20mだけが確認されている。東・南壁から主軸方向は $N-5^{\circ}-W$ と推測される。遺存している壁高は14cmである。

床 確認された部分はほぼ平坦である。南壁下の一部で壁溝が確認されている。また、南壁際から焼土塊が検出されている。

覆土 3層に分層できる。層厚が薄いため堆積状況は不明である。

土層解説

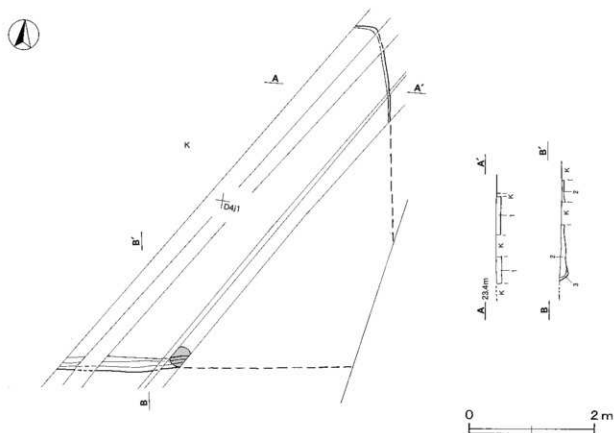
1 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

3 暗褐色 ロームブロック少量

2 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片45点(坏3, 高坏6, 甕36)が出土している。また、流れ込んだ陶器片2点も出土している。いずれも細片のため図示できない。

所見 壁溝や壁の立ち上がりが一部確認されていることから住居跡としたが、詳細は不明である。時期は、決定できる出土土器がないため不明である。



第166図 第105号住居跡実測図

表8 時期不明堅穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設				覆土	主な出土遺物	備考 重複関係 (古→新)
								主柱穴	出入口 ピット	炉・竈	貯蔵穴			
59	E 2 d7	不明	[方形]	[3.85]×[3.70]	-	-	-	-	-	-	-	不明	-	本跡→SD16
102	D 3 d2	N-36°-W	長方形	6.34×3.64	6	平坦	-	-	-	-	-	不明	土師器	本跡→ST112
104	D 3 b5	N-36°-W	[長方形]	[4.70]×[3.90]	3	平坦	-	-	-	1	-	不明	-	
105	D 4 14	N-5°-W	[方形]	[5.40]×[5.20]	14	平坦	一部	-	-	-	-	不明	土師器	

(2) 溝跡

第3号溝跡 (第167図, 付図)

位置 調査区北・中央部の1 2 e1~K 2 a2区, 標高22.7mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第23号住居跡, 第5・12号溝跡を掘り込んでいる。

規模と形状 調査区域外と接する1 2 j6区から, 北東方向(N-8°-E)に伸び, 1 2 e6区で北西向きに屈曲して, 北西方向(N-66°-W)へ直線的に伸びている。同溝は調査区中央部においても確認されており, 全体の形状はコの字状を呈している。北部で確認された長さは20.86m, 上幅0.38~1.00m, 下幅0.16~0.42

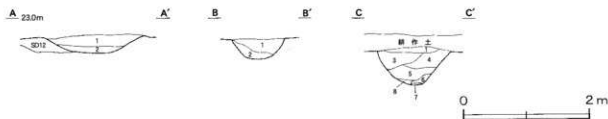
m、深さ60cmである。断面形はU字状を呈し、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 8層に分層できる。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|----------------|-------|------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック微量 | 6 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 褐色 | ローム粒子多量 | 7 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 4 黒褐色 | ローム粒子少量 | 8 暗褐色 | ローム粒子微量 |

所見 調査区中央部においても同溝は確認されており、形状はコの字状を呈している。そのため本跡は方形を呈する区画溝の可能性ある。区画内に関連を示す遺構が確認できないため、性格は不明である。



第167図 第3号溝跡土層断面図

第10号溝跡 (第168図, 付図)

位置 調査区北部のH3a5～H3c6区、標高23mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第7・9号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 調査区域外と接するH3c6区から、北西方向(N-28°-W)へ直線的に調査区域外まで延びている。確認された長さは8.57m、上幅0.46～0.65m、下幅0.25～0.59m、深さ11～16cmである。断面形はU字状を呈し、壁は外傾して立ち上がっている。

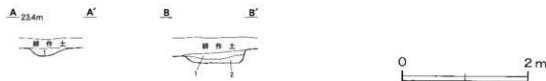
覆土 2層に分層できる。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------------|-------|----------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量、炭化物微量 | 2 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |
|-------|---------------|-------|----------------|

遺物出土状況 土師器片19点(甕)が出土しただけである。いずれも細片で、流れ込んだものと考えられる。

所見 確認された部分が少ないため、性格は不明である。時期は、遺構に伴う土器が出土していないため不明である。



第168図 第10号溝跡土層断面図

第12号溝跡 (第169図, 付図)

位置 調査区北部のG2h3～J2a2区、標高22.7mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第15～17号住居跡、第3号溝跡を掘り込んでいる。

規模と形状 調査区域外と接するJ2a2区から、北方向(N-8°-W)へやや弧状に延び、H2j2区で北東

方向(N-11°-W)に向きを変え、G 215区まで直線上に延びている。さらに、G 215区で北西方向(N-62°-E)に屈曲し、調査区域外まで延びている。確認された規模は、長さ99.4m、上幅0.36~0.70m、下幅0.10~0.20mで、深さは10~25cmである。断面形はU字状を呈し、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 3層に分層できる。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

- | | |
|----------------------|-----------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子少量 | 3 暗褐色 ロームブロック微量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量 | |

遺物出土状況 土師器片60点(坏1, 碗5, 鉢1, 甕53)が出土している。いずれも細片で、流れ込んだものと考えられる。

所見 周囲に関連を示す遺構は確認されず、性格は不明である。時期は、遺構に伴う土器が出土していないため不明である。



第169図 第12号溝跡土層断面図

第13号溝跡 (第170図, 付図)

位置 調査区北部のD 3 j2~E 2 h8区、標高23.3mの台地平坦部に位置している。西には、第15・16号溝跡がほぼ平行するように位置している。

重複関係 第25号住居跡を掘り込んで、第531号土坑、第1号方形周溝遺構に掘り込まれている。

規模と形状 E 2 h8区から北東方向(N-25°-W)へ直線的に調査区域外まで延びている。確認された規模は長さ37.0m、上幅0.38~0.86m、下幅0.20~0.70mで、深さは8~26cmである。断面形はU字状を呈し、壁は外傾して立ち上がっている。

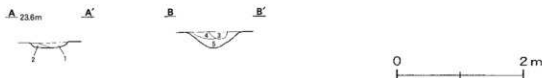
覆土 5層に分層できる。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

- | | |
|---------------------|-----------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子微量 | 4 暗褐色 ローム粒子少量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子中量 | 5 黒褐色 ロームブロック少量 |
| 3 黒褐色 ローム粒子少量、炭化物微量 | |

遺物出土状況 土師器片18点(甕)が出土しただけである。いずれも細片で、流れ込んだものと考えられる。

所見 周囲に関連を示す遺構は確認されず、性格は不明であるが、南北方向に延びていることから、区画溝の可能性も考えられる。時期は、遺構に伴う土器が出土していないため不明である。



第170図 第13号溝跡土層断面図

第14号溝跡 (第171図, 付図)

位置 調査区北部のE 3 d8～E 3 e9区, 標高23.5mの台地平坦部に位置している。また, 北・南側に第72・90号墓坑が位置している。

重複関係 第26号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 調査区域外に接するE 3 e9区から, 4mほど西方向(N-86°-W)へ延びたところで, 北東方向(N-13°-E)に屈曲し, E 3 e8区で立ち上がっている。確認された長さは7.63m, 上幅0.18～0.31m, 下幅0.10～0.23m, 深さ8～13cmである。断面形はU字状を呈し, 壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 5層に分層できる。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|-----------------------|---------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子微量 | 4 暗褐色 ローム粒子少量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量 | 5 褐色 ローム粒子中量 |
| 3 暗褐色 ローム粒子微量 | |

所見 北・南側に墓坑が位置していることから, 区画溝の可能性も考えられるが, 規模が小さく性格は不明である。時期は, 土器が出土していないため不明である。



第171図 第14号溝跡土層断面図

第15号溝跡 (第172図, 付図)

位置 調査区北部のD 2 b8～E 2 c6区, 標高23mの台地平坦部に位置している。東に第13・16号溝跡がほぼ平行するように位置している。

重複関係 第31号住居跡, 第77号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 調査区域外に接するE 2 c6区から北東方向(N-33°-W)へ直線的に延び, E 2 a8区で北方向(N-3°-E)に向きを変えて, 調査区域外まで延びている。確認された規模は長さ23.46m, 上幅0.14～1.19m, 下幅0.04～0.82mで, 深さは10～37cmである。断面形はU字状を呈し, 壁は外傾して立ち上がっている。

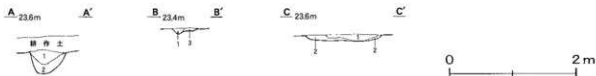
覆土 3層に分層できる。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

- | | |
|-------------------------|-----------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子・埴土粒子・炭化粒子微量 | 3 黒褐色 ロームブロック少量 |
| 2 褐色 ローム粒子多量 | |

遺物出土状況 土師器片8点(號)が出土しただけである。いずれも細片で, 流れ込んだものと考えられる。

所見 周囲に関連を示す遺構は確認されず, 性格は不明であるが, 第16号溝と同様に, 北側の谷津に雨水等を排水した溝の可能性が。時期は, 遺構に伴う土器が出土していないため不明である。



第172図 第15号溝跡土層断面図

第16号溝跡 (第173図, 付図)

位置 調査区北部のD 2 i0～E 2 h6区, 標高23.2mの台地平坦部に位置している。東に第13号溝跡, 西に第15号溝跡がほぼ平行するように位置している。

重複関係 第55・59号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 E 2 h6区から北東方向(N-22°-E)へ直線的に伸び, E 2 c7区でさらに北東方向(N-39°-E)に向きを変えて, 調査区域外まで延びている。確認された規模は長さ41.98m, 上幅0.68～1.70m, 下幅0.28～0.53mで, 深さは14～25cmである。断面形はU字状を呈し, 壁は外傾して立ち上がっている。

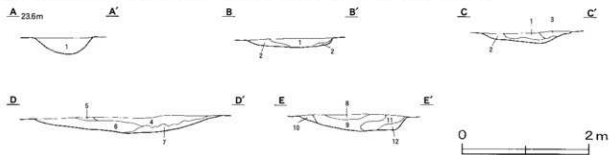
覆土 12層に分層できる。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

土層解説

1 暗褐色	ロームブロック少量	7 暗褐色	ロームブロック中量, 炭化材微量
2 褐色	ロームブロック中量	8 黒褐色	焼土粒子多量
3 黒褐色	ローム粒子少量	9 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子少量
4 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子微量	10 暗褐色	焼土ブロック・ローム粒子少量
5 暗褐色	焼土粒子中量	11 黒色	ローム粒子・焼土粒子微量
6 褐色	ロームブロック中量, 炭化材微量	12 黒褐色	焼土粒子・炭化材微量

遺物出土状況 土師器片144点(高坏1, 甕143)が出土している。いずれも細片で, 流れ込んだものと考えられる。

所見 周囲に関連を示す遺構は確認されず, 性格は不明であるが, 第15号溝と同様に, 北側の谷津に雨水等を排水した溝とも想定される。時期は, 遺構に伴う土器が出土していないため不明である。



第173図 第16号溝跡土層断面図

第18号溝跡 (第174図, 付図)

位置 調査区北部のG 2 a3～G 2 a4区, 標高23mの台地平坦部に位置している。南側に第17号溝跡が平行して位置している。

重複関係 第43・49号住居跡を掘り込み, 第94・101号墓坑に掘り込まれている。

規模と形状 調査区域外に接するG 2 a3区から東方向(N-117°-E)へ直線的に伸びており, 確認された長さは7.42m, 上幅0.36～0.50m, 下幅0.10～0.30m, 深さ12cmである。断面形はU字状を呈し, 壁は外傾して立ち上がっている。

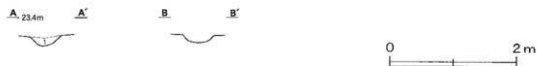
覆土 単一層である。層厚が薄いため堆積状況は不明である。

土層解説

1 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化材微量
-------	----------------------

遺物出土状況 土師器片6点(甕)が出土しただけである。いずれも細片で, 流れ込んだものと考えられる。

所見 南側に第17号溝が平行するように位置しているが, 性格・時期とも不明である。



第174図 第18号溝跡土層断面図

第32号溝跡 (第175図)

位置 調査区北部のD 2 f8～D 2 g0区、標高22.9mの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第118号墓坑に掘り込まれている。

規模と形状 D 2 g0区から北西方向 (N-34°-W) へ直線的に延びている。規模は長さ7.6m、上幅0.32～0.58m、下幅0.18～0.40m、深さ12cmである。断面形は逆台形を呈している。

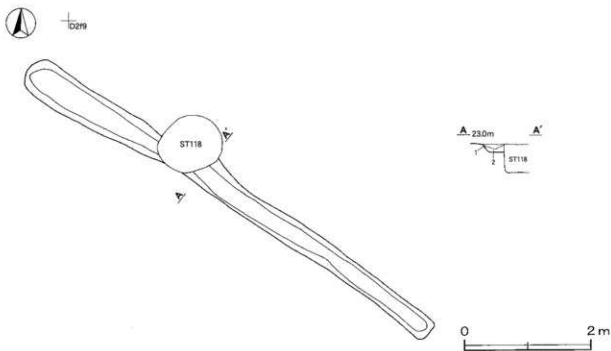
覆土 2層に分層できる。層厚が薄いため堆積状況は不明である。

土層解説

1 暗褐色 ロームブロック少量

2 黒褐色 ロームブロック少量

所見 出土土器や周囲に関連性を示す遺構がなく、時期・性格とも不明である。



第175図 第32号溝跡実測図

第33号溝跡 (第176図)

位置 調査区北部のD 2 c8～D 2 e8区、標高22.6mの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 D 2 e8区から北方向 (N-10°-E) へ直線的に延びている。北端が調査区域外に延びており、確認できた長さは9.52m、上幅0.64～1.74m、下幅0.40～1.18m、深さ13～20cmである。断面形は浅いU字状を呈している。

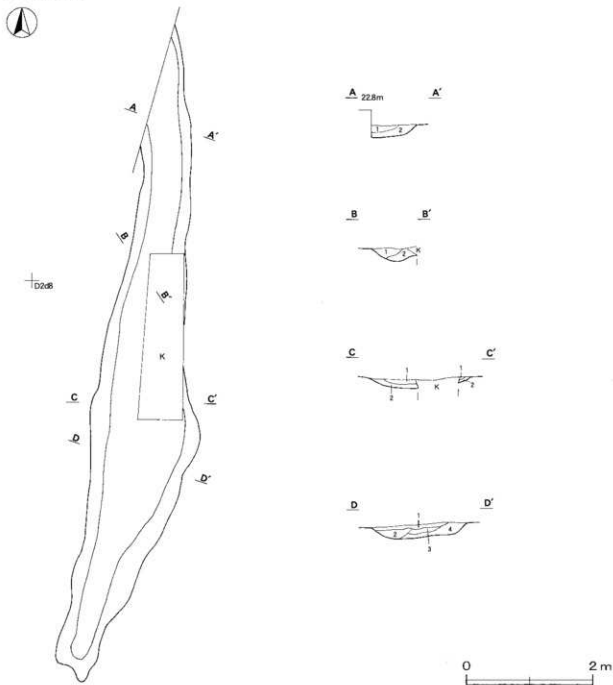
覆土 4層に分層できる。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------|-------|-----------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子微量 | 3 暗褐色 | ロームブロック微量 |
| 2 褐色 | ロームブロック少量 | 4 暗褐色 | ロームブロック少量 |

遺物出土状況 土師器片3点(坏2, 甕1)が出土している。いずれも細片で、流れ込んだものと考えられる。

所見 周囲に関連を示す遺構が確認されず、性格は不明である。時期は、遺構に伴う土器が出土していないため不明である。



第176図 第33号溝跡実測図

第36号溝跡（第177図）

位置 調査区北部のB 4 i3～B 4 i4区、標高20.6～20.9mの台地縁辺部に位置している。

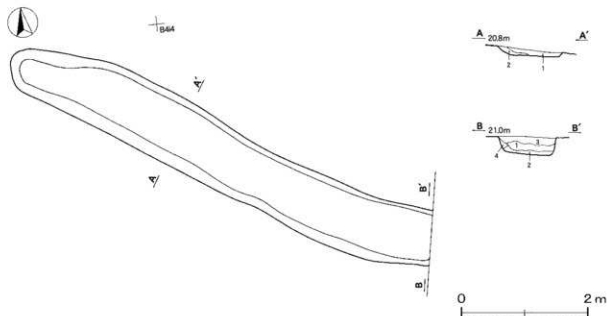
規模と形状 B 4 i4区から西方向（N-60°-W）へ直線的に延びている。東端が調査区域外に延びており、確認できた長さは7.28m、上幅0.74～1.04m、下幅0.42～0.79m、深さ12～26cmである。断面形は逆台形を呈している。

覆土 4層に分層できる。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

- | | |
|-----------------------|------------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量 | 3 極暗褐色 ロームブロック微量 |
| 2 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量 | 4 黒褐色 ローム粒子微量 |

所見 出土土器や周囲に関連性を示す遺構がなく、時期・性格とも不明である。



第177図 第36号溝跡実測図

第37号溝跡（第178図）

位置 調査区北部のC 3 b8～C 3 d7区、標高21.2mの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第572・573号土坑を掘り込み、第642・644～646号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 C 3 b8区から南西方向（N-30°-E）へ直線的に延びている。確認できた長さは8.68m、上幅0.80～1.10m、下幅0.34～0.62m、深さ46～58cmである。断面形はU字状を呈している。

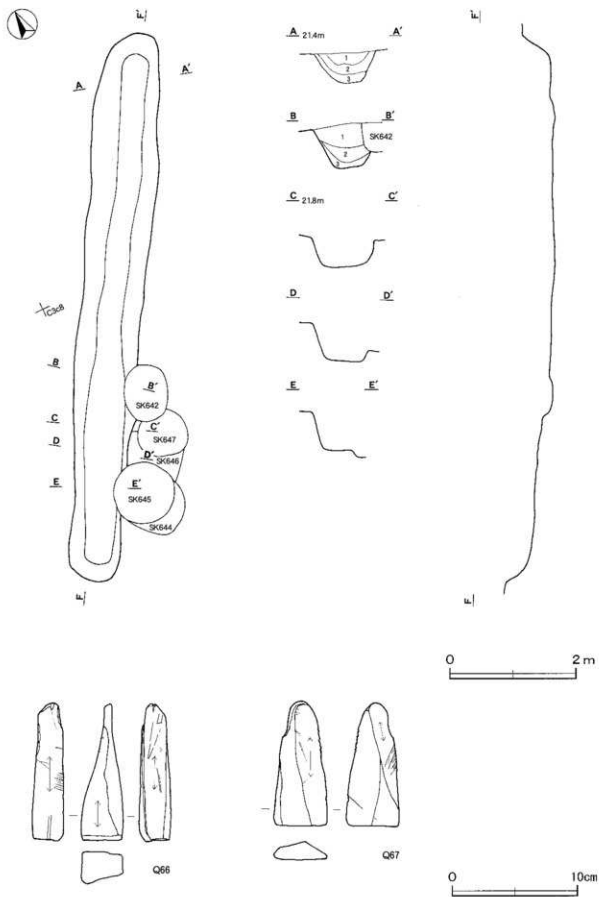
覆土 3層に分層できる。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

- | | |
|-------------------------|------------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 3 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 2 極暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量 | |

遺物出土状況 土師器片6点（甕）、陶磁器片7点（碗4、蓋3）、石器2点（砥石）が出土している。Q66・Q67は覆土中から出土している。

所見 周囲に関連を示す遺構が確認されず、性格は不明である。時期は、遺構に伴う土器が出土していないため不明である。



第178图 第37号沟跡・出土遺物実測図

第37号溝跡出土遺物観察表 (第178図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備考
Q66	砥石	10.9	3.4	2.5	107.5	粘板岩	紙面3面	覆土中	
Q67	砥石	8.5	4.2	1.5	80.2	粘板岩	紙面2面	覆土中	

第38号溝跡 (第179図)

位置 調査区北部のC4c1~C3d0区、標高21.2mの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 C3d0区から北東方向(N-33°-E)へ直線的に延びている。確認できた長さは4.14m、上幅0.32~1.26m、下幅0.20~1.04mで、南部でやや上幅が広がっている。深さ12~14cmで、断面形はU字状を呈している。

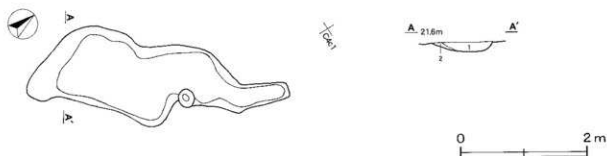
覆土 2層に分層できる。層厚が薄いため堆積状況は不明である。

土層解説

1 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

2 暗褐色 ロームブロック中量

所見 出土土器や周囲に関連性を示す遺構がなく、時期・性格とも不明である。



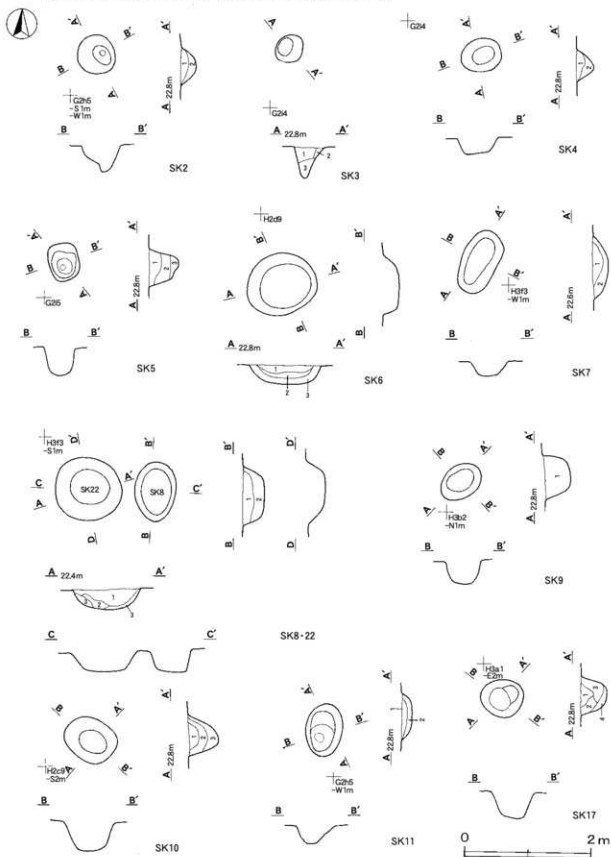
第179図 第38号溝跡実測図

表9 溝跡一覧表

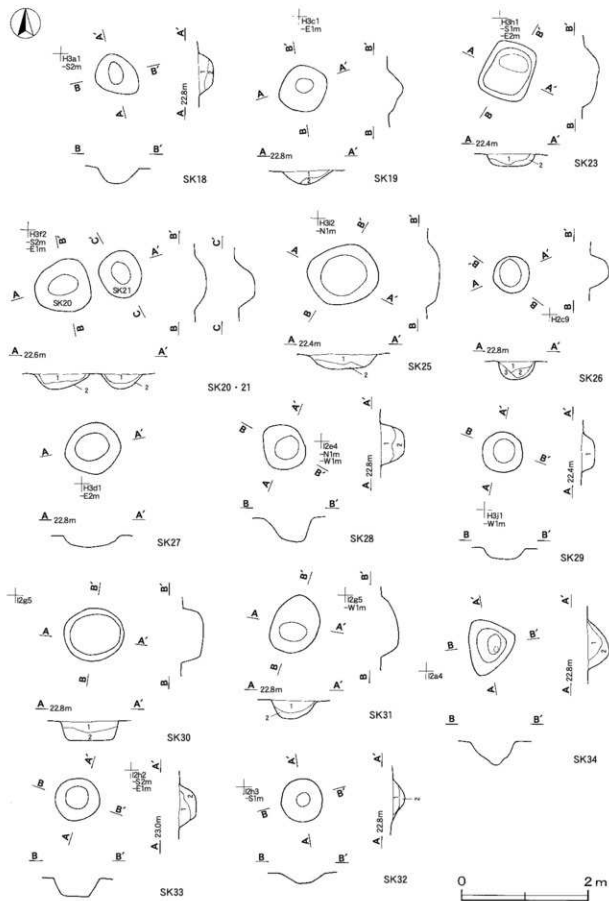
番号	位置	方向	形状	規模			断面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係 (古→新)	
				長さ (m)	上幅 (m)	下幅 (m)					深さ (cm)
3	I 2c1~K 2a3	N-8°-E N-66°-W	コ字状	(20.86)	0.38~1.00	0.16~0.42	60	U字状	自然	-	S123, SD 5・12 →本跡
10	H 3a5~H 3c6	N-28°-W	直線状	(8.57)	0.46~0.65	0.25~0.59	11~16	U字状	自然	土師器	S17・9→本跡
12	G 2i3~J 2a3	N-8°-W N-11°-W	L字状 弧状	(99.4)	0.36~0.70	0.10~0.20	10~25	U字状	自然	土師器	S115~17, S10 →本跡
13	D 3j2~E 2i6	N-25°-W	直線状	(37.0)	0.38~0.86	0.20~0.70	8~26	U字状	自然	土師器	S125→本跡→ 第1号方形周 溝遺構, SK531
14	E 3i8~E 3i9	N-86°-W N-13°-E	L字状	(7.63)	0.18~0.31	0.10~0.23	8~13	U字状	人為	-	S126→本跡
15	D 2i8~E 2c6	N-33°-W N-3°-E	弧状	(23.46)	0.14~1.19	0.04~0.82	10~37	U字状	自然	土師器	S131, SK77→本 跡
16	D 2i10~E 2i6	N-22°-E N-39°-E	L字状	(41.98)	0.68~1.70	0.28~0.53	14~25	U字状	人為	土師器	S155・59→本跡
18	G 2a3~G 2a5	N-117°-E	直線状	(7.42)	0.36~0.50	0.10~0.30	12	U字状	不明	土師器	S143・19→本跡 →ST94・101
32	D 2i8~D 2i9	N-34°-W	直線状	7.6	0.32~0.58	0.18~0.40	12	逆台形状	不明	-	本跡→ST118
33	D 2i8~D 2i9	N-10°-E	直線状	(9.52)	0.61~1.71	0.40~1.18	13~20	U字状	自然	土師器	
36	B 4i3~B 4i4	N-60°-W	直線状	(7.28)	0.71~1.04	0.42~0.79	12~26	逆台形状	自然	-	
37	C 3i6~C 3i7	N-30°-E	直線状	8.68	0.80~1.10	0.34~0.62	46~58	U字状	自然	土師器, 石器	SK572・873→本 跡→SK642・644 →646
38	C 4c1~C 3i8	N-33°-E	直線状	4.14	0.32~1.26	0.20~1.04	12~14	U字状	不明	-	

(3) 土坑 (第180~191図)

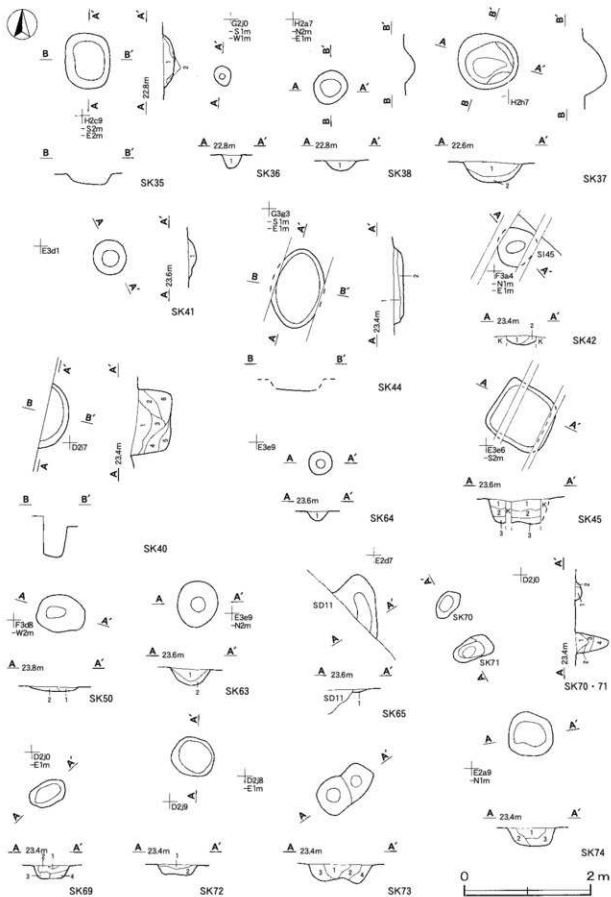
時期及び性格不明の土坑については、以下、実測図を記載する。



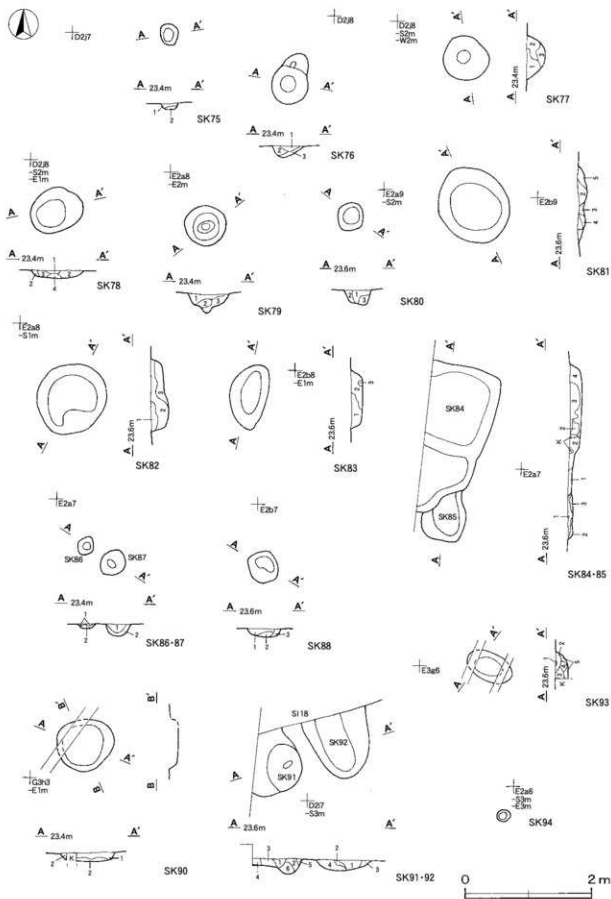
第180図 土坑実測図(1)



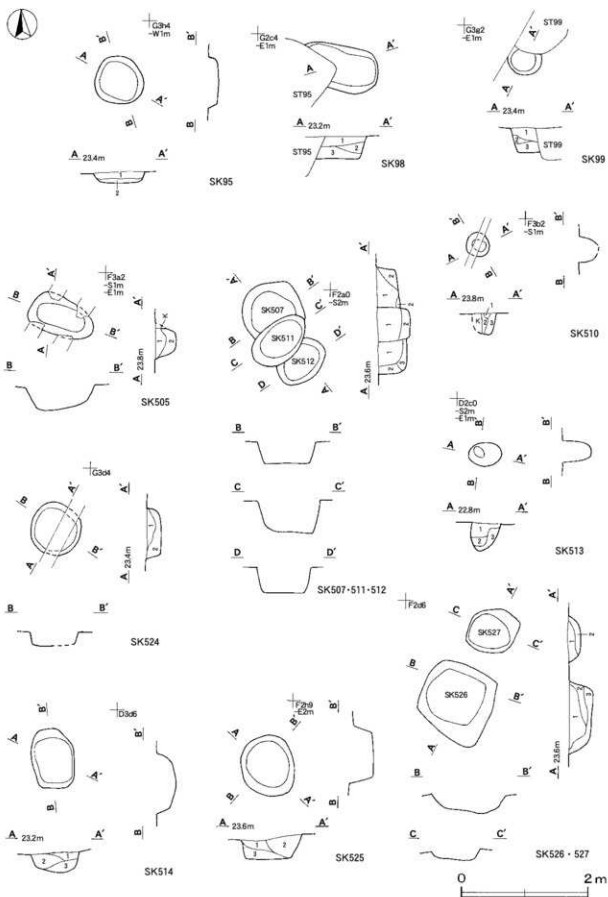
第181图 土坑实测图(2)



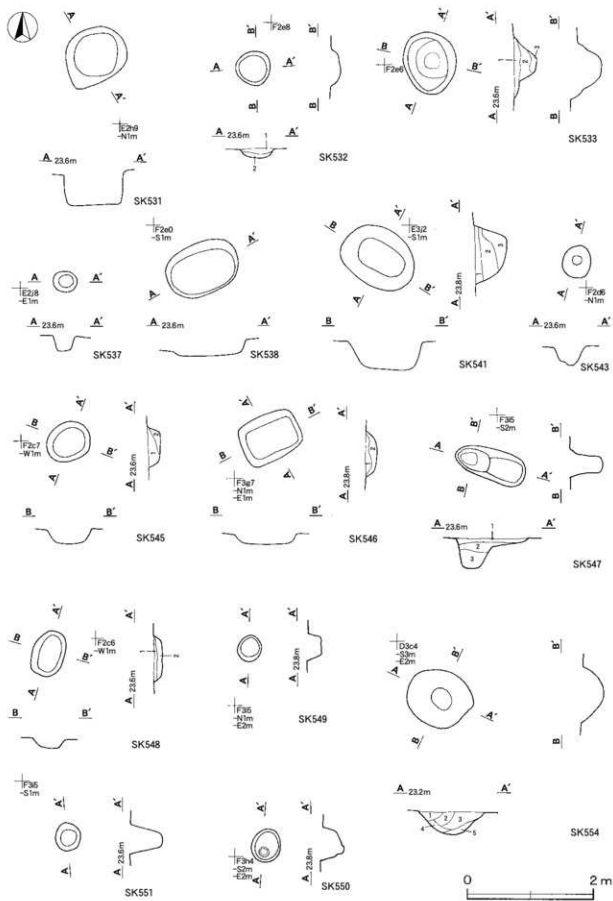
第182图 土坑实测图(3)



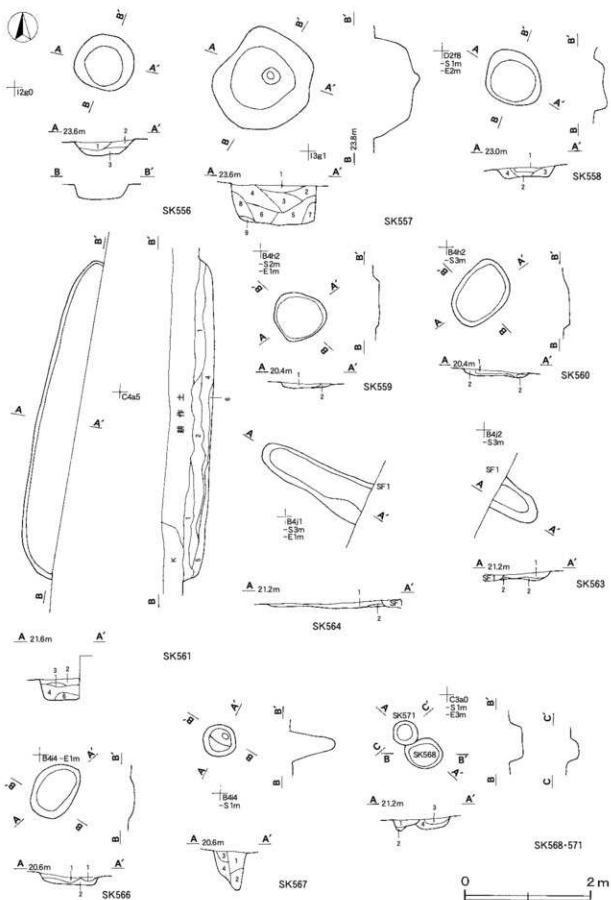
第183图 土坑夹测图(4)



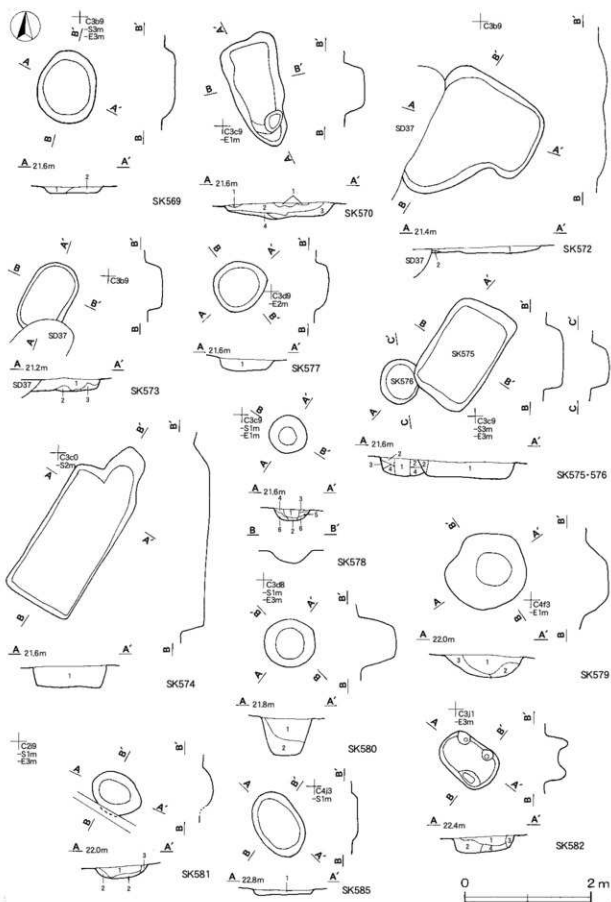
第184图 土坑实测图(5)



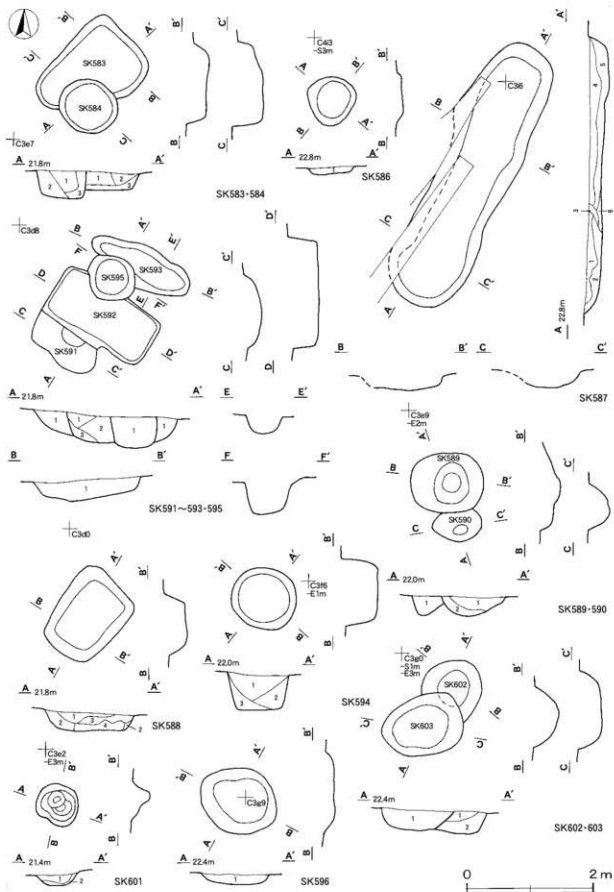
第185图 土坑实测图(6)



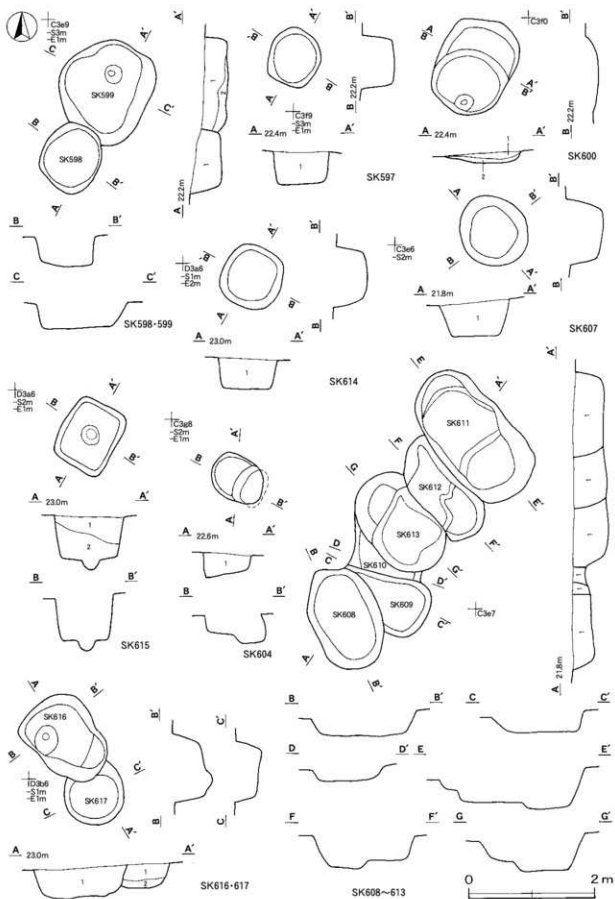
第186图 土坑实测图(7)



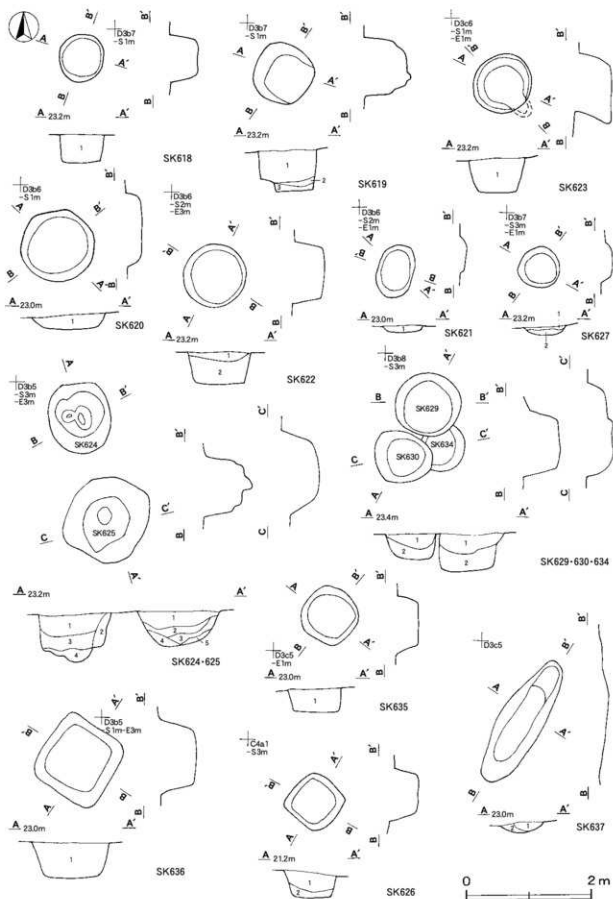
第187图 土坑实测图(8)



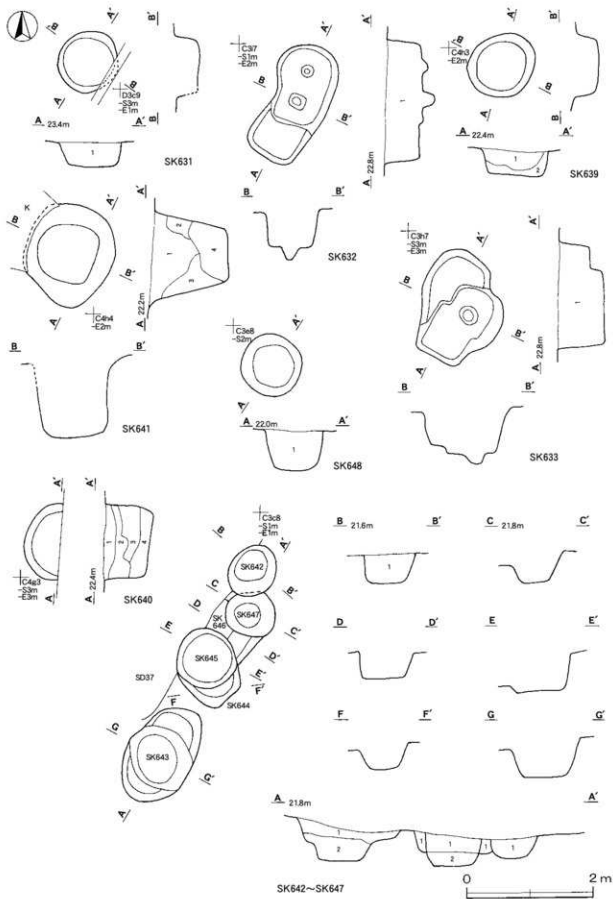
第188图 土坑实测图(9)



第189图 土坑实测图(10)



第190图 土坑实测图(11)



第191图 土坑实测图(12)

第2号土壌層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック微量

第3号土壌層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 褐色 ローム粒子中量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量

第4号土壌層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量

第5号土壌層解説

- 1 褐色 ロームブロック・炭化物微量
- 2 黄褐色 ロームブロック・遊離バミス少量、炭化物微量
- 3 に近い褐色 ローム粒子中量、炭化物微量

第6号土壌層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 褐色 ローム粒子中量

第7号土壌層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子中量

第8号土壌層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子多量

第9号土壌層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量

第10号土壌層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土ブロック微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 褐色 ローム粒子中量

第11号土壌層解説

- 1 褐色 ロームブロック少量
- 2 褐色 ローム粒子中量

第17号土壌層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量
- 3 褐色 ロームブロック少量
- 4 暗褐色 ロームブロック微量

第18号土壌層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量
- 2 褐色 ロームブロック少量

第19号土壌層解説

- 1 褐色 ロームブロック少量
- 2 褐色 ローム粒子中量

第20号土壌層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 褐色 ローム粒子中量

第21号土壌層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量
- 2 褐色 ローム粒子多量

第22号土壌層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ロームブロック少量
- 3 褐色 ローム粒子多量

第23号土壌層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量
- 2 褐色 ローム粒子多量

第25号土壌層解説

- 1 褐色 ロームブロック少量
- 2 褐色 ローム粒子多量

第26号土壌層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
- 3 褐色 ローム粒子少量

第28号土壌層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子多量

第29号土壌層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量

第30号土壌層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子多量

第31号土壌層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子多量

第32号土壌層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子多量

第33号土壌層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子多量

第34号土壌層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量

第35号土壌層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子中量

第36号土壌層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量

第37号土壌層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

第38号土壌層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量

第40号土壌層解説

- 1 褐色 ロームブロック多量
- 2 褐色 ロームブロック中量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量
- 4 黒褐色 ロームブロック少量
- 5 黒褐色 ロームブロック微量
- 6 暗褐色 ロームブロック微量

第41号土壌層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量

第42号土壌層解説

- 1 褐色 ローム粒子多量、焼土ブロック・炭化粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子多量

第44号土壌層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子多量

第45号土壌層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量
- 2 黒褐色 ロームブロック多量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量

第50号土壌層解説

- 1 黒褐色 粘土ブロック中量、ローム粒子少量
- 2 極暗褐色 粘土ブロック・ローム粒子少量

第63号土壌層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子中量

第64号土壌層解説

- 1 黒褐色 炭化物・ローム粒子・焼土粒子微量

第65号土壌層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量

第69号土壌層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量
- 3 褐色 ロームブロック中量
- 4 褐色 ロームブロック多量

第70号土壌層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ロームブロック多量、炭化粒子微量

第71号土壌層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 褐色 ロームブロック多量
- 4 暗褐色 ロームブロック多量、炭化粒子微量

第72号土壌層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量

第73号土壌層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量

第74号土壌層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ロームブロック多量

第75号土壌層解説

- 1 褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ロームブロック中量

第76号土壌層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 褐色 ロームブロック中量
- 3 褐色 ローム粒子中量

第77号土壌層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量

第78号土壌層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ローム粒子微量
- 4 褐色 ロームブロック中量

第79号土壌層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ロームブロック多量

第80号土壌層解説

- 1 褐色 ロームブロック中量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

第81号土壌層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量
- 4 褐色 ロームブロック多量
- 5 褐色 ローム粒子微量

第82号土壌層解説

- 1 褐色 ロームブロック微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量
- 3 褐色 ローム粒子微量

第83号土壌層解説

- 1 褐色 ロームブロック微量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量
- 3 暗褐色 ローム粒子微量

第84号土壌層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量
- 4 褐色 ロームブロック少量

第85号土壌層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量
- 3 褐色 ローム粒子微量

第86号土壌層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子少量

第87号土壌層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子中量

第88号土壌層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 褐色 ローム粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量

第90号土壌層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量

第91号土壌層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 褐色 ロームブロック少量、黒色土ブロック微量
- 3 褐色 ロームブロック中量
- 4 暗褐色 ローム粒子微量
- 5 褐色 ローム粒子微量
- 6 褐色 ロームブロック中量、黒色土ブロック少量

第92号土壌層解説

- 1 褐色 ローム粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子少量、黒色土ブロック微量
- 3 褐色 ローム粒子中量、黒色土ブロック微量
- 4 褐色 ローム粒子少量

第93号土壌層解説

- 1 赤褐色 焼土ブロック少量
- 2 褐色 ロームブロック・黒色土ブロック・焼土粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量
- 4 暗褐色 ロームブロック・黒色土ブロック少量
- 5 黒褐色 ロームブロック・黒色土ブロック中量

第95号土壌層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量

第98号土壌層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量
- 3 褐色 ロームブロック微量

第99号土壌層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量

第505号土壌層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量

第507号土壌層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量

第510号土壌層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量

第511号土壌層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック・炭化物・焼土粒子微量

第512号土壌層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・遮雨バミス微量
- 3 暗褐色 ロームブロック・炭化物・焼土粒子微量

第513号土壌層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量

第514号土壌層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量

第524号土壌層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量
- 2 黒褐色 ローム粒子微量

第525号土壌層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子微量
- 2 極暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量

第526号土壌層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量、炭化粒子微量

第527号土壌層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 褐色 ローム粒子多量

第532号土壌層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック少量

第533号土壌層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量
- 2 褐色 ローム粒子多量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量

第541号土壌層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子少量
- 3 褐色 ローム粒子中量

第545号土壌層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量
- 2 褐色 ローム粒子中量

第546号土壌層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量

第547号土壌層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量
- 3 極暗褐色 ロームブロック微量

第548号土壌層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量
- 2 褐色 ローム粒子少量

第554号土壌層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量
- 4 黒褐色 ロームブロック微量
- 5 極暗褐色 ローム粒子微量

第556号土壌層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 黒褐色 ロームブロック微量

第557号土壌層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ロームブロック微量
- 5 黒褐色 ローム粒子微量
- 6 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 7 暗褐色 ロームブロック少量
- 8 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 9 暗褐色 ローム粒子少量

第558号土壌層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 黒褐色 ロームブロック微量
- 3 暗褐色 ロームブロック微量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量

第559号土壌層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 明褐色 ローム粒子中量

第560号土壌層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

第561号土壌層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 極暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 3 褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 4 に近い褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量
- 5 黒褐色 ロームブロック少量
- 6 明褐色 ロームブロック多量

第563号土壌層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子少量

第564号土壌層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 褐色 ローム粒子少量

第566号土壌層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子少量

第567号土壌層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 褐色 ロームブロック微量
- 3 極暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 4 明褐色 ロームブロック少量

第568-571号土壌層解説

- 1 褐色 ロームブロック中量
- 2 褐色 ロームブロック多量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量
- 4 明褐色 ロームブロック中量

第569号土壌層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

第570号土壌層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量
- 3 明褐色 ローム粒子中量
- 4 褐色 ロームブロック微量

第572号土壌層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 明褐色 ローム粒子中量

第573号土壌層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量
- 2 褐色 ロームブロック多量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量

第574号土壌土層解説

1 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量

第575号土壌土層解説1 暗褐色 ロームブロック中量
2 褐色 ロームブロック多量**第576号土壌土層解説**1 暗褐色 ロームブロック微量
2 黒褐色 ローム粒子少量
3 褐色 ロームブロック中量
4 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量**第577号土壌土層解説**

1 黒褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量

第578号土壌土層解説1 黒褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
2 黄褐色 ロームブロック中量
3 黒褐色 ロームブロック少量
4 にごり黄褐色 ロームブロック少量
5 黒褐色 ローム粒子少量
6 暗褐色 ローム粒子少量**第579号土壌土層解説**1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2 褐色 ロームブロック少量
3 暗褐色 ロームブロック微量**第580号土壌土層解説**1 黒褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子少量
2 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量**第581号土壌土層解説**1 褐灰色 ロームブロック少量
2 灰褐色 ロームブロック中量
3 褐色 ロームブロック中量**第582号土壌土層解説**1 褐灰色 ロームブロック少量
2 灰褐色 ロームブロック中量
3 褐色 ロームブロック多量
4 褐色 ロームブロック中量**第583号土壌土層解説**1 黒褐色 ロームブロック少量
2 褐色 ローム粒子少量
3 暗褐色 ロームブロック中量**第584号土壌土層解説**1 黒褐色 ロームブロック少量
2 黒褐色 ロームブロック中量
3 黒褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量**第585号土壌土層解説**

1 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

第586号土壌土層解説

1 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量

第587号土壌土層解説1 黒褐色 炭化物中量, ロームブロック少量
2 黒褐色 炭化物多量, ロームブロック少量
3 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子中量
4 黒褐色 焼土ブロック・炭化物少量, ロームブロック微量
5 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
6 黒色 ロームブロック・炭化物・焼土粒子微量**第588号土壌土層解説**1 黒褐色 ローム粒子少量, 炭化物微量
2 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量
3 褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
4 黒褐色 炭化物中量, ロームブロック微量**第589号土壌土層解説**1 黒褐色 ロームブロック少量
2 黒褐色 ロームブロック中量**第590号土壌土層解説**

1 黒褐色 ロームブロック少量

第591号土壌土層解説

1 黒褐色 ロームブロック少量

第592号土壌土層解説1 黒褐色 ロームブロック少量, 炭化物微量
2 褐色 ロームブロック中量, 炭化物微量
3 黒褐色 ロームブロック少量, 炭化材微量**第593号土壌土層解説**

1 黒色 ロームブロック少量, 炭化物微量

第594号土壌土層解説1 褐灰色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量
2 褐灰色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
3 黒褐色 ロームブロック微量**第595号土壌土層解説**

1 黒褐色 ローム粒子微量

第596号土壌土層解説

1 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量

第597号土壌土層解説

1 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量

第598号土壌土層解説

1 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量

第599号土壌土層解説1 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
2 褐色 ロームブロック少量**第600号土壌土層解説**1 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
2 褐色 ロームブロック少量**第601号土壌土層解説**1 暗褐色 ロームブロック微量
2 褐色 ローム粒子少量**第602号土壌土層解説**1 黒褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
2 暗褐色 ロームブロック少量**第603号土壌土層解説**

1 黒褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量

第604号土壌土層解説

1 黒褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量

第607号土壌土層解説

1 黒褐色 ロームブロック中量, 糞沼パミスブロック微量

第608号土壌土層解説

1 黒褐色 ロームブロック少量

第609号土壌土層解説

1 黒褐色 ロームブロック少量

第610号土壌土層解説

1 黒褐色 ロームブロック微量

第611号土壌土層解説

1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

第612号土壌土層解説

1 黒褐色 ロームブロック少量

第613号土壌土層解説

1 黒褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量

第614号土壌土層解説

1 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量

第615号土坑土層解説
 1 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
 2 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量

第616号土坑土層解説
 1 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

第617号土坑土層解説
 2 黒褐色 炭化粒子少量、ローム粒子微量
 3 褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

第618号土坑土層解説
 1 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量

第619号土坑土層解説
 1 暗褐色 ロームブロック少量、炭化物微量
 2 褐色 ロームブロック中量
 3 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

第620号土坑土層解説
 1 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

第621号土坑土層解説
 1 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

第622号土坑土層解説
 1 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
 2 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量

第623号土坑土層解説
 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量

第624号土坑土層解説
 1 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
 2 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量
 3 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
 4 褐色 ロームブロック中量

第625号土坑土層解説
 1 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
 2 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
 3 褐色 ロームブロック少量
 4 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量
 5 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

第626号土坑土層解説
 1 黒褐色 ロームブロック少量
 2 暗褐色 ロームブロック中量

第627号土坑土層解説
 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
 2 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

第629号土坑土層解説
 1 黒褐色 炭化粒子少量、ロームブロック微量
 2 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量

第630号土坑土層解説
 1 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量
 2 黒褐色 炭化粒子少量、ロームブロック微量

第631号土坑土層解説
 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量

第632号土坑土層解説
 1 黒褐色 ロームブロック・糞沼パミスブロック少量、炭化粒子微量

第633号土坑土層解説
 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子・糞沼パミスブロック少量

第635号土坑土層解説
 1 黒褐色 ロームブロック少量

第636号土坑土層解説
 1 黒褐色 ロームブロック・糞沼パミスブロック少量

第637号土坑土層解説
 1 黒褐色 ロームブロック微量
 2 暗褐色 ロームブロック少量

第639号土坑土層解説
 1 暗褐色 ロームブロック少量
 2 黒褐色 ロームブロック少量

第640号土坑土層解説
 1 黒褐色 ロームブロック少量
 2 暗褐色 ロームブロック中量
 3 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量
 4 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

第641号土坑土層解説
 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量、糞沼パミスブロック微量
 2 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量
 3 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量
 4 黒褐色 炭化粒子中量、ローム粒子・焼土粒子微量

第642号土坑土層解説
 1 黒褐色 ロームブロック少量

第643号土坑土層解説
 1 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量
 2 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量

第644号土坑土層解説
 1 褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

第645号土坑土層解説
 1 褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
 2 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量

第646号土坑土層解説
 1 灰褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

第647号土坑土層解説
 1 灰褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

第648号土坑土層解説
 1 黒褐色 ロームブロック・糞沼パミスブロック少量

(SK27・94・531・537・538・543・549～551・634土層解説なし)

表10 土坑一覧表

番号	位置	長軸(径)方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 重複関係 (古一新)
				長軸(径)×短軸(径)(m)	深さ(cm)					
2	G 2b4	—	円形	0.64 × 0.60	26	緩斜	皿状	自然	—	
3	G 2b4	—	方形	0.45 × 0.41	53	外傾	皿状	人為	—	
4	G 214	N-53°-E	楕円形	0.68 × 0.56	26	外傾	皿状	自然	—	
5	G 2b5	N-15°-W	長方形	0.58 × 0.46	49	外傾	皿状	人為	—	
6	H 2a9	N-77°-E	楕円形	1.11 × 0.94	25	緩斜	平坦	自然	—	
7	H 3e2	N-20°-E	楕円形	1.01 × 0.58	13	緩斜	平坦	自然	—	

番号	位置	長軸(径)方向	平面形	規 模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備 考 重複関係 (古→新)
				長軸(径)×短軸(径)(m)	深さ(cm)					
8	H 3 f3	N-0°	楕円形	0.90 × 0.63	36	外傾	平坦	自然	—	
9	H 3 a2	N-52°-E	楕円形	0.70 × 0.53	35	外傾	平坦	不明	—	
10	H 2 e9	N-48°-W	長方形	0.82 × 0.66	50	緩斜	平坦	人為	—	
11	G 2 g4	N-12°-E	楕円形	0.84 × 0.60	30	緩斜	皿状	自然	—	
17	H 3 a1	—	円形	0.67 × 0.61	42	緩斜	平坦	人為	—	
18	H 3 a1	N-55°-W	不整楕円形	0.75 × 0.67	22	緩斜	皿状	自然	—	
19	H 3 c1	—	方形	0.73 × 0.70	25	緩斜	皿状	自然	—	
20	H 3 f2	N-21°-W	楕円形	0.88 × 0.82	22	緩斜	皿状	自然	—	
21	H 3 f2	N-35°-E	楕円形	0.74 × 0.65	22	緩斜	皿状	自然	—	
22	H 3 f3	N-59°-E	楕円形	1.03 × 0.93	36	緩斜	平坦	人為	—	
23	H 3 h1	N-20°-E	長方形	0.92 × 0.78	26	緩斜	皿状	自然	—	
25	H 3 h2	N-64°-E	長方形	1.07 × 0.93	20	緩斜	皿状	自然	—	
26	H 2 b8	—	円形	0.60 × 0.57	31	緩斜	皿状	人為	—	
27	H 3 c1	—	円形	0.86 × 0.82	19	緩斜	皿状	不明	—	
28	I 2 d3	—	方形	0.70 × 0.66	38	外傾	平坦	人為	—	
29	H 2 i0	—	円形	0.64 × 0.61	20	緩斜	皿状	不明	—	
30	I 2 g5	N-85°-W	楕円形	0.96 × 0.83	30	外傾	皿状	人為	—	
31	I 2 g4	N-18°-E	楕円形	0.95 × 0.74	28	緩斜	皿状	人為	—	
32	I 2 h3	—	円形	0.69 × 0.67	16	緩斜	皿状	自然	—	
33	I 2 h2	—	円形	0.70 × 0.68	28	外傾	平坦	自然	—	
34	H 2 j4	N-7°-W	不定形	0.90 × 0.74	40	緩斜	皿状	自然	—	
35	H 2 e9	N-0°	長方形	0.85 × 0.70	16	緩斜	平坦	自然	—	
36	G 2 j9	N-22°-W	楕円形	0.31 × 0.27	23	外傾	皿状	不明	—	
37	H 2 g6	—	円形	0.97 × 0.90	37	緩斜	皿状	自然	—	
38	G 2 j7	—	方形	0.55 × 0.50	18	緩斜	皿状	不明	—	
40	D 2 b6	—	[楕円形]	1.00 × (0.36)	56	外傾	平坦	人為	—	SI18→本跡
41	E 3 d1	—	円形	0.55 × 0.53	11	緩斜	皿状	不明	—	
42	E 3 j4	—	[円形]	0.62 × [0.62]	15	緩斜	皿状	不明	—	SI45→本跡
44	G 3 g3	N-9°-E	[楕円形]	1.25 × [0.82]	17	緩斜	平坦	人為	—	
45	E 3 d6	—	方形	1.00 × 0.95	40	直立	平坦	人為	—	
50	F 3 e7	N-72°-W	楕円形	0.75 × 0.60	7	緩斜	平坦	人為	—	
63	E 3 d8	N-15°-E	楕円形	0.72 × 0.62	26	緩斜	皿状	自然	—	
64	E 3 e9	—	円形	0.38 × 0.38	14	緩斜	皿状	不明	—	
65	E 2 d6	N-46°-W	不定形	1.00 × 0.53	(4)	緩斜	平坦	自然	—	本跡→SD11
69	D 2 j0	N-56°-E	不整楕円形	0.59 × 0.37	20	緩斜	平坦	人為	—	
70	D 2 j9	N-40°-E	楕円形	0.48 × 0.31	11	緩斜	平坦	人為	—	
71	D 2 j9	N-67°-E	楕円形	0.65 × 0.35	52	外傾	平坦	人為	—	
72	D 2 i9	—	円形	0.70 × 0.62	17	緩斜	平坦	自然	—	
73	D 2 j8	N-54°-E	不整楕円形	0.97 × 0.54	25~30	緩斜	凹凸	人為	—	
74	D 2 j9	—	円形	0.72 × 0.69	30	緩斜	平坦	人為	—	
75	D 2 j7	N-20°-W	楕円形	0.35 × 0.29	9	緩斜	平坦	人為	—	
76	D 2 j7	N-19°-E	不整楕円形	0.85 × 0.58	17	緩斜	皿状	人為	—	
77	D 2 j7	—	円形	0.73 × 0.70	29	緩斜	皿状	人為	—	
78	D 2 j8	N-75°-E	楕円形	0.85 × 0.68	10	緩斜	平坦	人為	—	
79	E 2 a8	—	円形	0.67 × 0.62	28	緩斜	皿状	人為	—	
80	E 2 a8	—	円形	0.48 × 0.46	23	外傾	平坦	人為	—	

番号	位置	長軸(径)方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 直復關係 (古→新)
				長軸(径)×短軸(径)(m)	深さ(cm)					
81	E 2 b8	N-25°-W	楕円形	1.26 × 1.07	14	緩斜	皿状	人為	—	
82	E 2 a8	—	円形	1.15 × 1.08	28	外傾	皿状	人為	—	
83	E 2 b8	N-11°-E	楕円形	0.99 × 0.60	17	緩斜	平坦	人為	—	
84	D 2 j6	N-17°-E	不定形	2.43 × 1.05	20	緩斜	平坦	人為	—	SK85→本跡
85	E 2 a6	N-15°-W	[不定形]	(0.73) × 0.73	7	緩斜	平坦	人為	—	本跡→SK84
86	E 2 a7	N-40°-E	楕円形	0.29 × 0.25	7	緩斜	皿状	自然	—	
87	E 2 a7	N-34°-E	楕円形	0.46 × 0.38	21	緩斜	皿状	自然	—	
88	E 2 b7	—	円形	0.53 × 0.52	12	緩斜	平坦	人為	—	
90	G 3 g3	—	円形	0.90 × 0.83	10	外傾	平坦	人為	—	
91	D 2 i6	N-22°-E	[楕円形]	1.10 × (0.75)	10~23	緩斜	皿状	人為	—	
92	D 2 i7	N-26°-W	[楕円形]	(1.05) × 0.90	16	緩斜	皿状	人為	—	
93	E 3 a6	N-63°-W	楕円形	0.77 × 0.46	20	緩斜	平坦	人為	—	
94	E 2 a6	—	円形	0.22 × 0.20	—	—	—	不明	—	
95	G 3 h3	—	円形	0.79 × 0.75	15	外傾	平坦	人為	—	
98	G 2 e4	N-71°-W	[楕円形]	(1.20) × 0.72	32	緩斜	平坦	人為	—	S143→本跡→ST95
99	G 3 g2	—	[円形]	0.53 × (0.38)	38	外傾	平坦	人為	—	本跡→ST99
505	F 3 a2	N-70°-W	楕円形	1.06 × 0.56	38	緩斜	皿状	自然	—	
507	F 2 a9	N-37°-W	[楕円形]	(1.10) × 0.94	37	外傾	平坦	人為	—	本跡→SK511
510	F 3 b1	—	円形	0.38 × 0.38	30	緩斜	皿状	人為	—	S198→本跡
511	F 2 a9	N-55°-E	楕円形	1.00 × 0.60	52	外傾	平坦	人為	—	SK507・512→本跡
512	F 2 a9	N-55°-E	[楕円形]	0.86 × (0.60)	45	直立	平坦	人為	—	本跡→SK511
513	D 2 e0	N-80°-W	楕円形	0.52 × 0.40	46	直立	皿状	人為	—	
514	D 3 d5	N-6°-W	長方形	0.94 × 0.70	31	外傾	皿状	人為	—	
524	G 3 d3	—	円形	0.84 × 0.82	22	直立	平坦	自然	—	
525	F 2 b9	N-37°-W	楕円形	1.00 × 0.90	34	外傾	平坦	人為	—	
526	F 2 a6	N-29°-E	不整形	1.16 × 1.16	20~30	緩斜	傾斜	人為	—	
527	F 2 a6	—	不定形	0.75 × 0.75	20	外傾	皿状	人為	—	
531	E 2 g8	—	不定形	1.08 × 0.92	52	直立	平坦	不明	—	
532	F 2 e7	—	円形	0.54 × 0.54	16	緩斜	皿状	自然	—	
533	F 2 a6	N-0°	楕円形	0.98 × 0.84	44	緩斜	平坦	人為	—	
537	E 2 i8	—	円形	0.37 × 0.34	25	外傾	皿状	不明	—	
538	F 2 e0	N-61°-E	楕円形	1.18 × 0.82	17	外傾	平坦	不明	—	S157→本跡
541	E 3 j1	N-54°-W	楕円形	1.20 × 0.92	44	外傾	平坦	人為	—	
543	F 2 e5	N-19°-E	楕円形	0.51 × 0.45	30	緩斜	皿状	不明	—	
545	F 2 e6	N-65°-E	楕円形	0.72 × 0.61	22	緩斜	平坦	人為	—	
546	F 3 i7	N-64°-E	長方形	0.98 × 0.73	17	緩斜	平坦	人為	—	
547	F 3 i4	N-70°-W	不整形長方形	1.16 × 0.49	10~52	直立	平坦	人為	—	
548	F 2 e5	N-21°-E	楕円形	0.75 × 0.49	16	緩斜	皿状	自然	—	
549	F 3 b5	—	円形	0.41 × 0.39	21	外傾	平坦	不明	—	
550	F 3 i4	N-13°-E	楕円形	0.54 × 0.44	37	外傾	皿状	不明	—	
551	F 3 i5	N-5°-W	楕円形	0.46 × 0.38	50	外傾	皿状	不明	—	
554	D 3 e4	N-50°-W	楕円形	1.02 × 0.90	38	外傾	皿状	人為	—	SD31→本跡
556	I 2 f0	—	円形	0.95 × 0.90	24	緩斜	平坦	人為	—	
557	I 2 f0	N-37°-E	不定形	1.39 × 1.42	60~72	緩斜	皿状	不明	—	
558	D 2 i8	—	円形	0.90 × 0.83	20	外傾	平坦	人為	—	
559	B 4 h2	—	円形	0.79 × 0.76	8	外傾	平坦	自然	—	

番号	位置	長軸(径)方向	平面形	規 模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備 考 重複関係 (古→新)
				長軸(径)×短軸(径)(m)	深さ(cm)					
560	B 4 12	N-23°-E	橢円形	1.10 × 0.79	10	外傾	平坦	自然	土師質土器	
561	C 4 a4	N-9°-E	[橢円形]	5.08 × (0.61)	33	緩斜	平坦	人為	-	
563	C 4 a2	N-60°-W	[橢円形]	(0.73) × 0.54	15	緩斜	平坦	自然	-	本跡→SF 1
564	B 4 11	N-64°-W	[橢円形]	(1.82) × 0.68	8	緩斜	平坦	人為	-	本跡→SF 1
566	B 4 14	N-52°-E	橢円形	0.95 × 0.70	10	緩斜	平坦	自然	-	
567	B 4 14	-	円形	0.55 × 0.55	72	外傾	皿状	人為	磁器	
568	C 3 a0	N-85°-E	橢円形	0.60 × 0.48	21	外傾	平坦	自然	土師質土器	本跡→SK571
569	C 3 c9	N-9°-W	橢円形	1.15 × 0.95	18	外傾	皿状	人為	-	
570	C 3 10	N-18°-W	不定形	1.18 × 0.90	33	外傾	皿状	自然	-	
571	C 3 a0	N-46°-W	橢円形	0.43 × 0.38	17	外傾	平坦	自然	-	SK568→本跡
572	C 3 18	N-27°-E	[不定形]	2.19 × (1.80)	38	外傾	平坦	人為	-	本跡→SD07
573	C 3 18	N-26°-E	[橢円形]	(0.97) × 0.75	23	外傾	平坦	人為	-	本跡→SD07
574	C 3 c9	N-35°-E	不定形	2.94 × 1.14	37	外傾	平坦	人為	縄文土器, 土師質土器, 陶器	SF1→本跡
575	C 3 c9	N-35°-E	長方形	1.76 × 1.05	27	外傾	平坦	人為	土師質土器, 磁器	SK576→本跡
576	C 3 c9	N-1°-W	橢円形	0.74 × 0.60	28	外傾	平坦	人為	-	本跡→SK575
577	C 3 c9	N-32°-E	橢円形	0.87 × 0.75	18	外傾	平坦	人為	-	
578	C 3 c9	-	円形	0.65 × 0.60	30	緩斜	平坦	人為	-	
579	C 4 a3	-	円形	1.28 × 1.20	38	緩斜	平坦	自然	-	
580	C 3 a8	-	円形	0.80 × 0.80	61	外傾	平坦	自然	-	
581	C 2 10	N-67°-W	[橢円形]	0.85 × (0.68)	20	緩斜	平坦	人為	-	
582	C 3 11	N-50°-W	隅丸長方形	0.97 × 0.69	25	外傾	平坦	自然	-	
583	C 3 a7	N-44°-E	[不定形]	1.70 × 1.26	35	外傾	平坦	人為	磁器	本跡→SK584
584	C 3 a7	N-14°-E	橢円形	0.95 × 0.85	46	外傾	平坦	人為	須恵器, 磁器	SK583→本跡
585	C 4 12	N-21°-W	橢円形	1.10 × 0.72	6~10	緩斜	平坦	人為	-	
586	C 4 13	-	不整形	0.77 × 0.76	6~9	緩斜	平坦	人為	-	
587	C 3 15	N-65°-E	長楕円形	4.48 × 1.30	23	緩斜	平坦	人為	土師質土器	
588	C 3 a0	N-45°-E	長方形	1.38 × 1.08	27	外傾	平坦	人為	-	
589	C 3 a9	N-7°-W	隅丸長方形	1.17 × 0.95	23	緩斜	平坦	自然	-	SK590→本跡
590	C 3 a9	N-9°-E	[橢円形]	0.77 × (0.53)	32	緩斜	平坦	人為	-	本跡→SK589
591	C 3 a8	N-54°-W	[不定形]	1.13 × (0.50)	25	緩斜	皿状	人為	-	本跡→SK592
592	C 3 a8	N-59°-W	長方形	1.77 × 0.91	46	直立	平坦	人為	-	SK591→本跡→SK595
593	C 3 a8	N-61°-W	長楕円形	1.72 × 0.69	30	外傾	平坦	人為	-	本跡→SK595
594	C 3 16	-	円形	1.04 × 0.98	55	外傾	平坦	人為	土師器, 磁器	
595	C 3 a8	-	円形	0.78 × 0.72	50	外傾	平坦	人為	-	SK592, 593→本跡
596	C 3 a8	N-60°-W	橢円形	1.30 × 1.06	15	緩斜	平坦	人為	-	
597	C 3 19	N-10°-W	橢円形	0.96 × 0.84	50	直立	平坦	人為	土師質土器	
598	C 3 19	N-2°-E	橢円形	1.15 × 0.96	45	直立	平坦	人為	陶器	SK599→本跡
599	C 3 19	N-1°-W	[不定形]	1.65 × 1.53	40	外傾	平坦	人為	縄文土器, 須恵器, 土師質土器	本跡→SK598
600	C 3 19	N-31°-E	隅丸長方形	1.59 × 1.20	15	緩斜	平坦	自然	-	
601	C 3 c2	-	円形	0.70 × 0.65	8	緩斜	皿状	自然	土師器	
602	C 3 a0	N-62°-W	[橢円形]	0.94 × (0.61)	39	緩斜	皿状	自然	-	本跡→SK603
603	C 3 a0	N-43°-E	橢円形	1.23 × 1.02	36	緩斜	皿状	人為	-	SK602→本跡
604	C 3 a8	N-55°-W	橢円形	0.88 × 0.68	72	袋状	平坦	人為	-	
607	C 3 a6	N-39°-W	橢円形	1.18 × 1.06	57	外傾	平坦	人為	-	
608	C 3 a6	N-47°-W	橢円形	1.70 × 1.10	34	外傾	平坦	人為	-	SK609→本跡
609	C 3 a6	-	[隅丸方形]	(1.60) × 0.89	30	外傾	平坦	人為	-	SK610→本跡→SK608

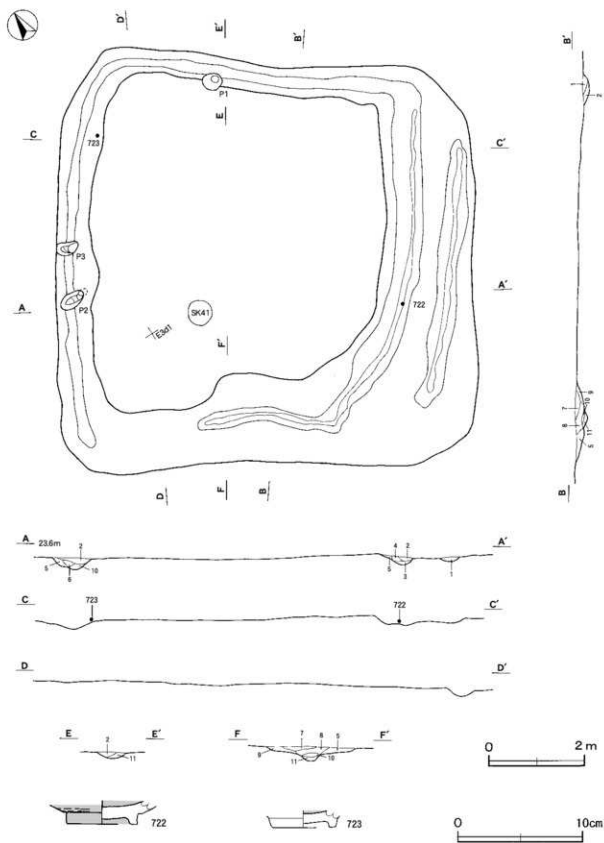
番号	位置	長軸(径)方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備 考 重複関係 (古→新)
				長軸(径)×短軸(径)(m)	深さ(cm)					
610	C 3 06	[N-20°-E]	不明	(0.20) × 1.10	22	外傾	平坦	人為	—	本跡→SK609+613
611	C 3 06	N-37°-W	楕円形	2.31 × 1.23	60	外傾	有段	人為	—	SK612→本跡
612	C 3 06	N-35°-W	[楕円形]	1.73 × (0.71)	50	外傾	有段	人為	—	SK613→本跡→SK611
613	C 3 06	N-38°-W	[楕円形]	1.71 × (1.05)	55	外傾	有段	人為	—	SK610→本跡→SK612
614	D 3 a6	—	円形	0.96 × 0.96	51	外傾	平坦	人為	—	
615	D 3 a6	N-59°-E	長方形	1.09 × 0.91	69	直立	平坦	人為	—	
616	D 3 a6	N-32°-W	不定形	1.47 × 1.07	53	外傾	平坦	人為	—	SK617→本跡
617	D 3 b6	—	[円形]	1.05 × 0.97	39	外傾	平坦	人為	—	本跡→SK616
618	D 3 b6	—	円形	0.78 × 0.71	42	外傾	平坦	人為	—	土師質土器, 陶器
619	D 3 b7	—	円形	0.95 × 0.94	65	外傾	平坦	人為	—	
620	D 3 b6	—	円形	1.16 × 1.15	23	外傾	平坦	人為	—	
621	D 3 b6	N-11°-E	楕円形	0.83 × 0.56	11	外傾	平坦	人為	—	
622	D 3 b6	—	円形	0.99 × 0.98	50	外傾	平坦	人為	—	
623	D 3 c6	—	円形	0.97 × 0.90	53	袋状	平坦	人為	—	土師質土器
624	D 3 b6	N-12°-W	楕円形	1.12 × 0.95	73	外傾	凹凸	人為	—	
625	D 3 c6	—	闕九方形	1.33 × 1.23	55	外傾	平坦	自然	—	土師器, 瓦質土器
626	C 4 b1	—	方形	0.83 × 0.79	43	外傾	平坦	人為	—	SF 1→本跡
627	D 3 b7	—	円形	0.65 × 0.64	15	外傾	平坦	自然	—	
629	D 3 b8	—	円形	1.08 × 1.02	54	外傾	平坦	人為	—	土師質土器
630	D 3 c8	N-61°-W	楕円形	0.96 × 0.83	—	外傾	平坦	自然	—	SK634→本跡
631	D 3 b9	N-33°-E	[楕円形]	1.00 × (0.82)	37	外傾	平坦	人為	—	土師質土器
632	C 3 17	N-19°-E	不定形	1.97 × 1.00	76	外傾	平坦	人為	—	土師質土器, 磁器
633	C 3 17	N-26°-E	不定形	1.73 × 1.40	87	外傾	平坦	人為	—	縄文土器
634	D 3 c8	N-19°-E	[楕円形]	(0.63) × 0.72	30	緩斜	平坦	—	—	本跡→SK629+630
635	D 3 b5	—	方形	0.89 × 0.86	32	外傾	平坦	人為	—	SF 1→本跡
636	D 3 b5	—	方形	1.20 × 1.19	56	外傾	平坦	人為	—	土師質土器, 磁器
637	D 3 c5	N-32°-E	長楕円形	2.20 × 0.68	15	緩斜	皿状	自然	—	縄文土器
639	C 4 b3	—	円形	1.08 × 1.00	36	外傾	平坦	人為	—	
640	C 4 g3	N-6°-E	[楕円形]	1.20 × (0.50)	77	直立	平坦	人為	—	土師質土器
641	C 4 g4	N-10°-W	[不整楕円形]	1.64 × (1.45)	118	外傾	平坦	人為	—	縄文土器, 土師質土器, 陶磁器
642	C 3 c8	N-20°-E	楕円形	0.86 × 0.73	43	外傾	平坦	人為	—	SK37→SK647→本跡
643	C 3 d7	N-32°-E	楕円形	1.65 × 1.05	55	外傾	有段	人為	—	
644	C 3 c8	[N-35°-W]	不明	(0.22) × 0.85	36	外傾	平坦	人為	—	SK37→SK646→本跡→SK645
645	C 3 c8	—	円形	0.96 × 0.95	60	外傾	平坦	人為	—	SK37→SK646→SK644→本跡
646	C 3 c8	[N-35°-E]	不明	(0.17) × (0.87)	41	外傾	平坦	人為	—	SK37→本跡→SK644→SK645+647
647	C 3 c8	N-69°-W	[楕円形]	0.84 × 0.75	49	外傾	平坦	人為	—	SK646→本跡→SK642
648	C 3 c8	—	円形	1.00 × 1.00	63	直立	平坦	人為	—	SF 1→本跡

(4) 方形周溝遺構

第 1 号方形周溝遺構 (第192区)

位置 調査区北部の E 3 c1区, 標高23mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第13号溝跡を掘り込んでいる。周溝の区画内に第41号土坑が位置しているが、新旧関係は不明である。



第192图 第1号方形周沟遺構・出土遺物実測図

規模と形状 内法は南北軸5.9～7.1m、東西軸6.3m、外法は南北軸8.4m、東西軸8.9mの隅丸方形で、南北の周溝と直交する軸線から、主軸方向はN-32°-Eである。周囲に巡る溝は上幅0.6～2.2m、下幅0.16～0.3m、深さ18～24cmで、東部は上幅がやや広く、周溝内に溝2条が検出されている。断面はU字状を呈し、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

ピット 3か所。P1の深さは18cm、P2は深さ40cm、P3は深さ53cmである。P2・P3は出入り施設のためのピットとも想定されるが、詳細は不明である。P1は性格不明である。

覆土 11層に分層できる。周囲から土砂が流入した堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

1 黒褐色	ロームブロック微量	7 暗褐色	ローム粒子・炭化粒子少量
2 黒褐色	ロームブロック少量	8 暗褐色	ローム粒子中量
3 褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量	9 暗褐色	ローム粒子少量
4 黒褐色	ローム粒子微量	10 褐色	ローム粒子中量
5 褐色	ロームブロック微量	11 黒褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
6 暗褐色	ロームブロック微量		

遺物出土状況 土師器片96点（環1、甕94、ミニチュア土器1）、須恵器片11点（環6、壺1、甕4）、陶器片2点（碗）が出土している。土師器・須恵器片は細片が多く、断面も摩滅しており、流れ込んだものと考えられる。722は南周溝内の底面、723は北周溝の覆土上層からそれぞれ出土している。

所見 本跡の性格は、周溝の区画内には炉跡や柱穴、埋葬施設等は確認されなかったため、不明である。時期は、722が底面から出土していることから、中世後半と考えられる。

第1号方形周溝遺構出土遺物観察表（第192図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・軸葉	色調	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考
722	陶器	丸碗	—	(1.9)	5.6	精良 鎔輪	灰白・緑	良好	体部・底部内・外面施釉	底面	10% 瀬戸・美濃
723	陶器	天目茶碗	—	(1.4)	5.1	精良 鉄輪	灰白・黒	良好	高台周辺露胎 内面施釉	覆土上層	10% 瀬戸・美濃

(5) ピット群

今回の調査で、7か所のピット群が確認された。いずれも建物跡を想定できるような配置ではなく、時期も不明である。ここでは、ピット群ごとに計測表、第2～6号ピット群については平面図を掲載し、その他のピット群の平面図については、全体図に記載する。

第1号ピット群（付図）

位置 調査区北部のG2j9～H3d1区、標高22.6mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 南北17.0m、東西7.2mの範囲から、9か所のピットが検出された。ピットの平面形は長径28～84cm、短径26～52cmの円形または楕円形、長方形で、深さ19～35cmである。断面形はU字形を呈している。

遺物出土状況 土師器片3点（甕）が出土しているが、流れ込んだものである。

所見 配置に規則性がなく、建物と判断することが困難であるためピット群とした。時期は、出土土器が遺構に伴うものと判断できないため不明である。

表11 第1号ビット群ビット一覧表

ビット 番号	規模 (cm)			ビット 番号	規模 (cm)			ビット 番号	規模 (cm)			
	長径	× 短径	深さ		長径	× 短径	深さ		長径	× 短径	深さ	
1	32	×	32	4	48	×	44	7	41	×	33	20
2	28	×	26	5	84	×	52	8	46	×	38	20
3	61	×	46	6	40	×	36	9	42	×	37	25

第2号ビット群 (第193図)

位置 調査区北部のH2h0～I2a0区、標高22.2mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 南北13.3m、東西3.8mの範囲から、7か所のビットが検出された。ビットの平面形は長径39～60cm、短径37～48cmの円形または楕円形で、深さ12～18cmである。断面形はU字形を呈している。

遺物出土状況 土師器片6点(甕)が出土しているが、流れ込んだものである。

所見 配置に規則性がなく、建物と判断することが困難であるためビット群とした。時期は、出土土器が遺構に伴うものと判断できないため不明である。

表12 第2号ビット群ビット一覧表

ビット 番号	規模 (cm)			ビット 番号	規模 (cm)			ビット 番号	規模 (cm)			
	長径	× 短径	深さ		長径	× 短径	深さ		長径	× 短径	深さ	
1	43	×	42	4	45	×	44	6	44	×	40	17
2	39	×	37	5	49	×	48	7	60	×	47	18
3	42	×	37									

第3号ビット群 (第194図)

位置 調査区北部のH2f4～H2h6区、標高22.4mの台地平坦部に位置している。

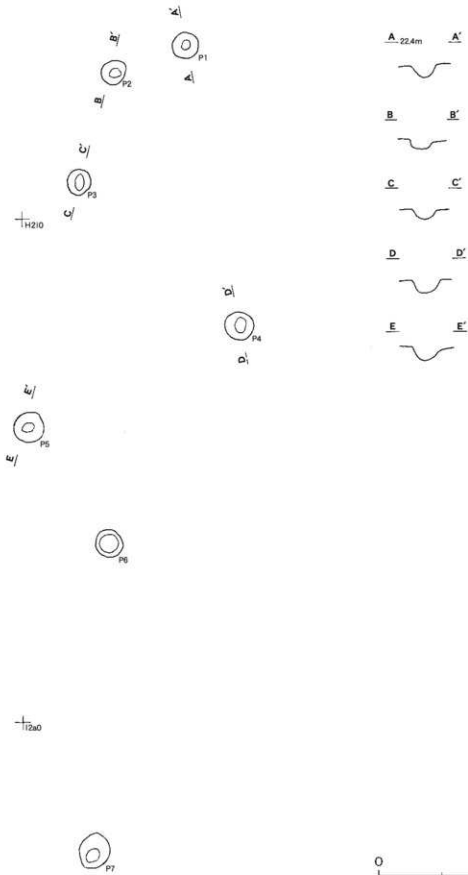
規模と形状 南北9.2m、東西8.2mの範囲から、14か所のビットが検出された。ビットの平面形は長径30～64cm、短径29～56cmの円形または楕円形で、深さ12～38cmである。断面形はU字形を呈している。

遺物出土状況 土師器片8点(甕)が出土しているが、流れ込んだものである。

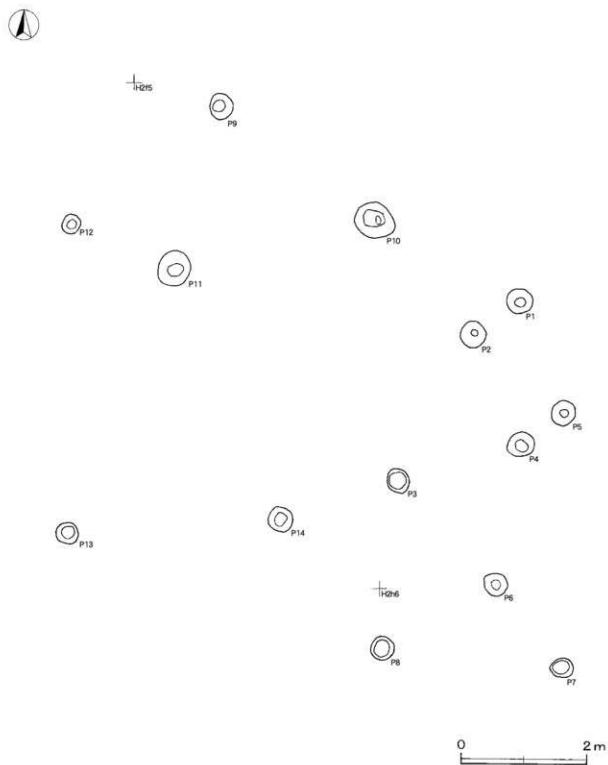
所見 配置に規則性がなく、建物と判断することが困難であるためビット群とした。時期は、出土土器が遺構に伴うものと判断できないため不明である。

表13 第3号ビット群ビット一覧表

ビット 番号	規模 (cm)			ビット 番号	規模 (cm)			ビット 番号	規模 (cm)			
	長径	× 短径	深さ		長径	× 短径	深さ		長径	× 短径	深さ	
1	40	×	39	6	37	×	36	11	54	×	52	13
2	43	×	40	7	36	×	32	12	30	×	29	12
3	39	×	35	8	40	×	38	13	33	×	32	22
4	44	×	37	9	42	×	34	14	40	×	38	14
5	39	×	38	10	64	×	56					



第193図 第2号ピット群実測図



第194図 第3号ビット群実測図

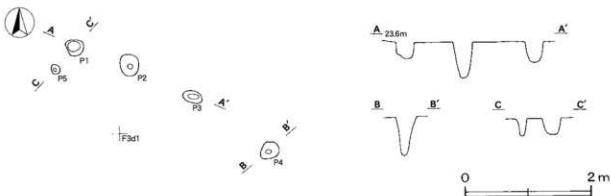
第4号ビット群 (第195図)

位置 調査区北部のF 2 c0～F 3 d1区、標高23.5mの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 南北1.9m、東西3.5mの範囲から、5か所のビットが検出された。ビットの平面形は長径14～34cm、短径12～28cmの円形または楕円形で、深さ26～60cmである。断面形はU字形を呈している。

遺物出土状況 土師器片17点(甕)が出土しているが、流れ込んだものである。

所見 P 1～P 4は直線的に並び樞跡の可能性もあるが、柱間寸法に規則性がないため、ビット群とした。時期は、出土土器が遺構に伴うものと判断できないため不明である。



第195図 第4号ビット群実測図

表14 第4号ビット群ビット一覧表

ビット番号	規模 (cm)			ビット番号	規模 (cm)			ビット番号	規模 (cm)					
	長径	短径	深さ		長径	短径	深さ		長径	短径	深さ			
1	28	×	26	26	3	30	×	18	32	5	14	×	12	28
2	34	×	28	58	4	30	×	26	60					

第5号ビット群 (第196図)

位置 調査区北部のC 4 d1～C 4 d3区、標高21.5mの台地縁辺部に位置している。

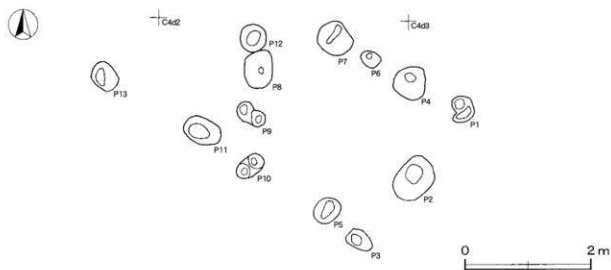
規模と形状 南北3.7m、東西6.1mの範囲から、13か所のビットが検出された。ビットの平面形は長径30～75cm、短径25～54cmの円形または楕円形、不定形で、深さ12～38cmである。断面形はU字形を呈している。

遺物出土状況 土師器片2点(甕)がP 7・P 8から出土しているが、流れ込んだものである。

所見 建物跡の可能性もあるが、ビットの規模や形状に規則性がなく、建物跡と判断することが困難である。時期は、出土土器が遺構に伴うものと判断できないため不明である。

表15 第5号ビット群ビット一覧表

ビット番号	規模 (cm)			ビット番号	規模 (cm)			ビット番号	規模 (cm)					
	長径	短径	深さ		長径	短径	深さ		長径	短径	深さ			
1	41	×	35	29	6	30	×	25	24	10	49	×	29	12
2	75	×	54	18	7	45	×	45	32	11	63	×	41	18
3	43	×	26	23	8	56	×	44	24	12	45	×	45	14
4	53	×	53	38	9	50	×	25	32	13	46	×	35	24
5	45	×	37	12										



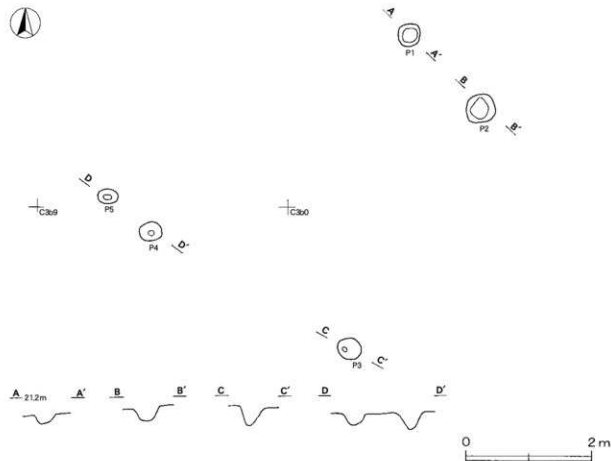
第196図 第5号ピット群実測図

第6号ピット群 (第197図)

位置 調査区北部のC 3 a9～C 3 b0区、標高21.2mの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 南北5.3m、東西6.3mの範囲から、5か所のピットが検出された。ピットの平面形は長径33～50cm、短径33～44cmの円形または楕円形で、深さ14～30cmである。断面形はU字形を呈している。

所見 配置に規則性がなく、建物と判断することが困難であるためピット群とした。時期は、出土土器が遺構に伴うものと判断できないため不明である。



第197図 第6号ピット群実測図

表16 第6号ピット群ピット一覧表

ピット 番号	規模 (cm)			ピット 番号	規模 (cm)			ピット 番号	規模 (cm)		
	長径	× 短径	深さ		長径	× 短径	深さ		長径	× 短径	深さ
1	40	× 38	14	3	40	× 34	30	5	33	× 33	22
2	50	× 44	18	4	36	× 33	23				

第7号ピット群 (付図)

位置 調査区北部のC3d2～C3g2区、標高21.1～21.7mの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 南北11.0m、東西10.3mの範囲から、9か所のピットが検出された。ピットの平面形は長径31～59cm、短径25～55cmの円形または楕円形で、深さ23～56cmである。断面形はU字形を呈している。

所見 配置に規則性がなく、建物と判断することが困難であるためピット群とした。時期は、出土土器が遺構に伴うものと判断できないため不明である。

表17 第7号ピット群ピット一覧表

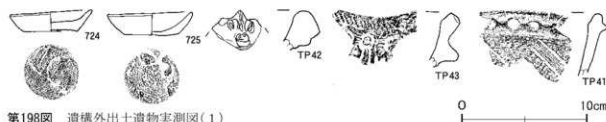
ピット 番号	規模 (cm)			ピット 番号	規模 (cm)			ピット 番号	規模 (cm)		
	長径	× 短径	深さ		長径	× 短径	深さ		長径	× 短径	深さ
1	36	× 31	23	4	40	× 33	23	7	59	× 55	41
2	31	× 25	27	5	41	× 40	32	8	44	× 38	29
3	45	× 37	33	6	42	× 35	41	9	37	× 34	56

表18 ピット群一覧表

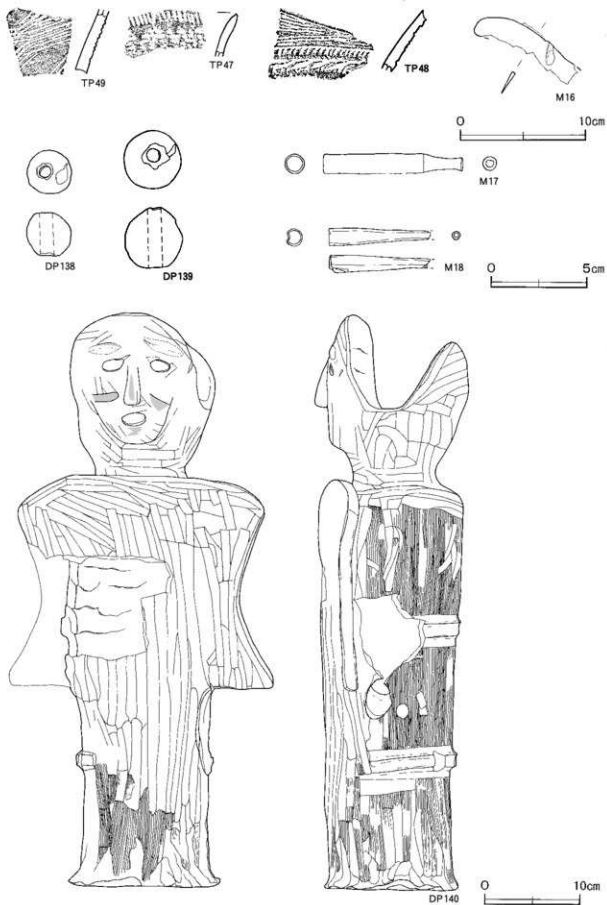
番号	位置	範囲(m)		ピット数	ピット 平面形	ピット規模			ピット 断面形	出土遺物	備 考
		南北	東西			長径 (m)	短径 (m)	深さ (cm)			
1	G2j9～H3d1	16.97	7.20	9	円形・楕円形・ 長方形	0.28～ 0.34	0.26～ 0.52	19～35	U字形	土師器	
2	H2h6～I2a6	13.25	3.83	7	円形・ 楕円形	0.39～ 0.60	0.37～ 0.48	12～18	U字形	土師器	
3	H2f4～H2b6	9.24	8.22	14	円形・ 楕円形	0.30～ 0.64	0.29～ 0.56	12～38	U字形	土師器	
4	F2c6～F3d1	1.88	3.48	5	円形・ 楕円形	0.14～ 0.34	0.12～ 0.28	26～60	U字形	土師器	
5	C4d1～C4d3	3.65	6.09	13	円形・楕円形・ 不定形	0.30～ 0.75	0.25～ 0.54	12～38	U字形	土師器	
6	C3a9～C3b6	5.34	6.28	5	円形・ 楕円形	0.33～ 0.50	0.33～ 0.44	14～30	U字形	—	
7	C3d2～C3g2	11.0	10.3	9	円形・ 楕円形	0.31～ 0.59	0.25～ 0.55	23～56	U字形	—	

(6) 遺構外出土遺物 (第198～200図)

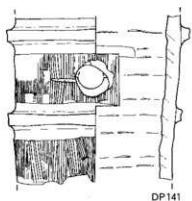
今回の調査で出土した遺物の中で、遺構に伴わない遺物について、実測図と観察表を掲載する。



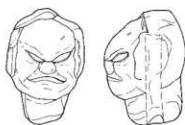
第198図 遺構外出土遺物実測図(1)



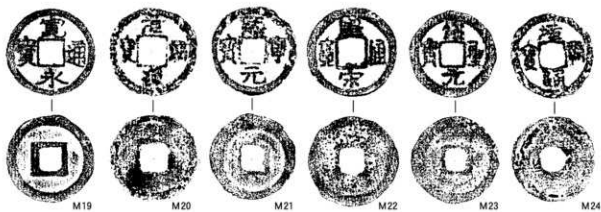
第199图 遗構外出土遺物実測図(2)



DP141



DP146



M19

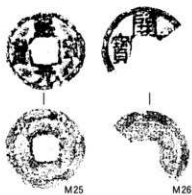
M20

M21

M22

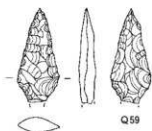
M23

M24



M25

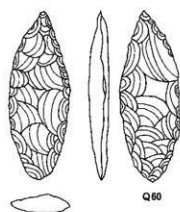
M26



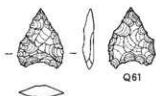
Q59



Q64



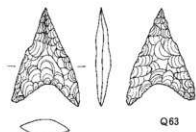
Q60



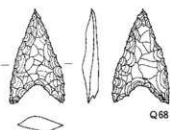
Q61



Q62



Q63



Q68



第200图 遺構外出土遺物実測図(3)

遺構外出土遺物観察表 (第198~200図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP41	陶文土器	深鉢	—	(5.0)	—	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部上位に押圧のある隆帯	3区	PL37
TP42	陶文土器	深鉢	—	(3.2)	—	長石・石英	赤褐	普通	断面肥手	3区	PL37
TP43	陶文土器	深鉢	—	(4.2)	—	長石・石英	明赤褐	普通	波状口縁	3区	PL37
TP47	陶文土器	深鉢	—	(3.5)	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	口唇端部に半載竹管による縦位の条線帯	7区	
TP48	陶文土器	深鉢	—	(5.1)	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	半載竹管による平行沈線	7区	
TP49	陶文土器	深鉢	—	(5.1)	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	半載竹管による平行沈線	7区	
724	土師質土器	小皿	6.4	1.6	4.3	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	底部回転糸切り	S145	90% PL36
725	土師質土器	小皿	6.6	1.8	4.4	長石・石英・雲母	橙	普通	底部回転糸切り	S145	90% PL36

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質(胎土)	特 徴	出土位置	備考
BP38	埴状土埴	2.3	2.3	0.6	(10.6)	長石・石英	ナゲ 一方向からの穿孔	3区	
BP39	埴状土埴	3.0	3.2	0.7	(26.4)	長石・石英	丁寧なナゲ 一方向からの穿孔	3区	

番号	器種	高さ	幅(口径)	厚さ	重量	材質(胎土)	特 徴	出土位置	備考
BP40	人物埴輪	60.0	27.2	16.2	(4,960)	長石・石英・礫	肩部へラナゲ 腹部ハケ目調整 目と口は穿孔後、上、下部に赤彩 鼻部上面にみず状の赤彩 アゴ部粘土地り付け後整形	S123	PL37
BP41	埴輪	(17.5)	(19.8)	—	(1,820)	長石・石英・赤色粒子・礫	外面縦ハケ目調整 (4本/cm) 凸帯逆時計回りの横ナゲ 内面輪積み直 器厚1.4~1.6cm	S122	PL38
BP46	人形	3.1	2.1	2.1	6.9	長石・砂粒	頭部から首部 首部穿孔	7区	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備考
M16	鎌	(8.2)	(2.2)	0.3	(25.8)	鉄	断面三角形	3区	

番号	器種	長さ	小口径	径	重量	材質	特 徴	出土位置	備考
M17	樽管	7.4	0.7	1.0	10.4	銅	吸口部 口付残存	2区	
M18	樽管	(5.4)	0.4	0.9	(3.2)	銅	吸口部	3区	

番号	種別	銭種	外径	孔径	厚さ	重量	材質	初鋳年	特 徴	出土位置	備考
M19	古銭	寛永通寶	2.43	0.63	0.13	3.80	銅	1636	古寛永 背文なし	S140	PL40
M20	古銭	元禄通寶	2.39	0.71	0.14	2.86	銅	1686	篆書	S150	PL40
M21	古銭	熊手元寶	0.05	0.66	0.13	3.14	銅	1688	真書	S150	PL40
M22	古銭	皇宋通寶	2.48	0.70	0.15	3.86	銅	1038	真書	S150	PL40
M23	古銭	紹聖元寶	2.41	0.63	0.14	3.90	銅	1094	行書	S150	PL40
M24	古銭	元禄通寶	2.34	0.70	0.12	2.64	銅	1686	篆書	ST73	PL40
M25	古銭	熊手元寶	(2.22)	0.72	(0.11)	(1.80)	銅	1688	真書	ST73	PL40
M26	古銭	開元一貫	(2.30)	(0.73)	0.12	(1.32)	銅	621	真書 欠け	3区	PL40

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備考
Q59	尖頭器	(2.5)	1.1	0.5	(0.82)	石英	押圧剥離による調整 基部欠損	S121	PL40
Q60	尖頭器	4.5	1.6	0.5	3.94	安山岩	押圧剥離による調整	S146	PL40
Q61	石鏃	1.6	1.2	0.3	0.49	チャート	押圧剥離による調整	S196	PL40
Q62	石鏃	(1.2)	1.7	0.3	(0.5)	黒曜石	押圧剥離による調整 先端部欠損	S198	PL40
Q63	石鏃	2.5	1.8	0.4	1.14	チャート	押圧剥離による調整	SD17	PL40
Q64	石鏃	1.4	1.1	0.2	0.37	黒曜石	押圧剥離による調整	北部	PL40
Q68	石鏃	2.5	1.5	0.4	0.97	チャート	押圧剥離による調整	SF1	

第4節 ま と め

今回報告する調査区北部からは、竪穴住居跡69軒、掘立柱建物跡2棟、溝跡16条、井戸跡2基、墓坑50基、土坑183基、方形竪穴遺構1基、方形周溝遺構1基、道路跡1条、柵跡1列、ピット群7か所が確認された。

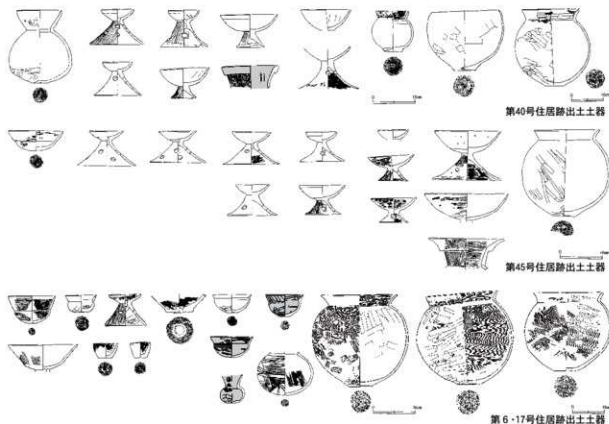
調査の結果、これらの遺構は、古墳時代前期・後期の集落跡と江戸時代の墓域であり、瀬沼川右岸の台地上先端部まで集落が形成されていることが明らかになった¹⁾。ここでは、これらの遺構を出土土器の様相を基に時期区分し²⁾、調査区北部の集落の変遷を述べ、大半を占める古墳時代前期の住居跡の類型化を試み、さらに茨城町域における同時期の瀬沼川沿岸の様相を概観する。

1 集落の変遷

出土土器を基に時期区分を行い、竪穴住居跡の形態的な特徴や出土遺物について述べていく。出土遺物が極めて少なく、調査区域外に延びるなど時期区分が困難な住居跡は細分から除外した。また、住居の規模は、床面積50㎡以上のものを大形住居、20～50㎡未満のものを中形住居、20㎡未満のものを小形住居とした。

第1期

本期に属する出土土器は、主に高坏・器台・鉢・小形埴・埴・壺・甕・甗である。高坏の坏部は比較的深く、裾部が大きく開くものも見られる。小形の高坏も見られ、坏部も比較的深くになっている。器台は受け部が比較的小さく、直線状と内彎状を呈するものが見られる。小形埴の体部は、ソロバン玉状を示すものと球形に近い形状を示すものが混在している。埴は底部が突出せず、口頸部が長くなる傾向を示している。甕は球形を呈し、頸部でく字状に屈曲するものが主体である。これらの出土土器から、本期を4世紀前葉（前期中葉）と位置づけた。



第201図 第1期の土器群

本期は潤沼川沿いの台地上に小規模な住居群が出現する時期である。竪穴住居跡13軒が該当し、調査区北部に集中する傾向が見られる。南の住居群は第6号住居跡を中心とした第7・8・12・13・20号住居跡、第17号住居跡を中心とした第2・15・16号住居跡の2グループに分けることができる。第6号住居跡は一辺約8mと大形で、炬2か所を有し、南西コーナー部を除く壁際には、高さ約10cmほどの高まりを有しているのが特徴である。同じように壁際に高まりを有する住居跡は、本跡以外に第3・11・48号住居跡がある。いずれも本期には属さないが、規模は一辺約6m台で、周囲に小形住居を配していることから、住居群では中核的な存在であるといえる。また、第7・8・13号住居跡は、第6号住居跡と同じほぼ真北方向に主軸をとっていることから、統一化された集落構成をうかがうことができる。第17号住居跡を中心とした第15・16号住居跡の住居群は、さらに西部の調査区域外へ広がるものと見られる。

この他、本期に属する第40号住居跡は両グループの北側に位置し、主軸方向を異にしていることから、いずれのグループに属しているのが明確にすることができない。この住居跡は一辺6mで、炬東側から多量に検出されている炭化米が目玉される。炭化米は稲穂主体で稈や葉などの部位が検出されていないことから、穂摘された状態で保管されていたものが、火を受け炭化したものと思われる。付近では、潤沼川の対岸に位置する中畑遺跡の同時期の住居跡からも炭化米が出土している³¹。この住居跡の前方には方形周溝墓が位置しており、住居跡と併行する時期でもあったことから、相互に密接な関係をもっていたと推測される。第40号住居跡は方形周溝墓など関連する遺構は確認されていないが、炭化米が出土したことにより、当該期において、本遺跡周辺域で稲が耕作されていたことを実証する資料となる。この炭化米の年代測定から、本跡で比定された住居跡の年代観を支持する結果も出ている³¹。

北部は第45・101号住居跡の2軒で、主軸方向をほぼ同じくし、約4mの間隔を空けて位置している。特筆する遺物として、第45号住居跡の南東壁際の床面から並ぶように出土している器台、高坏、高坏の坏部を据えていたとみられる壺の口縁部が挙げられる。出土時は横に倒れていたが、同じ下土師東遺跡の第85号住居跡の壁際から、器台、高坏のほか、壺の口縁部に据えた甕が並んで出土している例が報告がされている³¹。出土状況より、本跡の壺の口縁部も、甕や高坏の坏部を据えるための器台として転用された可能性が高い。この他の住居跡からも、壺の口縁部のみの破片も多く出土しているが、土器が据えられた状態で出土している例は少ない。このような壺は、体部破損などで本来の機能を失った後、口縁部のみを器台に転用したものと考えられる。また、両跡の壁際から、球状土鍾や土器類が並んで出土している点など、球状土鍾の使用法や住居内空間を探る上で貴重な資料になると思われる。なお、第101号住居跡は、大部分が第99号住居跡の重複を受けており、詳細は不明である。

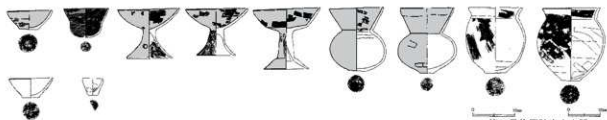
第2期

本期に属する出土土器は、高坏・器台・鉢・小形埴・埴・S字甕である。高坏は1期に比べると坏部がやや小形化し、屈曲して外上方に伸びているものも見られる。脚部内は中位以上が中空になっており、直立気味に伸びたあと外反している。器台は脚部が直立気味に伸びており、全体的に長くなっている。小形埴は体部がソロバン玉状から球形へと変化が見られる。埴は体部が球形になり、口頸部が1期より長くなる傾向が見られる。これらの出土土器から、本期を4世紀中葉（前期後葉）と位置づけた。

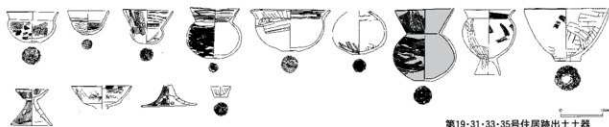
本期は点在していた小規模な集落が、拡大しつつある時期である。竪穴住居跡17軒及び掘立柱建物跡2棟が該当し、住居群は大きく調査区北部と中央部に分かれる。北部は第18・29・31・55号住居跡、中央部は第1・4・5・10・11・19・33・35・39・42・48・58・100号住居跡である。北に位置する第55号住居跡は一部後世



第11号住居跡出土土器



第55号住居跡出土土器



第19・31・33・35号住居跡出土土器

第202図 第2期の土器群

の擾乱を受けているが、規模は一边約7mを超え、その東側に位置する第29号住居跡と主軸方向をほぼ同じくしている。また、炉・貯蔵穴はともに2か所、南・西壁際に間仕切り溝も有している。住居内に間仕切り溝を有するのは、当遺跡内では本跡と第43・53号住居跡の3軒だけで、本期では1軒である。また、隣接する第29号住居跡からは、土製の炉器台3個体が炉内北部から出土している。炉器台の形態は、鍾形で先端が前屈し、背部にはくぼみを有しており、羽黒遺跡でも同様の炉器台が出土している⁶⁾。この他、この炉器台が設置されたと思われるピット2か所も炉内北部から確認されている。

さらに、中央部に展開する住居群は、規模や形態等から第11号住居跡を中心とした第1・4・5・10・19・33・35・42号住居跡及び第1・2号掘立柱建物跡と第39・48・58・100号住居跡の2グループに分けることができる。第11号住居跡を中心としたグループは、主軸方向を概ね揃えていることから、規画的に配置されていたといえる。第11号住居跡の規模は、一边約7mと住居群では大きく、炉・貯蔵穴1か所、南西コーナー部以外の壁際に、約10cmの高まりを有している。壁際の高まりは、住居内の機能分化を示すものと考えられ、1期で見られた第6号住居跡と同じ南西コーナー部以外に構築されていることから、時期を超えて継承された可能性もある。

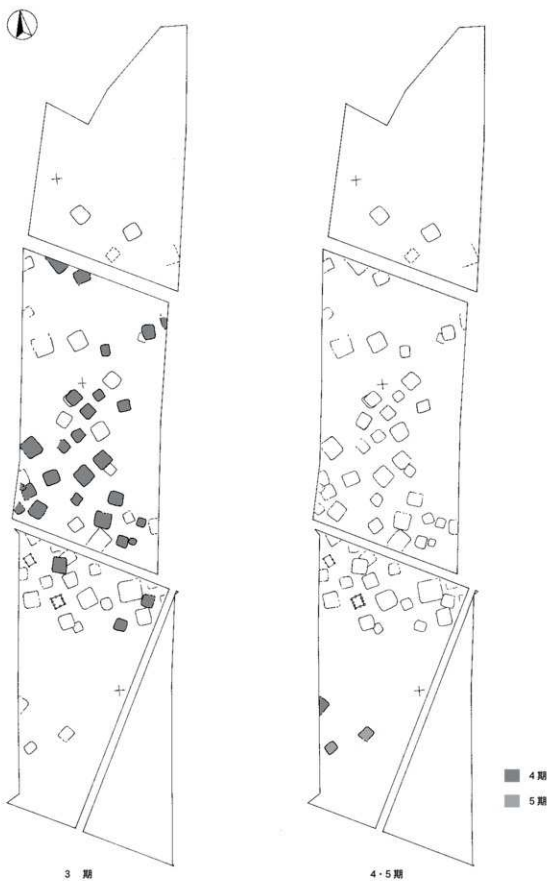
第39・48・58・100号住居跡のグループは環状で、中央に空間を設けるように配置されている。これらのグループはさらに西の調査区域外に延びる可能性がある。

第3期

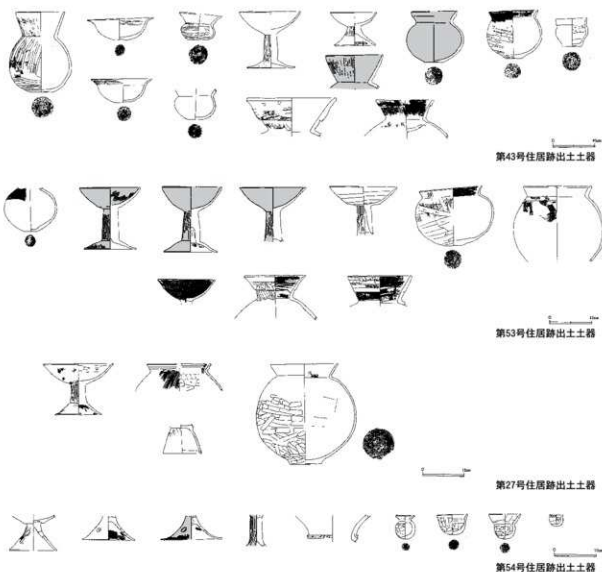
本期に属する出土土器は、高坏・器台・小形埴・埴・壺・S字甕である。高坏はこの時期から、脚内部が中実のものが見られるようになる。器台は脚が長く伸びるものが増え、小形埴は口縁部の縮小化と体部の球形化が進んでいる。埴は口頸部が長大化する傾向が見られる。これらの出土土器から、本期を4世紀後葉(前期後葉)と位置づけた。



第203图 下土師東遺跡遺構變遷圖(1)



第204图 下土師東遺跡遺構変遷図(2)



第205図 第3期の土器群

本期は点在していた小規模な集落が、一挙に拡大する時期である。竪穴住居跡28軒が該当し、調査区北部と中央部に集中する傾向が見られる。北部は第24・25号住居跡、中央部は3・9・14・26・27・30・34・36～38・41・43・44・46・49～54・57・96～99号住居跡に分けることができる。北部の2軒は住居全体の様相がつかめないが、集落はさらに調査区域外の西方に広がる可能性もある。さらに、中央部の竪穴住居跡は、主軸方向を西にとる第38・43・46・47・49～54・57・96・98・99号住居跡と、東にとる第3・9・14・34・36・37・41・44号住居跡、及び真北にとる第26・27・30・97号住居跡の3グループに分けることができる。主軸方向を西にとる住居跡は14軒と最も多く、規模や主軸方向などから、第52・53号住居跡、第51・54号住居跡、第49・50号住居跡がそれぞれセットになると思われる。この時期になると、住居の規模はいずれも中形になり、大形住居は見られなくなる。当該期において中心的大形住居がなくなり、住居規模がほぼ揃うのは、大規模な支配権力がはたらき、集落構造などにも統制がとられた結果とも考えられる。第43・53号住居跡には、内部施設として南東壁際の間仕切り溝1条も有している。両跡の間仕切り溝は、炉の延長線上にそれぞれ片設されており、住居内部の機能分化を反映したものと思われる⁷⁾。

東にとる住居跡は中形の第3・41・44号住居跡を中心に、その周辺には第9・14・34・36・37号住居跡が配されている。第36・37号住居跡は隣接しすぎているため、同時期に存在したとは考えにくい、短期間での建て替えなどが考えられる。特に、第36号住居跡は柱穴・硬化面は検出されているものの、炉が確認されていない

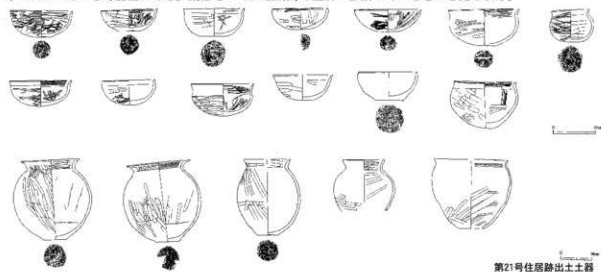
いことから、第41・44号住居跡の居住以外の付属施設とも考えられる。

真北にたる竪穴住居跡4軒は、中央部を空けるように配置されており、さらに東方の調査区域外に延びる可能性がある。

ほぼ時期を同じくして、茨城町の潤沼川流域には四世紀末から五世紀初頭の築造とされる宝塚古墳⁹⁾や居館跡とされる堀跡と住居跡が確認されている奥谷遺跡が位置している⁹⁾。宝塚古墳と奥谷遺跡が有機的な関係を有しているか否かは不明であるが、潤沼川・潤沼と直接かかわりがあり、交易にも深い関わりをもっていた人物が奥谷から下土師一帯まで大規模に支配し、対岸の宝塚古墳に埋葬された可能性もある¹⁰⁾。このように、住居の主軸方向がいくつかに分かれるのは、単位集団ごとに住居の方向軸が統制される状況下で、短期間での住み替え、または小移動が行われた可能性も考えられる。本期をもって集落は一時途絶える。

第4期

集落が再び形成される。古墳時代中期後葉に比定される第21号住居跡1軒が該当する。大部分が調査区域外になるため、住居の様相は把握できないが、貯蔵穴周辺から出土した須恵器大甕が目される。須恵器大甕は上から潰れたような状態で、床面から出土しており、床面には大甕を据えたと思われる小ピットも確認されている。大甕は口縁の一部を欠いているものの、ほとんどが復元されている。住居の帰属時期が中期後葉に比定されることから、大甕は搬入品である可能性が高く、集団の中でも優位な立場をうかがうことができる。住居が調査区域外に延びているため、住居全体の様相をつかむことができないが、当該期の集落は調査区域外の西方へ広がっている可能性がある。集落としては短期間で他所へ移動しているものと見られる。

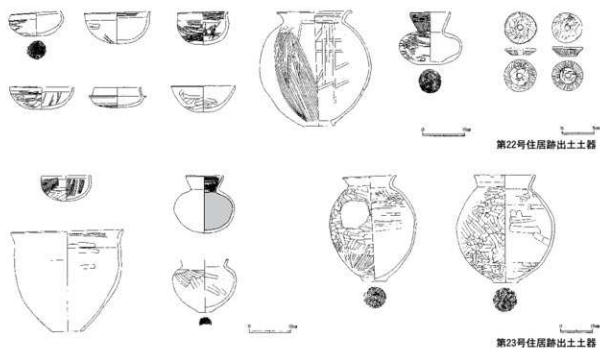


第206図 第4期の土器群

第5期

本期の出土土器は、第22号住居跡の南西部の床面から出土した須恵器甕が注目される。須恵器甕は、TK23併行のものと考えられ、土師器甕を重ねた状態で出土している。また、体部が大きく張り出し、頭部に沈線を巡らした増も床面から出土している。出土土器や住居形態などから、本期の時期を古墳時代中期末葉から後期初頭とした。

本期は短い空白期をはさんで集落が再度形成される。住居内に竈が導入される時期で、第22・23号住居跡2軒が該当する。調査範囲では当該期の住居群は2軒であったが、第4期と同様、調査区域外の西方に広がっている可能性がある。2軒は一辺が4mほどの小形住居跡で、規模や主軸方向は概ね揃っている。第22号住居



第207図 第5期の土器群

跡は竈の煙道部を壁外に掘り込まず、袖部がハの字状の開くタイプで、いわゆる「初期竈」を有する住居である。また、貯蔵穴が竈に隣接しており、一边を除く貯蔵穴上面の三辺には粘土が貼り付けられている。この粘土は壁際等からの土砂や雨水などの流入を防いだものと思われる。

竈右袖部から貯蔵穴上面まで粘土で構築される形態は、当該期の内部構造を探る上で重要な資料となるであろう。

また、竈と貯蔵穴を隣接させてコーナー部に付設している点は、竈と貯蔵穴は連動して機能するものであり、食や寝間など住居内部の機能分化を反映したものと推測される。

なお、第23号住居跡の覆土上層から、人物埴輪が出土している。盾を持ち顔には朱が塗られ、住居内に投げ込まれたような状態で出土している。本跡は焼失住居で、ほとんどが人為的に埋め戻された後、自然堆積により周囲からの土砂が流入している。周辺の台地縁辺部には、古墳時代後期とされる東山稲荷古墳や高山古墳群等が位置しており¹¹⁾、機能を失った埴輪が廃棄され、本跡内に捨てられたものと考えられる。

東山稲荷古墳の年代は、6世紀中頃以降と推測され、被葬者は瀬沼川以南の下土師を中心とした一円を統轄下に収め、埴輪製作にもかかわった職業工人集団の首長層的な人物の可能性が高いとされている¹²⁾。この職業工人集団がこの下土師の地に居住していた可能性も想定できるが、古墳に近い調査区からは、後期の集落が確認されていない。下土師地区には古墳が点在しており、本期以降、墓城が台地縁辺部を中心に形成され、当地には集落城が形成されなかったものと考えられる。

2 古墳時代前期住居の分類

古墳時代前期と比定した住居の中で、炉の付設位置や主柱穴・出入りロピットの位置など内部施設の在り方から分類を試みた。調査区域外に延びたり、攪乱を受けるなど住居全体の様相がつかめない12軒については、分類から除外した。

A類：炉が主柱穴を結ぶラインの内側に付設されるもの

第4・6・9～14・16・17・19・20・25・30・34・35・37・39・41・44・45・49・53・55・96・99号住居の

26軒が該当する。資料対象となる50軒中、過半数の住居跡が本類に属する。この中で、炉が出入りロピットと対峙する位置に付設される住居跡は、第4・6・10・11・14・17・34・37・39・44・49・53号住居跡、出入りロピットと対峙しない位置に付設される住居跡は、第9・12・13・16・19・20・25・30・35・41・45・55・96・99号住居跡である。

炉が出入りロピットと対峙する住居跡では、炉の付設位置が北壁に寄る住居跡10軒、西壁に寄る住居跡1軒、ほぼ中央である住居跡1軒で、炉は中央部から北壁に寄る傾向が高い。これら12軒の時期別内訳は、1期2軒、2期4軒、3期6軒である。中でも第6・11・17号住居跡は1・2期の中心的な存在である住居跡で、第6・11号住居跡は壁際に高まりをもつ住居跡である。特に第6号住居跡は、出入りロピットは高まりが切れる南西部に寄っている。貯蔵穴は12軒中7軒が有しており、付設位置は南東コーナー部1軒、南西コーナー部6軒である。

出入りロピットと対峙しない住居跡では、炉の付設位置が住居跡の中央部から北壁に寄る住居跡6軒、東壁に寄る住居跡5軒、ほぼ中央部の住居跡2軒、西壁に寄る住居跡1軒で、北壁と東壁に寄る住居跡が多い。特に、第9号住居跡は、炉を西部に付設することで、東部の空間が広がっている。このように炉を片側に寄せることで、住居跡内空間をできるだけ広く確保したと考えられる。15軒の時期別内訳は、1期5軒、2期3軒、3期12軒である。貯蔵穴は14軒中5軒の住居跡に付設され、すべて南西コーナー部である。本類では貯蔵穴は出入りロ西側に付設されているものが多い。

日類：炉が支柱穴を結ぶライン上に付設されるもの

第3・27・40・42・43・50・52・54・57・100号住居跡が該当する。この中で、出入りロピットと対峙する位置に付設される住居跡は、第27・40・50・52・57・100号住居跡である。6軒の時的内訳は、1期1軒、2期1軒、3期4軒である。炉は北側2か所の柱穴を結ぶライン上に付設されているため、中央部の空間が確保されている。貯蔵穴は6軒すべてに付設され、南西コーナー部4軒、南東コーナー部2軒である。

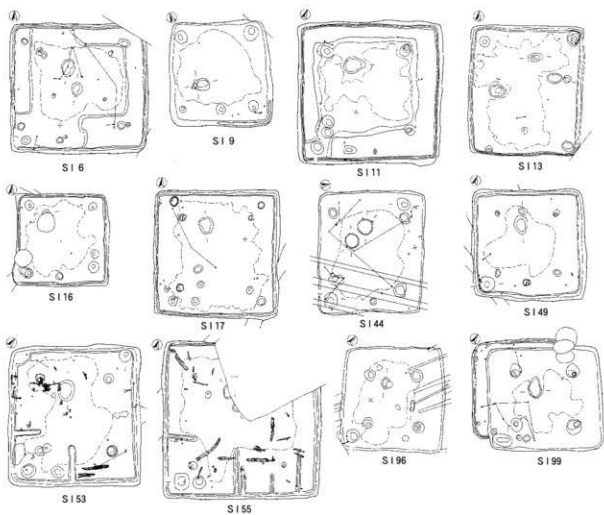
また、出入りロピットと対峙しない位置に付設される住居跡は、第3・42・43・54号住居跡の4軒である。出入りロピットと対峙する壁を結んだラインから炉の付設位置を見てみると、4軒とも西側に寄っている。4軒の時期内訳は、2期1軒、3期3軒である。貯蔵穴は4軒すべてに付設され、南西コーナー部2軒、南東コーナー部1軒、第3号住居跡は南東・南西コーナー部にそれぞれ1か所付設されている。

C類：炉が付設され、支柱穴・出入りロピット・貯蔵穴のいずれかが確認されている住居

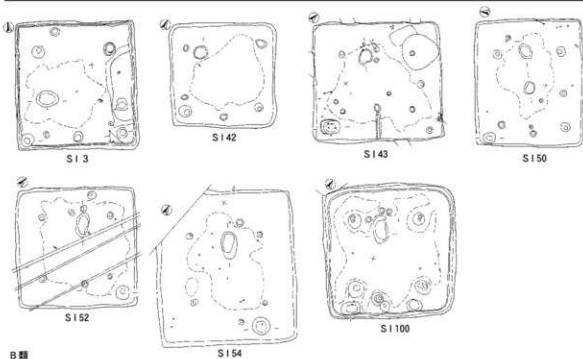
第5・26・29・32・33・38・46・51・58・97・98・103号住居跡が該当する。第97・98号住居跡は貯蔵穴、第5・29・38・51・58号住居跡は柱穴・貯蔵穴、第26・32・33・46号住居跡は柱穴が炉以外にそれぞれ確認されている。特に、一辺6mを超しながら、柱間寸法が規則的に配されていない第29号住居跡、炉のみが確認された第103号住居跡など、支柱穴が明確に確認されない住居跡が多い。また、第32号住居跡は西側に階段状の施設を有し、その付近が特に硬化していることから、この階段状の施設は出入り口に伴うものとみられる。

D類：炉が確認されない住居

第28・36号住居跡が該当する。2軒ともピットのみが確認されている。第28号住居跡はピット1か所で、その周辺の床面が硬化している。第36号住居跡はピット4か所で、中央部の床面が硬化している。2軒からは炉や出土遺物が確認されていないことから、居住目的以外の作業場・倉庫などの他の住居跡に付属する施設と考

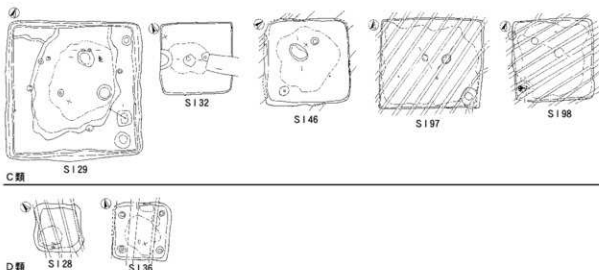


A類



B類

第208図 古墳時代前期住居の分類(1)



第209図 古墳時代前期住居の分類(2)

えられる。

炉 対象となる住居跡50軒中、炉が付設された住居跡は48軒で、付設割合は96%とかなり高い。炉の付設数別では、1か所36軒、2か所11軒、3か所1軒で、1か所が圧倒的に多い。炉の付設位置については、先ほどの分類のとおり、支柱穴を結ぶラインの内側に付設される傾向がうかがえる。複数の炉を有する住居跡は、作り替えが確認された住居跡1軒、機能を分けていると思われる住居跡10軒である。しかし、重複していない炉については、同時期であるか使用時期に差があるかは明確になるものが少ない。また、炉器台またはその可能性のある土製品が出土している住居跡は、第3号住居跡（7点）、第4号住居跡（2点）、第13号住居跡（3点）、第16号住居跡（1点）、第29号住居跡（3点）、第31号住居跡（1点）、第33号住居跡（1点）、第36号住居跡（2点）、第41号住居跡（5点）、第43号住居跡（2点）、第49号住居跡（4点）、第95号住居跡（3点）の12軒である¹³⁾。第9・41号住居跡は炉内から3個体の炉器台、第29号住居跡の炉内北部からは小ピット2か所も確認されている。この小ピットは、甕などの土器を安定させて炉に据え置くためのものと考えられる。形態的特徴として、錐形で、先端部がやや前屈し、背部にくぼみがつけられている。このような特徴をもつ土製支脚は、古墳時代前期から中期にかけての遺跡から出土することがある。炉器台は、燃焼効果を上げるため先端部で甕などの土器を支え、安定させるために3～4個組み合わせ使用されたものである。また、背部のくぼみを持つことにより移動も可能であったと思われる。土製で火を受けて脆くなりやすく、遺存しにくいことから、本来使用した住居数はさらに増える可能性もあるが、調査区全体で確認された住居数と比較すると、炉器台が出土した住居跡数の割合はかなり低い。出土割合の低さは、炉器台を使用する文化圏等の相違が見られるのか、使用者や使用機会が限られていたかなど、今後検討する課題である。

さらに、第3号住居跡からも粗製器台が1点出土している。粗製器台については、形態分類がされており、D類に該当する¹⁰⁾。本資料の形態は、胴部にくびれ部があり、一端がカットされた器受部が逆「ハ」字状、脚部が「ハ」字状に開いているものである。本跡の場合、1個体のみの出土であり、土製の炉器台と出土状況が異なる。

貯蔵穴 全体の規模が確認できなかった住居跡を除き、対象となる住居跡50軒中、貯蔵穴が付設された住居跡は30軒で、その割合は60%である。付設数別では1基が25軒と多く、2基が5軒である。住居跡の規模別では、小形が9軒、中形が17軒、大形が2軒、全体の規模が確認できなかったものが2軒である。一辺が6m以上の住居跡になると付設率はかなり高くなっている。形状は長方形、円形、楕円形で、規模も長軸（径）50～

100cmが大部分を占めている。複数の貯蔵穴を有する住居跡は5軒で、コーナー部に並列する住居跡2軒、各コーナー2か所に付設する住居跡3軒である。中でもコーナー部に貯蔵穴を並列させた第29号住居跡は、土層断面から貯蔵穴1から2へ作り替えたことが明らかになっている。

主柱穴・出入り口施設 主柱穴4か所の配列が認められる住居跡は27軒で、一辺が8mを超える第6号住居跡は柱穴間に2か所の補助柱穴も確認されている。住居の規模が大きくなれば、柱穴の深さも深くなる傾向を示している。今回の調査区で主柱穴をもたない住居跡や柱穴の不明瞭な住居跡も多く存在していることから、使用期間の短い住居跡や居住以外の目的をもった住居跡などが考えられる。また、主柱穴がかなり壁際に寄った住居跡も見られ、硬化面の範囲と併せても、空間をできるだけ広く確保した工夫がなされている。出入り口施設のピットが確認された住居跡は32軒で、南壁際の中央に位置しているものがほとんどである。しかし、第6号住居跡のように壁際に高まりを有する住居跡では、高まりが構築されない南西コーナー部寄りに付設されているものもある。

壁際に高まりをもつ遺構 ベット状遺構と呼ばれるものである。第3・6・11・48号住居跡が該当し、第6・11号住居跡は四周に、第3号住居は東壁際のみで確認されている。全体の様相がつかめない第48号住居跡では、南から東壁際で確認されている。いずれも一辺約6mを超す住居跡に見られ、地山を掘り残して構築している。壁際の高まりは、住居内の機能分化を示すものと考えられ、第6号住居跡は1期、第11・48号住居跡は2期、第3号住居跡は3期と、軒数は少ないが、各期にわたり構築されていることから、伝統的に受け継がれた内部施設と考えられる。

間仕切り溝 第43・53・55号住居跡で確認されている。第43・53号住居は南東壁に1条、第55号住居は南東壁際に4条、南西壁際に1条である。第55号住居跡は一辺7mを超す大形で、第43・53号住居跡は6m台の中形である。3軒とも主柱穴で囲まれた部分の外側で確認されている。また、間仕切り溝によって区画された範囲は、踏み硬められた部分が少ない。溝は何らかの目的によって住居内を仕切ったと思われるが、どのように使用されたかについては、住居内空間の使用法を考えながら検討していく必要がある。

3 瀬沼川流域における集落の様相

瀬沼や瀬沼川、瀬沼前川の流域には、数多くの遺跡の存在が知られている。特に、大洗町域の瀬沼周辺や茨城町域の瀬沼前川周辺では、弥生時代から古墳時代前期へ継続した集落が多く、注目される。一方、瀬沼川流域では目立った弥生時代の集落は確認されておらず、弥生土器と土師器の共存例も確認されていない。

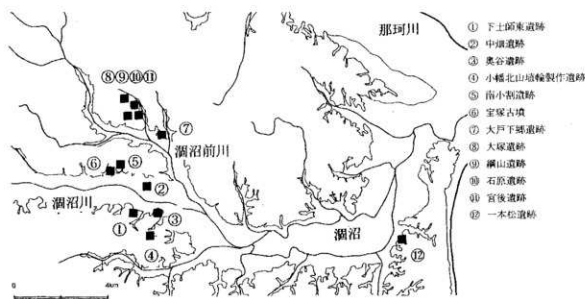
今回調査した下土師東遺跡においても、当期の住居跡から弥生土器と土師器の共存は確認されていない。

奥谷遺跡は瀬沼川右岸の台地上に位置しており、古墳時代前期の居館跡とされる溝跡と同時期の住居跡6軒が確認されている¹⁰。溝跡は、幅3メートル、長さ約50メートルの方形に巡っている。溝の北東部には一辺8メートル程の張り出し部があり、祭祀的色彩の強い三連結の小形椀形土器や手捏土器が出土している¹⁰。竪穴住居跡が一般の住居とするならば、居館には長的な人物が住んでいた区域と考えられる。この後、一時集落は途切れるが、古墳時代後期から平安時代にかけて住居数は再び増加する。

さらに瀬沼川の上流には、古墳時代前期の築造とされる宝塚古墳が位置している¹¹。本古墳は墳長35メートルの前方後方墳であり、古式土師器が出土している。さらに、その小支谷を隔てて隣接する南小割遺跡では、古墳時代前期・中期の竪穴住居跡が確認され、前期の住居跡は127軒にも及んでいる¹⁰。また、最も標高の高い場所の方周溝葬1基が確認されている。周辺地域に例の少ない土器や、炉石のみではなく粗製器台形土器を多く伴っていることから特異性を指摘することができる。移住者の集落ということができる。集落

集落変遷概略図

遺跡名	弥生	古墳時代前期			古墳時代中期			古墳時代後期			奈良・平安		中世	
		前葉	中葉	後葉	前葉	中葉	後葉	前葉	中葉	後葉	前半	後半	前半	後半
下土師東					空白期			古墳群形成中					空白期	
			最盛期			須恵器環身						区画溝		
中畑					空白期									
			方形周溝墓					須恵器大甕・平甕				10世紀	聚・集落	墓域
南小割														
			最盛期								10世紀			墓域
奥谷														
			居館										居館	墓域



第210図 潤沼川流域における古墳時代前期の遺跡位置図（武田石高遺跡 古墳時代編より 一部加筆）

は古墳時代前期から住居跡数が増加し、奈良時代で途切れている。奥谷・南小割遺跡とも弥生時代の集落や住居跡内から弥生土器と土師器の共伴例は確認されていない。

今回調査された下土師東遺跡からも、中畑遺跡、奥谷遺跡、南小割遺跡と同様に、弥生時代の集落は確認されていない。さらに住居内から土師器と十王台式土器等の共伴例も確認されていないことから、当該期において新たに開拓された集落と捉えることができる。これに対して、潤沼川や潤沼川の支流である潤沼前川流域では、十王台式土器の集落と古式土師器を使用する集落が共存する例が見られる。特に、潤沼川河口に位置している銚釜遺跡⁹⁾、潤沼から内陸へ流れる潤沼前川流域に位置している大畑¹⁰⁾・矢倉¹¹⁾・大戸下郷遺跡¹²⁾、その西側の桜の郷遺跡群(宮後¹³⁾・綱山¹⁴⁾・石原¹⁵⁾・大塚遺跡¹⁶⁾)では、弥生時代の住居跡が多く存在し、土師器と十王台式土器の共伴例が確認されている。このことから、当該期の集落の起源は、潤沼流域の太平洋側や潤沼前川流域が潤沼川流域に先行するものと思われる。

その後、潤沼川が潤沼に流入する地点に奥谷遺跡・下土師東遺跡、その対岸に中畑遺跡、潤沼川左岸の台地上に宝塚古墳、その宝塚古墳と谷津を挟んで南小割遺跡など、潤沼川流域に新たに集落が形成されていったのである。

4 おわりに

古墳時代の幕開けとともに潤沼川・潤沼前川流域には多くの集落が形成されている。在来集団と外来の古式土師器を使用する集団が多く併存する潤沼前川流域の人々や、下土師東遺跡のように新たな集落を開拓した集落の人々も相当のエネルギーを必要としたに違いない。今回の古墳時代前期を中心とした集落跡の発見は、同じ潤沼川流域に位置する南小割遺跡や奥谷遺跡とともに、当該期の人々の動向を示唆する資料となるであろう。

註

- 1) 第305集では、下土師東遺跡の調査区南部を中心に集落跡が確認されていることが報告されている。
- 2) 出土土器の時期区分については、浅井哲也氏と櫻村宣行氏の編年を対応させている。
a 浅井哲也「茨城県における古墳時代前期の土器」『領域の研究—阿久津久先生追悼記念論集—』阿久津久先生追悼記念事業実行委員会 2003年4月
b 櫻村宣行「和泉式土器編年考—茨城県を中心として—」『研究ノート』5号 茨城県教育財団 1996年6月
c 櫻村宣行「茨城県南部における鬼高式土器について」『研究ノート』2号 茨城県教育財団 1993年7月
- 3) 早川麗司「中畑遺跡 東関東自動車道水戸線(茨城南IC～茨城JCT)建設事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第306集 2008年3月 炭化米は、精米された状態で甕と甕に保管されていたものが、火を受け炭化したものであると報告されている。
- 4) 第40号住居跡から出土した炭化米については、バリノ・サーヴェイ株式会社に業務委託した。詳細は付章を参照されたい。
- 5) 芳賀友博・菊池直哉「下土師東遺跡 東関東自動車道水戸線(茨城南IC～茨城JCT)建設事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第305集 2008年3月
- 6) 駒澤悦郎「羽黒遺跡 一級河川女沼川(河川改修工事事業地内埋蔵文化財調査報告書1)」『茨城県教育財団文化財調査報告』第202集 2003年3月
- 7) 小高五十二「ヤツノ上遺跡の間仕切溝をもつ住居跡について」『研究ノート』第2号 1993年7月
- 8) 井上義安・千種重樹「茨城町宝塚古墳」茨城町史編さん委員会 1985年11月
- 9) 齋藤和彦「一般国道6号改築工事地内埋蔵文化財調査報告書 奥谷遺跡・小鶴遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第50集 1989年3月
- 10) 茨城町史編さん委員会「茨城町史 通史編」茨城町教育委員会 1995年2月
- 11) 茨城県教育庁文化課『茨城県遺跡地図』2001年3月
- 12) 井上義安「茨城町東山稲荷古墳」茨城町史編さん委員会 1985年11月
- 13) ()内はが器台の推定個体数を表した。
- 14) 鶴見貞雄「粗製器台の用途を考える—高崎貝塚出土の器台形土器を例にして—」『研究ノート』第3号 1993年7月
- 15) 註9に同じ
- 16) 註9に同じ
- 17) 註9に同じ
- 18) 中村敦治・江幡貞夫「茨城中央工業団地造成工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ 南小割遺跡・権現堂遺跡・視塚古墳・後原遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第129集 1998年3月

- 19) a 杉浦隆之・福田義彦『ひいがま』Ⅰ ひいがま遺跡発掘調査団 1975年8月
 b 宮田毅『ひいがま』Ⅱ ひいがま遺跡発掘調査団 1975年11月
 c 井上義安『ひいがま』Ⅲ ひいがま遺跡発掘調査団 1976年3月
- 20) 長谷川聡「北関東自動車道(友部～水戸)建設工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 大塚遺跡・大塚遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第136集 1998年3月
- 21) 飯島一生「北関東自動車道(友部～水戸)建設工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 矢倉遺跡・後口原遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第135集 1998年3月
- 22) a 近藤恒重「大戸下郷遺跡 主要地方道内原塩崎線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第216集 2004年3月
 b 緒引英樹・松本直人「大戸下郷遺跡Ⅱ 主要地方道内原塩崎線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第257集 2006年3月
- 23) a 川又清明・野田良直・吹野富美夫・浅野和久「宮後遺跡Ⅰ やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第188集 2002年3月
 b 和田清典・吹野富美夫・浅野和久・荒崎克一郎・駒澤悦郎「宮後遺跡Ⅱ やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅲ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第240集 2005年3月
 c 川又清明・浅野和久「宮後遺跡Ⅲ やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅳ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第241集 2005年3月
- 24) 田中幸夫・荒崎克一郎「横山遺跡 やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅵ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第243集 2005年3月
- 25) 村上和彦「やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 石原遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』163集 2000年3月
- 26) a 長谷川聡・田中幸夫・小野克敏「大塚遺跡Ⅰ やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅴ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第242集 2005年3月
 b 井上琢哉・小林健太郎「大塚遺跡Ⅱ 主要地方道内原塩崎線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅴ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第258集 2006年3月

参考文献

- 茨城町史編さん委員会『茨城町史 通史編』茨城町教育委員会 1995年2月
 古墳時代土器研究会『土器が語る～関東古墳時代の黎明～』第一法規出版株式会社 1997年5月
 白石真理「武田石高遺跡 古墳時代編」『ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告』第17集 1999年1月

付 章 1

下土師東遺跡出土炭化材の樹種

パリオ・サーヴェイ株式会社

はじめに

下土師東遺跡は、潤沼川右岸（南岸）の台地上に位置し、古墳時代前期から中期の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、溝跡等が検出されている。このうち、SI3は、焼失住居跡と考えられ、構築部材等に由来する可能性のある炭化材が出土している。

本報告では、SI3から出土した炭化材について樹種同定を実施し、木材利用に関する資料を得る。

1 試料

試料は、SI3から出土した炭化材2点（No.1, 2）である。

2 分析方法

木口（横断面）・柀目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。なお、同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊東（1982）、Wheeler 他（1998）を参考にする。また、各樹種の木材組織の配列の特徴については、林（1991）、伊東（1995, 1996, 1997, 1998, 1999）や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを参考にする。

3 結果

炭化材は、No.1がコナラ属コナラ亜属クヌギ節、No.2がイネ科タケ亜科に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1-2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高のものと同複合放射組織とがある。

・イネ科タケ亜科 (Gramineae subfam. Bambusoideae)

維管束が基本組織の中に散在する不斉中心柱が認められ、放射組織は認められない。タケ亜科は、タケ・ササ類であるが解剖学的特徴では区別できない。

4 考察

SI3から出土した炭化材のうち、No.1は住居中央部の床面から出土している。軸方向が南北になり、直交するように東西方向に伸びる部材が3本付属し、梯子状の外観を呈する。この形状から、上屋の一部の可能性がある。同定されたクヌギ節は、日本にクヌギとアベマキの2種があるが、関東地方ではクヌギが一般的であるのに対し、アベマキは生育していない。このことから、今回のクヌギ節もクヌギと考えられる。クヌギは、関東地方の二次林などに普通にみられる落葉高木で、木材は重硬で強度が高い。

一方、No. 2は、住居の北東隅付近の床面から出土している。タケ亜科は強度的に垂木などの構築部材に利用されたとは考えにくい、萱材としてはよく利用される種類であることから、本住居跡でも屋根などを葺いた萱材等に由来する可能性がある。

本遺跡周辺では、中畑遺跡の4世紀代の堅穴住居跡から出土した炭化材が、暖温帯常緑広葉樹林に分布するムクロジに同定されている(パリノ・サーヴェイ株式会社, 2008)。一方、県内各地で行われた古墳時代前期の分析例をみると、奥山A遺跡でコナラ節、姥ヶ谷津遺跡でクスギ節・コナラ節、北前遺跡でクスギ節、高崎貝塚でハンノキ属、行人田遺跡でクスギ節、神田遺跡でクスギ節とハンノキ属、南小割遺跡でクスギ節とコナラ節、大塚遺跡でサクラ属、綱山遺跡でエゴノキ属、船窪遺跡でカラスザンショウとヤナギ属等の例がある(パリノ・サーヴェイ株式会社, 1986a, 1993a, 1994a, 1994b, 1997a, 1998, 2005a, 2005b, 2005c)。また、古墳時代中期では、西原遺跡でクスギ節、平出久保遺跡でアカガシ亜属、イヌガヤ、ムクロジ、ヤツノ上遺跡でクスギ節、コナラ節、中久喜遺跡でクスギ節、コナラ節、東山遺跡でクスギ節、馬場遺跡でクスギ節、根崎遺跡でクスギ節、南小割遺跡でクスギ節、ハンノキ属、クリ、実穀寺子遺跡でクスギ節、島名前野東遺跡でクスギ節、コナラ節、谷田部漆遺跡でクスギ節、コナラ節等の例がある(パリノ・サーヴェイ株式会社, 1986b, 1993b, 1993c, 1994b, 1995, 1996, 1997b, 1998, 1999, 2002)。船窪遺跡のような例外的な遺跡もあるが、クスギ節・コナラ節を主とする遺跡が多く、今回の結果とも調和的である。また、沿海地でアカガシ亜属、イヌガヤ、ムクロジのような暖温帯に分布する樹木が利用される傾向があり、沿海地と内陸との植生の違いを反映している可能性がある。

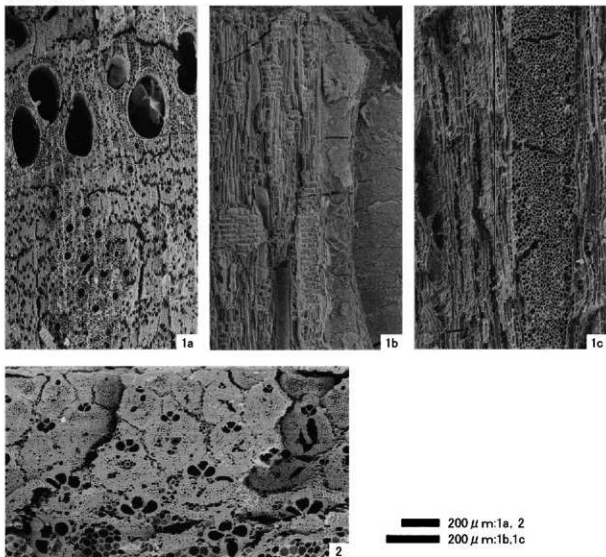
本住居跡では、今回同定を実施した他にも炭化材が出土しており、今後これらの炭化材についても同定を行い、住居における木材利用をより詳細に明らかにすることが望まれる。

引用文献

- 林 昭三, 1991, 日本産木材 顕微鏡写真集, 京都大学木質科学研究所。
- 伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ, 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181。
- 伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ, 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176。
- 伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ, 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201。
- 伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ, 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166。
- 伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ, 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216。
- パリノ・サーヴェイ株式会社, 1986a, 奥山A遺跡出土試料炭化材同定報告。「茨城県教育財団文化財調査報告書第31集 水街道都市計画事業・内守谷土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書2 奥山A遺跡・奥山C遺跡・西原遺跡」財団法人茨城県教育財団, 239-240。
- パリノ・サーヴェイ株式会社, 1986b, 西原遺跡出土試料種子及び材同定報告。「茨城県教育財団文化財調査報告書第31集 水街道都市計画事業・内守谷土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書2 奥山A遺跡・奥山C遺跡・西原遺跡」財団法人茨城県教育財団, 241-243。
- パリノ・サーヴェイ株式会社, 1993a, 北前遺跡遺構内出土炭化材の樹種同定。「茨城県自然博物館(仮称)建設用地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」, 財団法人茨城県教育財団, 309-310, PL68。
- パリノ・サーヴェイ株式会社, 1993b, ヤツノ上遺跡出土炭化材同定報告について。「牛久北部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅰ)」, 財団法人茨城県教育財団, 299-303, PL77。
- パリノ・サーヴェイ株式会社, 1993c, 中久喜遺跡から出土した炭化材の種類。「牛久北部特定土地区画整理事

- 業地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅱ), 財団法人茨城県教育財団, 254-257.
- バリノ・サーヴェイ株式会社, 1994a, 姥ヶ谷津遺跡から出土した炭化材の種類. 「茨城県教育財団文化財調査報告第89集 岩井幸田工業団地造成事業地内埋蔵文化財調査報告書 姥ヶ谷津遺跡・南間遺跡」, 財団法人茨城県教育財団, 107-109, PL38.
- バリノ・サーヴェイ株式会社, 1994b, 高崎貝塚遺構内出土炭化材の樹種同定について. 「茨城県自然博物館(仮称)建設用地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」, 財団法人茨城県教育財団, 318-320, PL78.
- バリノ・サーヴェイ株式会社, 1994c, 平出久保遺跡第38号住居跡出土炭化材の樹種同定について. 「茨城県教育財団文化財調査報告第98集 主要地方道水戸鉾田佐原線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 平出久保遺跡」, 財団法人茨城県教育財団, 137-139.
- バリノ・サーヴェイ株式会社, 1995, 東山遺跡出土の炭化材同定について. 「牛久北部特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅲ)」, 財団法人茨城県教育財団, 288-289.
- バリノ・サーヴェイ株式会社, 1996, 馬場遺跡・行人田遺跡出土の炭化材・炭化種子同定報告について. 「牛久北部特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅳ)」, 財団法人茨城県教育財団, 261-264.
- バリノ・サーヴェイ株式会社, 1997a, 神田遺跡から出土した炭化材の樹種. 「(仮称)葛城地区土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」, 財団法人茨城県教育財団, 294-296.
- バリノ・サーヴェイ株式会社, 1997b, 根崎遺跡出土炭化材の樹種同定分析. 「(仮称)萱丸地区土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」, 財団法人茨城県教育財団, 181-182.
- バリノ・サーヴェイ株式会社, 1998, 南小割遺跡から出土した炭化材の樹種. 「茨城中央工業団地造成工事地内埋蔵文化財調査報告書」, 財団法人茨城県教育財団, 149-152.
- バリノ・サーヴェイ株式会社, 1999, 実教寺子遺跡から出土した炭化材・種実遺体の種類. 「荒川本郷地区特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」, 財団法人茨城県教育財団, 275-277.
- バリノ・サーヴェイ株式会社, 2002, 島名前野東遺跡他から出土した炭化材の樹種. 「谷田部漆遺跡 下巻」, 財団法人茨城県教育財団, 1-9.
- バリノ・サーヴェイ株式会社, 2005a, 大塚遺跡から出土した炭化材の樹種について. 「大塚遺跡Ⅰ」, 財団法人茨城県教育財団, 398-400.
- バリノ・サーヴェイ株式会社, 2005b, 綱山遺跡から出土した炭化材の樹種について. 「綱山遺跡」, 財団法人茨城県教育財団, 494-497.
- バリノ・サーヴェイ株式会社, 2005c, 船窪遺跡群自然化学分析. 「(財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告第32集 船窪遺跡(第2分冊)」, ひたちなか市船窪土地地区画整理組合・財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社, 337-377.
- バリノ・サーヴェイ株式会社, 2008, 中畑遺跡から出土した炭化材の樹種. 「東関東自動車道水戸線(茨城南IC〜茨城JCT)建設事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」, 財団法人茨城県教育財団, 254-258.
- 島地 謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織. 地球社, 176p.
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*].

図版1 炭化材



1. コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (SI3.No.1) a: 木口, b: 柀目, c: 板目
2. イネ科タケ亜科 (SI3.No.2) 横断面

付 章 2

下土師東遺跡出土炭化種実・炭化材の種類と年代

パリオ・サーヴェイ株式会社

はじめに

下土師東遺跡（茨城県東茨城郡茨城町所在）は、潤沼川右岸（南岸）の台地上に立地し、古墳時代前期～中期の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、溝跡等が検出されている。本報告では、古墳時代前期（4世紀）の住居跡とされるSI40から出土した炭化種実と、住居構築材とされる炭化材の種類と年代を確認し、遺構の年代観と当時の植物利用や周辺植生に関する資料を得る。

1 試料

試料は、3区の第40号住居跡（SI40）から出土した炭化種実1点（No.54）と炭化材1点（No.1）である。炭化種実は、多量の同一種と思われる粒状物が集合、固結した黒色の塊状炭化物が複数個確認されるため、炭化物をできる限り壊さないように分析を実施する。炭化材は、樹種同定用と年代測定用に分けられていたため、念のため、樹種同定用と年代測定用の2点について同定を実施する。また、これらの2試料について、炭化種実の塊状1点（0.58g）をAMS法、炭化材4.8gをβ線計数法にて放射性炭素年代測定を実施する。

2 分析方法

(1) 種実遺体分析

試料を肉眼で観察し、塊状炭化物を壊さないように抽出する。試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、現生標本および石川（1994）、中山ほか（2000）、長田（1989）等の資料との対照から、種実の種類や部位、状態を確認し、個数と重量を求める。その後、残渣をシャーレに移して双眼実体顕微鏡下で観察し、イネの果実（胚乳・穎）が1000個を越えるまで抽出する過程で、イネ以外の種実（栽培植物のムギやアワ、ヒエなど）や炭化材、焼土などの有無を確認する。分析後の種実および1000個以上抽出後、未分析の残渣は、容器に入れて保管返却する。

(2) 炭化材同定

木口（横断面）・柀目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の断面面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察する。独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを用いて、確認できた組織の特徴を有する樹種を検索し、当社で所有する現生標本と比較して樹種を同定する。

なお、同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊東（1982）、Wheeler他（1998）を参考にする。また、各樹種の木材組織の配列の特徴については、林（1991）、伊東（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にする。

(3) 放射性炭素年代測定

土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HC1により炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOHにより腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HC1によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分の除去を行う（酸・アルカリ・酸処理）。

AMS法は、試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅（II）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃（30分）850℃（2時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度

差を利用し、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした¹³C-AMS専用装置 (NEC Pelletron 9SDH-2) を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局 (NIST) から提供されるシュウ酸 (HOX-II) とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に¹³C/¹²Cの測定も行うため、この値を用いてδ¹³Cを算出する。

β線計数法は、試料に含まれる炭素を酸化させて二酸化炭素とし、さらに精製ラインを用いて二酸化炭素からアセチレンを合成する。β線計数装置の気体比例計数管で¹³Cの崩壊数を計測する。測定が終了したアセチレンガスから再び二酸化炭素を製作し、安定同位体比測定用質量分析装置で試料中のδ¹³Cを測定する。

放射性炭素の半減期は、LIBBYの半減期5,568年を使用する。測定年代は、1950年を基点とした年代 (BP) であり、誤差は標準偏差 (One Sigma:68%) に相当する年代である。暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を用い、誤差として標準偏差 (One Sigma) を用いる。

3 結果

(1) 種実遺体分析

結果を表1に示す。炭化種実は、栽培植物のイネ (*Oryza sativa* L.; イネ科イネ属) の胚乳と穎果 (稲初) に同定された。全て炭化しており黒色。胚乳は、長さ4.5-5.5mm、幅2-3mm、厚さ1.5mm程度の偏平な楕円体。基部一端に胚が脱落した斜切形の凹部がある。発芽個体は確認されない。胚乳表面はやや平滑で、2-3本の隆条が縦列する。胚乳を包む穎 (果) は、長さ6-7.5mm、幅3.5-4mm、厚さ2mm程度の偏平な長楕円体。基部に斜切状円柱形の果実序柄と1対の護穎を有し、その上に外穎 (護穎と言う場合もある) と内穎がある。外穎は5脈、内穎は3脈をもち、ともに舟形を呈し、縫合してやや偏平な長楕円形の稲初を構成する。基部から長さ2-8mm、径0.3mm程度の線形の果柄が確認される個体 (図版1-4) や、頂部に芒をもつ個体が確認される。果皮は薄く壊れやすく、表面には微細な顆粒状突起が縦列する。

多量のイネの穎果が固結した塊状炭化物は、14個以上 (75.9g) 確認され、最大のもので長さ10cm、幅5.5cm、厚さ3cm程度 (図版1-2)。穎果はほぼ同一方向に配列し、果実序柄の位置にも統一性がある (図版1-3)。複数列が確認されることから、穂軸がまばらに分枝して開張し、多数の小穂をつける円錐果序 (稲穂) の状態と判断される。また、果柄や枝と考えられる径0.3mm程度の線形の植物遺体が、果序 (稲穂) と平行・斜交する状態で複数確認される。稈や葉と考えられる植物遺体は確認されない。

表1. 種実遺体分析結果

試料名	種類名	部位	状態	個数	重量	備考	
SI-40 No. 54	イネ	穎・胚乳	炭化	多量固結・塊状	>13	75.3 g	塊状炭化物を優先抽出 年代測定対象
					1	0.58 g	
	イネ	穎・胚乳	炭化	果実序柄付着	295	2.1 g	1000個を超えるまで確認
				果実序柄欠損	755	5.3 g	
				破片	68	0.1 g	
	イネ	枝or柄?	炭化	破片	>14	<0.01g	
				炭化材		5	
		焼土			40	1.3 g	
		残渣		ほぼ炭化		8.6 g	
		分析残渣		ほぼ炭化		54.6 g	未分析(イネ含む)
				計	148 g		

なお、塊状炭化物抽出後の残渣よりイネを1118個(7.5g)抽出した過程では、イネ以外の種実確認されず、イネの果柄または枝と考えられる植物遺体や炭化材、焼土が確認された。イネは、完形個体(1050個)が破片個体(68個)を圧倒的に上回り、果実序柄が残存する状態良好な個体(295個)が確認された。

(2) 炭化材同定

炭化材は、2点とも落葉広葉樹のハンノキ属ハンノキ亜属に同定された。解剖学的特徴等を記す。

・ハンノキ属ハンノキ亜属 (*Alnus subgen. Alnus*) カバノキ科

散孔材で、管孔は単独または2-4個が放射方向に複合して散在する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のもの集合放射組織とがある。

(3) 放射性炭素年代測定

同位体効果による補正を行った測定結果を表2に示す。暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い(¹⁴Cの半減期5,730±40年)を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表している。

暦年較正結果を表3に示す。暦年較正は、測定誤差 σ 、 2σ 双方の値を計算する。 σ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。測定誤差を σ として計算させた結果、炭化種実(イネ胚乳・穎)はcalAD267-411、炭化材(ハンノキ属ハンノキ亜属)はcalBC483-196であった。

表2. 放射性炭素年代測定結果

試料名	種類	補正年代 BP	$\delta^{13}C$ (‰)	測定年代 BP	Code No.
SI-40 No. 54	炭化種実(イネ)	1,680 ± 30	-22.75 ± 0.67	1,650 ± 30	IAAA-70350
SI-40 No. 1	炭化材(ハンノキ亜属)	2,280 ± 90	-27.4		IAA-1095

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
- 2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

4 考察

古墳時代前期(4世紀)の住居跡とされるSI140から出土した炭化種実は、栽培植物のイネの可食部にあたる胚乳と胚乳を包む穎(果)に同定された。多量のイネが集合した塊状炭化物は、円錐果序(稲穂)の状態、穀粒の形成が完了した完熟期に相当すると判断される。イネの炭化胚乳・穎の測定年代は1,680±30BP、暦年較

表3. 暦年較正結果

試料名	補正年代 (BP)	暦年較正年代(cal)						相対比	Code No.
		σ	cal AD	cal AD	cal AD	cal BP	cal BP		
イネ 炭化胚乳・穎 (SI-40 No. 54)	1,682 ± 33	σ	cal AD 267	cal AD 271	cal BP 1,683	1,679	0.036	IAAA-70350	
			cal AD 335	cal AD 411	cal BP 1,615	1,539	0.964		
		2σ	cal AD 256	cal AD 303	cal BP 1,694	1,647	0.179		
			cal AD 315	cal AD 426	cal BP 1,635	1,524	0.821		
ハンノキ亜属 炭化材(SI-40 No. 1)	2,285 ± 91	σ	cal BC 483	cal BC 466	cal BP 2,433	2,416	0.035	IAA-1095	
			cal BC 415	cal BC 196	cal BP 2,365	2,146	0.965		
		2σ	cal BC 748	cal BC 687	cal BP 2,698	2,637	0.041		
			cal BC 666	cal BC 643	cal BP 2,616	2,593	0.012		
		σ	cal BC 591	cal BC 578	cal BP 2,541	2,528	0.005		
			cal BC 506	cal BC 93	cal BP 2,516	2,043	0.942		
			2σ	cal BC 748	cal BC 687	cal BP 2,698	2,637		0.041
				cal BC 666	cal BC 643	cal BP 2,616	2,593		0.012

- 1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and P J Reimer) を使用
- 2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。
- 3) 1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
- 4) 統計的に真の値が入る確率は σ は68%、 2σ は95%である。
- 5) 相対比は、 σ 、 2σ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

正結果はcalAD267-411を示し、発掘調査時の所見で推定された住居跡の年代観を支持する。

以上のことから、当該期の本遺跡周辺域におけるイネの利用が推定され、稲穂の状態で保存保管されていたものが、火を受け炭化したことが推定される。分析試料は稲穂主体で、稈や葉などの他の部位が確認されないことから、穂摘みされた状態で保管された可能性がある。これについては、出土状況の詳細を確認した上で検討する必要がある。本遺跡に比較的近い中畑遺跡でも、4世紀とされる住居内の藁からイネが、藁からマメ類とアサガが炭化した状態で多量出土している（パリオ・サーヴェイ株式会社, 2008）。

一方、同じ住居跡（SI40）から出土した炭化材は、住居構築材に由来すると考えられ、上述の炭化種実と同じ地点から検出されている。炭化材の測定年代は、 $2,280 \pm 90$ BP、暦年較正結果はcalBC483-196となり、住居跡の推定年代より500-800年近く古い年代を示す。イネが住居跡の推定年代とほぼ一致する年代を示していることを考慮すると、分析した炭化材は古材を使用したものかも知れない。

炭化材の樹種は、ハンノキ亜属に同定された。日本のハンノキ亜属には、ハンノキ、サクラバハンノキ、ケヤマハンノキ、ミヤマカワラハンノキ、カワラハンノキ、ヤハズハンノキ、サルクラハンノキがあるが、本遺跡周辺では低湿地に生育するハンノキが一般的であり、今回の炭化材もハンノキに由来する可能性が高い。ハンノキの木材は、やや重硬な部類に入るが、保存性は高くない。

本遺跡では、同じく古墳時代前期のSI3から出土した炭化材がクスギ節とタケ亜科に同定されている（付章1）。年代測定結果から同一時期の炭化材か疑問も残るが、本遺跡では古墳時代にクスギ節のハンノキ亜属の木材も住居構築材に利用されていた可能性がある。なお、タケ亜科は材質から屋根を葺いた茅材等に由来すると考えられる。クスギ節は、現在の分布からクスギの可能性が高いと考えられる。クスギは、コナラと共に関東地方の二次林を構成する種類であるが、コナラよりも湿った土地を好む種類であり、後背湿地等にも生育する。今回確認されたハンノキ亜属も低地に生育する点で共通点があり、古墳時代前期の住居構築材を低地から入手していた可能性がある。

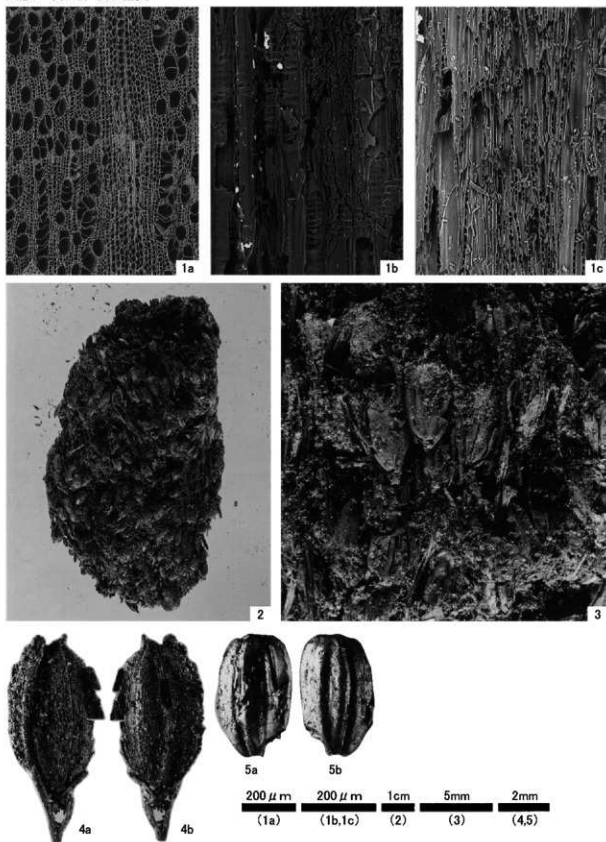
一方、中畑遺跡では、4世紀代の堅穴住居跡から出土した炭化材がムクロジに同定されている。ムクロジは、主にアカガシ亜属などと共に暖地に生育する落葉広葉樹であり、遺跡周辺にはムクロジも分布していたことが推定される。茨城県内では、これまでも古墳時代前期の住居構築材について樹種を明らかにした例がある。クスギ節とハンノキ属が共に確認された例としては、神田遺跡（つくば市）の例がある（パリオ・サーヴェイ株式会社, 1997）。また、高崎貝塚（坂東市）ではハンノキ属とタケ亜科が確認され、隣接する北前遺跡（坂東市）でクスギ節が確認されており（パリオ・サーヴェイ株式会社, 1993, 1994）、本遺跡と類似した木材利用が明らかになっている。

引用文献

- 林 昭三, 1991, 日本産木材 顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
石川茂雄, 1994, 原色日本植物種子写真図鑑. 石川茂雄図鑑刊行委員会, 328p.
伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.
伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.
伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.
伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.
伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.
中山至大・井之口希秀・南谷志忠, 2000, 日本植物種子図鑑. 東北大学出版会, 642p.

- 長田武正, 1989, 日本イネ科植物図譜. 株式会社平凡社, 759p.
- バリノ・サーヴェイ株式会社, 1993, 北前遺跡遺構内出土炭化材の樹種同定. 「茨城県自然博物館 (仮称) 建設用地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」, 財団法人茨城県教育財団, 309-310, PL68.
- バリノ・サーヴェイ株式会社, 1994, 高崎貝塚遺構内出土炭化材の樹種同定について. 「茨城県自然博物館 (仮称) 建設用地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」, 財団法人茨城県教育財団, 318-320, PL78.
- バリノ・サーヴェイ株式会社, 1997, 神田遺跡から出土した炭化材の樹種. 「(仮称) 葛城地区土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」, 財団法人茨城県教育財団, 294-296.
- バリノ・サーヴェイ株式会社, 2008, 中畑遺跡から出土した炭化材の樹種, 17号住居跡出土の炭化種実. 「東関東自動車道水戸線 (茨城南ⅠC～茨城)CT」建設事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」, 財団法人茨城県教育財団, 254-258.
- 島地 謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織. 地球社, 176p.
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩 (日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*].

図版1 炭化材・炭化種実



1. ハンノキ属ハンノキ亜属(SI-40 No.1) a: 木口, b: 柀目, c: 板目
 2. イネ 胚乳・穎(SI-40 No.54)
 3. イネ 胚乳・穎(SI-40 No.54)
 4. イネ 胚乳・穎(SI-40 No.54)
 5. イネ 胚乳(SI-40 No.54)

写 真 图 版



第3号陥し穴完掘状況



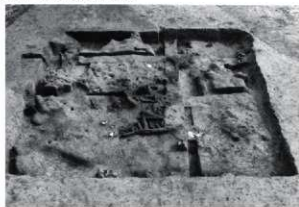
第5号陥し穴完掘状況



第1号住居跡完掘状況



第2号住居跡完掘状況



第3号住居跡遺物出土状況



第3号住居跡遺物出土状況



第4号住居跡完掘状況



第5号住居跡完掘状況



第6号住居跡完掘状況



第6号住居跡遺物出土状況



第9号住居跡完掘状況



第9号住居跡遺物出土状況



第9号住居跡遺物出土状況



第9号住居跡炉器台出土状況



第10号住居跡完掘状況



第11号住居跡完掘状況



第11号住居跡遺物出土状況



第11号住居跡遺物出土状況



第12号住居跡完掘状況



第13号住居跡完掘状況



第13号住居跡遺物出土状況



第14号住居跡完掘状況



第14号住居跡遺物出土状況



第15号住居跡遺物出土状況



第16号住居跡掘り方完掘状況



第16号住居跡遺物出土状況



第17号住居跡完掘状況



第17号住居跡掘り方完掘状況



第17号住居跡遺物出土状況



第17号住居跡遺物出土状況



第18号住居跡完掘状況



第19号住居跡完掘状況



第19号住居跡遺物出土状況



第19号住居跡遺物出土状況



第19号住居跡ピット3遺物出土状況



第20号住居跡完掘状況



第20号住居跡遺物出土状況



第21号住居跡遺物出土状況



第21号住居跡遺物出土状況



第22号住居跡完掘状況



第22号住居跡遺物出土状況



第22号住居跡遺物出土状況



第22号住居跡竈完掘状況



第23号住居跡完掘状況



第23号住居跡遺物出土状況



第23号住居跡遺物出土状況



第23号住居跡竈遺物出土状況



第24号住居跡完掘状況



第24号住居跡遺物出土状況



第24号住居跡遺物出土状況



第25号住居跡完掘状況



第25号住居跡遺物出土状況



第25号住居跡遺物出土状況



第26号住居跡、第90号墓坑完掘状況



第27・32号住居跡、第91～93号墓坑完掘状況



第27号住居跡遺物出土状況



第27号住居跡遺物出土状況



第27号住居跡炉2完掘状況



第29号住居跡完掘状況



第29号住居跡遺物出土状況



第29号住居跡遺物出土状況



第29号住居跡炉内ビット完掘状況



第29号住居跡貯蔵穴遺物出土状況



第30号住居跡完掘状況



第30号住居跡遺物出土状況



第30号住居跡遺物出土状況



第31号住居跡完掘状況



第31号住居跡遺物出土状況



第33号住居跡遺物出土状況



第33号住居跡完掘状況



第33号住居跡ビット2遺物出土状況



第34号住居跡完掘状況



第34号住居跡遺物出土状況



第35号住居跡完掘状況



第35号住居跡遺物出土状況



第36号住居跡完掘状況



第38号住居跡遺物出土状況



第39号住居跡完掘状況



第39号住居跡遺物出土状況



第39号住居跡遺物出土状況



第39号住居跡ピット3遺物出土状況



第40号住居跡完掘状況



第40号住居跡遺物出土状況



第40号住居跡遺物出土状況



第40号住居跡炉完掘状況



第40号住居跡炭火米出土状況



第41号住居跡完掘状況



第41号住居跡遺物出土状況



第41号住居跡遺物出土状況



第41号住居跡炉器台出土状況



第41号住居跡貯蔵穴遺物出土状況



第42号住居跡完掘状況



第42号住居跡遺物出土状況



第43号住居跡完掘状況



第43号住居跡遺物出土状況



第43号住居跡遺物出土状況



第43号住居跡貯藏穴遺物出土状況



第44号住居跡完掘状況



第44号住居跡遺物出土状況



第44号住居跡遺物出土状況



第44号住居跡遺物出土状況



第45号住居跡完掘状況



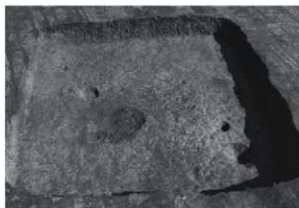
第45号住居跡遺物出土状況



第45号住居跡遺物出土状況



第45号住居跡ピット6遺物出土状況



第46号住居跡完掘状況



第47号住居跡完掘状況



第48号住居跡完掘状況



第48号住居跡遺物出土状況



第49号住居跡完掘状況



第49号住居跡遺物出土状況



第49号住居跡遺物出土状況



第50号住居跡完掘状況



第50号住居跡遺物出土状況



第50号住居跡遺物出土状況



第51号住居跡完掘状況



第52号住居跡完掘状況



第52号住居跡遺物出土状況



第52号住居跡遺物出土状況



第53号住居跡完掘状況



第53号住居跡遺物出土状況



第53号住居跡遺物出土状況



第54号住居跡完掘状況



第54号住居跡遺物出土状況



第55号住居跡遺物出土状況



第55号住居跡完掘状況



第55号住居跡遺物出土状況



第57号住居跡完掘状況



第57号住居跡遺物出土状況



第58号住居跡完掘状況



第58号住居跡遺物出土状況



第58号住居跡遺物出土状況



第58号住居跡遺物出土状況



第96号住居跡遺物出土状況



第96号住居跡遺物出土状況



第97号住居跡掘り方完掘状況



第98号住居跡完掘状況



第98号住居跡遺物出土状況



第98号住居跡貯蔵穴遺物出土状況



第99・101号住居跡完掘状況



第99・101号住居跡遺物出土状況



第99・101号住居跡遺物出土状況



第99・101号住居跡遺物出土状況



第100号住居跡完掘状況



第100号住居跡遺物出土状況



第100号住居跡遺物出土状況



第17号溝跡完掘状況



第1号方形竪穴遺構完掘状況



第97号墓坑完掘状況



第100号墓坑完掘状況



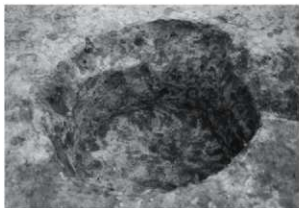
第102号墓坑完掘状況



第103号墓坑完掘状況



第104号墓坑完掘状况



第107号墓坑完掘状况



第114号墓坑完掘状况



第536号土坑完掘状况



第540号土坑完掘状况



第1号道路迹完掘状况



第12号沟迹完掘状况



第1号方形周沟遗构完掘状况



SI 34-569



SI 41-597



SI 55-681



SI 55-680



SI 21-513



SI 49-641



SI 21-512



SI 22-530



SI 21-511



SI 21-515





SI 6-455



SI 13-479



SI 19-503



SI 17-496



SI 3-443



SI 6-454



SI 25-547



SI 11-470



SI 19-502



SI 19-504





SI 49-643



SI 23-539



SI 55-683



SI 40-583



SI 31-561



SI 43-606





SI 55-686



SI 55-687



SI 45-635



SI 43-611



SI 53-654



SI 55-685



SI 53-656



SI 45-636



SI 41-599



SI 3-450



SI 39-576



SI 41-600



SI 43-615



SI 45-637



SI 24-544



SI 100-706



SI 43-613



SI 53-660



SI 101-710



SI 53-659



SI 101-711



SI 43-614





SI 9-467



SI 9-466



SI 11-473



SI 9-465



SI 3-449



SI 23-542



SI 17-499



SI 41-602



SI 39-581



SI 24-545



SI 23-541



SI 21-528



SI 45-638



SI 99-704



SI 99-703



SI 55-689

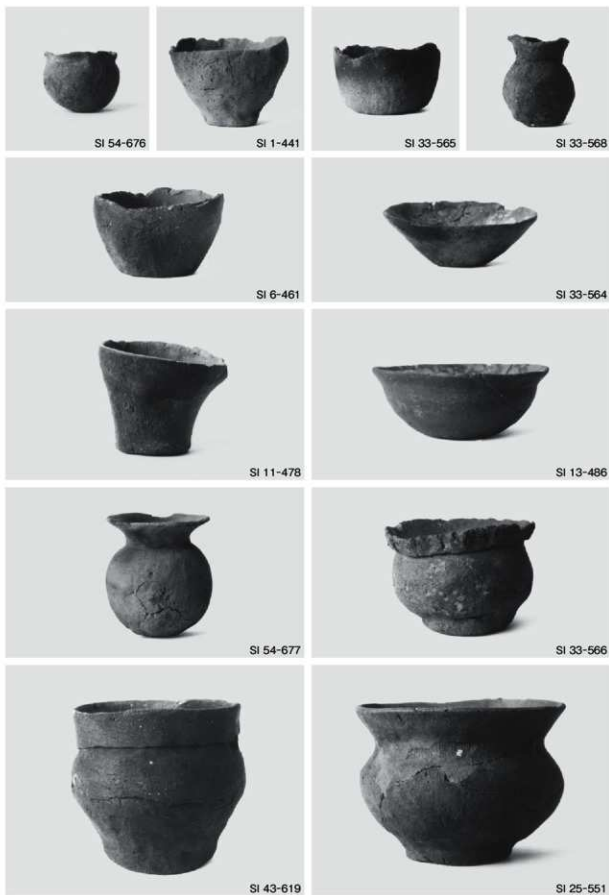


SI 41-603

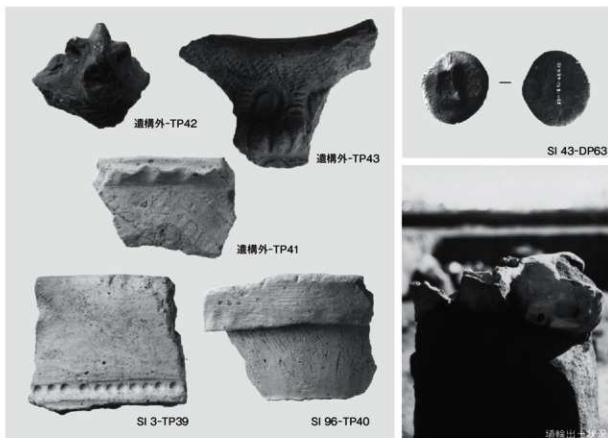


SI 40-595









出土土器・土製品

遺構外-DP140



遺構外-DP141



SI 29-DP43



SI 41-DP142~144



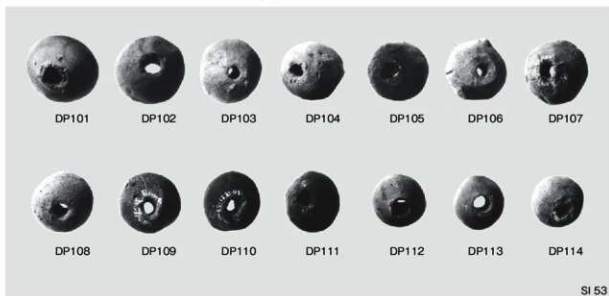
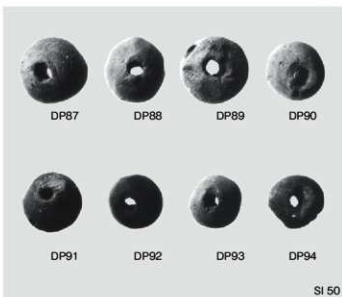
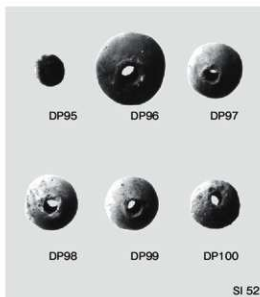
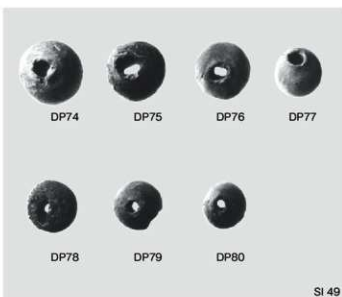
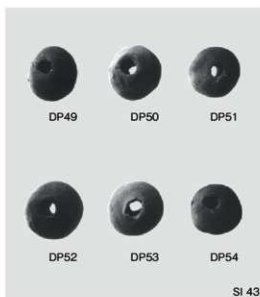
DP142

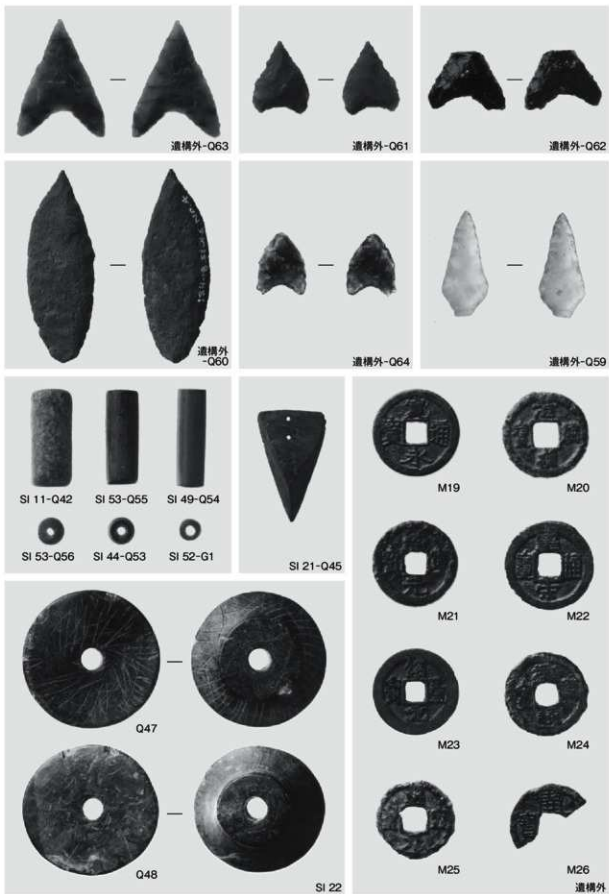


DP143



DP144





出土石製品・ガラス・銅製品

抄 録

ふりがな	しもはじびがしいせき							
書名	下土師東遺跡2							
副書名	東関東自動車道水戸線(茨城南IC～茨城JCT)建設事業地内埋蔵文化財調査報告書IV							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告							
シリーズ番号	第315集							
著者名	芳賀友博 大関武 田原康司 小野政美 早川麗司							
編集機関	財団法人茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL. 029-225-6587							
発行日	2009(平成21)年3月23日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
下土師東遺跡	茨城県東茨城郡茨城町大字下土師字東山2,401番地ほか	08302 122	36度 19分 15秒 36度 19分 27秒	140度 24分 29秒 140度 24分 17秒	22 ～ 23m	20051201 ～ 20060331 20060401 ～ 20060731 20070201 ～ 20070331 20070601 ～ 20070731 20080801 ～ 20080930	6,180㎡ 5,745㎡ (5,745㎡) 1,991㎡ 2,337㎡	東関東自動車道水戸線(茨城南IC～茨城JCT)建設事業に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
下土師東遺跡	集落跡	縄文 古墳	陥し穴 竪穴住居跡 掘立柱建物跡 溝跡	3基 65軒 2棟 1条	縄文土器(深鉢) 土師器(坏・埴・埴・器台・高坏・壺・甕・甎)、須恵器(坏・大甕)、土製品(球状土鏝・人物埴輪)、石器・石製品(紙石・紡錘車・管玉・白玉・石製模造品)、自然遺物(炭化米)		古墳時代中期の住居跡から須恵器の大甕、古墳時代前期の住居跡から炭化米が出土している。	
		奈良 時期不明	溝跡 竪穴住居跡	1条 4軒	須恵器(高台付坏)			
	墓域跡 その他	中世・近世 中世・近世	墓坑 方形竪穴遺構 井戸跡 溝跡 土坑 道路跡 柵跡	50基 1基 2基 1条 2基 1条 1列	金属製品(煙管・古銭) 土師質土器(小皿)、陶磁器(碗・片口鉢)、金属製品(古銭)			
		不 明	溝跡 土坑 方形周溝遺構 ピット群	13条 181基 1基 7か所				
要約	古墳時代前～後期の集落跡と江戸時代の墓域が確認されている。特に古墳時代前期の住居跡からは、炉器台が炉脇に設置された状態で出土しており、煮沸具である甕の使用法を考える上で重要な資料となる。また、古墳時代後期の住居跡から人物埴輪が出土している。投げ込まれたような状態で出土していることから、何らかの理由で捨てられたものと考えられる。							

茨城県教育財団文化財調査報告第315集

下土師東遺跡 2

茨城県自動車道水戸線(茨城南1C~茨城JCT)
建設事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ

平成21(2009)年3月18日 印刷
平成21(2009)年3月23日 発行

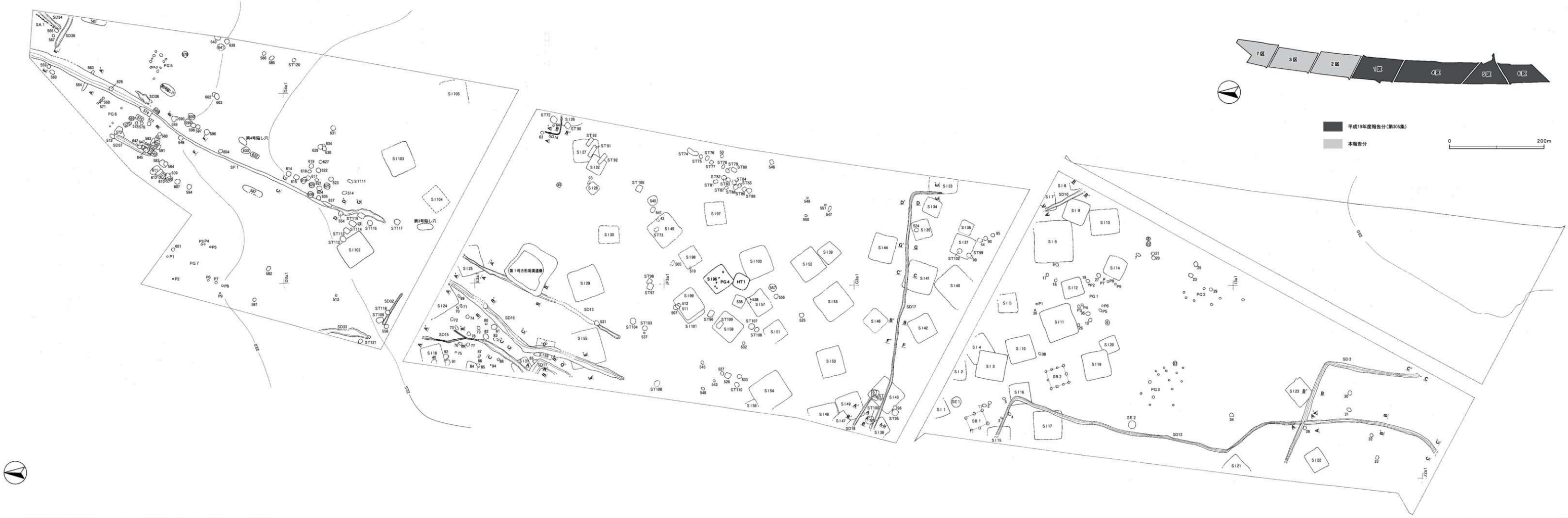
発行 財団法人 茨城県教育財団
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内
TEL. 029-225-6587

印刷 山三印刷株式会社
〒311-4153 水戸市河和田町4433の33
TEL. 029-252-8481

付 図

茨城県教育財団文化財調査報告第315集

下土師東遺跡 2 遺構全体図



付図 下土師東遺跡2遺構全体図 「茨城県教育財団文化財調査報告第315集」

0 20m